岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第383集

里遺跡発掘調査報告書

ほ場整備事業（一関第2地区）関連遺跡発掘調査

（財）岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

里遺跡発掘調査報告書

ほ場整備事業（一関第2地区）関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの貴重な文化財や重要な文化財が残されております。先人たちが残してきた多くの文化財を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。その一方で、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発が、県民の切実な願いであるということはいうまでもありません。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和は今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむ得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書はほ場整備事業（一関第２地区）に関連して、平成12年度に実施した平泉町里遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査では弥生時代から近世に至る各種の遺構や、それに伴う土器・石器などの遺物が検出されています。なかでも奥州藤原時代の和鏡やかわらけ、陶磁器などが出土し、貴重な資料を提供することができました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する関心と理解をより一層深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助と御協力を賜りました一関地方振興局一関農村整備事務所・平泉町教育委員会をはじめ、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成13年12月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　村　上　勝　治

例　言

1．本報告書は、岩手県西磐井郡平泉町長島字若宮10ほかに所在する里遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、ほ場整備事業一関第2地区の施行に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と一関地方振興局一関農村整備事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号はＮＥ66－2119、遺跡略号はＳＴ－00、発掘調査面積は4,160 m²である。

4．発掘調査期間は平成12年４月11日～８月４日、室内整理期間は平成12年11月１日～平成13年３月31日である。

5．野外調査の担当は村木　敬・菅原靖男、室内整理は村木　敬が担当した。

6．本報告書は村木　敬が執筆・編集をおこなった。

7．本遺跡出土遺物等の分析、鑑定、保存処理は以下の各位・各機関に依頼した。(順不同、敬称略)

和鏡の鑑定	杉山　洋（奈良国立文化財研究所　飛鳥資料館）
和鏡の保存処理・科学分析	元興寺文化財研究所　保存科学センター
鉄製品の保存処理	岩手県立博物館
トイレ状遺構の土壌分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
炭化材の放射性炭素年代測定分析	株式会社古環境研究所
炭化材樹種同定	木工舎「ゆい」

8．本報告書の作成にあったては下記の方々にご指導、ご協力をいただいた。(順不同、敬称略)

本澤慎輔、八重樫忠郎、及川司、菅原計二、菅原幹成（平泉町教育委員会）、瀬川司男（東和町ふるさと歴史資料館）、岡田茂弘（東北歴史資料館）、工藤雅樹（福島大学）杉山　洋（飛鳥資料館）、斉藤邦雄、斉藤　務（柳之御所遺跡調査事務所）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）

9．調査結果はこれまでに現地説明会資料や調査略報に発表してきたが、本書の内容がこれらに優先するものである。

10．土層の色調観察は、「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修　1993)

11．本調査で得られた一切の資料は岩手県埋蔵文化財センターが保管している。

目次

序
例言

本文

第１章．調査に至る経過 ・・・・・・・1
第２章．遺跡の位置と環境 ・・・・・・・2
位置 ・・・・・・・2
地形と地質 ・・・・・・・2
周辺の遺跡 ・・・・・・・5
基本層序 ・・・・・・・8
第３章．調査・整理の方法 ・・・・・・・12
野外調査 ・・・・・・・12
室内整理の方法 ・・・・・・・13
第４章．Ａ地区の遺構・遺物 ・・・・・・・15
第５章．Ｂ地区の遺構・遺物 ・・・・・・・20
第６章．Ｃ地区の遺構・遺物 ・・・・・・・58
第７章．Ｄ地区の遺構・遺物 ・・・・・・・65
第８章．Ｅ地区の遺構・遺物 ・・・・・・・65
第９章．Ｆ地区の遺構・遺物 ・・・・・・・74
第10章．まとめ ・・・・・・・104
第11章．各種鑑定と自然科学分析 ・・・・・・・112
平泉周辺出土の和鏡について ・・・・・・・112
平泉町里遺跡出土和鏡の分析について ・・・・・・・115
平泉町里遺跡トイレ状遺構の内容物について ・・・・・・121
平泉町里遺跡における放射性炭素年代測定 ・・・・・・・125
里遺跡出土炭化財の樹種 ・・・・・・・127

図　版

第１図　遺跡位置図　・・・・3
第２図　地形分類・遺跡周辺の地形図　・・・・4
第３図　周辺の遺跡分布図　・・・・6
第４図　土層断面配置図　・・・・10
第５図　土層断面図　・・・・11
第６図　グリッド配置図　・・・・12
第７図　凡例　・・・・14
第８図　遺構配置図　・・・・15
第９図　Ａ地区ＳＴＰ01・ＳＫ01・配石遺構　・・・・17
第10図　Ａ地区出土遺物　・・・・18
第11図　Ｂ地区弥生・遺構配置図　・・・・21
第12図　Ｂ地区平安・遺構配置図　・・・・22
第13図　Ｂ地区平安・遺構配置図　・・・・23
第14図　Ｂ地区ＳＫ01　・・・・25
第15図　Ｂ地区炭化物集中部１出土遺物（1）　・・・・26
第16図　Ｂ地区炭化物集中部１出土遺物（2）　・・・・27
第17図　Ｂ地区炭化物集中部１出土遺物（3）　・・・・28
第18図　Ｂ地区炭化物集中部２出土遺物（1）　・・・・29
第19図　Ｂ地区炭化物集中部２出土遺物（2）　・・・・30
第20図　Ｂ地区炭化物集中部２出土遺物（3）　・・・・31
第21図　Ｂ地区炭化物集中部２出土遺物（4）　・・・・32
第22図　Ｂ地区ＳＫ01（弥生）出土遺物　・・・・33
第23図　Ｂ地区弥生遺構外出土遺物（1）　・・・・34
第24図　Ｂ地区弥生遺構外出土遺物（2）　・・・・35
第25図　Ｂ地区ＳＩ01・出土遺物　・・・・37
第26図　Ｂ地区ＳＩ02・ＳＩ03　・・・・38
第27図　Ｂ地区Ｓ１04・出土遺物　・・・・39
第28図　Ｂ地区ＳＥ01・出土遺物（1）　・・・・41
第29図　Ｂ地区ＳＥ01・出土遺物（2）　・・・・42
第30図　Ｂ地区ＳＸ01・出土遺物・ＳＤ01　・・・・43
第31図　Ｂ地区ＳＫ01・03　・・・・45
第32図　Ｂ地区ＳＫ04～07　・・・・47
第33図　Ｂ地区ＳＥ01・ＳＫ類・Pit類出土遺物　・・・48
第34図　Ｂ地区遺構外・表採出土遺物　・・・・49
第35図　Ｃ地区遺構配置図　・・・・59
第36図　Ｃ地区ＳＥ01・ＳＸ01・ＳＫ01出土遺物・・・61
第37図　Ｃ地区ＳＤ01　・・・・62
第38図　Ｃ地区遺構外・表採出土遺物　・・・・63
第39図　Ｅ地区遺構配置図　・・・・66
第40図　Ｅ地区遺構配置図　・・・・67
第41図　Ｅ地区ＳＫ01・02・04　・・・・68
第42図　Ｅ地区ＳＫ02・04出土遺物　・・・・69
第43図　Ｅ地区ＳＫ03・出土遺物　・・・・71
第44図　Ｅ地区弥生・Ｐ15・遺構外出土遺物　・・・・72
第45図　Ｆ地区遺構配石図　・・・・75
第46図　Ｆ地区遺構配石図　・・・・76
第47図　Ｆ地区ＳＩ01・出土遺物　・・・・77
第48図　Ｆ地区ＳＩ02・出土遺物　・・・・78
第49図　Ｆ地区ＳＩ03　・・・・79
第50図　Ｆ地区ＳＩ03出土遺物（1）　・・・・80
第51図　Ｆ地区ＳＩ03出土遺物（2）　・・・・81
第52図　Ｆ地区ＳＩ03出土遺物（3）　・・・・82
第53図　Ｆ地区ＳＩ04・出土遺物　・・・・84
第54図　Ｆ地区ＳＩ05・出土遺物（1）　・・・・85
第55図　Ｆ地区ＳＩ05・出土遺物（2）　・・・・86
第56図　Ｆ地区ＳＤ01　・・・・87
第57図　Ｆ地区ＳＤ01出土遺物　・・・・88
第58図　Ｆ地区ＳＫ01・02・出土遺物　・・・・91
第59図　Ｆ地区ＳＢ01　・・・・93
第60図　Ｆ地区ＳＢ02　・・・・94
第61図　Ｆ地区遺構外・表採出土遺物（1）　・・・・95
第62図　Ｆ地区遺構外・表採出土遺物（2）　・・・・96

写真図版

図版１　和鏡Ｘ線写真　・・・・89
図版２　和鏡（299・300）表　・・・・131
図版３　和鏡（299・300）裏　・・・・132
図版４　航空写真（１）　・・・・133
図版５　航空写真（２）　・・・・134
図版６　Ａ地区遺構　・・・・135
図版７　Ａ・Ｂ地区遺構　・・・・136
図版８　Ｂ地区遺構（１）　・・・・137
図版９　Ｂ地区遺構（２）　・・・・138
図版10　Ｂ地区遺構（３）　・・・・139
図版11　Ｂ・Ｃ地区遺構　・・・・140
図版12　Ｃ・Ｅ地区遺構　・・・・141
図版13　Ｅ・Ｆ地区遺構　・・・・142
図版14　Ｆ地区遺構（１）　・・・・143
図版15　Ｆ地区遺構（２）　・・・・144
図版16　Ｆ地区遺構（３）　・・・・145
図版17　Ａ地区遺物　・・・・146
図版18　Ｂ地区遺物（１）　・・・・147
図版19　Ｂ地区遺物（２）　・・・・148
図版20　Ｂ地区遺物（３）　・・・・149
図版21　Ｂ地区遺物（４）　・・・・150
図版22　Ｂ地区遺物（５）　・・・・151
図版23　Ｂ地区遺物（６）　・・・・152
図版24　Ｂ地区遺物（７）　・・・・153
図版25　Ｂ地区遺物（８）　・・・・154
図版26　Ｂ・Ｃ地区遺物　・・・・155
図版27　Ｃ・Ｅ・Ｆ地区遺物　・・・・156
図版28　Ｆ地区遺物（１）　・・・・157
図版29　Ｆ地区遺物（２）　・・・・158
図版30　Ｆ地区遺物（３）　・・・・159
図版31　Ｆ地区遺物（４）　・・・・160
図版32　Ｆ地区遺物（５）　・・・・161
図版33　Ｆ地区遺物（６）　・・・・162

表

第１表　周辺遺跡一覧　・・・・7
第２表　Ａ地区遺物観察表　・・・・19
第３表　Ｂ地区柱穴計測表　・・・・50
第４表　Ｂ地区遺物観察表（１）　・・・・51
第５表　Ｂ地区遺物観察表（２）　・・・・52
第６表　Ｂ地区遺物観察表（３）　・・・・53
第７表　Ｂ地区遺物観察表（４）　・・・・54
第８表　Ｂ地区遺物観察表（５）　・・・・55
第９表　Ｂ地区遺物観察表（６）　・・・・56
第10表　Ｂ地区遺物観察表（７）　・・・・57
第11表　Ｃ地区柱穴計測表　・・・・60
第12表　Ｃ地区遺物観察表　・・・・64
第13表　Ｅ地区柱穴計測表　・・・・72
第14表　Ｅ地区遺物観察表　・・・・73
第15表　Ｆ地区柱穴観察表（１）　・・・・97
第16表　Ｆ地区柱穴観察表（２）　・・・・98
第17表　Ｆ地区柱穴観察表（３）　・・・・99
第18表　Ｆ地区柱穴観察表（４）　・・・・100
第19表　Ｆ地区遺物観察表（１）　・・・・101
第20表　Ｆ地区遺物観察表（２）　・・・・102
第21表　Ｆ地区遺物観察表（３）　・・・・103

第１章　　調査に至る経過

里遺跡は、ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）一関第２地区施工に伴い、その事業区域内に位置することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、西磐井郡平泉町長島地内の323.9ｈａの地区で、現況の水田は昭和30年代に10 a区画に整備されたものの、区画形状が小さいうえに農道が狭小なため、農地の流動化や農産物の輸送、大型機械の搬入に支障を来している状態であった。それらの阻害要因を除去し、高生産性農業の確立を図るために大区画ほ場の整備を実施することとして、平成10年度に新規採択されたものである。

本事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成11年２月２日付け一地整第616号により一関地方振興局一関農村整備事務所より岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をし、平成11年４月８日付け教文第34号の回答で、工事範囲内に里遺跡が含まれていることを確認されたことに始まる。

分布調査結果に基づき一関農村整備事務所では、平成11年10月６日付け一地整第398号で教育委員会に試掘調査を依頼した。依頼を受けた教育委員会では、平成11年10月12日から平成11年12月10日にかけて試掘調査を実施し、その結果、発掘調査が必要なことが判明し、平成12年1月27日付け教文第1086号でその旨の回答があったものである。

第２章　　遺跡の立地と環境

第１節　位置

里遺跡は岩手県西磐井郡平泉町長島字若宮10ほかに所在し、JR東日本東北本線平泉駅から北北東約2.5kmにあり、北上川東岸の沖積地に立地している。

遺跡が所在する平泉町は、内陸部の南端部に位置し、北は胆沢郡前沢町と衣川村、東は東磐井郡東山町、南は一関市に接する。面積6375km²、人口約9600人の町である。

本遺跡は国土地理院発行の５万分の１地形図「水沢」(ＮＪ－54－14－14) の図幅に含まれ、北緯39度00分32秒、東経141度８分５秒付近にある。

第２節　地形と地質

平泉町の地勢を概観すると、町の中央を北上川が南流し低地が形成され、東に北上山地西縁部、西に磐井丘陵、奥羽脊梁山脈が広がる。北上山地は紡錘形を成して南北に延び、中央に早池峰山を主とした高山地帯が存在し、そこから北方や南方にかけて高度をしだいに減じ、起伏が少ない単調な地形を形成し、準平原や高地性の丘陵が認められる。この地区の北上山地西縁部に限ると束稲山塊の主峰束稲山、経塚山、観音山がある。奥羽脊梁山脈は、帯状を成す火山岩類を主とした褶曲山地で地形的にも大起伏山地が多く、湯田や雫石などの構造盆地が発達し、山脈の大部分は北上川水系に属する。一方北上川は、北上・奥羽山系を２分し、岩手県の中央よりやや西寄りの北上川低地帯を南流し、宮城県北部を縦貫して仙台湾に注ぐ長さ243kmの川である。

平泉町及び周辺の地質は、北上川左岸流域では古生代の石灰岩、礫岩、泥岩、中生代の花崗岩の基盤層、北上川右岸流域では新生代第三世紀の安山岩、古生代の泥岩の基盤層が主体となっている。

本遺跡は、北上川左岸の沖積地上に立地し、北上川との比高差は大きくない。この沖積地は土地分類では谷底氾濫平野として扱われている。遺跡はその中でも最も高い位置に形成された段丘上にある。

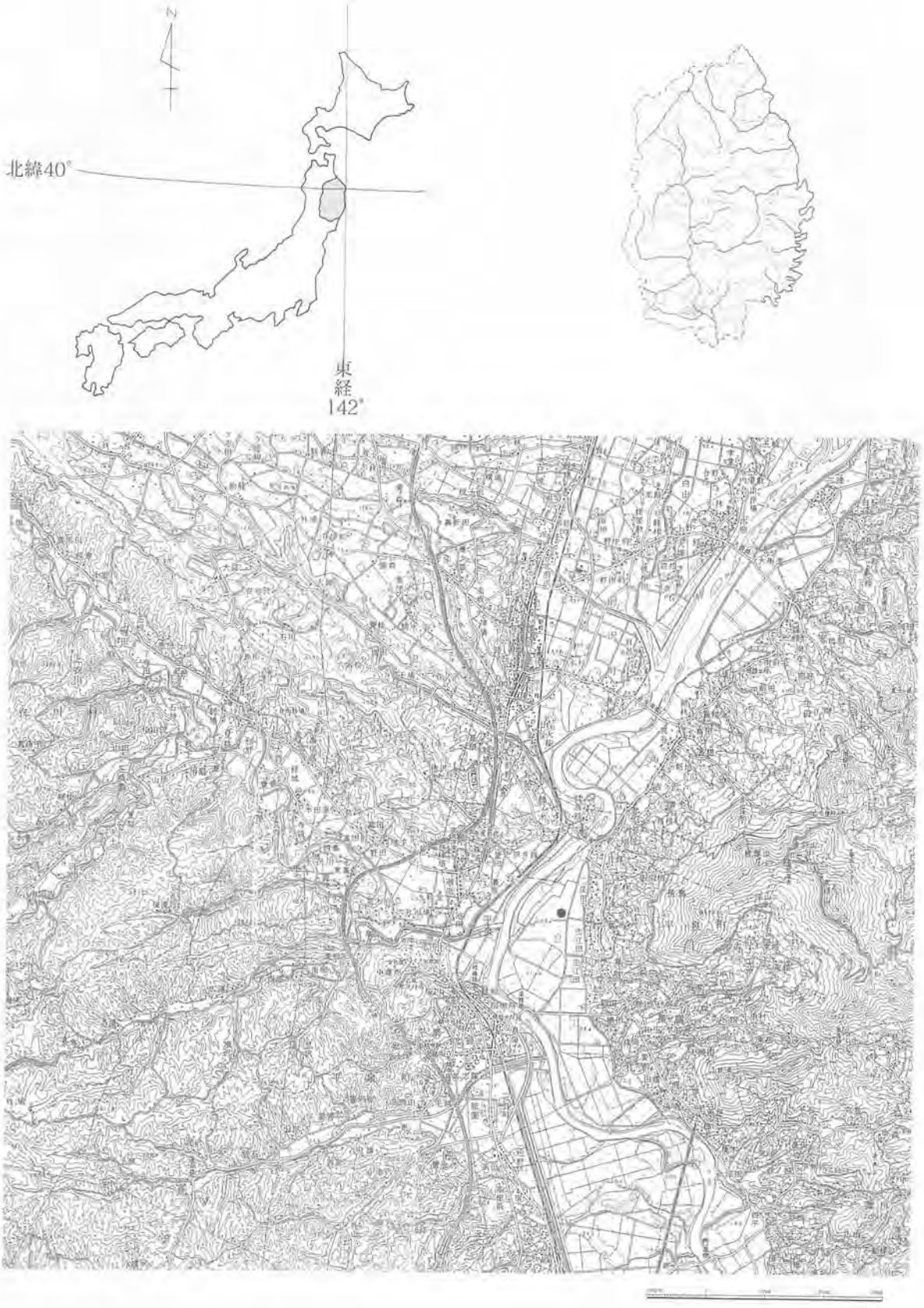
さらに細かく遺跡の地形を見てみると、遺跡内は北上川の影響により異なる５つの面が形成されている。まず、一段目はＡ地区でのみ存在し、自然堤防から下る斜面を除いた範囲に形成されている。この面は若干北から南へ傾斜する緩斜面となっている。この面は遺跡内を南北に走る農道として利用されており、Ｂ地区からＦ地区では調査区外にあたる。二段目はＦ地区西端でのみ確認され、自然堤防のすぐ下に形成された面である。三段目はＢ・Ｃ地区の自然堤防より西側に形成された面である。この面は先述した二段目より標高が若干高い。四段目は自然堤防と考えられ、調査区範囲内で最も標高の高い面にあたる。この面はＢ地区からＦ地区と南北にまたがって存在しており、現況は畑地や住宅地、農道である。五段目は自然堤防より東側に広がる一段低い面で、自然堤防の後背湿地に相当するものと思われる。この面もＢ地区からＦ地区にかけて存在し、現況は水田、畑地、農道である。

＜参考・引用文献＞

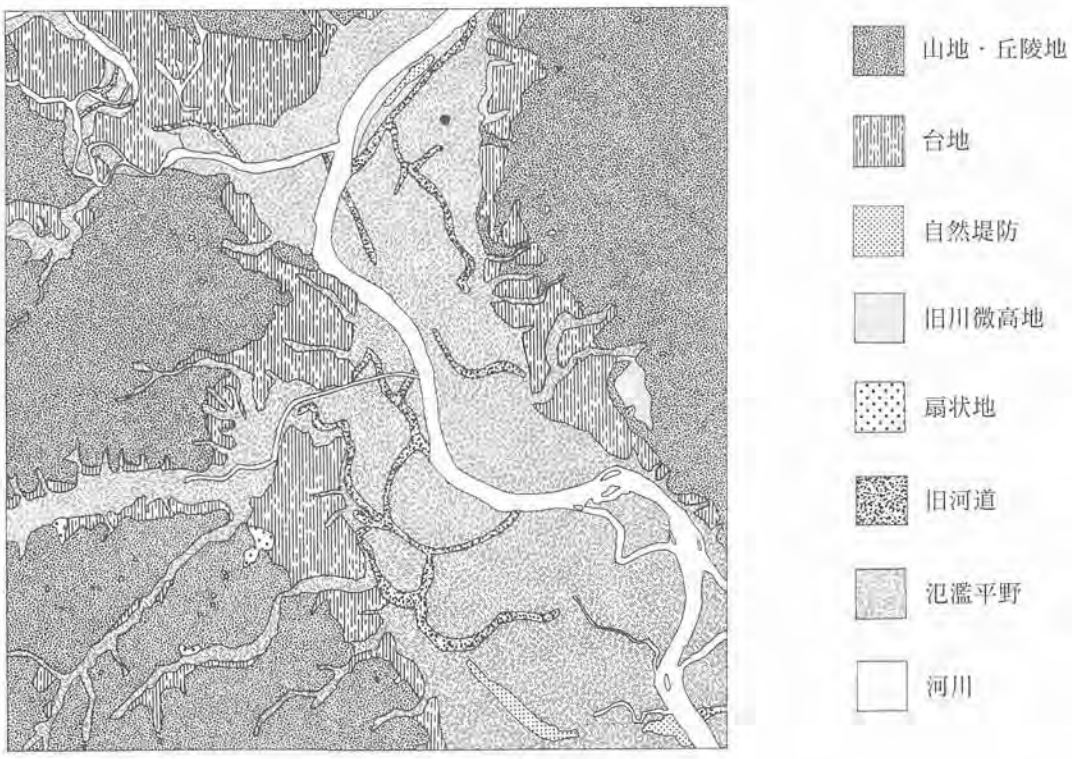
岩手県　1974 『北上山系開発地域　土地分類基本調査　一関』

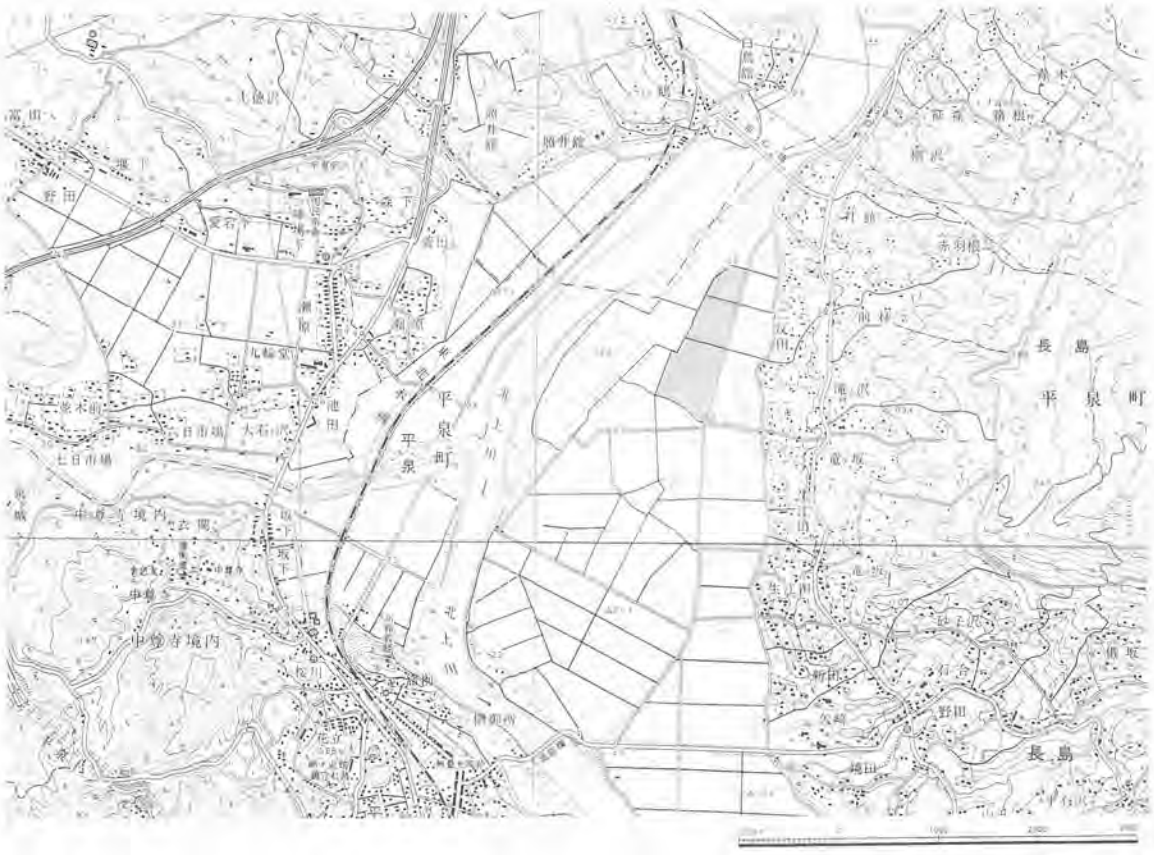
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988 『柳之御所跡』　岩手県文化振興事業団調査報告書第228集

平泉町教育委員会　1994 『柳之御所跡発掘調査報告書』　岩手県文化財調査報告書第38集



第１図　遺跡位置図





第２図　地形分類・遺跡周辺の地形図

第３節　周辺の遺跡

平泉町には平成12年度現在、103箇所の遺跡が登録されている。奥州藤原氏関連遺跡の調査が多く行われ、貴重な成果を上げている。町内には奥州藤原氏関連遺跡に限って存在するわけではなく、新山権現社遺跡や泉屋遺跡などで確認されているような縄文時代から近世・近代までの遺跡が存在し、人々の生活が営まれていることが明らかにされている。

今回報告する里遺跡は、弥生時代、10～11世紀の平安時代、12世紀の奥州藤原時代の遺物が出土していることから、それらが出土する遺跡に限定し、平泉町及び周辺地域から概観していく。

（1）弥生時代の遺跡

平泉町内で弥生時代に属する遺跡として本格的に調査されたものはなく、報告例も極めて少ない。当埋蔵文化財センターで調査された新山権現社、泉屋遺跡、高玉遺跡、瀬原Ⅰ遺跡などで土器が僅かに確認されている。それらの中の高玉遺跡や瀬原Ⅰ遺跡は、弥生時代後期の天王山式期に属する土器が数点出土しているものの、全体的に点数は少なく不明な点が多い。また、周辺地域の前沢町や衣川村では、数遺跡が確認されているものの調査例は少ない。報告されている遺跡として、北上川上流に縄文時代晩期から弥生時代中期に属する遺物が確認されている川岸場Ⅰ遺跡がある。

（2）９～11世紀の遺跡

平泉町内で９～11世紀代にかけての報告例は少ない。当埋蔵文化財センターで報告されている瀬原Ⅰ遺跡や三日町Ⅰ遺跡、矢崎Ⅰ遺跡などでは９世紀後半から10世紀に所属する住居跡が僅かに確認され、それに伴う遺物が出土している。また、志羅山遺跡第14次調査、柳之御所遺跡などで当該期の遺構や遺物等が僅かに確認されている。町内に当該期中の遺跡が所在することが明らかになりつつあるが、全体像は未だ不明に近い。今回の報告例は、自然堤防上にこの時期の小規模な集落が存在していたことを示唆している。

（3）奥州藤原氏時代の遺跡

奥州藤原氏時代の平泉町内には、数多くの遺跡が存在し貴重な成果をあげている。古くから行われている国特別史跡の中尊寺境内、無量光院、毛越寺、観自在王院などの発掘調査や柳之御所遺跡、志羅山遺跡、泉屋遺跡などの最近の発掘調査から、藤原氏の時代における平泉の実態が明らかにされつつある。これらの成果は『平泉の埋蔵文化財』や岩手県教育委員会、岩手県埋蔵文化財センターの報告書に詳しく掲載されている。また、周辺地域では、衣川村に所在する安倍館で調査が行われ、当該期の青磁碗や白磁皿などの遺物が検出されている。

本遺跡が所在する北上川東岸地域に限って概観すると、月館Ⅰ遺跡や新山権現社遺跡などで表採遺物や包含層遺物として確認されているが、本遺跡のように奥州藤原氏の時代に属する遺物が遺構に伴って出土した報告例は極めて稀である。

＜参考・引用文献＞

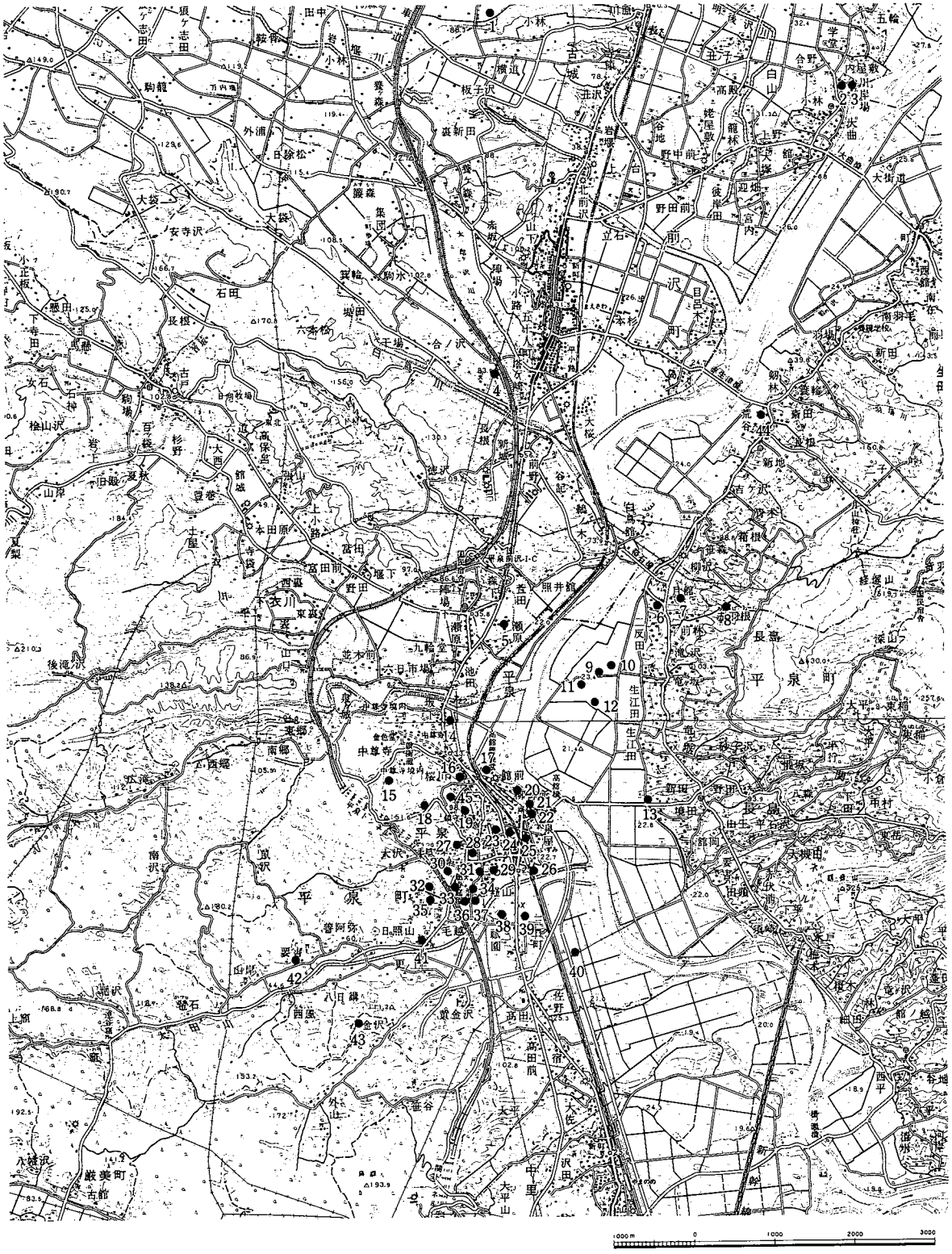
平泉町教育委員会　1987 『平泉の埋蔵文化財』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988 『柳之御所跡』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第228集

平泉町教育委員会　1994 『柳之御所跡発掘調査報告書』　岩手県文化財調査報告書第38集

平泉町教育委員会　1994 『平泉遺跡群発掘調査報告書』　岩手県文化財調査報告書第40集

岩手県教育委員会　2000 『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』



第３図　周辺の遺跡分布図

No	遺跡名	所在地	遺跡の性格・遺構・遺物	備考
1	高日向	前沢町古城字高日向		
2	川岸場Ⅰ	前沢町白山字川岸場	散布地	
3	川岸場Ⅱ	前沢町白山字川岸場	集落跡、環濠屋敷跡	
4	泊ヶ崎	前沢町字泊ヶ崎	弥生土器、土師器、須恵器	東北縦貫道開発に伴い調査
5	瀬原Ⅱ	平泉町平泉字瀬原	土師器、須恵器	
6	新山権現社	平泉町長島字月館	縄文土器、石器、弥生土器、土師器	
7	東福寺Ⅰ	平泉町長島字月館	社寺跡、	
8	東福寺Ⅱ	平泉町長島字月館	社寺跡、経塚	
9	里前Ⅱ	平泉町長島字里前	かわらけ	
10	里	平泉町長島字里	弥生土器、土師器、須恵器、かわらけ、陶磁器	今回調査
11	里前Ⅰ	平泉町長島字里前	かわらけ、羽口	
12	本町	平泉町長島字本町	かわらけ	
13	矢崎Ⅰ	平泉町長島字矢崎		平成12年調査
14	坂下	平泉町平泉字坂下	伽羅遺構、かわらけ、陶磁器	
15	中尊寺境内	平泉町平泉字衣関	伽羅遺構、堀跡、かわらけ、陶磁器	国特別史跡、長期にわたって発掘調査
16	衣関	平泉町平泉字衣関	かわらけ、陶磁器	
17	高館	平泉町平泉字柳之御所	城館、土塁、かわらけ	昭和39・40年度に発掘調査
18	鈴懸の森	平泉町平泉字大沢	経塚	
19	花立Ⅰ	平泉町平泉字花立	社寺跡、城館跡、礎石、かわらけ、陶磁器	
20	柳之御所	平泉町平泉字柳之御所	城館跡、かわらけ、陶磁器、木製品	長期にわたって発掘調査
21	猫間ヶ淵	平泉町平泉字猫間ヶ淵	池跡、かわらけ、陶磁器	
22	無量光院	平泉町平泉字花立	社寺跡、伽羅遺構、かわらけ、陶磁器	特別史跡
23	花立Ⅱ	平泉町平泉字花立	社寺跡、城館跡、建物跡、かわらけ、陶磁器	
24	白山社	平泉町平泉字大沢	社寺跡、堀、かわらけ	
25	伽羅御所	平泉町平泉字伽羅楽	土塁、かわらけ、陶磁器、堀	
26	泉屋	平泉町平泉字倉町	縄文土器、弥生土器、かわらけ、陶磁器	平成12年調査
27	毛越寺	平泉町平泉字大沢	社寺跡、伽羅遺構、かわらけ、陶磁器	特別史跡、長期にわたって調査
28	観自在王院	平泉町平泉字志羅山	社寺跡、伽羅遺構、かわらけ、陶磁器	特別史跡
29	志羅山	平泉町平泉字志羅山	かわらけ、陶磁器	
30	毛越Ⅱ	平泉町平泉字大沢		昭和48年度調査
31	倉町	平泉町平泉字倉町	かわらけ、陶磁器	
32	毛越Ⅳ	平泉町平泉字大沢	かわらけ	
33	毛越Ⅲ	平泉町平泉字大沢		昭和48年度調査
34	国衡館	平泉町平泉字倉町	城館跡、かわらけ、陶磁器	
35	毛越Ⅴ	平泉町平泉字大沢	城館跡、かわらけ	
36	毛越Ⅰ	平泉町平泉字大沢	かわらけ、陶磁器	
37	隆衡館	平泉町平泉字倉町	かわらけ、陶磁器	
38	祇園Ⅰ	平泉町平泉字祇園	かわらけ	
39	三日町Ⅲ	平泉町平泉字三日町	土師器、須恵器	
40	高玉	平泉町平泉字高玉	土師器、かわらけ、陶磁器	昭和49年度調査
41	毛越Ⅵ	平泉町平泉字大沢	かわらけ	
42	要害Ⅰ	平泉町平泉字要害	かわらけ、一字一石経石	
43	比丘尼寺	平泉町平泉字黄金沢	社寺跡	
44	生母宿	前沢町生母字荒谷	弥生土器、石斧、土偶	
45	金鶏山	平泉町平泉字花立	経塚、陶磁器	

第1表　周辺遺跡一覧

第４節　基本層序

本遺跡の基本層序についての説明を行う。本遺跡の各地区の土層観察は、同じ地区内においても東西に長いため同一層を把握するのに困難を強いられた。その為さらに距離がある調査区間での同一層面の把握はほとんど無理であった。このような状況の中で明らかにできたことは、弥生時代の遺構検出面である粘土層が色調は異なるもののＢ～Ｆ地区で共通して確認できること、平安時代の遺構はほぼ現在のような自然堤防が作られた後に形成されたこと、水田耕作土を除去すれば平安時代以降の遺構検出面となることである。

先述したように各調査区での同一層面の把握が困難なことから、各調査区ごとに土層説明を行う。ただし、粘土層以外の同一層と思われる層には、土層説明後に記載しておいた。

１．Ａ地区

Ⅰ層暗褐色シルト層（10ＹＲ３/４）現表土。農道にあたり非常に硬化している。Ⅱ層にぶい黄褐色シルト層（10ＹＲ４/３）粘性やや強く、しまり強い。直径５～10mmの炭化粒を少量、直径１～５mmの焼土と白色粒子を微量含む。本層上部は農道の影響により強く硬化している。本層は近世の遺構検出面に相当する。Ⅲ層暗褐色シルト層（10ＹＲ３/４）粘性、しまり共にやや強い。直径１～５mmの炭化粒と白色粒子を微量に含む。Ⅳ層暗褐色粘土質シルト層（10ＹＲ３/３）粘性やや強く、しまり強い。混入物はⅢ層より減り、若干粘性が増す。水の影響による白色やオレンジ色した粘土ブロックが見られる。Ⅴ層灰黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/２）粘性、しまり共に強い。上層に比べ砂質が非常に強く、混入物は見られない。縄文や弥生時代の遺構検出面となる。Ⅵ層暗褐色砂層（10ＹＲ４/３）細かい砂粒で構成されている。Ⅶ層にぶい黄褐色粘土層（10ＹＲ４/３）粘性、しまり共に強い。調査区内の層序の中で最も粘性が強く、混入物等は見られない。本層のみ他調査区の粘土層と対比できる層と考えている。

２．Ｂ地区

Ⅰ層黄灰色土層（2.5ＹＲ５/２）現水田耕作土。粘性、しまり共に強い。本層下部には褐色化した酸化鉄の層が見られる。Ⅱ層灰黄褐色土層（10ＹＲ５/２）旧水田層。本層中で分層は可能であったが、旧水田耕作土として一層と捉えた。上面に比較的多くの炭化粒を含む。Ⅰ層より暗味や黄色味共に増す。Ⅱ｀層 にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/３）粘性弱く、しまりもやや弱い。砂質が非常に強い。本層は調査区西側でのみ確認された。Ⅲ層にぶい黄褐色～褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/３～４/４）粘性やや強く、しまり強い。シルト質が強い層である。白色粒子がやや多く見られ、直径５～10mmの小石を含む。ただし場所によっては、比較的硬化し、暗味を増しているⅢ｀層（10ＹＲ３/２）が確認されたが同一層として判断した。Ⅳ層暗褐色～褐色砂質シルト層（10ＹＲ３/３～４/４）粘性強く、しまりやや強く～強い。上層に比べ砂質とシルト質が強くなる。水の影響と思われる灰色帯びた層を確認した。Ⅴ層灰黄褐色～にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/２～４/４）粘性、しまり共に強い。Ⅵ層にぶい黄褐色～褐色シルト層（10ＹＲ４/３～４/４）粘性、しまり共に強い。直径１～３mmの炭化粒が少量確認できる。下層境では水の影響と思われる白色粘土化したブロックを確認した。Ⅶ層褐色粘土質シルト層（10ＹＲ４/３）粘性、しまり共に強い。上下層の漸移的な層と考えられる。弥生時代の遺物包含層である。Ⅷ層暗褐色粘土層（10ＹＲ３/３）粘性、しまり共に強い。混入物は見られなくなる。弥生時代の遺構検出面に相当する。

３．Ｃ地区

Ⅰ層黄灰色土層（2.5ＹＲ５/２）現水田耕作土。粘性、しまり共に強い。本層下部には褐色化した酸化鉄

の層が見られる。II層灰黄褐色土層（10ＹＲ５/２）旧水田層。本層中で分層は可能であったが、旧水田耕作土として一層と捉えた。上面に比較的多くの炭化粒を含む。Ｉ層より暗味や黄色味共に増す。Ⅲ層褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/４）粘性やや強く、しまり強い。シルト質が強い。白色粒子がやや多く見られ、直径５～10mmの小石を含む。水田耕作時に削平を強く受けているため、場所によっては確認できないところもある。Ｂ地区のⅢ層と類似する。Ⅳ層にぶい黄褐色～褐色シルト層（10ＹＲ４/３～４/４）粘性、しまり共に強い。上層に比べ砂質とシルト質が強くなる。水の影響と思われる灰色帯びた層を確認した。Ｖ層褐色粘土質シルト層（10ＹＲ４/４）粘性、しまり共に強い。Ｂ区の７層目と同一。Ⅵ層にぶい黄褐色粘土層（10ＹＲ４/３）粘性やや強く、しまり強い。Ⅲ層と類似しているが比較的しまりは強い。

４．Ｄ地区

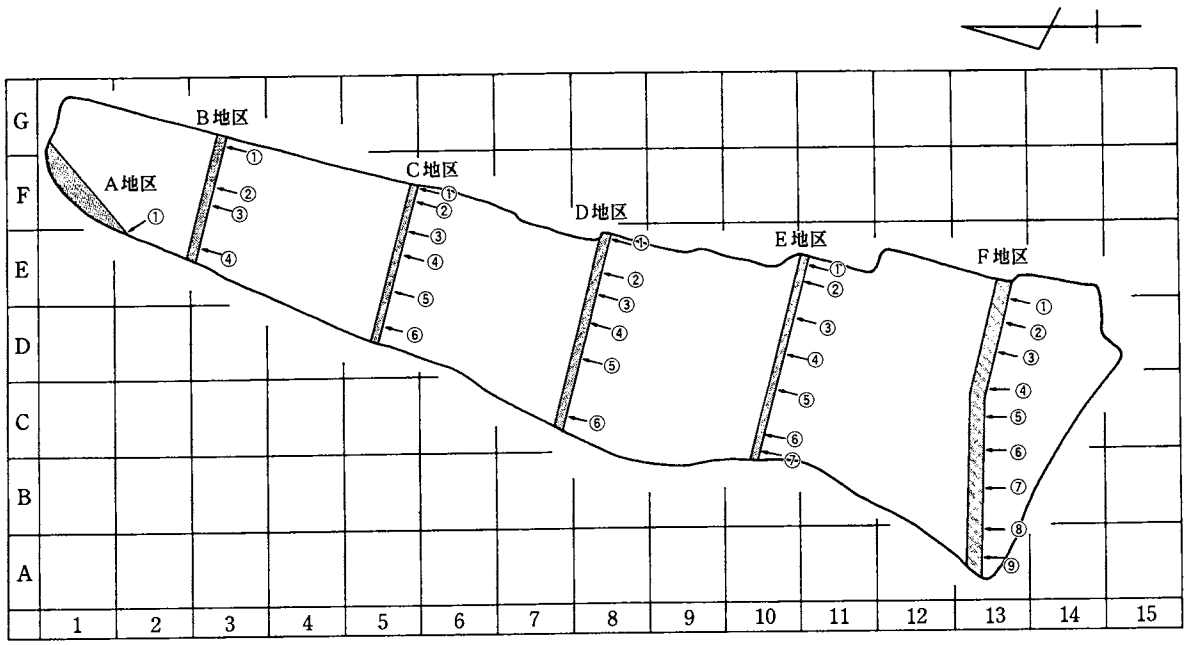
Ｉ層黄灰色土層（2.5ＹＲ５/２）現水田耕作土。粘性、しまり共に強い。本層下部には褐色化した酸化鉄の層が見られる。II層灰黄褐色土層（10ＹＲ５/２）旧水田層。本層中で分層は可能であったが、旧水田耕作土として一層と捉えている。上面に比較的多くの炭化粒を含む。Ｉ層より暗味と黄色味共に増す。Ⅲ層灰黄褐色～暗褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/３～４/４）粘性、しまり共に強い。直径１～５mmの炭化粒を微量、直径10mm前後の小石を含む。Ⅳ層にぶい黄褐色～暗褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/３～３/３）粘性、しまり共に強い。全体的にシルト質が非常に強くなり、シルトと粘土がブロック状に混入する所も見られる。Ｖ層褐色～暗褐色粘土層（10ＹＲ４/４～３/３）粘性、しまり共に強い。他調査区に比べ粘性が非常に富む。本層上面には灰色の粘土と酸化鉄のブロックが確認できる。Ⅵ層にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ５/４）粘性並、しまり強い。本層下部には灰色帯びたシルトを確認した。上下層に比べ砂質が強い。Ⅶ層褐色粘土質シルト層（10ＹＲ４/４）粘性、しまり共に強い。水の影響と思われる灰色帯びたブロックが確認できる。Ⅷ層褐色粘土質シルト層（10ＹＲ４/４）粘性、しまり共に強い。ＶとⅦ層の中間的な層である。

５．Ｅ地区

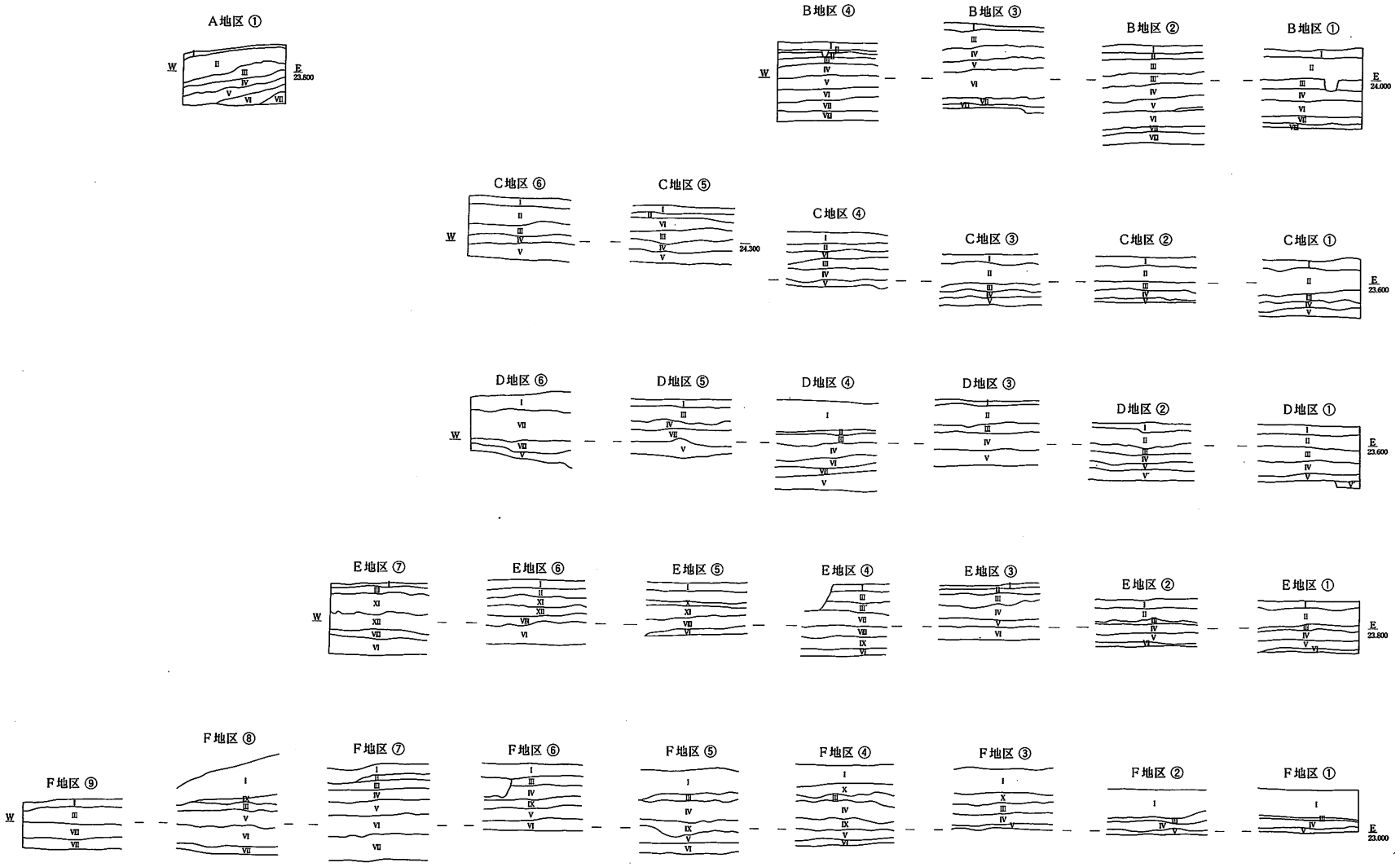
Ｉ層黄灰色土層（2.5ＹＲ５/２）現水田耕作土。粘性、しまり共に強い。本層下部には褐色した酸化鉄の層が見られる。II層灰黄褐色土層（10ＹＲ５/２）旧水田層。本層中で分層は可能であったが、旧水田耕作土として一層と捉えた。上面に比較的多くの炭化粒を含み、Ｉ層より暗味や黄色味が共に増す。Ⅲ層にぶい黄褐色～暗褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/４～３/３）粘性、しまり共に強い。シルト質は強くなり、白色粒子がやや多く、炭化粒が少量確認される。また、直径５～10mmの小石を含む。Ⅳ層暗褐色～褐色砂質シルト層（10ＹＲ３/３～４/４）粘性強く、しまりやや強い。上層に比べ砂質とシルト質が強くなる。水の影響と考えられる灰色帯びた層が確認された。Ｖ層にぶい黄褐色～褐色シルト層（10ＹＲ４/３～４/４）粘性、しまり共に強い。直径１～３mmの炭化粒が少量確認できる。調査区中央の所々で灰色帯びたシルトと酸化鉄が層状に形成されているのを確認できる。Ⅵ層暗褐色粘土層（10ＹＲ３/３）粘性、しまり共に強い。本層上面に灰色粘土と酸化鉄のブロックを確認した。Ⅶ層にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/３）粘性やや弱く、しまり強い。下層と比べしまりは強い。Ⅷ層にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/３）粘性やや弱く、しまり強い。上層と比べ水分が多く含まれており、比較的軟質に感じる。Ⅸ層にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/３）粘性やや強く、しまりあり。本層上面には水の影響と思われる酸化鉄のブロックなどが確認された。Ｘ層にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/３）粘性、しまり共に強い。ⅢとＸＩ層の漸移的な層である。ＸＩ層にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４/３）粘性、しまり共に強い。所々に黄白色のシルトブロックが確認できる。ＸII層にぶい黄褐色粘土シルト層（10ＹＲ４/３）粘性、しまり共に強い。ⅧとＸＩ層の中間的な層である。

6．F地区

Ⅰ層暗褐色土層（10ＹＲ3/4）である畑地耕作土と黄灰色シルト層（2.5ＹＲ5/2）である現水田耕作土の２種類が確認されている。場所によって異なるものの耕作土として一括して捉えている。Ⅱ層にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ4/3）粘性、しまり共に強い。シルト質が強く、比較的硬化している。白色粒子がやや多く見られ、直径５～10mmの小石を含む。Ⅲ層褐色砂質シルト層（10ＹＲ4/4）粘性やや強く、しまり強い。Ⅱ層よりシルト質が増し、灰色帯びた砂質ブロック、酸化鉄のブロックを多く観察できる箇所もある。Ⅳ層にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ4/3）粘性、しまり共に強い。上層に比べ砂質とシルト質が強くなる。水の影響と考えられる灰色帯びた層を確認した。Ⅴ層褐色シルト層（10ＹＲ4/4）粘性、しまり共に強い。Ⅵ層褐色粘土層（10ＹＲ4/4）粘性、しまり共に強い。本層上面に灰色粘土と酸化鉄ブロックが確認できる。本層下部に少量の炭化粒が見受けられる。Ⅶ層灰黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ4/4）粘性強く、しまりやや強い。炭化粒がやや多く確認される。Ⅷ層にぶい黄褐色砂層（10ＹＲ4/3）粘性弱く、しまりやや強い。所々によって色調は異なるが、砂質が極めて強い部分を本層と判断した。Ⅸ層にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ4/3）粘性強く、しまりやや強い。上下層に比べ砂質が強くなるものの、シルト質は若干弱くなる。Ｘ層にぶい黄褐色シルト層（10ＹＲ4/3）粘性、しまり共に強い。非常に硬化している層である。



第４図　土層断面配置図


A地区 ①
W
E
23.500
B地区 ④
B地区 ③
B地区 ②
B地区 ①
E
24.000
C地区 ⑥
C地区 ⑤
24.300
C地区 ④
C地区 ③
C地区 ②
C地区 ①
E
23.600
D地区 ⑥
D地区 ⑤
D地区 ④
D地区 ③
D地区 ②
D地区 ①
E
23.600
E地区 ⑦
E地区 ⑥
E地区 ⑤
E地区 ④
E地区 ③
E地区 ②
E地区 ①
E
23.800
F地区 ⑧
F地区 ⑨
F地区 ⑦
F地区 ⑥
F地区 ⑤
F地区 ④
F地区 ③
F地区 ②
F地区 ①
E
23.000

第5図　土層断面図

第３章　　調査・整理の方法

第１節　野外調査の方法

（1）調査区

本遺跡は、６本の用・排水路埋設に伴う調査であることから６カ所の調査区が存在している。これらの調査区を北から便宜的にＡ～Ｆ地区と呼称している。

（2）グリッドの設定

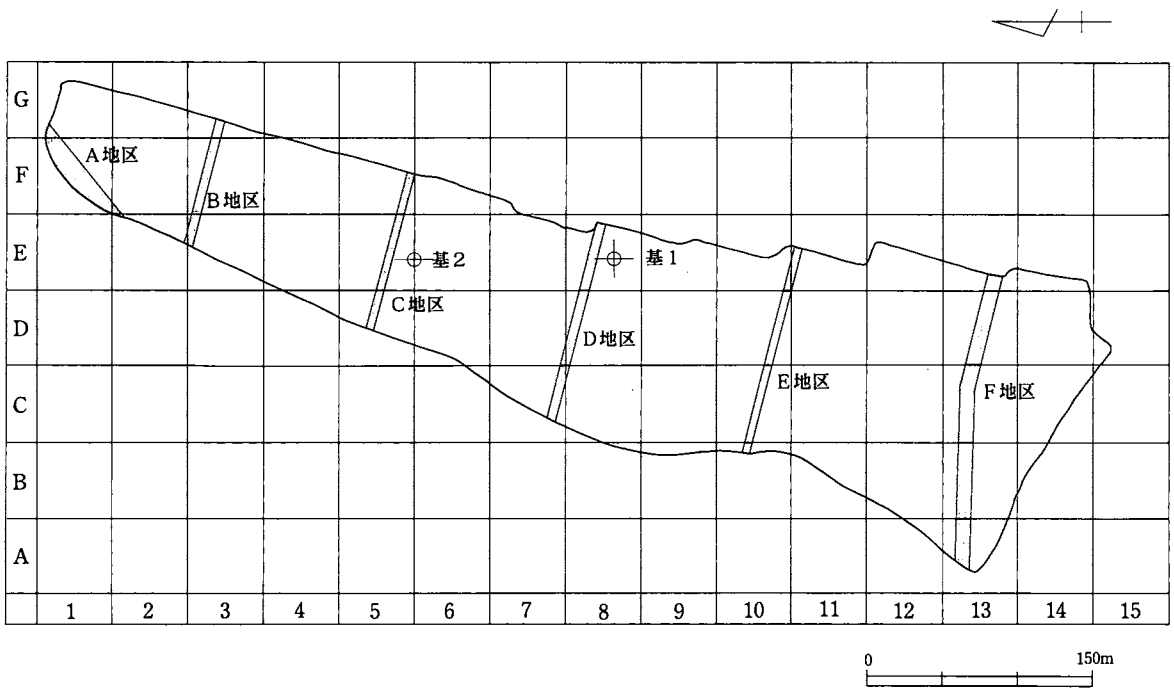
グリッドの設定にあたり、平面直角座標軸（第Ｘ系）に従って基準点１・２を設置した。

基準点１　Ｘ＝－109,970.000・Ｙ＝26,100.000

基準点２　Ｘ＝－109,840.000・Ｙ＝26,100.000

調査区内には上記の基準点のほかに、補点を９カ所に設置している。

これらの基準点と補点を結んだ線を基準線とし、これに直行する直線で調査区を遺跡全体を網羅するように設定しており、大グリッドは１辺が50m、小グリッドは大グリッドの各辺を10等分して１辺が５mとしている。大グリッドは西から東に向かってＡ～Ｇ、北から南に向かって１～15とし、また小グリッドは北西隅を１、南東隅を100となるようにした。各グリッドの名称は南東隅の杭の名称による。従って基準点１は８Ｅ65、基準点２は６Ｅ５となる。



第６図　グリッド配置図

（3）遺構の名称

野外調査では仮称を用いたが、報告書ではこれらを整理し以下のように略号を付した。

掘立柱建物・・ＳＢ　竪穴住居・・ＳＩ　井戸・・ＳＥ　土坑・・ＳＫ　溝・・ＳＤ　カマド・焼土遺構・・ＳＸ　陥し穴・・ＳＴＰ　柱穴・・Ｐ

なおこの番号には、調査の過程や調査後の検討で遺構に成り得ないとの判断したものもあり欠番が生じることもある。また、配石遺構１基検出されているが略号を付さず呼称している。

（4）粗堀り・遺構検出・精査

任意にトレンチを数カ所に設定し堆積状況や遺物の包含状況、遺構検出面の確認を行った後、重機を用いて遺構検出面まで掘り下げを行った。遺構の確認は表土を除去した面と遺物包含層直下の層界を、ジョレン、両刃鎌でプラン確認をした。また、遺構の精査では、サブトレンチを積極的に利用し、正確な遺構の把握に務めた。

検出された遺構は、２分法・４分法を用いて適宜使い分けて精査を行い、必要な記録は野帳や図面等に記録した。

（5）実測・写真撮影

遺構の平面実測は、簡易遣り方測量と平板測量で作成している。縮尺は原則として１/20とし、必要に応じて任意の縮尺を用いた。

写真撮影は、６×７㎝判カメラ１台（モノクロ）と35㎜判カメラ２台（モノクロ・リバーサル）を使用した。撮影は遺構・遺物の検出状況や出土状況に応じて行っている。

第２節　室内整理の方法

（1）作業手順

出土遺物は水洗、注記、遺物の接合復元をし、本報告書掲載遺物の登録を行った。これらの作業終了後、実測、拓本、遺物の写真撮影、遺構遺物のトレースを順に行い、種別ごとに図版と観察表を作成した。また、作業と平行して原稿執筆、各種の鑑定分析を行い報告書に掲載している。

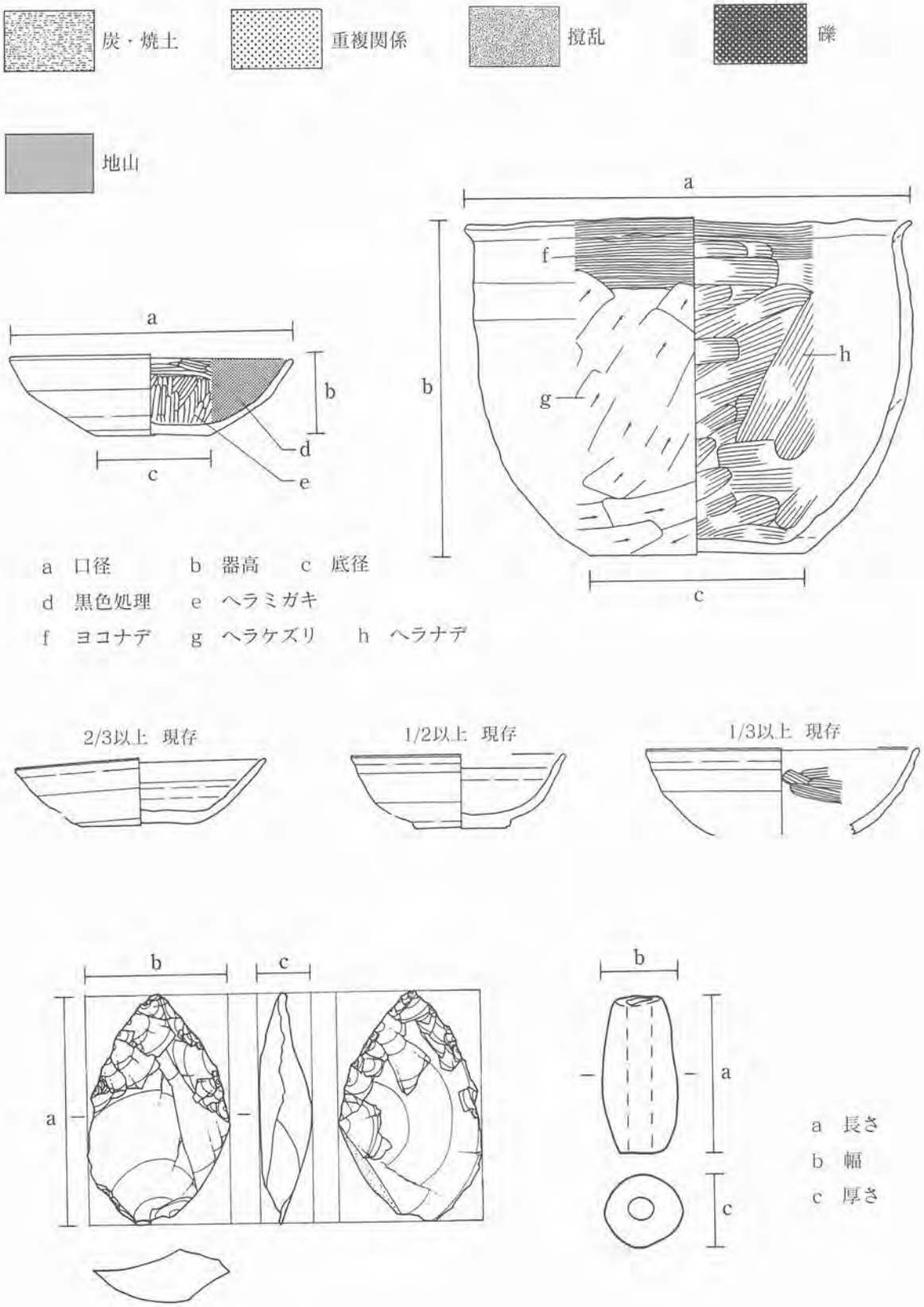
（2）遺構

遺構図版はスケール・縮尺率を付しており、一部例外があるものの以下の縮尺を原則としている。竪穴住居１/60、掘立柱建物1/60・1/120、土坑やカマド状遺構、井戸は1/40、溝1/40・1/80である。方位は第Ｘ系の北を示している。方位がないものはグリッドで方角を示している。

（3）遺物

土器実測は原則として反転実測が可能なものに限定した。ただし、かわらけは底部から口縁部まで残存しているものは積極的に実測し、大きさを表すため正面図は伏せて行った。土器の現存率は口縁部上端で表現している。掲載遺物の縮尺率は以下に記す。土器・土器拓影１/３、大形の土器１/４、石器４/５、土製品１/２、和鏡１/２を基本とし、大きさに合わせて適宜縮尺を変えている。各図版ごとに縮尺を示している。また石器は、被熱で剥落しているところにはスクリーントーンで、後世による剥離には空白にして示している。

写真図版の縮尺率は基本的に１/３であるが、26～30・32～43・48～107・239～267は１/２、177・178・229～236・309・310は１/６である。また、写真図版1～3は原寸で掲載している。


炭・焼土
重複関係
撹乱
礫
地山
a
b
c
d
e
f
g
h
a 口径　b 器高　c 底径
d 黒色処理　e ヘラミガキ
f ヨコナデ　g ヘラケズリ　h ヘラナデ
2/3以上 現存
1/2以上 現存
1/3以上 現存
a 長さ
b 幅
c 厚さ

第7図　凡例

第４章　　Ａ地区の遺構・遺物

第１節　Ａ地区の概観

Ａ地区は遺跡の最も北に位置し、面積1200㎡の調査区である。本地区は北東から南西に走る排水路埋設に伴い設定されている。

本調査区の現地形は、他の調査区がある段丘面から一段低い段丘面に下る斜面部分とその一段低い段丘面で形成されている。調査区の低い面は、現在農道として利用されている。

本調査区では１Ｆ63グリッドより北側は攪乱等によって削平を受けているため、１Ｆ63グリッドより南側でのみ遺構検出が可能となった。検出した遺構は、縄文か弥生時代に属する陥し穴と土坑、近世の配石遺構が１基ずつである。包含層からの出土遺物はなく、攪乱から数点確認できた程度である。

第２節　遺構

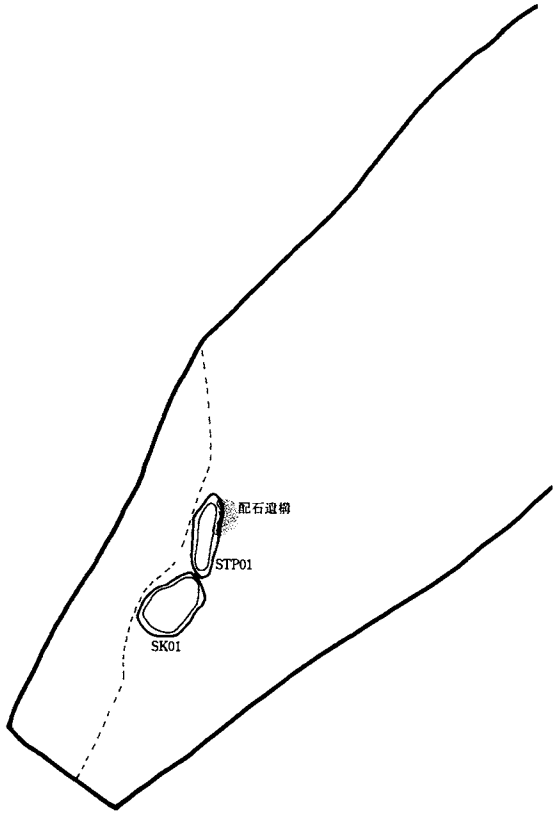
〔縄文・弥生時代〕

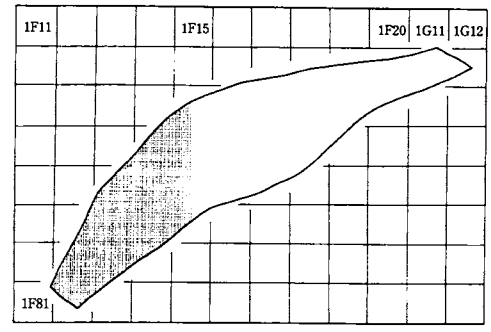
ＳＴＰ01

＜位置＞１Ｆ63・73に位置する。

＜検出面＞Ｖ層。

＜規模・平面形＞規模は2.78m×0.9m、深さ0.12～0.2m、平面形は楕円形を呈する。





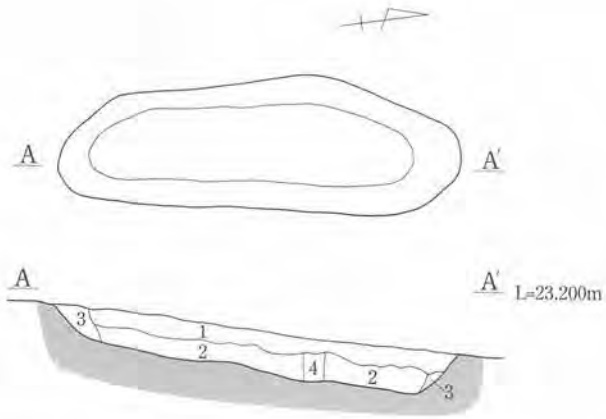
第８図　Ａ地区 遺構配置図

＜埋土＞主体層は褐色シルト層で、４層に分けられる。
＜出土遺物＞１は縄文が施文されている体部である。
＜遺構時期＞出土遺物から縄文か弥生時代に属すると思われる。
＜備考＞本遺構は、旧河川に平行して形成されていた。また、深さがないことから、本来掘り込まれた面が河川の氾濫により削平され、現検出面が形成されたことを推測させる。

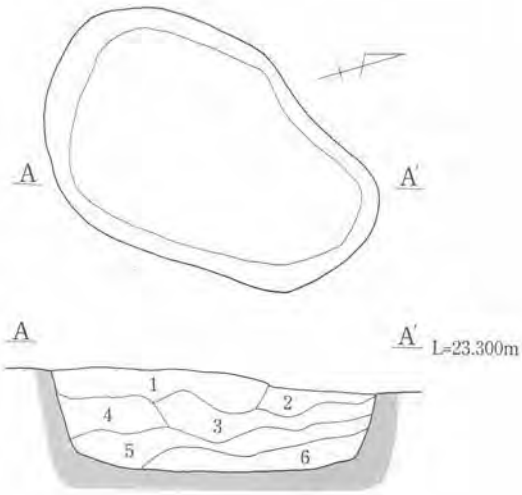
ＳＫＯ１
＜位置＞１Ｆ72・73に位置する。
＜検出面＞Ｖ層。
＜規模・平面形＞規模は2.14m×1.53m、平面形は不整円形を呈する。
＜埋土＞褐色シルト層が主体で、６層に分けられる。STP01の埋土と類似している。
＜出土遺物＞縄文が施文されている土器が出土しているが、図面掲載不可能なものである。
＜遺構時期＞出土遺物から縄文か弥生時代に属すると思われる。
＜備考＞STP01との新旧関係は不明である。

〔近世〕
配石遺構
＜位置＞１Ｆ63に位置する。
＜検出面＞II層。
＜検出状況＞表土掘り下げと同時に礫が数点検出された。それらの範囲を確認したところ、円礫が配列することから遺構として判断し精査に着手した。また、配石を除去した後、それらの下に土坑が存在することが明らかとなった。
＜規模・平面形＞配石の規模は1.32m×0.72m、平面形は配石の半分が削平されていることから半円形のみ確認された。また、土坑の規模は1.11m×1.08mで、平面形は不整円形を呈する。
＜埋土＞シルト層が主体で、２層に分けられる。
＜出土遺物＞土坑の埋土から寛永通宝（古寛永）が１枚出土している。
＜遺構時期＞近世に属すると考えられる。
＜備考＞礫の状況は、一番外側に置かれた礫は側縁部分を立て、その内側に置かれた大半の礫は平坦な面を上に向けて敷かれているような状態で配列されていた。使用されて礫は64点、重さは61.4kgである。

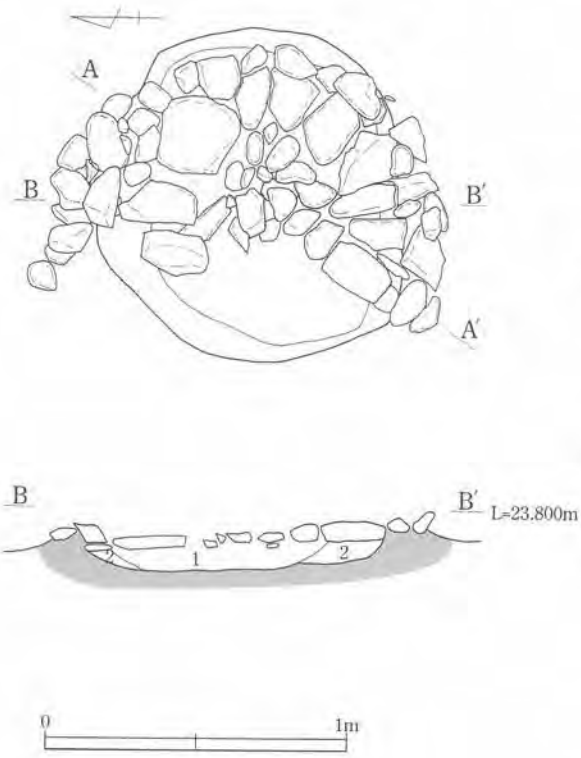
表採遺物
遺物は、縄文・弥生土器から近世陶磁器まで表採されている。その中で掲載可能な遺物のみ実測を行った。２はＬＲ縄文が施文された体部である。３は連続刺突文が施されている甕の口縁である。４は体部にＬＲ縄文が施文された鉢である。５は非ロクロ成形による甕の口縁である。６は体部にヘラミガキが施されている甕の頸部である。７は回転糸切りの底部をもつ須恵器の坏である。８～11は近世陶磁器で、８・９・11が肥前陶磁器、10が瀬戸・美濃産の陶磁器である。



STP01
1　暗褐色砂質シルト（10YR3／4）粘性あり、しまりやや強い。
2　褐色砂質シルト（10YR4／4）粘性、しまり共にやや強い。
3　褐色砂質シルト（10YR4／6）粘性、しまり共にやや強い。
4　暗褐色砂質シルト（10YR3／4）粘性、しまり共にやや強い。

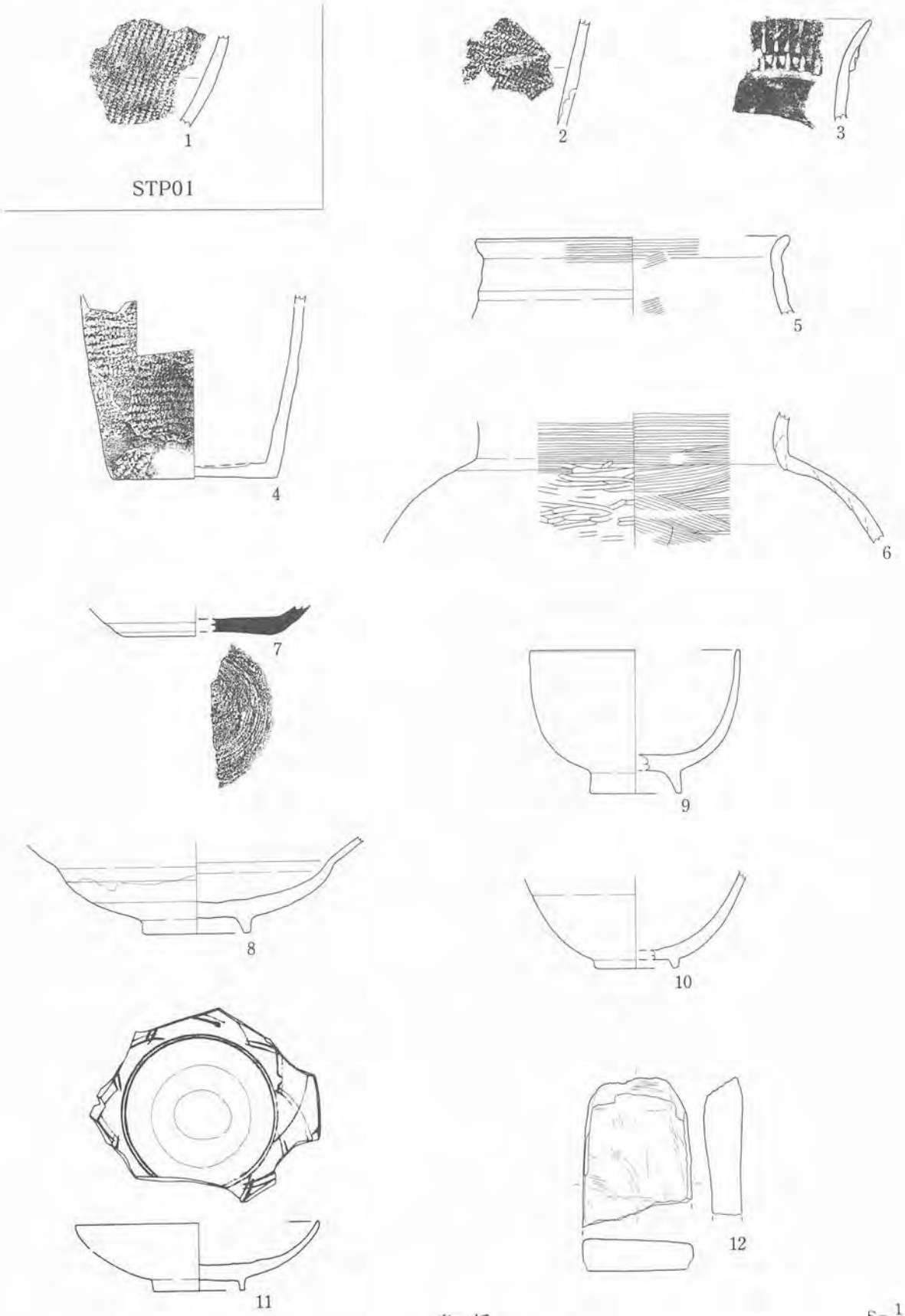


SK01
1　暗褐色シルト（10YR3／3）粘性弱く、しまり強い。
2　褐色シルト（10YR4／4）粘性、しまり共にやや強い。
3　にぶい黄褐色シルト（10YR4／3）2層と類似しているが、色調が微妙に異り、粘性しまり共に若干増す。
4　褐色シルト（10YR4／4）2層と類似しているが、粘性しまり共に増す。
5　褐色シルト（10YR4／4）粘性、しまり共にやや強い。
6　にぶい黄褐色砂質シルト（10YR4／3）粘性、しまり共にやや強い。砂質が増し地山と類似する。



配石遺構
1　灰褐色シルト（10YR5／1）粘性弱く、しまり強い。直径1～5㎜の炭化粒をやや多く、地山のブロックを僅かに含む。部分的に灰色帯びる所が目立つが1層と捉えた。
2　にぶい黄褐色粘土質シルト（10YR5／4）粘性やや強く、しまり強い。直径1～5㎜の炭化粒を微量に含む。地山崩落土。

第9図　A地区 STP01・SK01・配石遺構



第10図　A地区 出土遺物

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	文様・縄文	備考
1	1	縄文・弥生土器	-	体部	ＳＴＰ01埋土	ＬＲ縄文	
2	12	縄文・弥生土器	-	体部	表採	ＬＲ縄文	
3	2	弥生土器	甕	口縁部	表採	刺突文	
4	1	縄文・弥生土器	鉢	体～底部	表採	ＬＲ縄文	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
5	3	土師器	甕	頸～体部	表採	-	-	6.9	ミガキ	ナデ	-	細砂多	黄橙	良好	
6	4	土師器	甕	口縁部	表採	(16.9)	-	4.1	ナデ	ナデ	-	細砂多	黄橙	良好	
7	6	須恵器	坏	底部	表採	-	(7.6)	1.5	ロクロ	ロクロ	1/2	粗砂少	灰	良好	回転糸切り

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	胎土	釉薬	製作地	製作年代	備考
8	7	陶磁器	鉢	体～底部	表採	-	4.8	5.6	灰色	銅緑釉	肥前	18C前半	
9	8	陶磁器	皿	口～底部	表採	12.8	4.8	3.5	白色	染付	肥前	18C前半	
10	9	陶磁器	碗	底部	表採	-	4.2	4.7	灰色	透明釉	瀬戸・美濃	18C	
11	10	陶磁器	碗	口～底部	表採	11.0	4.7	7.4	灰色	灰釉	肥前	18C前半	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
12	11	砥石	表採	7.8	2.9	5.7	116.3	

第２表　　Ａ地区 遺物観察表

第５章　　Ｂ地区の遺構・遺物

第１節　Ｂ地区の概観

Ｂ地区はＢ～Ｆ地区の調査区があり自然堤防が含まれる沖積地の面で、最も北に位置する面積270㎡（90×３）の調査区である。本調査区は、ほぼ東西に延びる細長いトレンチとなっている。現況は水田と畑地である。

この調査区の現地形であるが、３Ｆ25グリッドより西側は東側より40～50cm高い自然堤防が形成されている一段高い面が存在し、その西側の３Ｆ11グリッド周辺からはやや下り低い面を形成していく。そしてこの低い面の脇に南北に走る農道へとさらに落ちていく。この農道はＡ地区の低い面に続いている。

本調査区は弥生時代と平安時代以降の遺構と遺物が確認されている。弥生時代に属する遺構は、炭化物集中２箇所、土坑と柱穴１基ずつ検出されている。出土遺物は土器、石器、土製品である。

平安時代以降に検出された遺構は、竪穴住居跡４棟、井戸１基、溝１条、土坑６基、カマド状遺構１基、柱穴31基である。遺物はかわらけや国産陶器、中国産陶磁器、土師器などである。

第２節　遺構

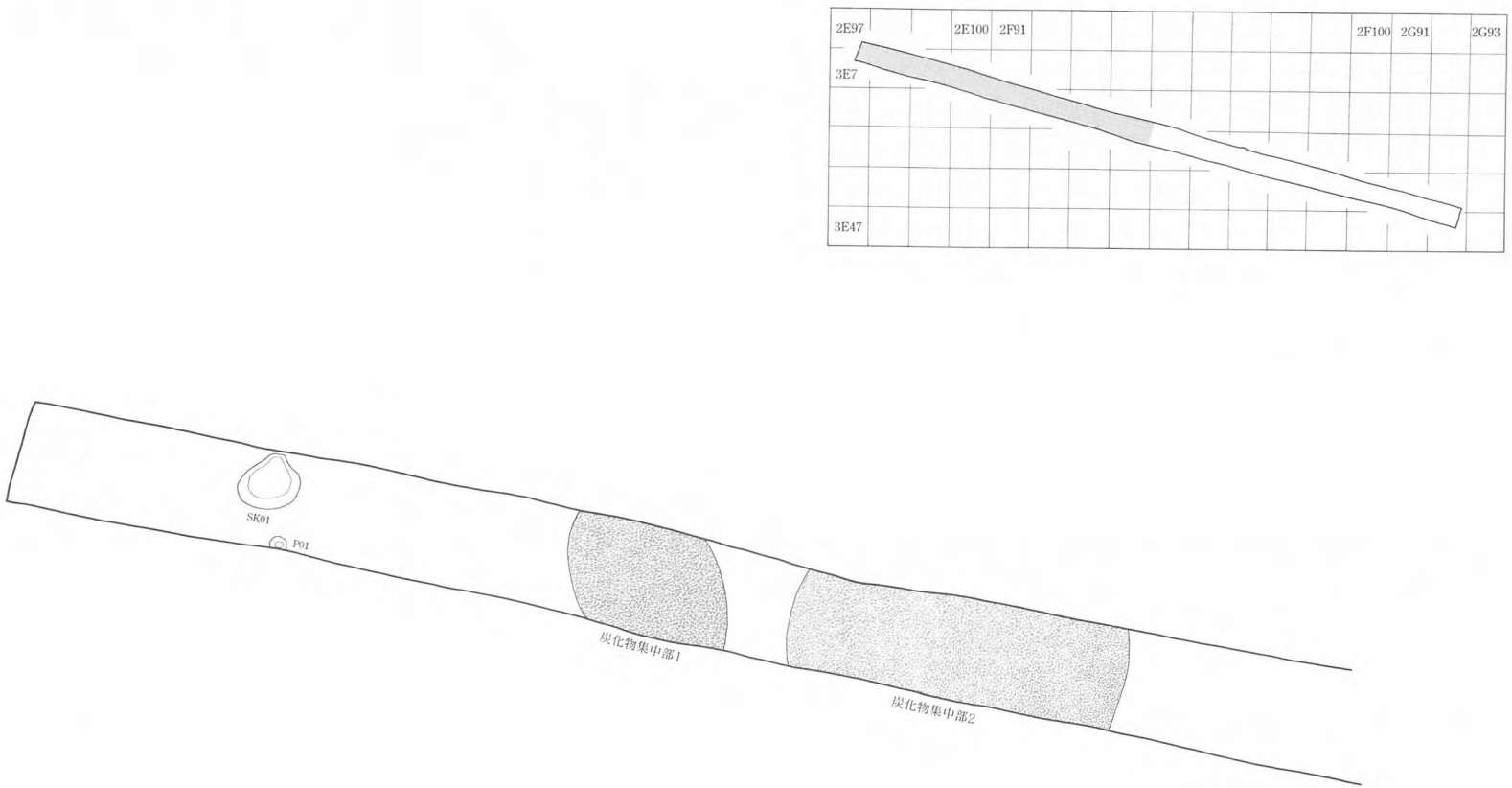
〔弥生時代〕

炭化物集中部１

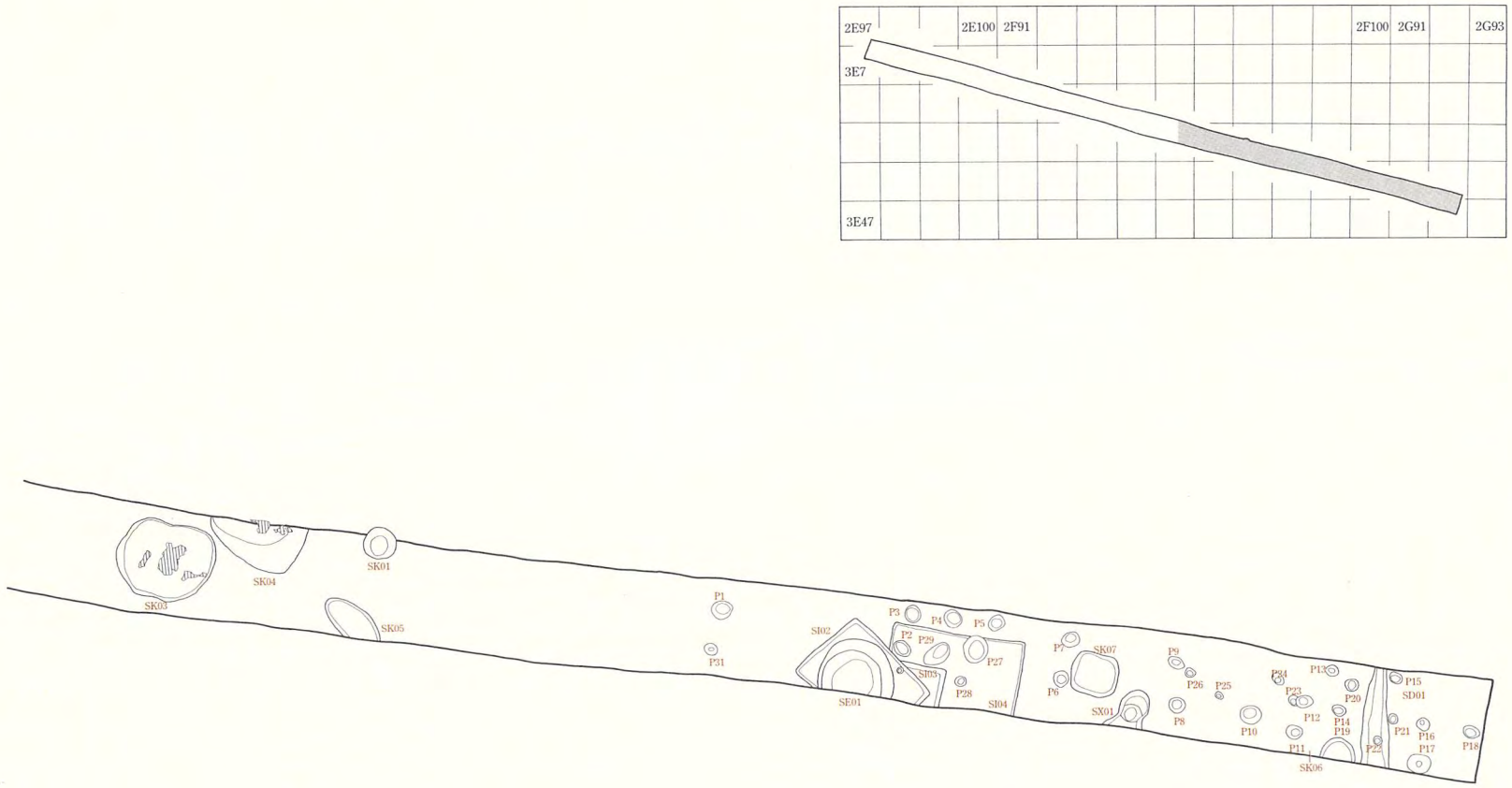
＜位置＞３Ｅ10・20に位置する。

＜検出面・検出状況＞Ⅶ層上面から炭化粒が広がりを見せ始めたことから、当初住居跡と判断しベルトを設定して数回に分けて掘り下げを行った。しかしこの集中部は、土層断面での観察から、炭化粒やⅥ層のシルト層やⅧ層の粘土層のブロックが上下に移動し、それらが波状に堆積していることが明らかになったため、住居跡として判断するまでに至らなかった。ただし、この集中部からは遺物も多数出土しているため遺構と扱った。

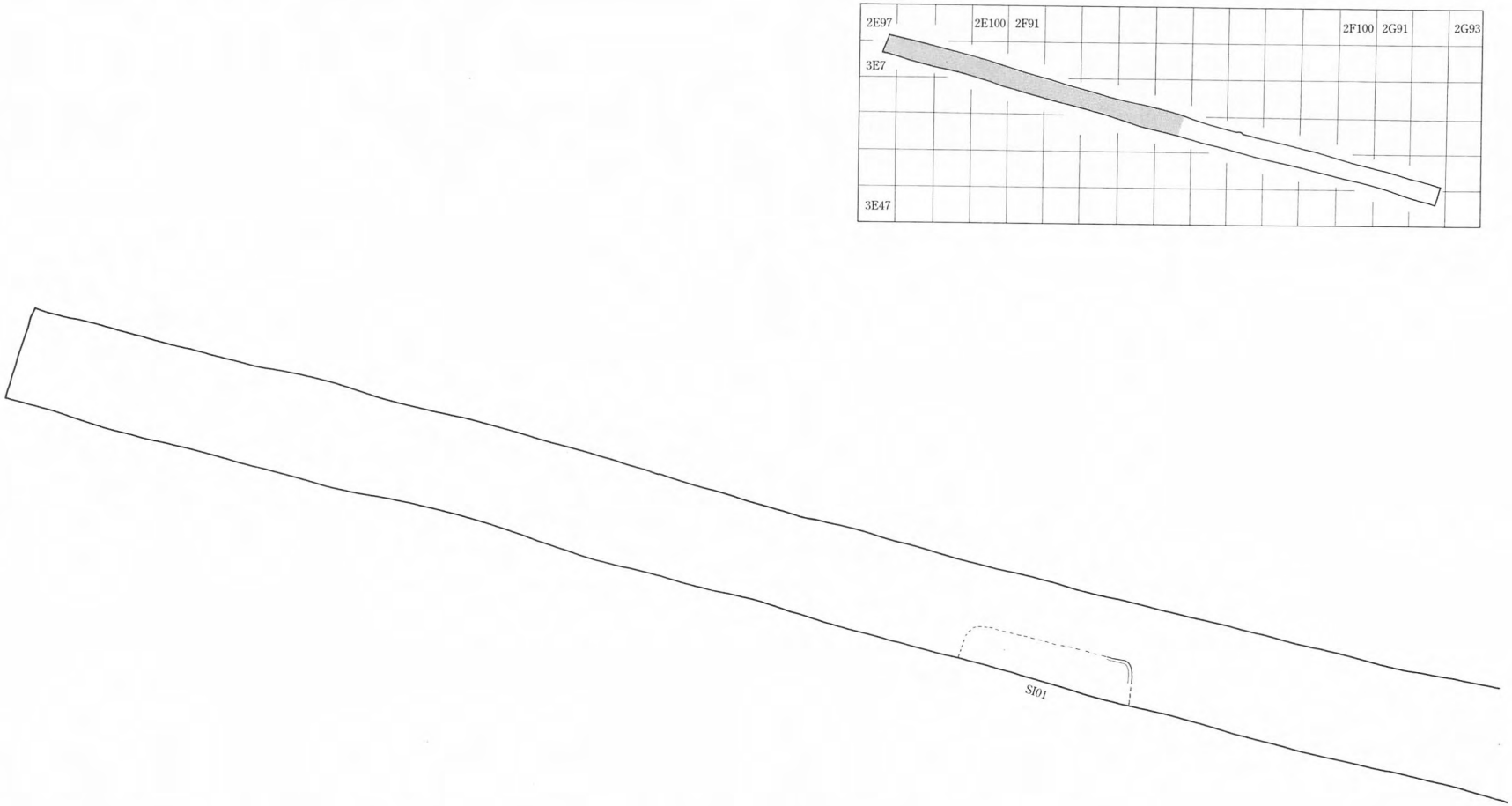
＜出土遺物＞土器92点、石器42点が出土している。土器の大半は縄文ないし無文の体部で、磨滅した土器が多いため図面掲載は不可能であった。器種組成は甕、深鉢である。13・15・16・18は指頭圧痕により波状を呈する口縁である。13と15、16は類似した口唇部の波状を示しているが、18は口唇部に施されている波状が他のものに比べると浅く、器厚も薄い。14は無節縄文（Ｌｒ）が施文された小形壺である。17は平行沈線と連孤沈線を組み合わせたものである。19～21は頸部もしくは頸部～体部にかけてのもので、体部からＬＲ縄文が施文されている。22と23はＬＲ縄文が施文されている体部である。24は平行沈線文の間に２列の列点文を組み合わせたものである。25は平行沈線文が施されている。石器の器種組成は、石鏃、石匙、石錐、楔形石器、二次加工を有する剥片、微細剥離痕を有する剥片、剥片、チップである。26～31は石鏃である。26は有茎石鏃で、素材腹面を裏面に残している。27～31は無茎石鏃で、27と28は素材剥片を縦位に、29～31は横長剥片を横位に用ている。32は石匙未製品である。石鏃の未製品とも考えられたが、縦断面の形状や素材が厚く石鏃のような先端部を作り出すような作業を行っていないことから石匙未製品とした。33は石錐で、剥片の末端が欠損されたものを素材として、加工を施して錐部が形成されている。34は石匙の摘み部分である。35は楔形石器、36・38～43は剥片、37は縁辺に二次加工が施されている剥片である。接合資料１は、一定の打面から剥片剥離が行われている。



第11図　B地区 弥生・遺構配置図



第12図　B地区 平安・遺構配置図



第13図　B地区 平安・遺構配置図

＜遺構時期＞弥生時代中期から後期に属するものと考えられる。

炭化物集中部２

＜位置＞３Ｆ11、12に位置する。

＜検出面・検出状況＞炭化物集中部１と同じの状況であり、同様に判断して精査を行った。

＜出土遺物＞土器135点、石器71点が出土している。土器の大半は縄文ないし無紋の体部であった。磨滅した土器が多く図面掲載は不可能であった。そのため土器の器種組成は不明な点が多い。44は口唇部が指頭圧痕による波状を呈している口縁である。45は体部に縦位の波状沈線文と横位の平行沈線・連孤沈線文を組み合わせたものである。46は体部が無文で、底部に木葉痕が見られる。47は外面にススが付着した無文の体部である。石器の器種組成は、石鏃、石匙、石匙の未製品、石錐、二次加工を有する剥片、微細剥離痕を有する剥片、チップである。48は有茎石鏃である。49～52は無茎石鏃である。49と50は素材剥片の背面側から調整剥離を加え先端部のみ作り出しており、未製品とも考えられる。51と52は先端部を中心に、周縁から剥離を加えているものである。53・54・56は石錐。55は石匙未製品で、素材剥片の打面を除去した後、石匙の摘み部分のみ二次加工が施されている。57～61、64は二次加工を有する剥片である。58～60、64は剥片の縁辺に二次加工を加えたものであるが、57は打製石斧か箆状石器の製作段階での欠損品と思われる。62、63、65～73は剥片で、その中で66・69～71は微細剥離痕を有するものである。接合資料は２～４まである。接合資料２は、切断された剥片の接合資料である。接合資料３と４は同一母岩で、いずれも一定方向からの連続剥離が行われている。ただし、背面の剥離方向からは360°打点を移動させながら剥片剥離を行っていることを窺える。

＜遺構時期＞弥生時代中期から後期に属するものと考えられる。

ＳＫＯ１

＜位置＞３Ｅ９に位置する。

＜検出面＞Ⅷ層。

＜規模・平面形＞規模は1.44m×1.41m、深さ0.31mである。平面形は不整円形を呈する。

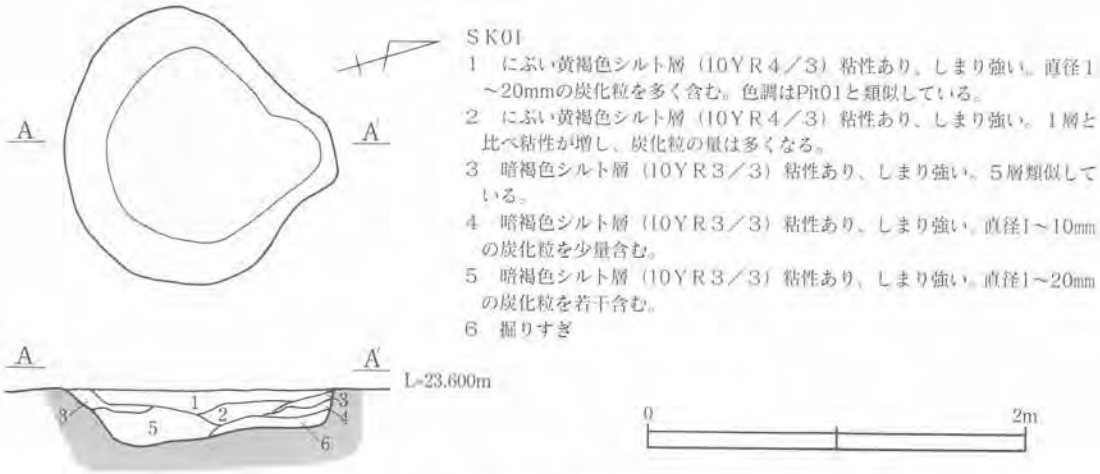
＜埋土＞褐色シルト層が主体で、５層に分けられる。

＜出土遺物＞土器34点、石器10点が出土している。点数も少なく不明な点が多いものの、器種には甕や深鉢がみられる。74は口唇部が指頭圧痕により波状を呈している甕である。75と76はＬＲ縄文が施文された体部で、76は穿孔を有するものである。77は体部が無文で底部に木葉痕をもつものである。78は体部下半にＬＲ縄文が施文されている底部である。石器組成は、石鏃、石匙、石匙の未製品、掻器、微細剥離痕を有する剥片、チップである。79は素材剥片の腹面が確認できる無茎石鏃である。80と81は石匙で、基本的に摘みを中心に作り出し、周縁に細かい剥離を加えたものである。82は、80と81に見られる摘み部分の作出方法や平面や側面形状が類似していることから、摘み部分の形成段階で欠損した石匙未製品と思われる。83は二次加工を有する剥片である。84は切断されている剥片である、85は微細剥離痕を有する剥片である。

＜遺構時期＞弥生時代中期から後期に属すると考えられる。

遺構外遺物

炭化物集中部１，２以外で土器113点、石器23点、土製品１点が出土し、図下した資料は14点である。遺構



第14図　B地区 SK01

外遺物の大半は、無紋や縄文が施文され体部の磨滅した土器であるため、掲載点数は僅かである。器種には壺や甕がある。86は連孤沈線文と平行沈線、山形沈線文の組み合わせをもつ壺の口縁である。87は平行沈線と工字文と充填縄文の組み合わせをもつ壺の口縁である。89は折り返し口縁で、口唇部直下がつまみ出されている。90と91は指頭圧痕により波状を呈する口縁で、91は口唇部直下に指頭圧痕が施されたものである。石器の器種組成は、二次加工を有する剥片、剥片、チップ、礫器、凹石である。101と102は剥片の末端に二次加工が施された剥片である。103～105剥片で、103と105は切断されている剥片である。106は一方から刃部形成をしている礫器である。107は凹石である。

〔平安時代以降〕

ＳＩＯ１

＜位置＞３Ｆ11・12の間に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜検出状況＞本調査以前の試掘トレンチの断面より遺構の存在を確認できたが、発掘調査段階で埋土と地山（Ⅲ層）との判別が付かずサブトレンチを入れることで遺構プランを決定した。このことにより遺構の大半を消失し、確認できたのは住居の北東隅のみであった。

＜規模＞住居が調査区外に延びていくため規模は不明である。確認された規模は東壁と西壁間が4.79m、調査区の壁と北壁間が1.16mを測る。

＜平面形＞確認された北東隅は、隅丸を呈している。

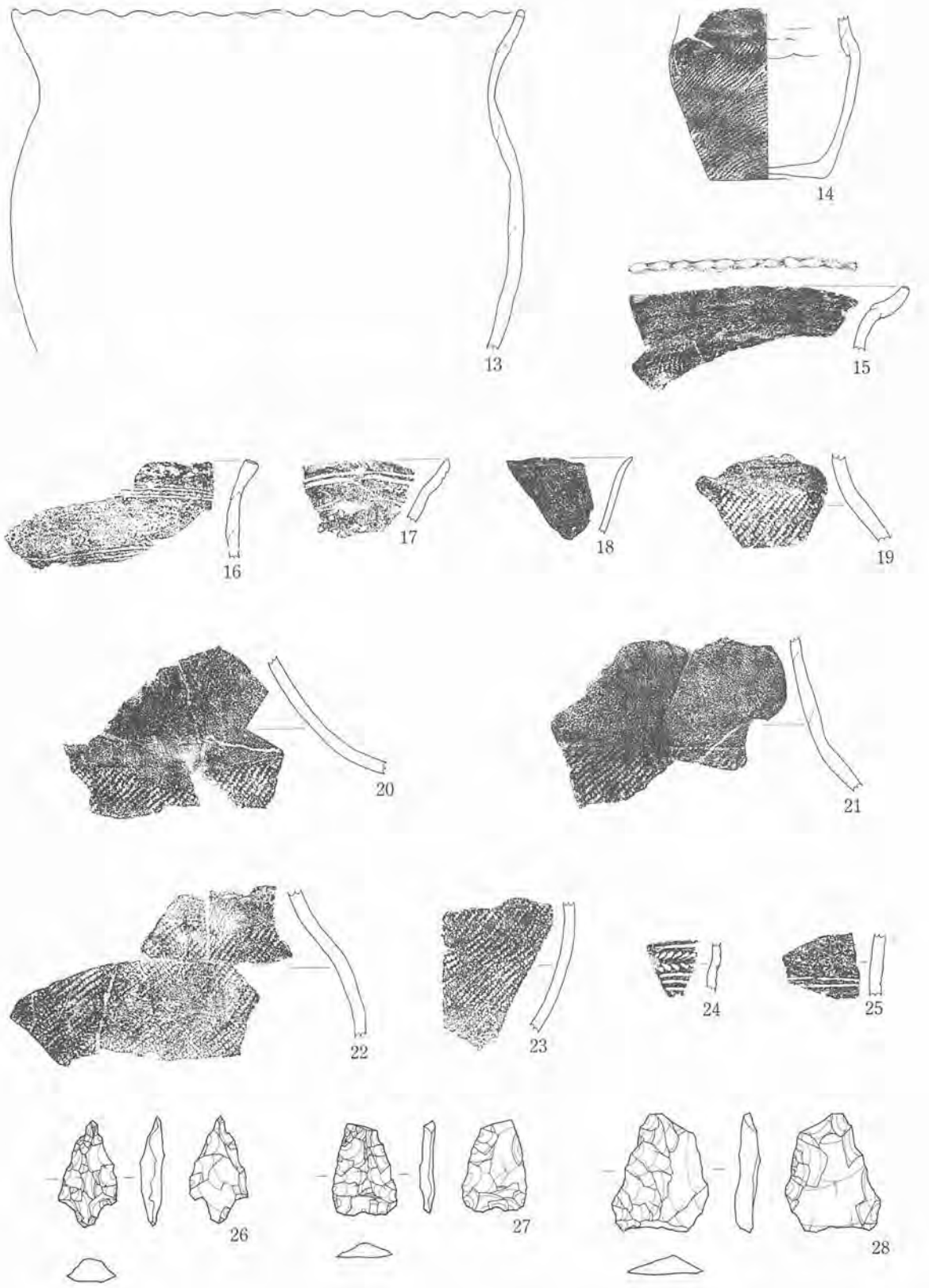
＜壁の状況＞埋土と地山の判別が付かず断面でのみ壁の立ち上がりを確認できた。確認された壁は、若干傾斜して立ち上がる。

＜床の状態＞唯一確認できた床は、Ⅳ層をそのまま床面として利用している。

＜カマド＞本調査以前の試掘断面から東壁方向と推測される。

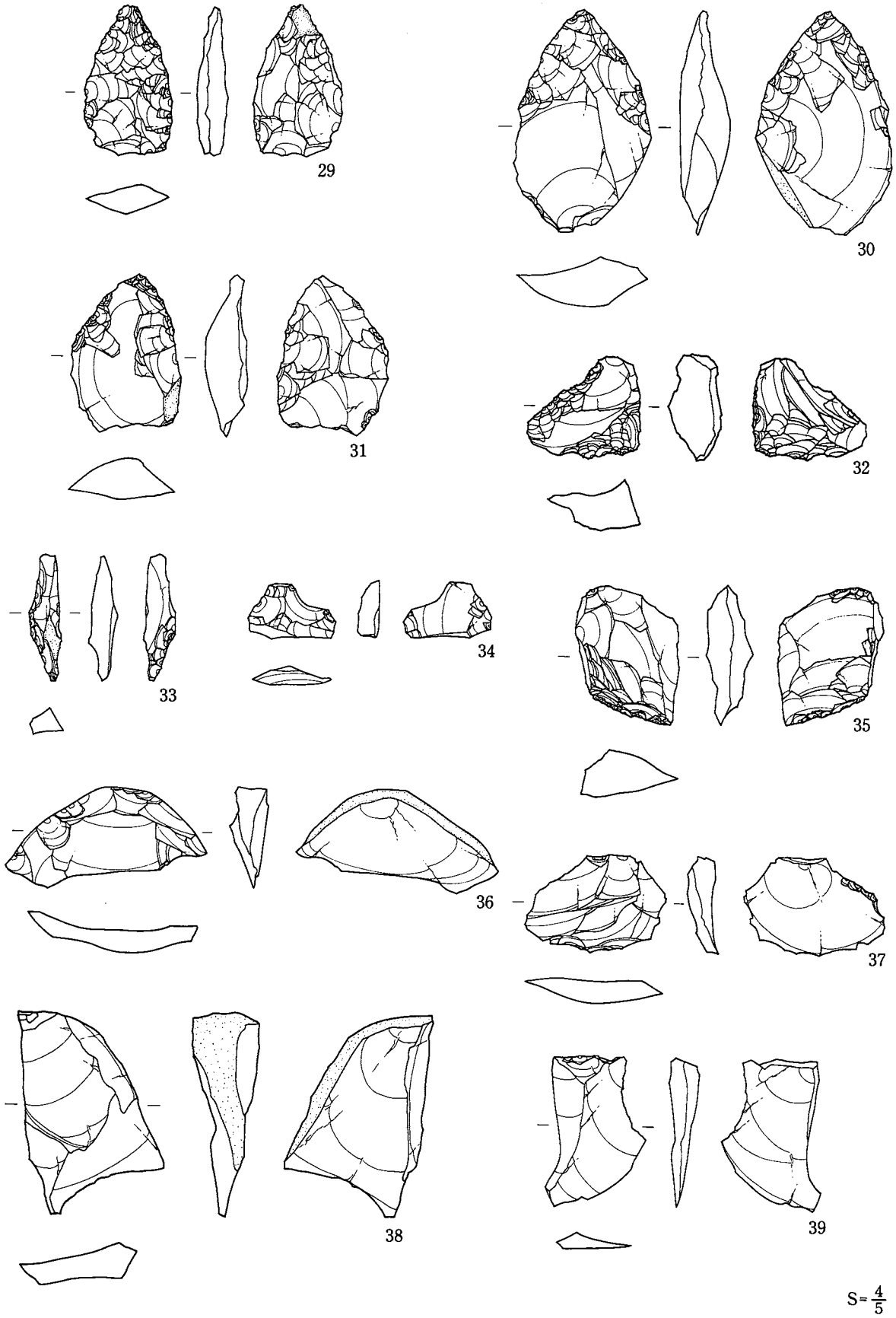
＜埋土＞黄褐色シルト層主体で、６層に区分できる。

＜出土遺物＞土師器の甕と須恵器の坏などが出土しているが、出土遺物の大半は磨滅していたため、図面掲載できたのは僅かである。108は土師器の甕、底面はヘラナデが施されている。109は須恵器の坏である。

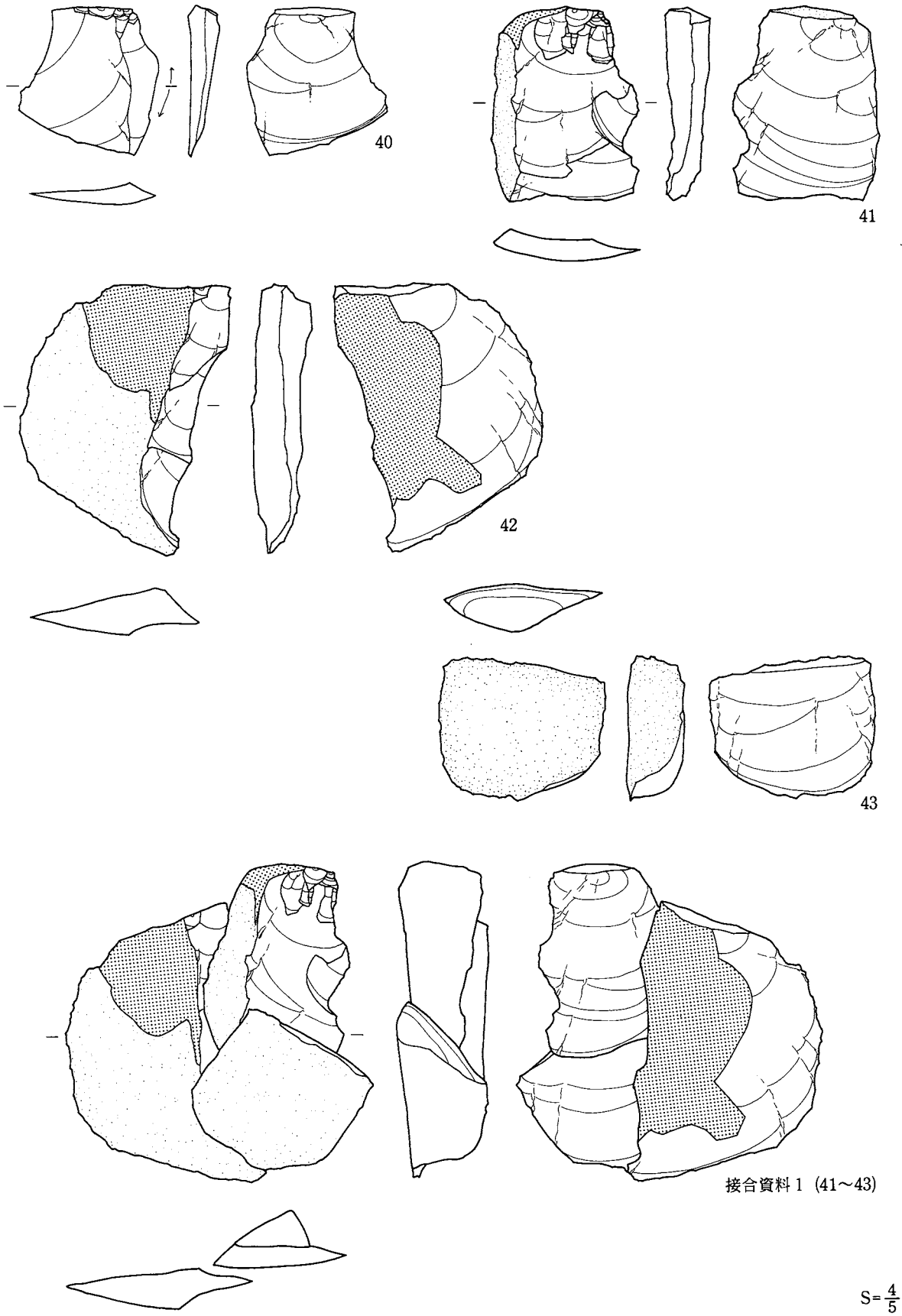


26～28 S＝$\frac{4}{5}$　他 S＝$\frac{1}{3}$

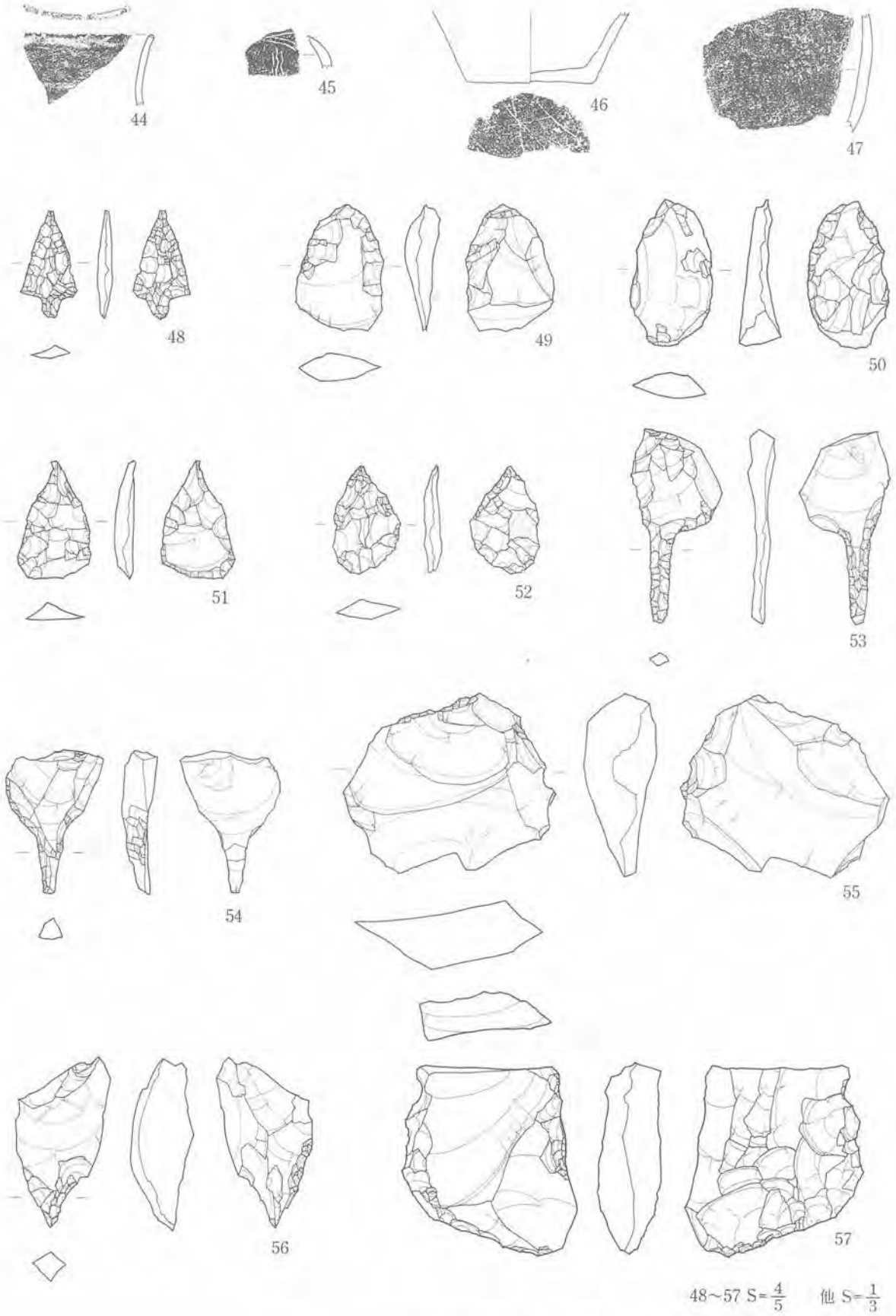
第15図　B地区炭化物集中部1　出土遺物(1)



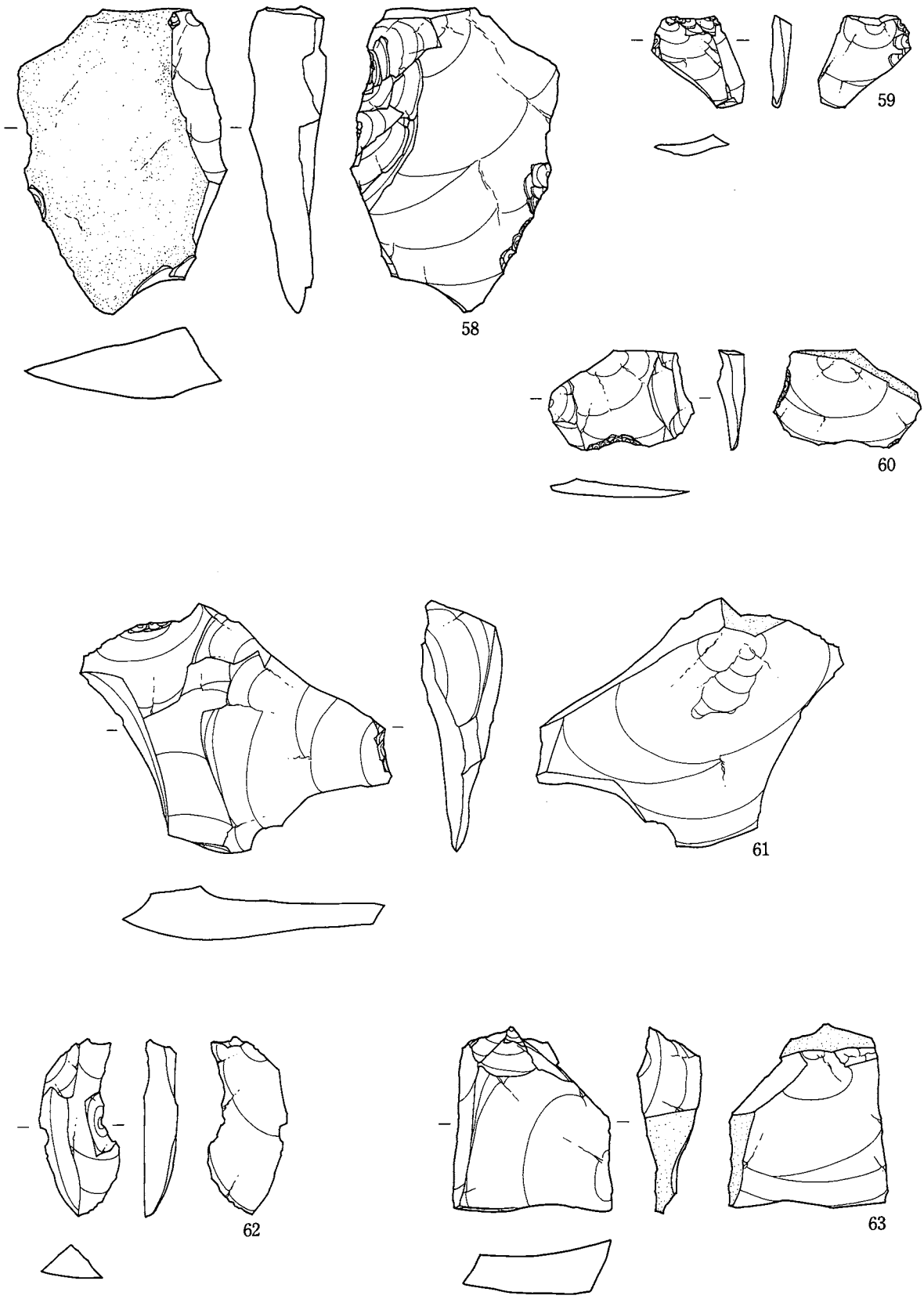
第16図　B地区炭化物集中部１　出土遺物（2）



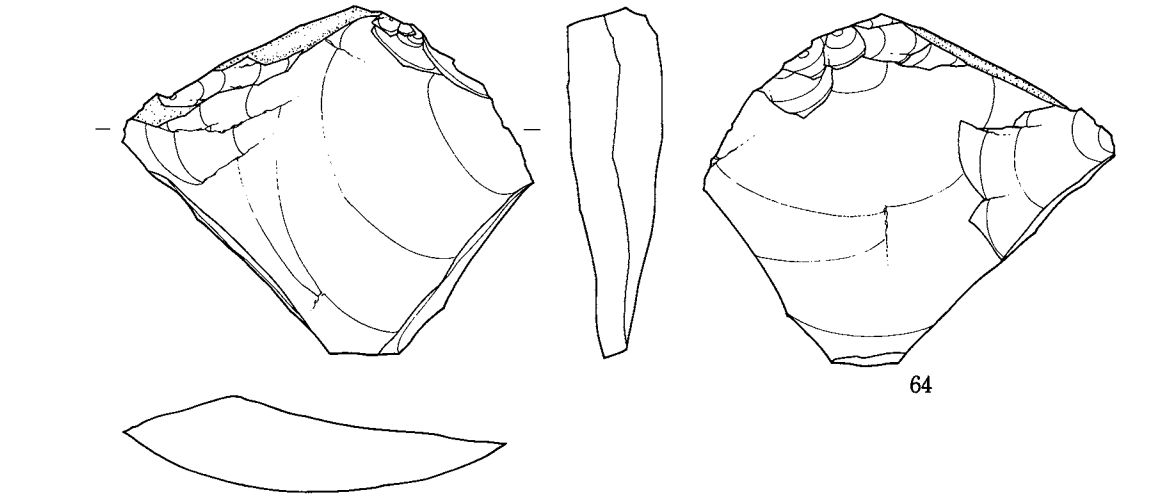
第17図　Ｂ地区炭化物集中部１　出土遺物（3）

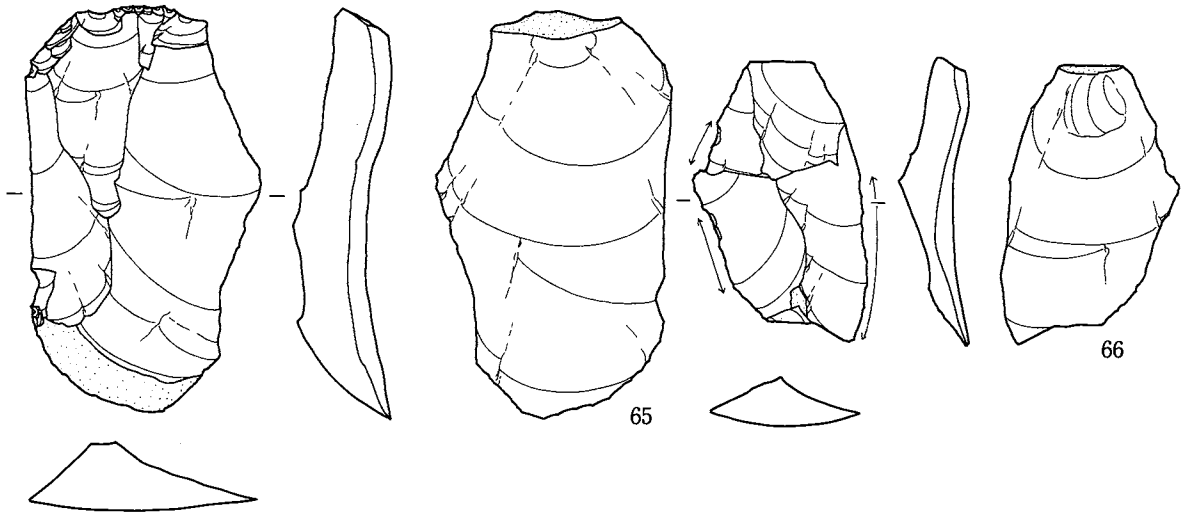


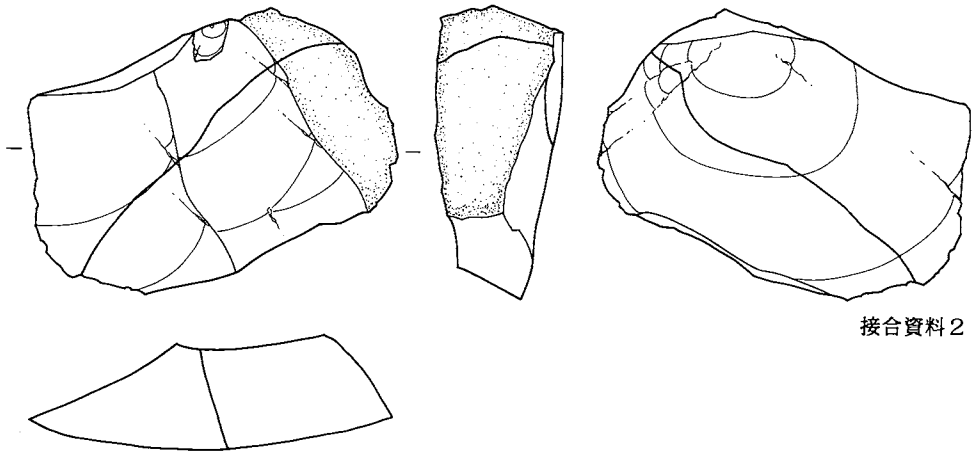
第18図　B地区炭化物集中部２　出土遺物（1）



第19図　B地区炭化物集中部２　出土遺物(2)



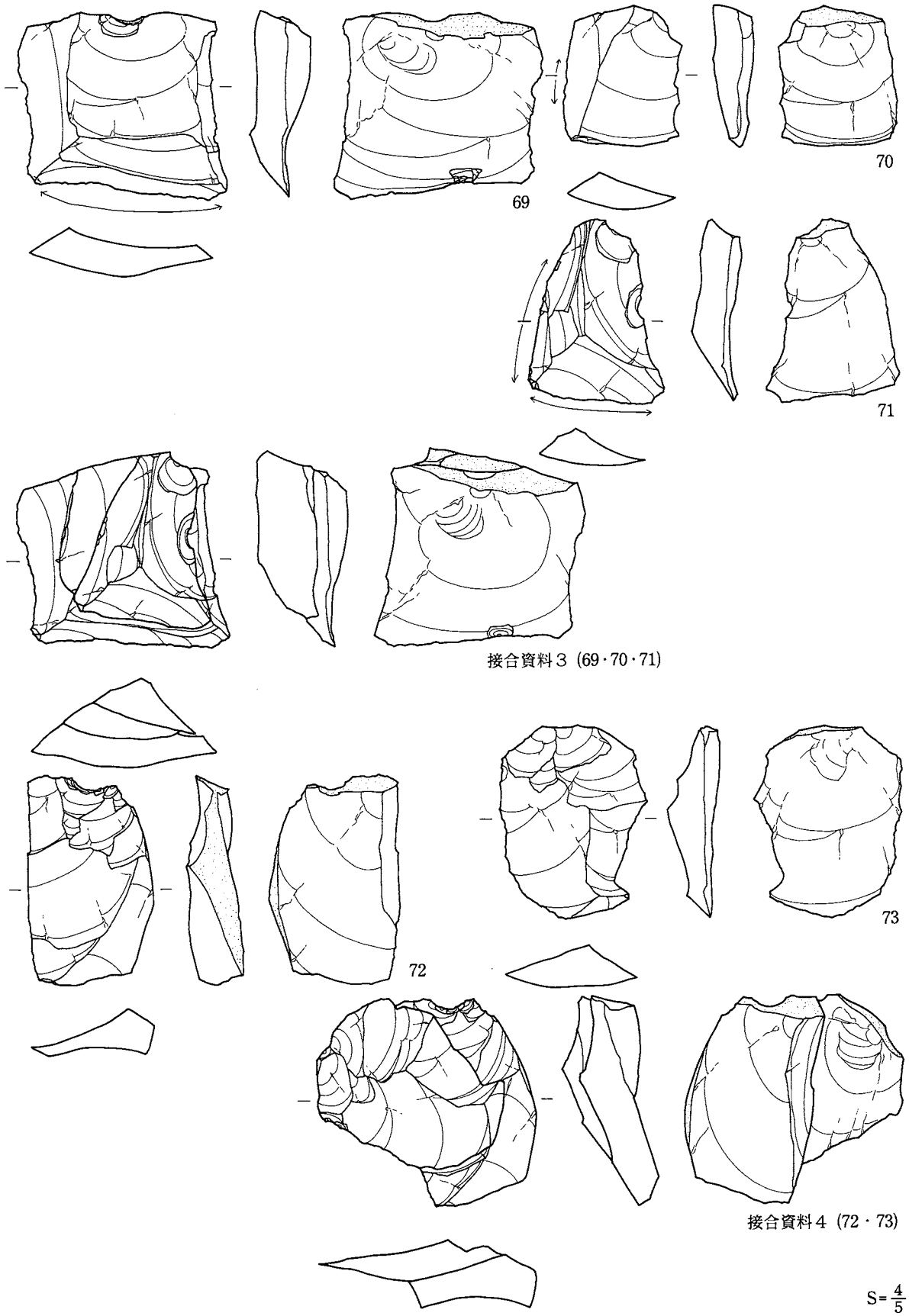




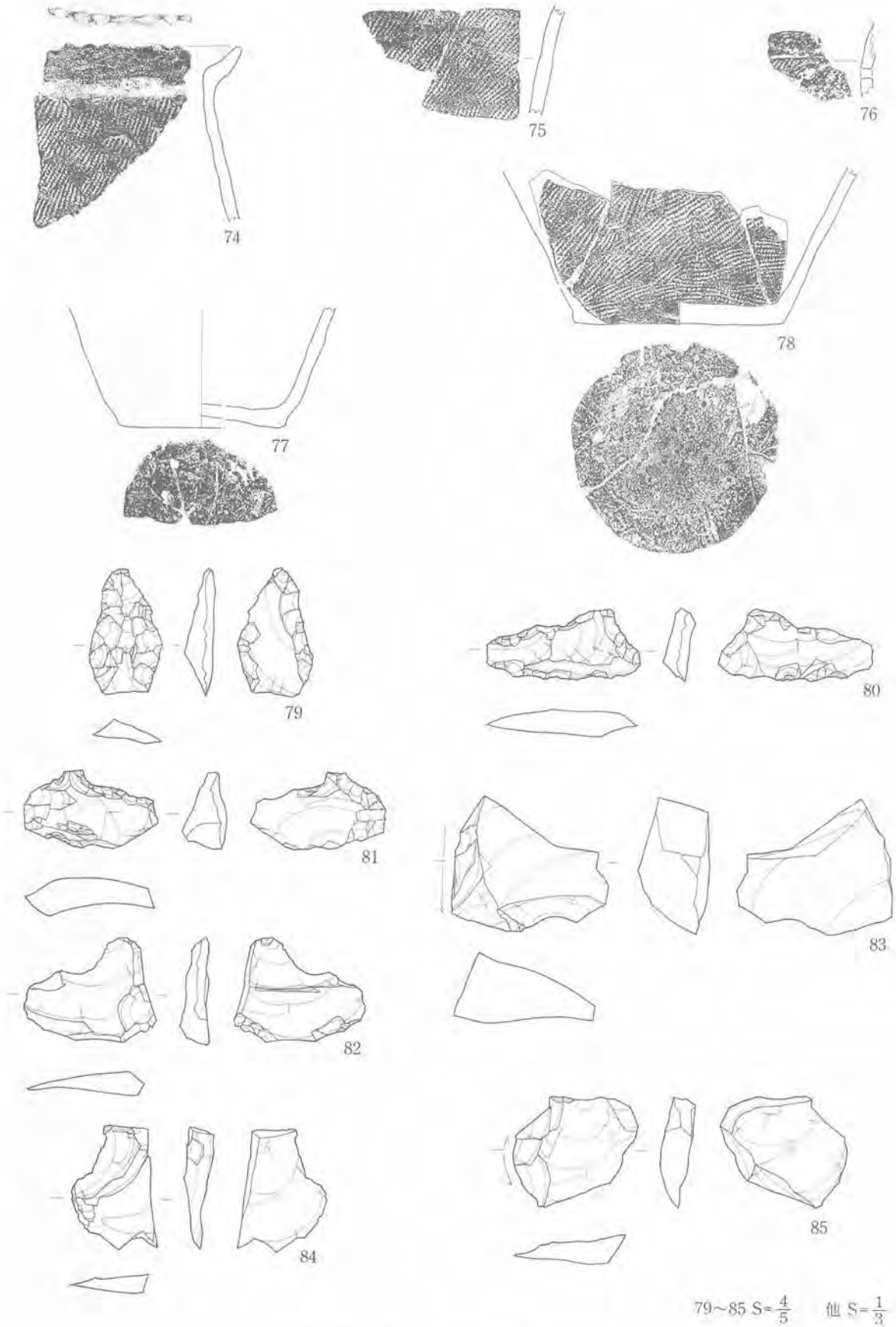
接合資料２（67・68）

S=$\frac{4}{5}$

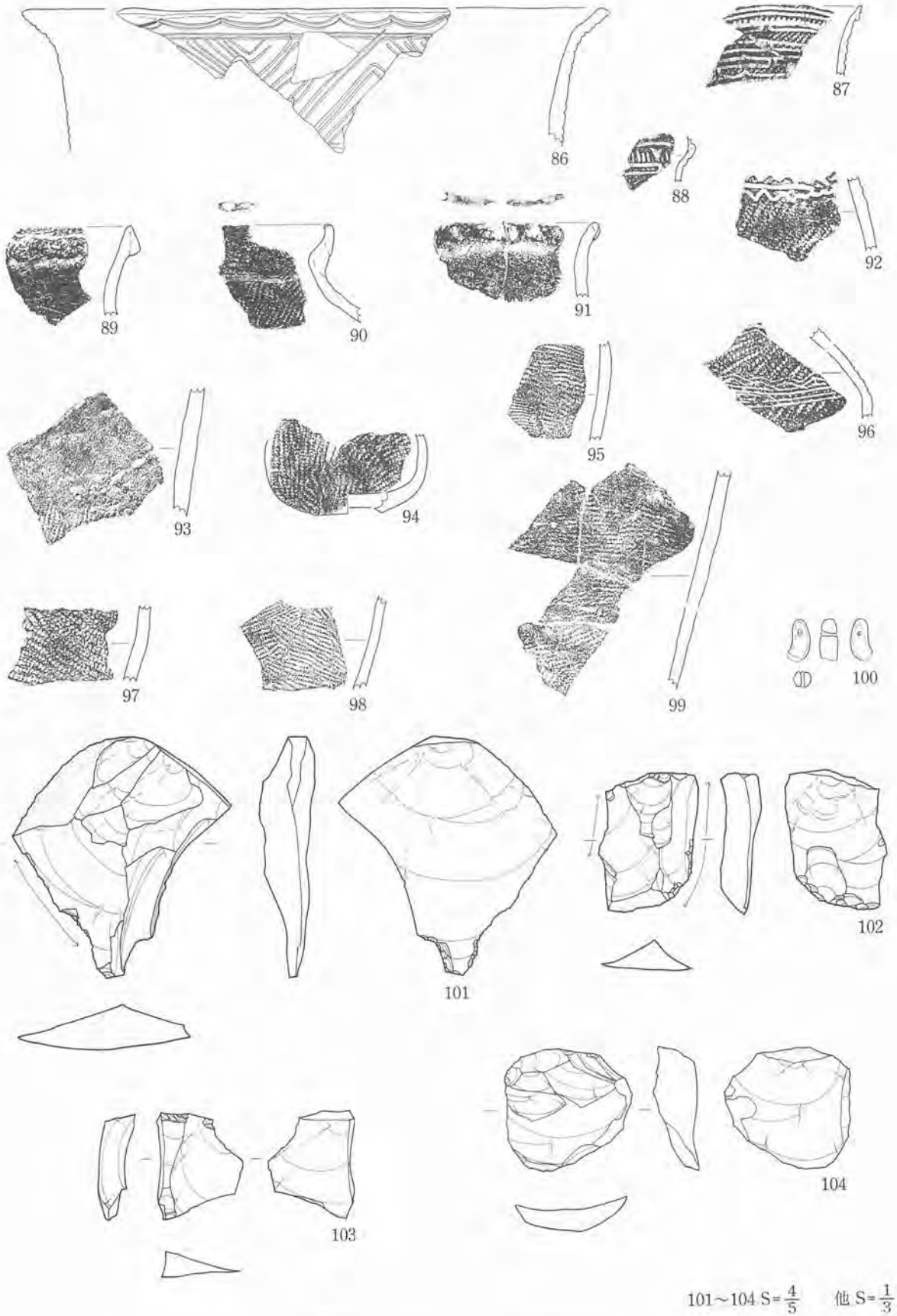
第20図　Ｂ地区炭化物集中部２　出土遺物（3）



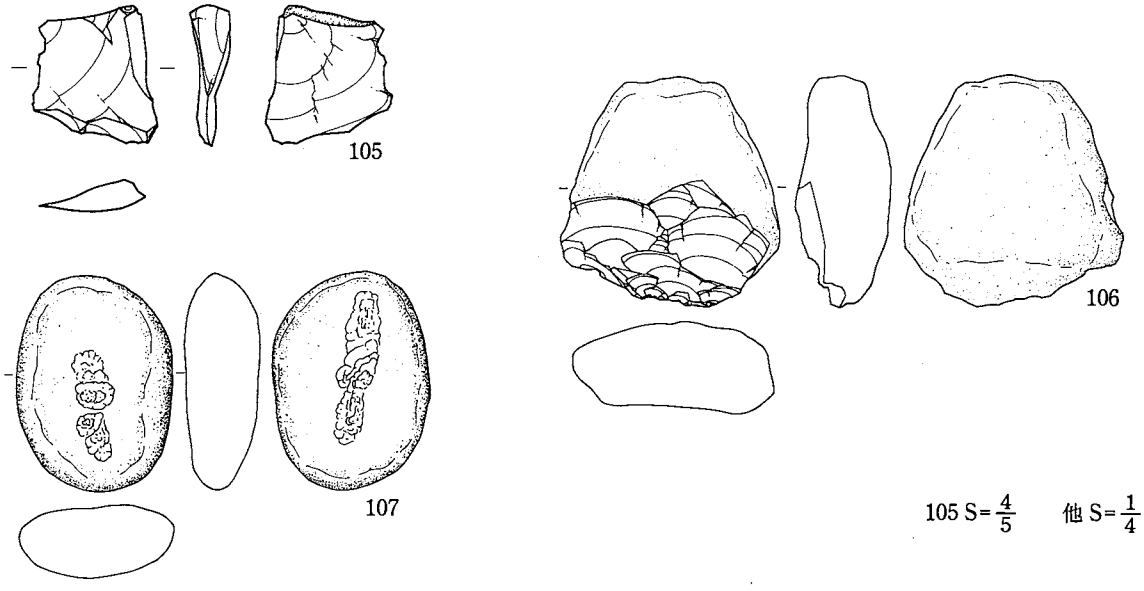
第21図　Ｂ地区炭化物集中部２　出土遺物（4）



第22図　B地区SK01（弥生）出土遺物



第23図　B地区弥生遺構外　出土遺物(1)



第24図　B地区　弥生遺構外　出土遺物(2)

＜遺構時期＞遺物の所属時期が特定できないが、９～10世紀に属する可能性がある。

ＳＩ02

＜位置＞３Ｆ39・40の間に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜検出状況＞遺構確認時に本遺構中央部で炭化粒と遺物が出土していることから精査に着手した。精査段階でＳＥ01との重複関係が認められたことから、改めて本遺構の把握に務めた。

＜重複＞ＳＩ03、04、ＳＥ01、Ｐ30と重複している。新旧関係はＳＩ04→ＳＩ03→ＳＩ02→ＳＥ01－Ｐ30の順で新しくなる（ＳＥ01とＰ30の新旧関係は不明）。

＜規模＞本遺構は調査区外に延びていくため規模は不明であるが、確認された規模は2.85m×2.11mを測る。

＜平面形＞確認された形状からは長方形を呈する。

＜壁の状況＞ＳＥ01によって遺構の中央部及び水田耕作により上半部が削平を受けているため、残りは不良である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

＜床の状態＞Ⅳ層との境まで掘り込むように形成され、確認された床面は平坦である。

＜カマド＞不明。

＜埋土＞１層で、地山崩落土を含むシルト層主体である。

＜出土遺物＞なし。

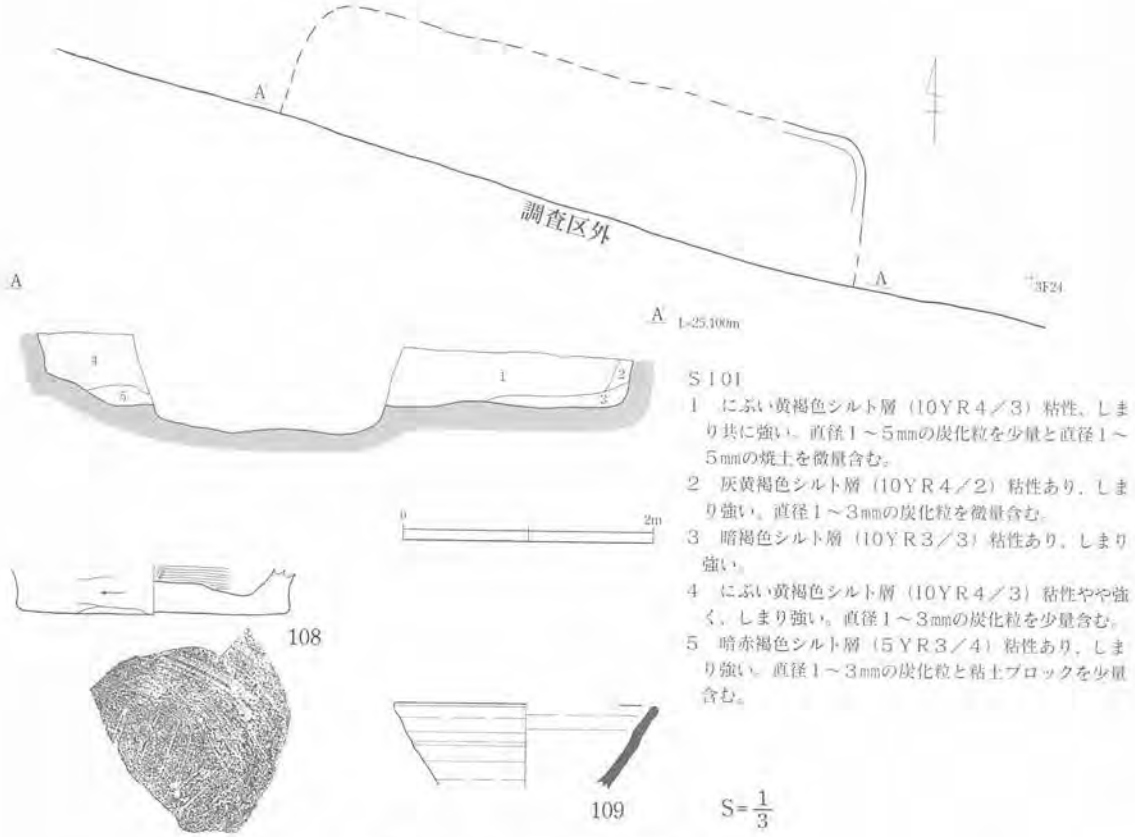
＜遺構時期＞不明。

ＳＩ03

＜位置＞３Ｆ39・40の間に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。
＜検出状況＞ＳＩ02のプラン確認のために調査区南壁面にサブトレンチを入れたことにより、本遺構が検出された。
＜重複＞ＳＩ02、ＳＩ04、ＳＥ01、Ｐ30と重複している。新旧関係はＳＩ04→ＳＩ03→ＳＩ02→ＳＥ01－Ｐ30の順に新しくなる（ＳＥ01とＰ30の新旧関係は不明）。
＜規模＞本住居は他の遺構に切られ、また調査区外に延びていくため全容は不明である。確認された規模は、北壁1.26m×東壁1.04mを測る。
＜平面形＞検出された北東隅は方形を呈している。
＜壁の状況＞ＳＩ02やＳＥ01によって切られているため、残りは不良である。確認された壁はほぼ垂直に立ち上がる。
＜床の状態＞ＳＩ04の床面に堆積した若干硬く締まった部分と地山を、そのまま床面と利用しており、ほぼ平坦である。
＜カマド＞不明であるが、調査区南壁断面の観察で炭化物や焼土などが確認されることから、調査区外に存在するものと推測される。
＜埋土＞シルト層主体で、４層に分けられる。
＜出土遺物＞なし。
＜遺構時期＞不明。

ＳＩ０４
＜位置＞３Ｆ39・40の間に位置する。
＜検出面＞Ⅲ層。
＜検出状況＞検出面が地山より若干暗味帯びていることから、複数のサブトレンチを入れ本遺構を検出し精査に着手した。
＜重複＞ＳＩ02、ＳＩ04、ＳＥ01、Ｐ２、27、28、29と重複している。新旧関係はＳＩ04→ＳＩ03→ＳＩ02→ＳＥ01－Ｐ２・27・28・29の順に新しくなる（ＳＥ01と柱穴の新旧関係は不明）。
＜規模＞重複する他の遺構に切られ、また調査区外に延びていくため全容は不明である。確認された規模は北壁2.52m×東壁1.96mを測る。
＜平面形＞検出された北東と北西隅は方形を呈している。
＜壁の状況＞確認できた壁は北壁と東壁の一部であり、壁は垂直より若干傾斜するように立ち上がる。
＜床の状態＞Ⅳ層との境まで掘り下げられて形成され、ほぼ平坦である。この境は若干堅く締まっているが、硬化面は確認できなかった。
＜カマド＞調査区南壁面より炭化粒、焼土がやや多く確認されていることから、調査区外の南東方向に設置されていると推測される。
＜埋土＞主体は黄褐色シルト層で、15層に分けられる。
＜出土遺物＞埋土上層より、かわらけ、常滑産陶器、土師器、金鋏等が出土している。ただし床面直上での遺物出土は見られなかった。出土遺物のほとんどは磨滅していたため、図面掲載できたのは僅かである。110～113はてづくねかわらけ、114・115は常滑産の甕、116は金鋏で、最大長27.3cm、重さ211.4gである。
＜遺構時期＞土師器や金鋏以外のかわらけや常滑産陶器は12世紀後半に属すると思われる。



第25図　B地区SI01・出土遺物

ＳＥＯ１

＜位置＞３Ｆ39に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜検出状況＞遺構検出時はＳＩ02の埋土と思われたが、中央から遺物や焼けた礫が出土し、さらに深く掘り下げられることから新たに井戸跡として精査に着手する。

＜重複＞ＳＩ02と重複し、ＳＩ02より新しい。

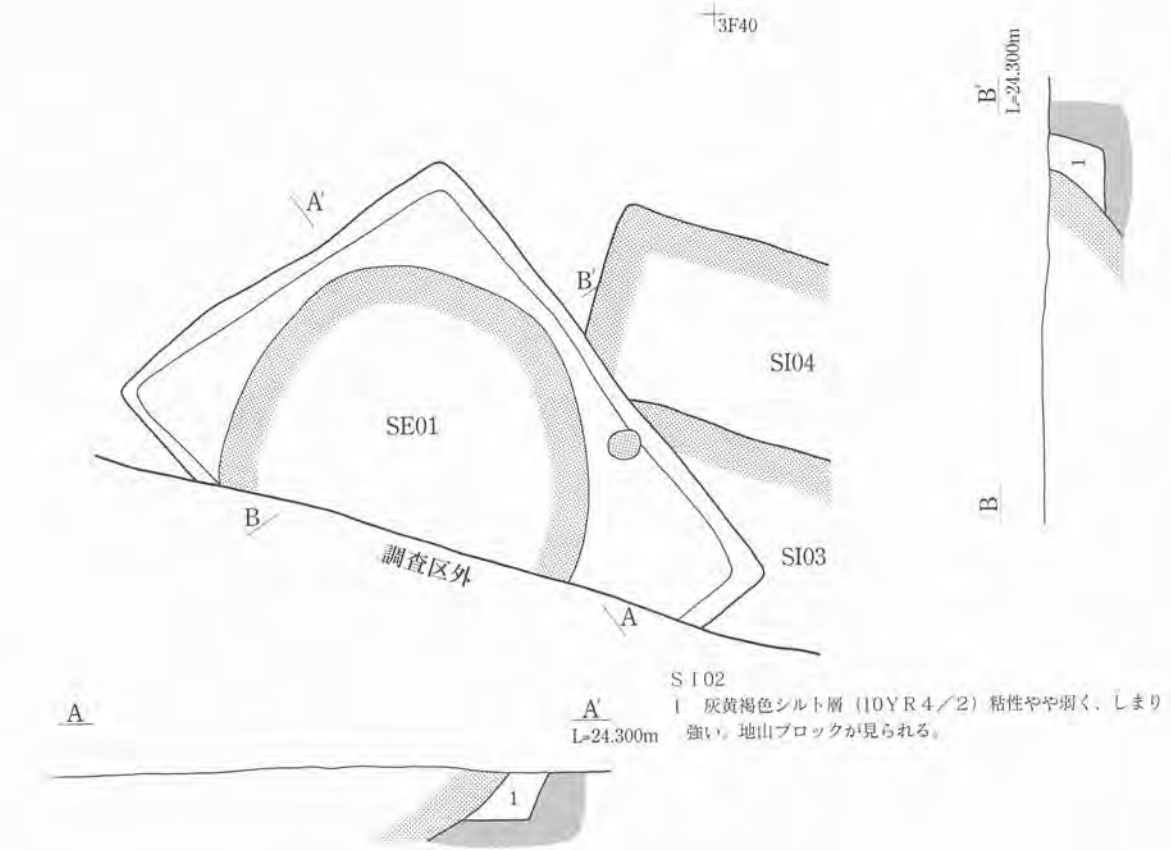
＜規模＞調査区外に延びていくため全容は不明であるが、確認された規模は2.01m×1.79mを測る。

＜平面形＞確認された平面形は円形を呈する。

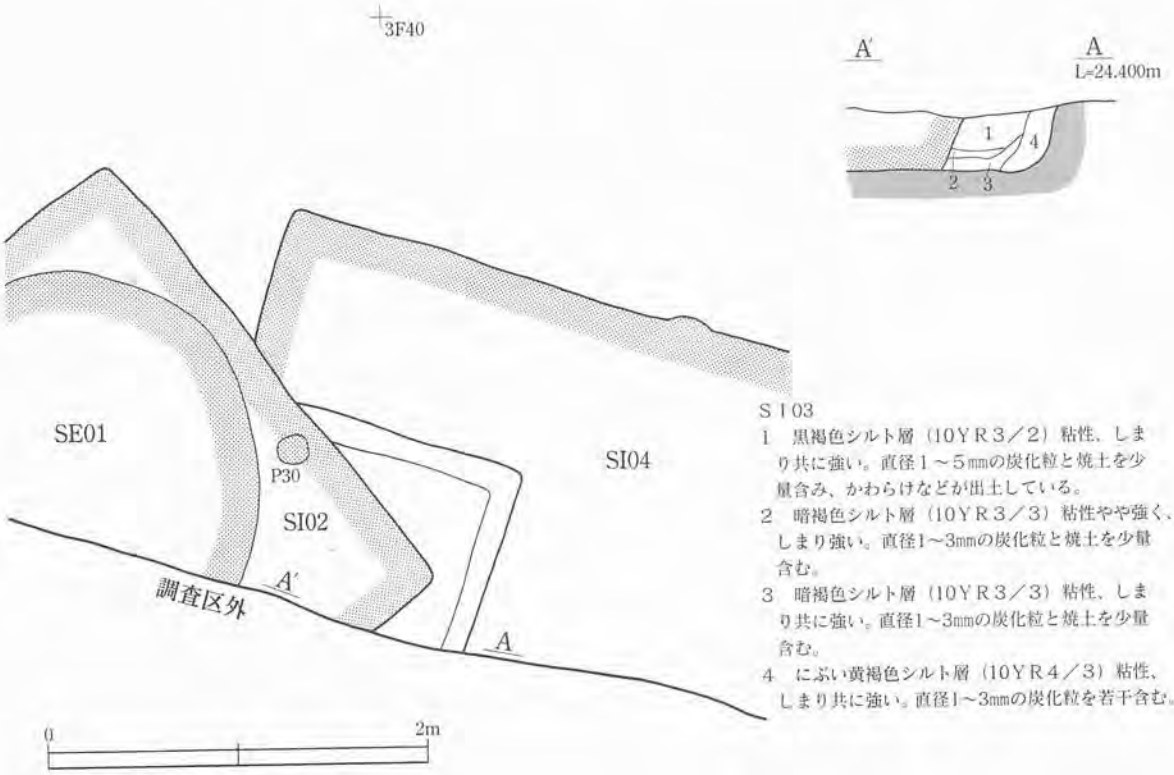
＜壁・底面の状況＞壁は開口部に向かって広がりながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

＜埋土＞褐色シルト層が主体で、40層に分けられる。中層より上位は人為堆積と思われる。

＜出土遺物＞埋土上層から中層よりかわらけ、常滑産陶器、須恵器、土師器、磨製石器などが出土している。それらの遺物と共に総点数201点、総重量320.22kgの礫（その内焼け礫は64%）が出土した。遺物の多くは磨滅している。117～126は、C_3・C_5・D_3・D_4に分類されるてづくねかわらけである。127・128はろくろかわらけである。129～144は常滑産陶器で、129の第Ⅲ型式に分類される以外は、特定できず第Ⅱ～Ⅲ型式に属するものと思われる。145は須恵器の甕、146は磨製石器で、石剣の可能性がある。

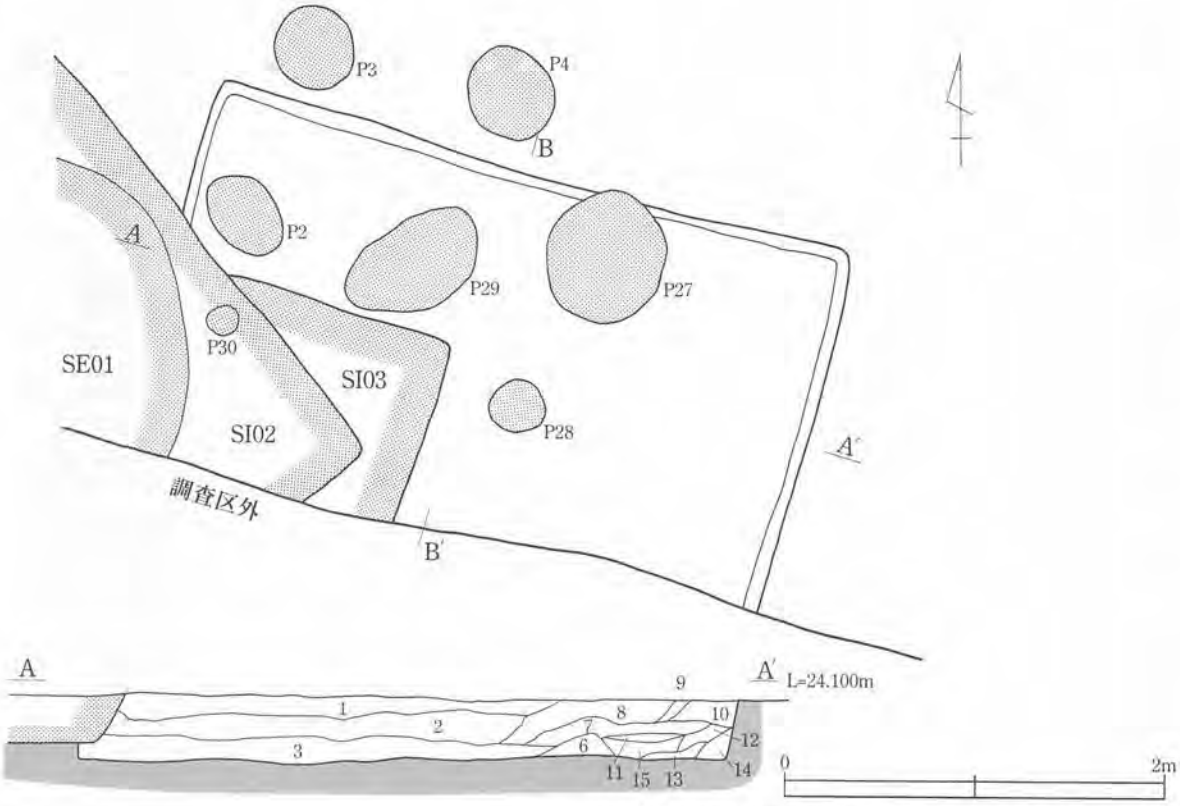


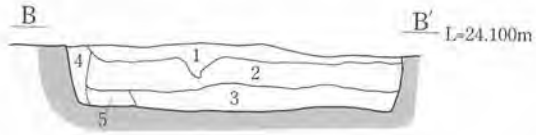
SI02
1　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性やや弱く、しまり強い。地山ブロックが見られる。



SI03
1　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共に強い。直径1～5㎜の炭化粒と焼土を少量含み、かわらけなどが出土している。
2　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。直径1～3㎜の炭化粒と焼土を少量含む。
3　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性、しまり共に強い。直径1～3㎜の炭化粒と焼土を少量含む。
4　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。直径1～3㎜の炭化粒を若干含む。

第26図　B地区SI02・SI03





SI04

1　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性やや弱く、しまり強い。直径1～5㎜の焼土と直径1～10㎜の炭化粒を微量含む。

2　褐色砂質シルト層（10YR4／4）粘性あり、しまり強い。炭化粒を若干含む。1層に比べ砂質増す。

3　褐色砂質シルト層（7.5YR4／3）粘性やや強く、しまり強い。2層に比べ粘性も強く、砂質も増す。

4　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性やや弱く、しまり強い。地山崩落土。

5　褐色シルト層（7.5YR4／3）粘性やや強く、しまり強い。3層と類似しているがしまりが増す。

6　褐色シルト（7.5YR4／3）粘性やや弱く、しまり強い。土質は3層に類似するが、直径1～20㎜の焼土や炭化粒をやや多く含む。

7　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性あり、しまり強い。6と8層の中間的な層。

8　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性あり、しまり強い。直径1～10㎜の焼土や炭化粒をやや多く含む。

9　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性あり、しまり強い。8層に類似しているが混入物の量が若干増す。

10　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性あり、しまり強い。8層に類似しているが地山ブロックを混入。

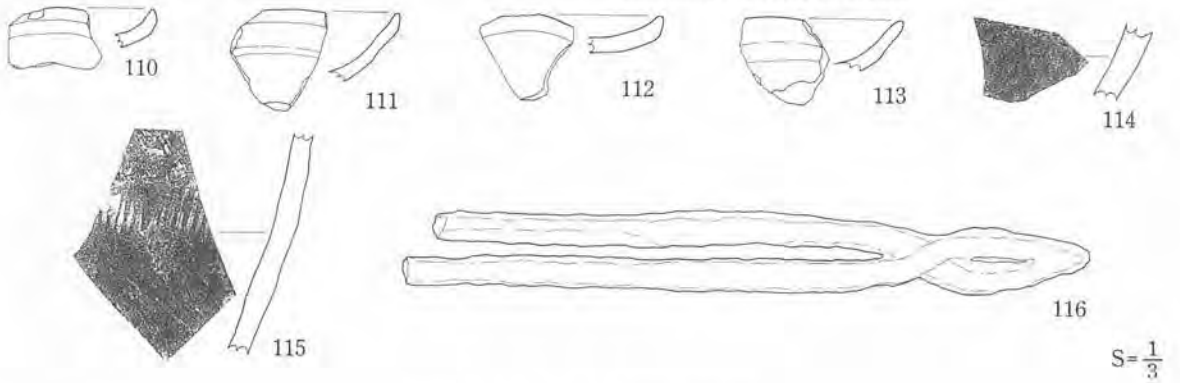
11　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性あり、しまり強い。7層に類似しているが若干明るみ増す。

12　暗褐色砂質シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。直径1～15㎜の焼土と直径1～10㎜の炭化粒や粘土ブロックを多く含む

13　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性やや強く、しまり強い。地山崩落土。

14　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性やや強く、しまり強い。地山崩落土。

15　暗褐色砂質シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。12層に類似しいるが混入物の量は減る。



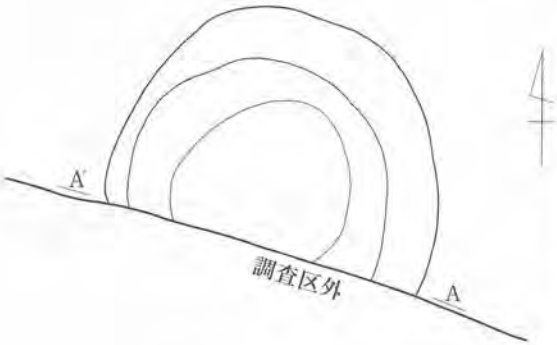
第27図　B地区SI04・出土遺物

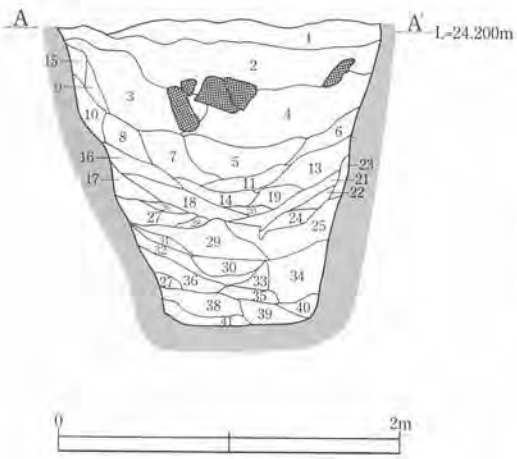
＜遺構時期＞大半の出土遺物は12世紀後半に属するものである。それらの遺物が埋土土層から出土していることや埋土の主体層からの相対的な判断できないことから遺構時期は不明であるが、12世紀後半に所属する可能性が高い。
＜備考＞廃棄され時間が経過した後、遺物や礫などが一括廃棄されている。

ＳＸＯ１
＜位置＞３Ｆ50・３Ｇ41の間に位置する。
＜検出面＞Ⅲ層。
＜検出状況＞水田耕作により天井部が削平されている状況で検出された。当初はカマド本体のみ独立し、土坑と重複していると考えたが、カマド裁断時に土坑は焚き口部に相当すると判断した。
＜規模＞焚き口に相当する箇所が調査区外に延びていくため全容は不明である。確認された燃焼室と焚き口部を含めた規模は1.13m×0.7～0.8mを測る。
＜平面形＞全容は不明であるが、確認された形状は燃焼室が円形、焚き口部が不整方形、全体では鍵穴状を呈している。
＜埋土＞暗褐色シルト層が主体で、９層に分けられる。
＜出土遺物＞ 常滑産甕の体部片(147)が１点や礫などが燃焼室の埋土から出土している。
＜遺構時期＞出土遺物から12世紀後半に属すると考えられる。
＜備考＞燃焼室と焚き口はⅣ層を掘り込むように形成されている。また、焚き口から見た燃焼室の方向は北東を向き、煙道は検出されていない。

ＳＤＯ１
＜位置＞３Ｇ32・42に位置する。
＜検出面＞Ⅲ層。
＜重複＞Ｐ22と重複しているが、本溝の方が古い。
＜平面＞上端幅、下端幅が部分によって変化するが、全体的にほぼ直線といえる。
＜規模＞検出長2.59m、上端幅0.32m～0.85m、下端幅0.16m～0.47m、深さ0.26mを測る。
＜埋土＞褐色シルト層が主体で、４層に分けられる。
＜出土遺物＞なし。
＜遺構時期＞主体層が柱穴群と同じであることから、柱穴の時期より若干新しい時期に相当すると思われる。
＜備考＞Ｃ地区で検出されたＳＤ01と規模や埋土状況などが同一であることから、同時期のものと推測される。

ＳＫＯ１
＜位置＞３Ｆ27に位置する。
＜検出面＞Ⅲ層。
＜検出状況＞調査当初時の試掘で検出し精査に着手した。同地区の他の遺構とは異なり、現水田耕作土を除去した段階で検出された。





SE01

1黒褐色砂質シルト層（10YR3／2）粘性やや弱く、しまり強い。直径1～20mmの焼土、直径1～10mmの白色粘土、直径1～15mmの炭化粒をやや多く含む。　2　暗褐色砂質シルト層（10YR3／3）粘性やや弱く、しまり強い。色調は異なるものの1層とほとんど同じであるが、若干混入物を多く含む。本層は焼けた10～30cm程の礫が最も多く混入している。　3　暗褐色シルト層（10YR3／3）2層に比べ、炭化粒などの混入物の量は減る。　4　黒褐色シルト層（10YR2／2）最も多く炭化粒や焼土などの混入物が含まれる。2層で見られた礫の量は減る。

5　黒褐色シルト層（10YR2／2）粘性やや弱く、しまりあり。4層に類似しているがしまりは弱くなる。　6　暗褐色シルト層（10YR3／3）直径1～5mmの炭化粒を若干含む。地山ブロックを多く混入。

7　黒褐色シルト層（7.5YR3／1）粘性あり、しまり強い。直径1～20mmの炭化粒をやや多く、直径1～10mmの焼土を少量含む。　8　暗褐色シルト層（10YR3／3）6層に類似しているが、若干明るい。9　3層とほぼ同じである。　10　褐灰色シルト層（10YR4／2）粘性弱く、しまりやや弱い。　11　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性強く、しまりやや強い。量は減るものの7層と同じ混入物が見られる。　12　欠番　13　黒褐色シルト層（10YR2／3）粘性、しまり共に強い。直径1～30mmの炭化粒をやや多く含む。　14　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性弱く、しまりやや弱い。砂質帯びる。15　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性強く、しまりやや強い。焼土ブロックを若干含む。　16　褐色粘土質シルト（10YR4／4）粘性強く、しまりやや強い。　17　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性やや強く、しまりやや強い。直径1～3mmの炭化粒を微量に含む。　18　黒色シルト層（10YR2／1）粘性強く、しまりやや強い。直径1～15mmの炭化粒を少量含む。　19　暗褐色砂質シルト（10YR3／4）粘性強く、しまりやや強い。混入物は18層とほとんど同じ。　20　黒褐色シルト層（10YR3／4）粘性、しまり共に強い。　21　褐色シルト（10YR4／4）粘性強く、しまりやや強い。　22　褐色シルト（10YR4／4）粘性強く、しまりやや弱い。　23　黒色シルト層（10YR2／1）18層に類似しているが、粘性が増し、混入物は見られなくなる。24　褐色シルト（10YR4／4）粘性あり、しまり弱い。

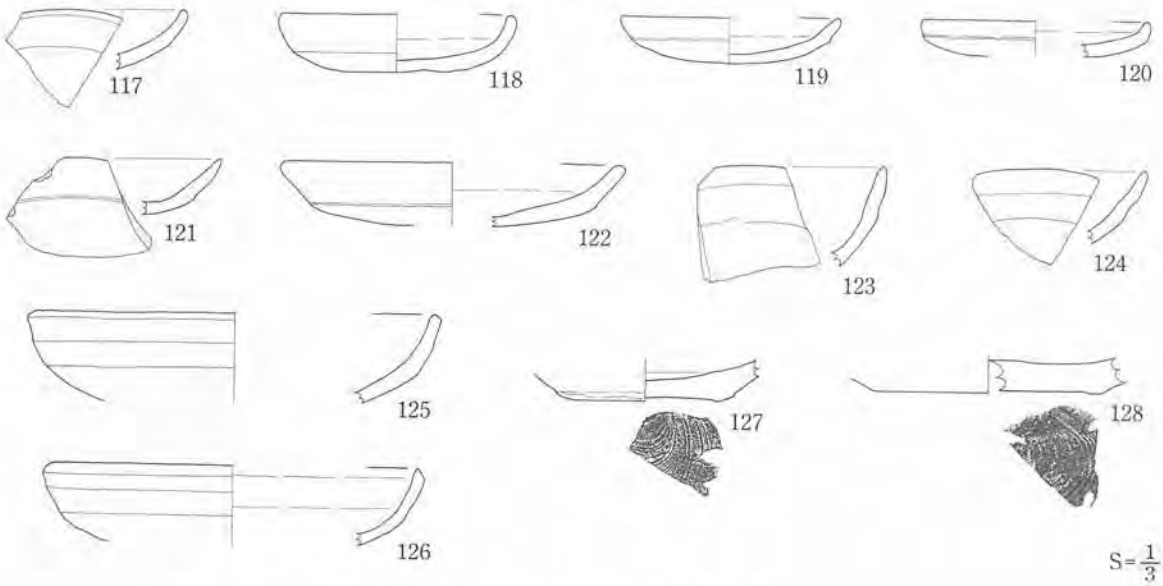
25　褐色シルト（10YR4／4）粘性あり、しまり弱い。　26　褐色シルト（10YR4／4）粘性やや弱く、しまり強い。　27　暗褐色砂質シルト（10YR3／4）粘性やや強く、しまり強い。　28　褐色砂質シルト（10YR4／4）粘性あり、しまり弱い。砂質帯びる。　29　暗褐色砂質シルト（10YR3／4）粘性あり、しまり弱い。砂質帯びる。

30　黒色シルト層（10YR2／1）粘性強く、しまりやや強い。直径1～10mmの炭化粒を微量に含む。また、地山ブロックも見られる。　31　暗褐色砂質シルト（10YR3／4）粘性、しまり共に弱い。焼土ブロックを若干含む。　32　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR3／4）粘性強く、しまりやや弱い。

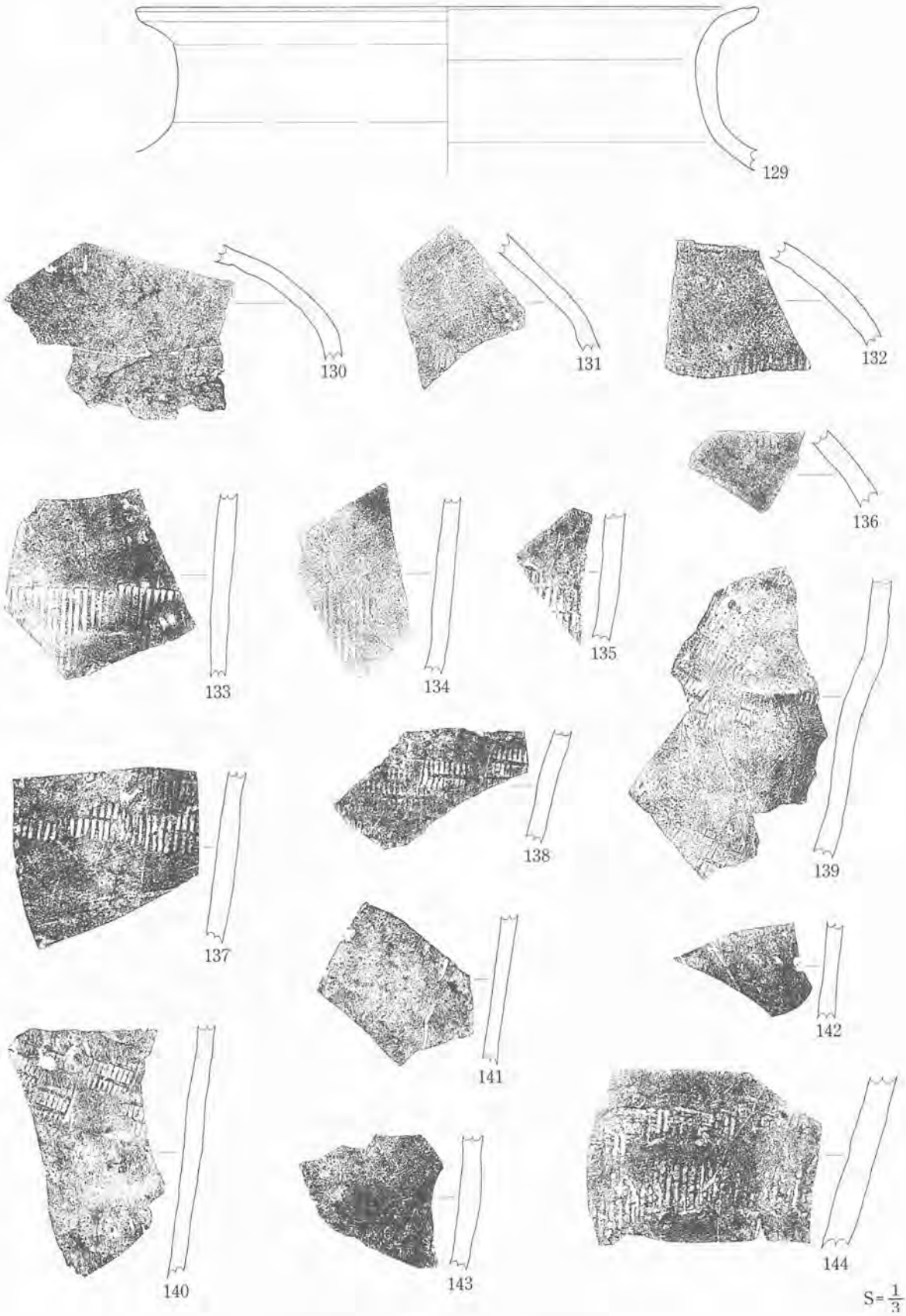
33　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR3／4）粘性強く、しまりやや弱い。32層より砂質帯びる。　34　褐色シルト（10YR4／4）粘性あり、しまり弱い。　35　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性、しまり共に強い。　36　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性強く、しまりやや弱い。32層より砂質帯びる。

37　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共に強い。直径1～3mmの炭化粒を微量含む。　38　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性強く、しまりやや弱い。32層より砂質帯びる。

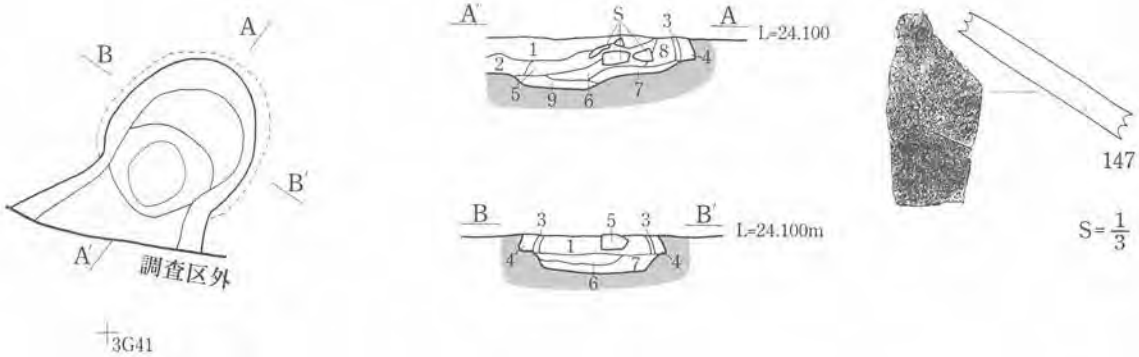
39　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共に強い。直径1～3mmの炭化粒を微量含む。　40　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。



第28図　B地区SE01・出土遺物（1）



第29図　B地区SE01・出土遺物(2)



SX01

1　黒褐色シルト層（10YR2／3）粘性、しまり共にやや強い。直径1～25mmの炭化粒、直径5mm前後の焼土、直径5mm前後の粘土をやや多く含む。

2　黒褐色シルト層（10YR2／2）粘性、しまり共にやや強い。直径5～10mmの炭化粒、直径5mm前後の焼土、直径5mm前後の粘土をやや多く含む。

3　浅黄橙色土層（7.5YR8／6）硬化している。

4　極暗赤褐色土層（2.5YR2／2）硬化している。

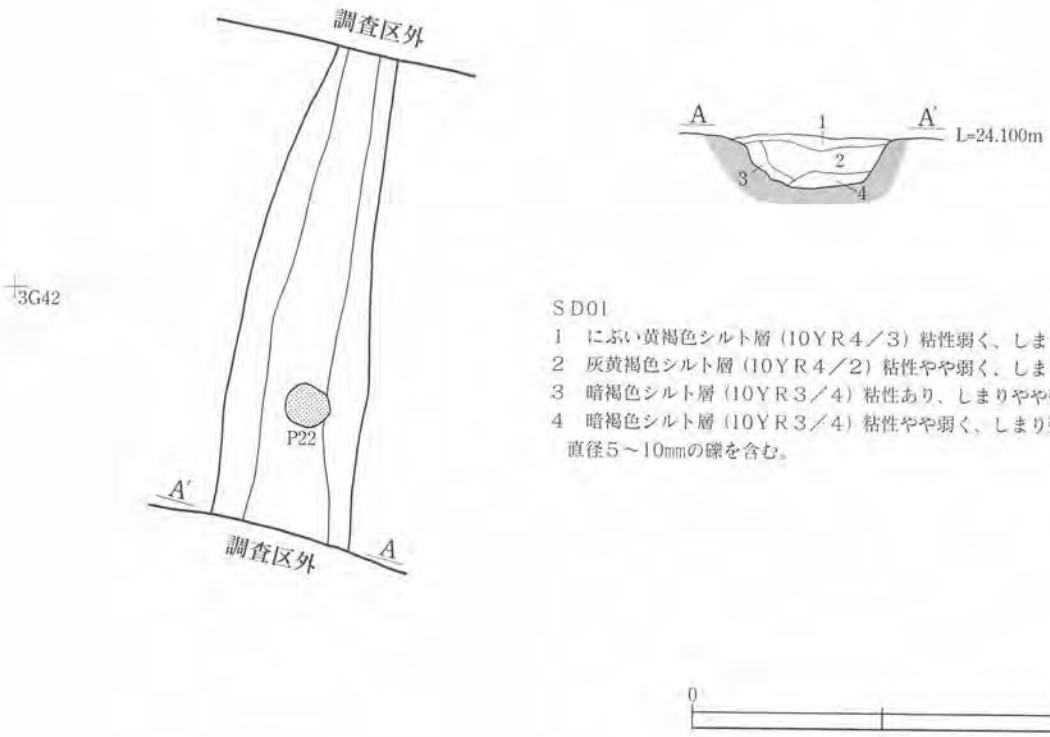
5　黒褐色シルト層（10YR3／3）粘性弱く、しまり強い。直径5～10mmの粘土ブロックと直径1～30mmの焼土を多く、直径1～10mmの炭化粒をやや多く含む。

6　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性やや弱く、しまり強い。直径5～10mmの粘土ブロックと直径1～30mmの焼土、直径1～10mmの炭化粒をやや多く含む。

7　暗赤褐色シルト層（5YR3／4）粘性やや強く、しまり強い。焼土と粘土ブロックのみ含まれている。

8　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性弱く、しまり強い。直径5～10mmの粘土ブロックと直径1～30mmの焼土を多く、直径1～10mmの炭化粒を少量含む。

9　褐色シルト層（10YR4／4）粘性、しまり共にやや強い。微量であるが、粘土と焼土ブロックが見られる。



SD01

1　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性弱く、しまり強い。

2　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性やや弱く、しまり強い。

3　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性あり、しまりやや強い。

4　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性やや弱く、しまり強い。直径5～10mmの礫を含む。

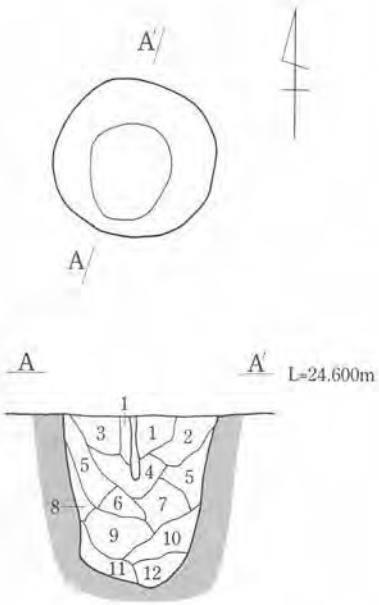
第30図　B地区SX01・出土遺物・SD01

＜規模・平面形＞規模は0.84m×0.82m、深さ0.91mである。平面形は円形を呈する。
＜埋土＞黒～暗褐色シルト層が主体で、12層に分けられる。
＜出土遺物＞てづくねかわらけ（148）、常滑産の甕（149）が埋土から出土している。
＜性格＞形状と埋土の状況から、「トイレ状遺構」の可能性がある。
＜遺構時期＞12世紀後半に属すると考えられる。
＜備考＞遺構時期は、遺物の所属時期や埋土状況などから平泉遺跡群で見られる「トイレ状遺構」に類似していることから判断した。

ＳＫ０３
＜位置＞３Ｆ26に位置する。
＜検出面＞Ⅲ層。
＜検出状況＞地山と異なる砂質帯びた範囲が広がることからサブトレンチを入れ、炭化材が検出されたことから遺構として精査に着手する。
＜規模・平面形＞規模は2.58m×1.96mで、平面形は不整円形を呈する。
＜埋土＞砂質シルト層が主体で、５層に分けられる。
＜出土遺物＞遺物は出土していないが、中央から炭化材（89×41×１cm、49×15×２cm、58×16×１cm）３点が検出されている。
＜性格＞不明。
＜遺構時期＞不明。
＜備考＞埋土の状況や炭化材の出土状況はＳＫ04と05と類似している。

ＳＫ０４
＜位置＞３Ｆ26に位置する。
＜検出面＞Ⅲ層。
＜検出状況＞ＳＫ03と同じである。
＜規模・平面形＞調査区外に遺構が延びていくため、規模や平面形の全容は不明である。確認された規模は2.51m×1.29mである。平面形は半円形を呈する。
＜埋土＞砂質シルト層が主体で、４層に分けられる。
＜出土遺物＞出土遺物はないが、中央から炭化材（53×31×2cm、27×25×1cm、19×13×１cm）３点が検出されている。
＜性格＞不明。
＜遺構時期＞不明。
＜備考＞遺構の性格は不明であるが、埋土の状況や炭化材の出土状況はＳＫ04と05と類似している。

ＳＫ０５
＜位置＞３Ｆ27に位置する。
＜検出面＞Ⅲ層。



SK01

1　黒色シルト層（10YR1.7／2）粘性弱く、しまり強い。直径3～5cmの地山ブロックがやや多く入り込んでいる。また最もしまりの強い層である。

2　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性弱く、しまり強い。直径1～3cmの礫を少量含む。また直径3mm前後の炭化粒を微量含む。

3　黒褐色シルト層（10YR2／3）粘性弱く、しまり強い。直径5mm前後の炭化粒を微量含む。

4　黒褐色シルト層（10YR2／2）粘性、しまり共にあり。直径1～10mmの炭化粒を若干含む。1層と類似しているが、砂質増す。

5　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性、しまり共に弱い。地山崩落土。

6　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性あり、しまり弱い。3層と類似しているが、若干明る味増す。

7　黒褐色シルト層（10YR2／3）粘性やや強く、しまり弱い。6層と類似しているが、粘性が増し、地山ブロックを多く含む。

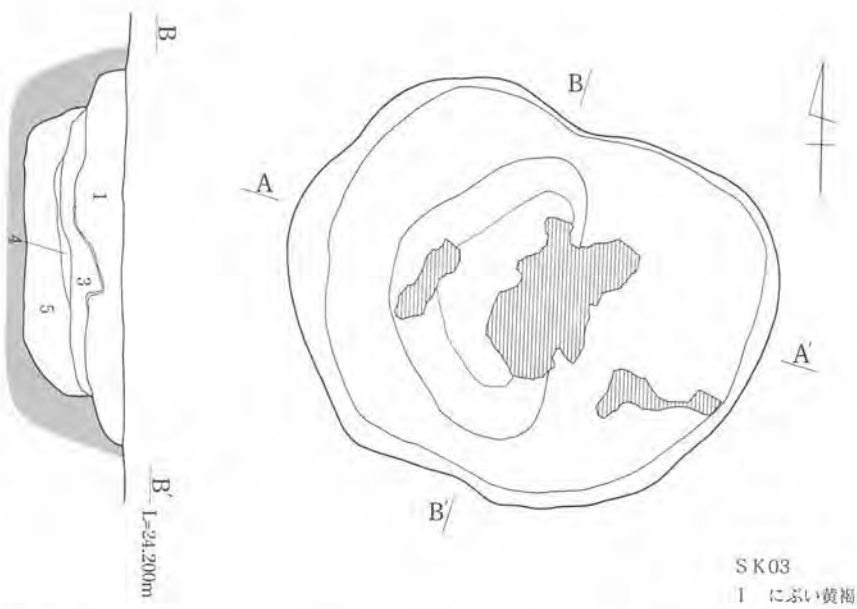
8　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性あり、しまり弱い。地山崩落土。

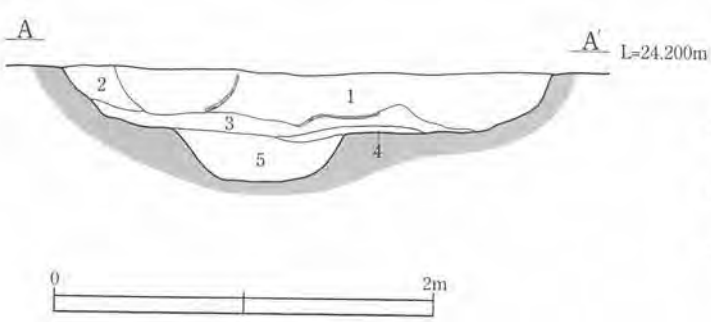
9　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性あり、しまり弱い。10層と類似しているが若干暗い。

10　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性あり、しまり弱い。砂質増す。

11　黒褐色砂層（10YR2／2）粘性、しまり共に弱い。

12　にぶい黄褐色砂層（10YR4／3）粘性、しまり共に弱い。地山崩落土が入り込む。





SK03

1　にぶい黄褐色砂層（10YR4／3）粘性弱い、しまりやや強い。直径1～20mmの炭化粒をやや多含む。

2　暗褐色砂層（10YR3／4）粘性弱い、しまりやや強い。直径1～15mmの炭化粒、地山ブロック少量含む。

3　褐色砂層（10YR4／4）粘性、しまり共に弱い。直径1～10mmの炭化粒をやや多く含む。

4　黒褐色シルト層（10YR2／2）粘性やや強く、しまり弱い。

5　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）直径1～10mmの炭化粒、地山崩落土を少量含む。

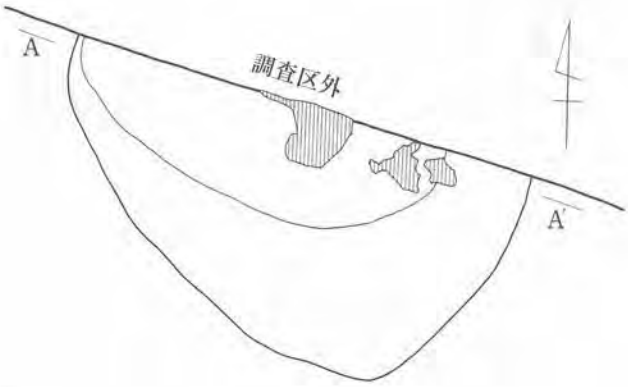
第31図　B地区SK01・03

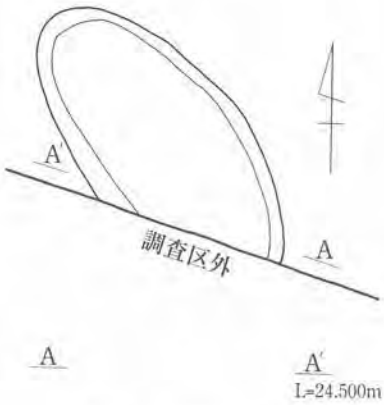
＜検出状況＞ＳＫ03と同じ。
＜規模・平面形＞調査区外に遺構が延びていくため、規模や平面形の全容は不明である。確認された規模は1.74m×0.86mである。平面形は楕円形を呈する。
＜埋土＞砂層が主体で、４層に分けられる。
＜出土遺物＞なし。
＜性格＞不明。
＜遺構時期＞不明。
＜備考＞遺構の性格は不明であるが、埋土や炭化粒が確認できる状況はＳＫ04と05と同じである。

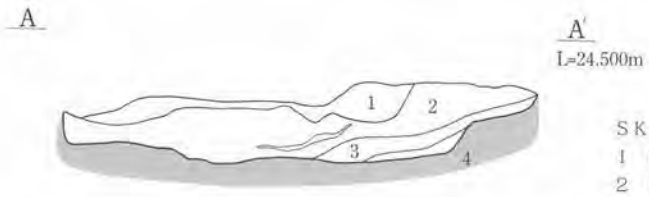
ＳＫＯ６
＜位置＞３Ｇ31・41に位置する。
＜検出面・検出状況＞本遺構は埋土と地山の判別できなかったため、次の文化層への掘り下げ時に調査区南壁の断面より検出された。本来の検出面はⅢ層である。
＜規模・平面形＞断面観察のみとなったことから全容は不明である。断面で確認された規模は1.95mである。
＜埋土＞暗褐色シルト層が主体で、６層に分けられる。
＜出土遺物＞土師器や常滑産陶器などが中層、常滑産の片口鉢が埋土下層から出土している。151は常滑産の片口鉢である。
＜遺構時期＞12世紀後半に属すると考えられる。

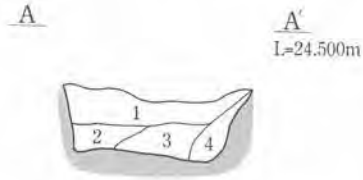
ＳＫＯ７
＜位置＞３Ｆ50に位置する。
＜検出面・検出状況＞本遺構は埋土と地山の判別が困難であったため、次の文化層への掘り下げ時に検出された。結果検出面はⅣ層であった。
＜規模・平面形＞規模は1.21m×1.11mで、平面形は隅丸方形を呈する。
＜埋土＞７層に分けられる。
＜出土遺物＞常滑産の甕やかわらけなど埋土下層から出土している。かわらけは磨滅していたため、図面掲載不可能であった。150は常滑産の甕である。
＜遺構時期＞12世紀後半に属すると考えられる。

柱穴
＜位置＞３Ｆ39より東側から主に検出されている。
＜検出面・検出状況＞概ねⅢ層である。ただしNo27～30の柱穴の４基は重複する住居の埋土と判別ができず、住居の床面やセクションベルトでの確認となる。またNo22～26・31の柱穴６基は、地山と埋土の判別が付かなかったことからⅣ層とⅤ層間での検出となる。
＜規模・平面形＞計測表で示した通りである。
＜埋土＞基本的に暗褐色シルト層が主体で構成されており、埋土主体層からＰ１と31、Ｐ２～21、Ｐ22～31の３種類に分類することができる。ただし、それらの新旧関係は不明である。
＜出土遺物＞Ｐ３・６・８・27・28からかわらけ、国産陶器、土師器などが出土している。出土遺物は少な









SK04

1　にぶい黄褐色砂層（10YR4／3）粘性弱く、しまり強い。直径1～20mmの炭化粒をやや多く含む。また、地山ブロックが混入している。

2　褐灰色砂層（10YR4／1）粘性弱く、しまり強い。平面図に示した炭化材が本層から出土している。断面からも5～10cmの炭化材が確認された。本層が最もしまりの強い層である。

3　褐灰色砂層（10YR4／1）粘性弱く、しまり強い。2層と類似しているが粘性は増す。地山ブロックを多く混入している。

4　褐灰色砂層（10YR4／1）粘性弱く、しまり強い。直径5～20mmの炭化粒をやや多く含む。炭化材の影響で一部黒い部分が確認されている。地山ブロックが混入している。

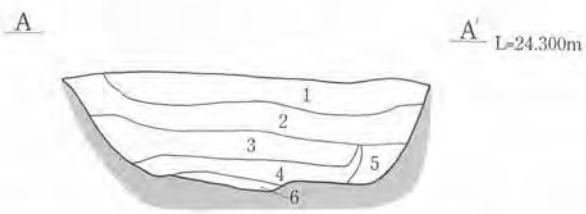
SK05

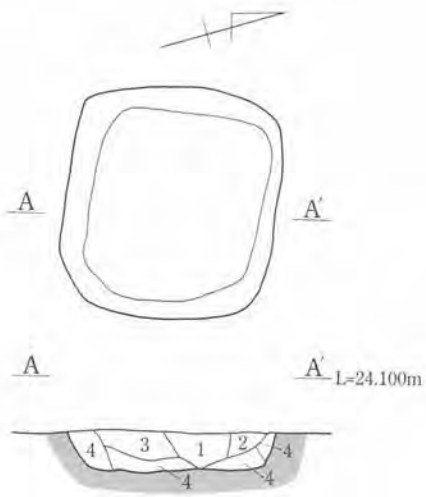
1　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性弱く、しまりやや弱い。

2　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性弱く、しまりやや弱い。

3　暗赤褐色シルト層（5YR3／2）直径1～20mmの炭化粒を少量、直径1～15mmの焼土を微量含む。

4　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性、しまり共にやや弱い。地山ブロックを多く含む。





SK06

1　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。直径1～10mmの炭化粒を少量、直径1～5mmの焼土を若干含む。直径1～5mmの礫や磨滅したかわらけが見られる。

2　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。炭化粒と焼土の量が増し、粒径も大きくなる。

3　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性あり、しまり強い。直径1～10mmの炭化粒をやや多く、直径1～3mmの焼土を含む。

4　黒色シルト層（10YR2／1）粘性、しまり共に強い。最も炭化粒を含む層で、1～20mmの炭化粒を多く含む。

5　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共に強い。直径1～10mmの炭化粒と直径1～5mmの焼土を若干含む。

6　掘りすぎ。

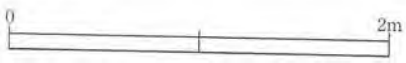
SK07

1　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共に強い。直径1～8mmの焼土と直径1～15mmの炭化粒を微量含む。

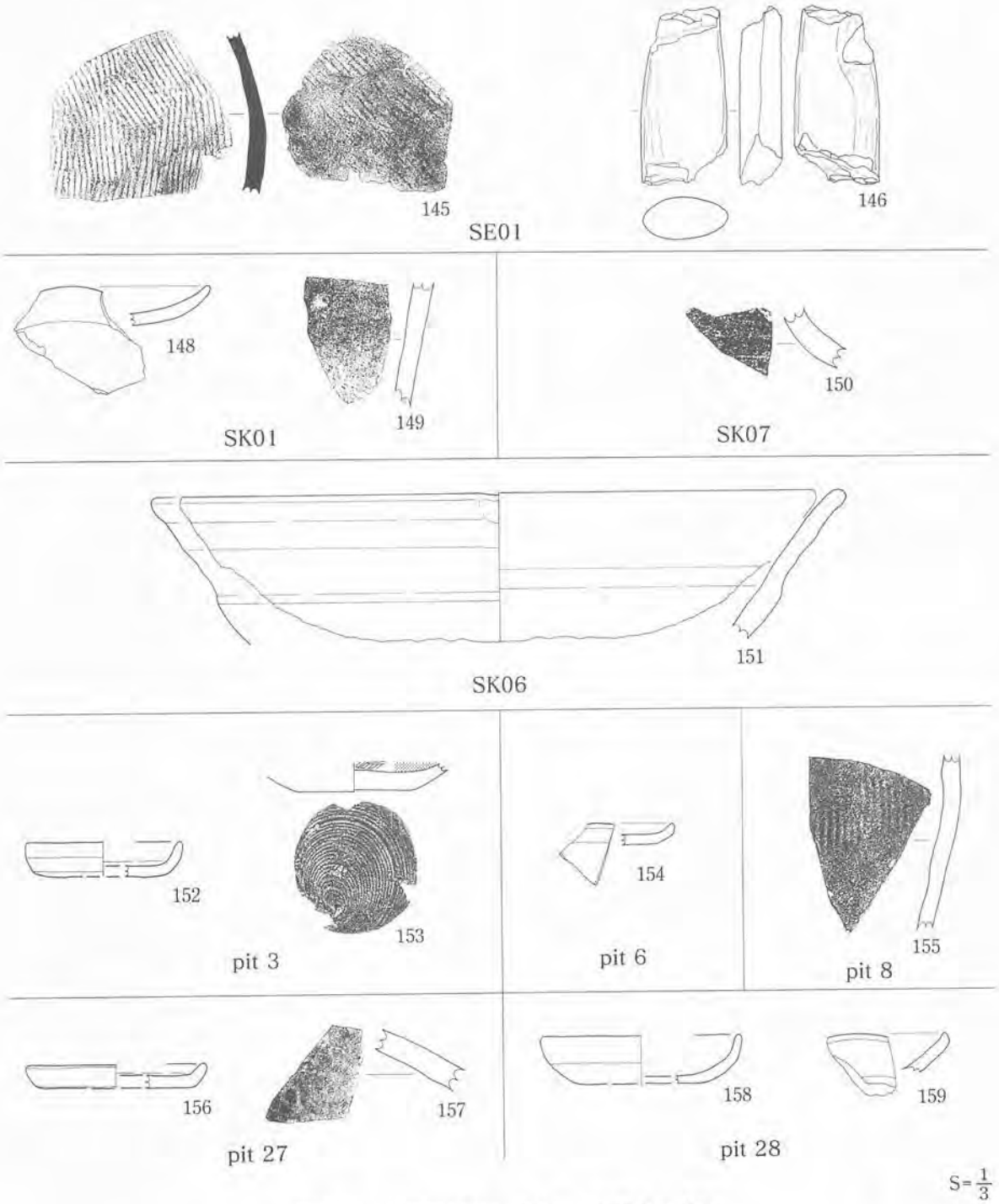
2　黒褐色シルト層（10YR3／2）1層と類似しているものの、若干明る味増し、混入物減る。

3　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性、しまり共に強い。直径1～20mmの炭化粒と直径1～5mmの焼土を微量含む。また、地山崩落土が入り込でいる。

4　灰褐色シルト層（7.5YR4／3）粘性強く、しまりやや強い。地山崩落土である。



第32図　B地区SK04～07

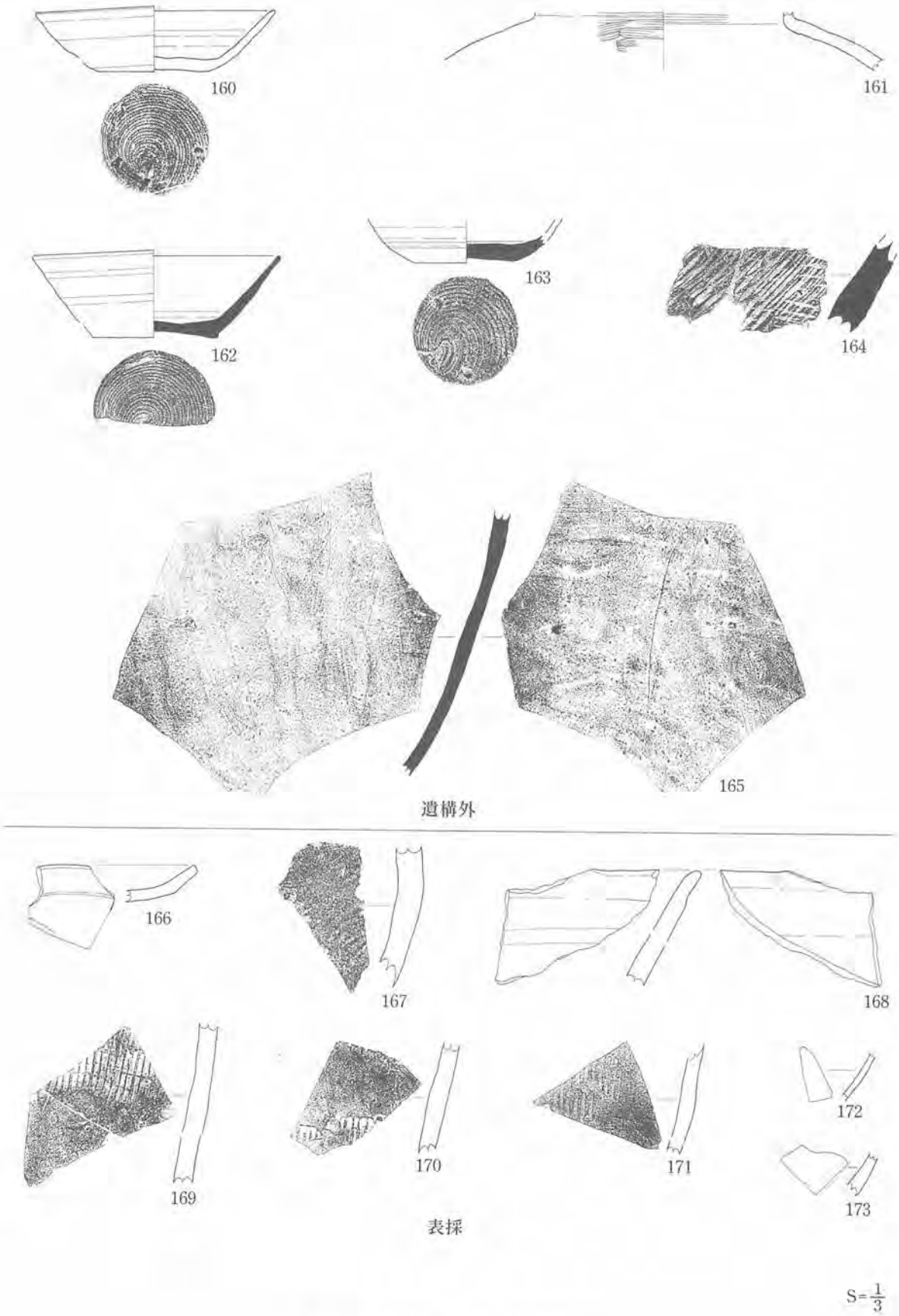


第33図　B地区SE01・SK類・Pi類出土遺物

く、磨滅したものが大半であった。152・154・156・158・159はてづくねかわらけ、155・157は常滑産の甕、153は内面に黒色処理が施された土師器である。

＜時期＞埋土の状況や出土遺物などから、P2～21の柱穴は12世紀代に属する可能性がある。

＜備考＞建物跡を構成する柱痕を確認できたが、調査区が狭いため建物跡のプランを確定するのは困難であった。また、大半の柱穴から出土している遺物の所属時期が同じであることから同時期のものと推測される。



第34図　B地区遺構外・表採出土遺物

遺構番号	時期	長軸	短軸	深さ	標高	開口部形状	備考
Pit 1	不明	38	33	65	23.36	円形	
Pit 2	古代～中世	55	50	65	23.69	不整円形	
Pit 3	古代～中世	50	35	45	23.6	楕円形	
Pit 4	古代～中世	45	43	37	23.65	円形	土師器（1）
Pit 5	古代～中世	52	45	43	23.55	円形	
Pit 6	古代～中世	45	40	68	23.25	楕円形	かわらけ（1）、土師器（1）
Pit 7	古代～中世	45	40	43	23.5	不整円形	
Pit 8	古代～中世	45	45	89	23.05	円形	
Pit 9	古代～中世	45	30	41	23.52	楕円形	
Pit 10	古代～中世	52	50	32	23.64	円形	
Pit 11	古代～中世	43	37	77	23.17	不整円形	土師器（2）、不明（1）
Pit 12	古代～中世	45	35	44	23.49	楕円形	
Pit 13	古代～中世	35	33	33	23.6	円形	
Pit 14	古代～中世	40	30	45	23.49	楕円形	
Pit 15	古代～中世	35	30	47	23.43	楕円形	
Pit 16	古代～中世	35	35	57	23.35	円形	
Pit 17	古代～中世	60	60	55	23.39	円形	かわらけ（1）
Pit 18	古代～中世	35	35	39	23.55	円形	
Pit 19	古代～中世	95	65	33	23.65	円形	
Pit 20	古代～中世	35	32	34	23.58	円形	
Pit 21	古代～中世	25	25	30	23.64	円形	
Pit 22	古代～中世	23	20	16	23.39	円形	
Pit 23	古代～中世	30	20	17	23.34	円形	
Pit 24	古代～中世	35	25	10	23.45	楕円形	
Pit 25	古代～中世	23	17	16	23.38	楕円形	
Pit 26	古代～中世	30	25	8	23.48	円形	
Pit 27	古代～中世	70	65	52	23.52	円形	かわらけ（2）、土師器（8）、不明（2）
Pit 28	古代～中世	30	28	15	23.41	円形	
Pit 29	古代～中世	80	47	30	23.67	楕円形	
Pit 30	古代～中世	25	20	5	23.54	円形	
Pit 31	不明	38	33	30	23.36	円形	

第3表　B地区柱穴計測表

遺構外遺物

遺物包含層が残存している自然堤防より西側（3F25グリッド）で土師器と須恵器が出土している。160は酸化焔焼成の土師器の坏、161は土師器の甕、162・163は須恵器の坏、164・165は須恵器の甕である。

表採遺物

表採された遺物は、土師器、かわらけ、常滑産陶器、中国産陶磁器、近世陶磁器などがある。これらの遺物は主に自然堤防より東側で出土している。

166はてづくねかわらけ、168は常滑産の片口鉢、167・170・171は常滑産の甕、172は白磁の碗、173は青磁の碗である。167～173の所属時期は12世紀後半に属するものである

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	文様・縄文	備考
13	3	弥生土器	壺	頸部～体部	炭化物集中1	無紋、ナデ	
14	1	弥生土器	壺	頸部～底部	炭化物集中1	無節縄文（Ｌｒ）	
15	7	弥生土器	壺	口縁～体部上半	炭化物集中1	ＬＲ縄文	
16	11	弥生土器	甕	口縁～頸部	炭化物集中1	波状口縁、２本の平行沈線	
17	12	弥生土器	壺	口縁～頸部	炭化物集中1	平行沈線とその下の連孤文の組み合わせ	
18	24	弥生土器	壺	口縁部	炭化物集中1	波状口縁と口唇部に刻み有り	
19	31	弥生土器	壺	頸部	炭化物集中1	ＬＲ縄文	
20	8	弥生土器	壺	頸部	炭化物集中1	ＬＲ縄文	
21	20	弥生土器	壺	体部	炭化物集中1	ＬＲ縄文、外面煤付着	
22	21	弥生土器	壺	体部	炭化物集中1	ＬＲ縄文、外面煤付着	
23	29	弥生土器	－	体部	炭化物集中1	ＬＲ縄文	
24	23	弥生土器	－	体部	炭化物集中1	烈点文と上下の平行沈線の組み合わせ	
25	30	弥生土器	－	体部	炭化物集中1	平行沈線	
44	25	弥生土器	甕	口縁部	炭化物集中2	無紋	
45	18	弥生土器	壺	体部	炭化物集中2	縦位に波状沈線文、横位に平行沈線と連孤文、ＬＲ縄文	
46	4	弥生土器	鉢	体部下半～底部	炭化物集中2	無紋、底部に木葉痕有り、外面煤付着	
47	33	弥生土器	－	体部	炭化物集中2	無紋、外面煤付着	
74	6	弥生土器	甕	口縁～体部上半	ＳＫ01埋土	ＬＲ縄文	
75	34	弥生土器	－	体部	ＳＫ01埋土	ＬＲ縄文	
76	36	弥生土器	－	体部	ＳＫ01埋土	ＬＲ縄文、穿孔有り	
77	5	弥生土器	甕	体部下半～底部	ＳＫ01埋土	無紋	
78	22	弥生土器	甕	体部下半～底部	ＳＫ01埋土	ＬＲ縄文、外面煤付着	
86	2	弥生土器	壺	口縁部	３Ｅ９Ⅶ層	連孤文、平行沈線、山形文の組み合わせ	
87	10	弥生土器	壺	口縁～頸部	３Ｅ９～10Ⅶ層	工字文、ＬＲ充填縄文	
88	17	弥生土器	壺	頸部	３Ｅ９～10Ⅶ層	口唇部直下に刺突文と平行沈線の組み合わせ、ＬＲ縄文	
89	14	弥生土器	壺	口縁～頸部	３Ｅ９Ⅶ層	波状口縁	
90	9	弥生土器	壺	口縁～頸部	３Ｅ９～10Ⅶ層	波状口縁、体部ＬＲ縄文	
91	13	弥生土器	壺	口縁部	３Ｅ９～10Ⅶ層	波状口縁、口縁に指頭圧痕文あり	
92	16	弥生土器	壺	体部	３Ｅ９～10Ⅶ層	沈線文の上下に山形文の組み合わせ	
93	37	弥生土器	－	体部	炭化物集中1	ＬＲ縄文、外面煤付着	
94	35	弥生土器	壺	体部	３Ｅ９Ⅶ層	ＬＲ縄文	
95	28	弥生土器	－	体部	３Ｅ８Ⅶ層	ＬＲ縄文	
96	15	弥生土器	壺	体部	３Ｅ９Ⅶ層	２本の波状沈線文と２組の平行沈線の組み合わせ、ＬＲ縄文	
97	26	弥生土器	－	体部	３Ｅ８Ⅶ層	ＬＲ縄文	
98	27	弥生土器	－	体部	３Ｅ８Ⅶ層	ＬＲ縄文	
99	32	弥生土器	－	体部	３Ｅ９～10Ⅶ層	無節縄文（Ｌｒ）	
100	1	土製品	－	－	Ⅶ層一括	穿孔あり	

第４表　　Ｂ地区遺物観察表（1）

遺物番号	登録番号	器種	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	自然面	赤化	母岩	背面構成	備考
26	1	石鏃	炭化物集中1	2.1	1.2	0.4	0.9	頁岩				−	
27	2	石鏃	炭化物集中1	(1.8)	3.0	0.2	0.7	頁岩				−	
28	3	石鏃	炭化物集中1	(2.4)	1.9	3.7	1.7	瑪瑙	有り			Ⅲ	
29	4	石鏃	炭化物集中1	3.2	1.9	0.6	3.3	瑪瑙				−	
30	5	石鏃	炭化物集中1	4.7	3.0	1.0	10.6	瑪瑙				Ⅲ	
31	6	石鏃	炭化物集中1	3.0	2.3	0.8	5.8	頁岩	有り			−	
32	10	石匙未製品	炭化物集中1	2.2	2.4	1.1	4.7	頁岩				Ⅰ	
33	7	楔形石器	炭化物集中1	2.6	2.3	1.0	6.1	頁岩	有り			−	
34	8	石錐	炭化物集中1	2.7	0.6	0.5	0.9	頁岩			04	Ⅱ	
35	9	石匙	炭化物集中1	1.2	1.8	0.4	0.9	頁岩	有り			−	
36	15	剥片	炭化物集中1	2.1	4.2	0.7	4.3	頁岩	有り			Ⅲ	
37	16	剥片（二次加工）	炭化物集中1	2.0	3.1	0.4	2.5	頁岩	有り			Ⅰ	
38	19	剥片	炭化物集中1	4.3	2.9	1.1	10.1	頁岩	有り			Ⅰ	
39	20	剥片	炭化物集中1	3.1	2.1	0.5	2.1	頁岩	有り		01	Ⅰ	
40	31	剥片	炭化物集中1	3.1	2.9	0.5	3.9	頁岩	有り			Ⅲ	
41	12	剥片	炭化物集中1	4.0	3.1	1.1	11.8	頁岩	有り		01	Ⅰ	
42	11	剥片	炭化物集中1	5.7	3.9	1.0	21.5	頁岩	有り	有り	01	Ⅰ	
43	13	剥片	炭化物集中1	2.9	3.6	1.1	14.5	頁岩	有り	有り	01	Ⅰ	
−	14	剥片（二次加工）	炭化物集中1	2.2	3.7	0.5	3.4	頁岩				Ⅱ	
−	17	剥片	炭化物集中1	5.0	5.0	1.7	39	頁岩	有り	有り	01	Ⅱ	
−	18	剥片	炭化物集中1	3.9	4.7	2.6	52.3	頁岩	有り	有り	01	Ⅰ	
−	21	剥片	炭化物集中1	3.1	2.8	0.7	2.9	頁岩	有り	有り		Ⅰ	
−	22	剥片	炭化物集中1	2.7	1.8	1.0	5.4	頁岩	有り		02	Ⅲ	
−	23	剥片	炭化物集中1	(1.9)	(3.4)	1.4	9.5	瑪瑙	有り	有り		−	
−	24	剥片	炭化物集中1	(1.6)	2.0	1.2	2.6	頁岩	有り	有り		−	
−	25	剥片	炭化物集中1	(1.8)	(3.1)	1.3	7.6	瑪瑙	有り	有り		−	
−	26	剥片	炭化物集中1	(2.4)	(1.8)	1.0	3.1	頁岩	有り	有り		Ⅲ	
−	27	剥片	炭化物集中1	(1.4)	2.0	0.3	0.9	頁岩	有り	有り		Ⅰ	
−	28	剥片	炭化物集中1	1.5	3.1	1.0	3.4	頁岩	有り		02	Ⅱ	
−	29	剥片	炭化物集中1	2.5	2.9	0.5	2.9	頁岩	有り	有り	01	Ⅲ	
−	30	剥片	炭化物集中1	(2.5)	(3.1)	0.4	2.8	珪化木				Ⅰ	
−	32	剥片	炭化物集中1	2.4	3.2	3.1	2.1	頁岩	有り			−	
−	33	剥片	炭化物集中1	2.5	2.0	0.5	2.1	頁岩	有り			Ⅲ	
−	34	剥片	炭化物集中1	1.6	1.9	0.5	1.1	黒曜石	有り			Ⅰ	
−	35	剥片	炭化物集中1	2.0	1.9	0.7	1.9	頁岩	有り			Ⅰ	
−	36	剥片	炭化物集中1	(1.3)	2.1	0.6	1.0	瑪瑙	有り	有り		−	
−	37	剥片	炭化物集中1	(2.3)	(2.5)	0.2	1.4	頁岩				Ⅰ	
−	38	剥片	炭化物集中1	2.2	1.8	0.4	1.3	瑪瑙	有り			Ⅲ	
−	39	剥片	炭化物集中1	1.5	2.5	0.3	1.0	頁岩				Ⅰ	
−	40	剥片	炭化物集中1	1.3	2.3	0.4	0.9	頁岩	有り	有り		Ⅱ	
−	41	剥片	炭化物集中1	(1.0)	(1.6)	(0.7)	1.7	頁岩				−	
−	42	剥片	炭化物集中1	(1.2)	(1.3)	(0.8)	1.2	頁岩				−	

第5表　B地区遺物観察表(2)

遺物番号	登録番号	器種	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	自然面	赤化	母岩	背面構成	備考
48	1	石鏃	炭化物集中２	2.2	1.1	0.2	0.5	頁岩				—	
49	2	石鏃	炭化物集中２	2.6	1.8	0.6	2.3	頁岩			03	Ⅲ	
50	3	石鏃	炭化物集中2	3.0	1.7	0.9	4.3	瑪瑙	有り			Ⅰ	
51	4	石鏃	炭化物集中2	2.5	1.5	0.4	1.4	瑪瑙				—	
52	5	石鏃	炭化物集中2	2.3	1.4	3.8	1.3	瑪瑙				—	
53	6	石錐	炭化物集中2	4.1	2.0	0.5	2.5	頁岩	有り			Ⅰ	
54	7	石錐	炭化物集中2	3.0	2.1	0.6	2.9	頁岩	有り			Ⅰ	
55	9	石匙未製品	炭化物集中2	4.2	4.5	1.2	20.2	頁岩	有り		04	Ⅲ	
56	8	石錐	炭化物集中2	3.8	2.0	1.2	6.8	頁岩				Ⅲ	
57	10	剥片（二次加工）	炭化物集中2	(4.0)	3.9	1.3	23.4	頁岩				Ⅰ	
58	11	剥片（二次加工）	炭化物集中2	6.3	4.0	1.4	3.2	頁岩	有り			Ⅰ	
59	14	剥片（二次加工）	炭化物集中2	(1.9)	(1.9)	0.3	1.1	頁岩			03	Ⅰ	
60	13	剥片（二次加工）	炭化物集中2	2.0	2.9	0.5	2.6	頁岩	有り			Ⅲ	
61	15	剥片	炭化物集中2	(5.1)	(6.3)	1.6	33.2	頁岩	有り		04	Ⅲ	
62	16	剥片（二次加工）	炭化物集中2	(1.9)	3.3	6.1	2.7	頁岩	有り		04	Ⅲ	
63	21	剥片	炭化物集中2	3.8	3.2	1.2	12.3	頁岩	有り		04	Ⅲ	
64	20	剥片（二次加工）	炭化物集中2	(5.8)	(6.7)	1.6	47.3	頁岩	有り		04	Ⅲ	
65	27	剥片（二次加工）	炭化物集中2	6.7	3.8	1.6	25.2	頁岩	有り		05	Ⅰ	
66	28	剥片（微細剥離）	炭化物集中2	4.6	3.0	0.9	7.7	頁岩	有り	有り	04	Ⅰ	
67	25	剥片	炭化物集中2	(3.2)	(5.8)	1.9	2.1	頁岩	有り		05	Ⅰ	
68	26	剥片	炭化物集中2	5.3	2.4	1.6	1.5	頁岩	有り	有り	04	Ⅰ	
69	17	剥片（二次加工）	炭化物集中2	3.9	4.2	1.2	16.2	頁岩	有り		04	Ⅲ	
70	18	剥片（微細剥離）	炭化物集中2	3.0	2.4	0.8	5.1	頁岩	有り		04	Ⅲ	
71	19	剥片（微細剥離）	炭化物集中2	3.9	2.9	1.0	7.4	頁岩	有り		04	Ⅲ	
72	23	剥片	炭化物集中2	4.5	2.6	1.2	13.5	頁岩	有り	有り	04	Ⅲ	
73	22	剥片	炭化物集中2	4.1	3.2	0.9	8.4	頁岩	有り		04	Ⅲ	
—	12	剥片（二次加工）	炭化物集中2	2.4	1.5	6.5	2.6	頁岩	有り		04	Ⅰ	
—	24	剥片	炭化物集中2	(2.9)	(5.6)	1.8	2.5	頁岩	有り	有り		Ⅰ	
—	29	剥片	炭化物集中2	(5.5)	2.6	0.7	10.9	頁岩	有り	有り	05	Ⅰ	
—	30	剥片	炭化物集中2	2.7	(3.9)	0.9	7.5	頁岩	有り		04	Ⅲ	
—	31	剥片	炭化物集中2	(5.2)	(3.4)	1.2	12.1	頁岩	有り		04	Ⅰ	
—	32	剥片	炭化物集中2	(3.2)	(4.0)	0.9	9.5	頁岩	有り	有り	04	Ⅰ	
—	33	剥片（二次加工）	炭化物集中2	(1.6)	(0.9)	0.6	1.1	頁岩	有り			—	
—	34	剥片	炭化物集中2	(6.2)	6.2	1.1	48.9	頁岩	有り		04	Ⅰ	
—	35	剥片	炭化物集中2	4.9	(1.9)	1.1	14.1	頁岩	有り	有り		Ⅰ	
—	36	剥片（二次加工）	炭化物集中2	(1.9)	2.5	0.4	1.4	頁岩	有り			Ⅲ	
—	37	剥片	炭化物集中2	2.5	1.9	1.1	4.4	安山岩				Ⅲ	
—	38	剥片	炭化物集中2	(1.6)	(1.3)	(0.9)	2.3	頁岩	有り		04	—	
—	39	剥片	炭化物集中2	1.3	2.4	0.6	1.9	頁岩	有り	有り		—	
—	40	剥片	炭化物集中2	2.2	2.5	1.0	4.3	瑪瑙	有り			Ⅰ	

第６表　　Ｂ地区遺物観察表(3)

遺物番号	登録番号	器種	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	自然面	赤化	母岩	背面構成	備考
–	41	剥片	炭化物集中2	1.5	1.4	0.4	0.9	頁岩	有り		04	I	
–	42	剥片	炭化物集中2	1.3	3.0	0.5	2	安山岩					
–	43	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
–	44	剥片	炭化物集中2	(1.3)	1.6	0.4	0.9	頁岩				I	
–	45	剥片	炭化物集中2	(1.5)	(1.5)	0.4	0.8	頁岩				I	
–	46	剥片	炭化物集中2	2.7	1.9	50.5	1.7	頁岩			04	I	
–	47	剥片	炭化物集中2	3.1	1.8	0.6	2.9	頁岩	有り		04	I	
–	48	剥片	炭化物集中2	1.9	2.4	0.5	1.8	頁岩	有り			I	
–	49	剥片	炭化物集中2	(2.2)	3.1	1.1	5.2	頁岩	有り			-	
–	50	剥片	炭化物集中2	1.7	1.5	0.3	1.0	頁岩	有り		04	I	
–	51	剥片	炭化物集中2	2.8	0.9	0.5	1.1	頁岩				I	
–	52	剥片（二次加工）	炭化物集中2	1.6	2.2	0.5	1.3	頁岩			04	I	
–	53	剥片	炭化物集中2	(2.5)	(2.2)	(0.6)	2.5	頁岩	有り	有り		-	
–	54	剥片（二次加工）	炭化物集中2	(1.2)	1.4	0.4	0.6	頁岩				I	
–	55	剥片	炭化物集中2	2.7	2.5	0.5	1.8	安山岩			04	III	
–	56	剥片	炭化物集中2	1.4	2.6	0.4	2.2	頁岩	有り		04	-	
–	57	剥片	炭化物集中2	1.4	2.7	0.3	2.2	頁岩	有り			III	
–	58	剥片（微細剥離）	炭化物集中2	(2.0)	(3.3)	0.3	3.3	頁岩			04	I	
–	59	剥片	炭化物集中2	3.5	1.7	0.9	2.6	頁岩				I	
–	60	剥片	炭化物集中2	1.9	1.7	0.8	5.6	瑪瑙	有り			I	
–	61	剥片（二次加工）	炭化物集中2	1.9	2.8	0.9	3.6	頁岩	有り			I	
–	62	剥片	炭化物集中2	(2.1)	(2.3)	0.9	3.1	頁岩			04		
–	63	剥片	炭化物集中2	(1.6)	2.1	0.3	0.7	頁岩				I	
–	64	剥片	炭化物集中2	(1.5)	(1.8)	0.2	0.9	頁岩	有り	有り	05	-	
–	65	剥片	炭化物集中2	2.2	1.5	0.7	1.2	頁岩	有り			-	
–	66	剥片	炭化物集中2	(1.6)	1.3	0.6	0.8	頁岩	有り	有り	05	III	
–	67	剥片	炭化物集中2	(2.4)	1.2	0.4	1.0	頁岩		有り		-	
–	68	剥片	炭化物集中2	(1.5)	(1.6)	0.3	0.5	頁岩			04	I	
–	69	チップ	炭化物集中2	1.0	1.1	0.3	0.3	頁岩				I	
–	70	チップ	炭化物集中2	1.1	1.2	0.3	0.2	頁岩				III	
–	71	チップ	炭化物集中2	1.2	1.0	0.2	0.2	頁岩		有り	05	-	

第７表　　Ｂ地区遺物観察表（4）

遺物番号	登録番号	器種	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	自然面	赤化	母岩	背面構成	備考
79	4	石鏃	ＳＫ01埋土	2.6	1.5	0.5	2.7	頁岩	有り			－	
80	1	石匙	ＳＫ01埋土	1.7	2.8	0.9	3.7	頁岩		有り	04	Ⅱ	
81	2	石匙	ＳＫ01埋土	1.4	3.2	0.7	2.8	頁岩	有り		06	Ⅱ	
82	3	石匙未製品	ＳＫ01埋土	(2.2)	(2.9)	0.5	2.7	頁岩	有り			Ⅰ	
83	5	掻器	ＳＫ01埋土	(2.6)	1.5	1.4	12.8	砂岩				－	
84	6	剥片	ＳＫ01埋土	2.6	(1.7)	0.5	1.8	頁岩			06	Ⅰ	
85	7	剥片（微細剥離）	ＳＫ01埋土	2.4	2.7	0.6	3.7	鉄石英				Ⅲ	
－	8	剥片	ＳＫ01埋土	2.5	3.0	1.0	6.0	鉄石英	有り			Ⅰ	
－	10	チップ	ＳＫ01埋土	1.3	1.3	0.5	1.2	瑪瑙				－	

遺物番号	登録番号	器種	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	自然面	赤化	母岩	背面構成	備考
101	21	剥片（二次加工）	３Ｅ９～10Ⅶ層	5.0	4.7	1.0	15.0	頁岩	有り		07	Ⅲ	
102	10	剥片（二次加工）	３Ｅ９Ⅶ層	2.8	2.2	0.8	5.3	頁岩	有り		07	Ⅰ	
103	16	剥片（二次加工）	３Ｅ９～10Ⅶ層	(2.2)	(1.8)	0.7	2.5	頁岩	有り			Ⅰ	
104	20	剥片	３Ｆ１Ⅶ層	2.5	2.7	0.7	4.8	頁岩	有り			Ⅰ	
105	17	剥片	３Ｅ９～10Ⅶ層	2.2	(2.1)	0.7	2.2	頁岩	有り		07	Ⅰ	
106	22	礫器	３Ｅ９Ⅶ層	11.9	11.3	4.6	772.7	頁岩	有り			－	
107	23	凹石	３Ｅ９Ⅶ層	11.1	7.9	3.6	210.8	安山岩	有り			－	
－	1	剥片	Ⅶ層一括	2.9	(2.3)	0.6	1.2	頁岩	有り			Ⅲ	
－	2	剥片	Ⅶ層一括	4.2	3.0	1.5	1.3	砂岩	有り			Ⅰ	
－	3	剥片	Ⅶ層一括	3.6	4.0	2.0	19.7	砂岩				Ⅰ	
－	4	剥片	Ⅶ層一括	2.4	(2.5)	0.6	2.6	頁岩	有り			Ⅲ	
－	5	剥片	Ⅶ層一括	(1.6)	(2.0)	0.4	0.9	頁岩	有り	有り		Ⅰ	
－	6	剥片	３Ｅ８Ⅶ層	5.9	5.9	1.5	40.8	頁岩				Ⅰ	
－	7	剥片	３Ｅ８Ⅶ層	5.7	2.7	0.6	2.7	頁岩	有り		07	Ⅰ	
－	8	剥片	３Ｅ８Ⅶ層	2.9	1.2	0.4	1.0	頁岩	有り			Ⅰ	
－	9	剥片（二次加工）	３Ｅ９Ⅶ層	(2.3)	2.9	1.3	8.4	頁岩	有り			Ⅰ	
－	11	剥片	３Ｅ９～10Ⅶ層	5.7	5.0	0.7	1.6	頁岩	有り			Ⅲ	
－	12	剥片	３Ｅ９～10Ⅶ層	2.8	2.2	0.8	5.3	砂岩	有り			Ⅰ	
－	13	剥片	３Ｅ９～10Ⅶ層	3.4	2.3	1.0	6.8	頁岩	有り			－	
－	14	剥片	３Ｅ９～10Ⅶ層	(3.1)	3.1	1.3	10.9	砂岩	有り			Ⅰ	
－	15	剥片	３Ｅ９～10Ⅶ層	2.1	2.7	1.3	7.4	頁岩	有り		07	Ⅰ	
－	18	剥片	３Ｅ９～10Ⅶ層	2.1	1.6	1.2	2.6	頁岩	有り			Ⅰ	

第８表　　Ｂ地区遺物観察表(5)

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	その他
108	5	土師器	底部	底部	ＳＩ01埋土	10.4	-	3.3	ロクロ	ロクロ	1/10	細砂多	にぶい橙	良好	
109	1	須恵器	坏	口縁	ＳＩ01埋土	-	(10.8)	1.9	ヘラケズリ	ヘラケズリ	1/4	細砂多	灰	良好	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底	残存度	胎土	色調	備考
110	1	かわらけ	ＳＩ04埋土	D4	-	-	1.6	指		-	細砂多	にぶい黄橙	
111	4	かわらけ	ＳＩ04埋土	D4	-	-	3.1	指		-	粗砂少	にぶい黄橙	
112	2	かわらけ	ＳＩ04埋土	D3	-	-	1.6			-	細砂多	にぶい黄橙	
113	3	かわらけ	ＳＩ04埋土	D3	-	-	2.1	指		-	細砂多	にぶい黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
114	6	常滑	甕	体部	ＳＩ04埋土	12世紀後半	赤褐色	
115	5	常滑	甕	体部	ＳＩ04埋土	12世紀後半	赤褐色	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	高さ	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
117	23	かわらけ	ＳＥ01埋土	D4	-	-	2.7			-	細砂多	浅黄橙	
118	21	かわらけ	ＳＥ01埋土	D3	(9.2)	-	2.3	指		1/8	細砂多	黄橙	外底に指紋
119	20	かわらけ	ＳＥ01埋土	D3	(8.4)	-	1.9			1/6	細砂多	浅黄橙	外底に指紋
120	24	かわらけ	ＳＥ01埋土	D3	(8.8)	-	1.9			1/6	細砂多	浅黄橙	
121	22	かわらけ	ＳＥ01埋土	C3	-	-	2.1	指		-	細砂多	黄橙	
122	29	かわらけ	ＳＥ01埋土	D3	(13.4)	-	2.5	指	すのこ痕	1/4	細砂多	にぶい黄橙	中央指凹み
123	32	かわらけ	ＳＥ01埋土	C3	-	-	4.0	指	すのこ痕	-	細砂多	浅黄橙	
124	25	かわらけ	ＳＥ01埋土	C3	-	-	2.9	指		-	細砂少	浅黄橙	
125	31	かわらけ	ＳＥ01埋土	C5	14.4	-	3.2			1/8	粗砂少	にぶい黄橙	
126	30	かわらけ	ＳＥ01埋土	C5	16.0	-	3.6	指		1/8	細砂多	灰黄橙	
127	27	かわらけ	ＳＥ01埋土	rd	-	(9.2)	1.5		回転糸切	1/8	細砂少	にぶい橙	
128	26	かわらけ	ＳＥ01埋土	rd	-	(7.2)	1.7		回転糸切	1/6	細砂少	橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
129	15	常滑	甕	口縁部	ＳＥ01埋土	12世紀第Ⅲ形式	暗褐色	内外自然釉
130	19	常滑	甕	肩部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	灰色	外自然釉
131	1	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	赤褐色	
132	3	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	暗褐色	外自然釉
133	4	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	赤褐色	10、14と同一個体
134	11	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	灰色	
135	14	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	赤褐色	4、10と同一個体
136	7	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	外自然釉	
137	10	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	赤褐色	4、14と同一個体
138	9	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	橙～赤褐色	5、6、13と同一個体
139	6	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	橙～赤褐色	5、9、13と同一個体
140	5	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	橙～赤褐色	6、9、13と同一個体
141	8	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	赤褐色	
142	12	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	橙～赤褐色	
143	13	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	橙～赤褐色	5、6、9、と同一個体
144	2	常滑	甕	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	灰色	内面砥石に転用
145	16	須恵器	甕	胴部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	灰色	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
146	28	磨製石器	ＳＥ01埋土	84.0	41.0	20.0	97.9	頁岩	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
147	1	常滑	甕	体部	ＳＸ01	12世紀後半	外オリーブの釉、内暗褐色	

第９表　Ｂ地区遺物観察表（6）

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
148	1	かわらけ	ＳＫ01埋土	Ｄ4	-	-	1.8	指		1/5	粗砂少	にぶい黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
149	2	常滑	甕	体部	ＳＫ01埋土	12世紀後半	赤褐色	
遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
150	1	常滑	甕	頸部	ＳＫ07	12世紀後半	外オリーブの釉、内暗褐色	
遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
151	1	常滑	片口鉢	口縁～体部	ＳＫ06	12世紀後半	褐灰色	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
152	1	かわらけ	Pit３埋土	Ｃ3	(7.2)	-	1.7	指		1／3	細砂多	にぶい黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
153	2	土師器	坏	底部	Pit３埋土	-	5.6	1.5	ロクロ	ロクロ･内黒処理	底部のみ	細砂多	にぶい黄橙	良好	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
154	1	かわらけ	Pit６埋土	Ｄ4	-	-	1.1	指		-	細砂多	にぶい黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
155	1	常滑	甕	体部	Pit８埋土	12世紀後半	外灰色の釉、内赤褐色	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
156	1	かわらけ	Pit27埋土	Ｄ3	(8.4)	-	1.1	指		1/3	粗砂多	黄褐色	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
157	2	常滑	甕	体部	Pit27埋土	12世紀後半	外オリーブの釉、内暗褐色	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
158	1	かわらけ	Pit28埋土	Ｄ3	9.2	-	2.3	指	すのこ痕	1/4	細砂多	にぶい黄橙	
159	2	かわらけ	Pit28埋土	Ｄ4	-	-	1.8	指	すのこ痕	-	細砂多	浅黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	その他
160	2	土師器	坏	口縁～底部	３Ｆ25Ⅲ層	12.7	6.0	3.4	ロクロ	ロクロ	2/3	細砂少	明黄褐色	良好	
161	4	土師器	甕	頸部	３Ｆ11Ⅲ層	-	-	3.0	ナデ・ヘラナデ	ナデ	-	粗砂多	褐色	良好	
162	1	須恵器	坏	口縁～底部	３Ｆ11Ⅲ層	13.2	6.6	4.6	ロクロ	ロクロ	1/2	細砂少	灰白色	良好	
163	5	須恵器	坏	底部	３Ｆ10Ⅲ層	10.3	5.3	2.3	ロクロ	ロクロ	底部のみ	粗砂多	灰色	良好	
164	7	須恵器	甕	体部	３Ｅ８Ⅲ層	-	-	6.3	叩き目		-	細砂少	灰色	良好	
165	6	須恵器	甕	体部	３Ｅ10Ⅲ層	-	-	14.7	ヘラケズリ	横位のナデ	-	細砂少	灰色	良好	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
166	2	かわらけ	３Ｇ31Ⅱ層	Ｄ4	-	-	1.8	指		1/5	細砂少	にぶい黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	その他
167	6	須恵器	甕	体部	３Ｆ24Ⅱ層	-	-	7.6	叩き目	横位のナデ		細砂粒少	灰白色	良好	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
168	7	常滑	片口鉢	口縁部	３Ｆ39Ⅱ層	12世紀後半	灰黄色	
169	5	常滑	甕	体部	３Ｆ40Ⅱ層	12世紀後半	赤褐色	
170	4	常滑	甕	体部	３Ｆ40Ⅱ層	12世紀後半	赤褐色	
171	3	常滑	甕	体部	３Ｆ40Ⅱ層	12世紀後半	赤褐色	
遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	太宰府分類	備考
172	9	青磁	碗	体部	３Ｆ38Ⅱ層	12世紀後半	同安Ⅰ類	
173	8	白磁	碗	体部	３Ｆ38Ⅱ層	12世紀後半	Ⅴ類	

第10表　Ｂ地区遺物観察表(7)

第６章　　Ｃ地区の遺構・遺物

第１節　Ｃ地区の概観

Ｃ地区はＢ地区とＤ地区の中間にあたり、遺跡範囲の中央よりやや北に位置している調査区である。調査面積は350㎡（70×５）で、現況は水田と畑地である。

この地区の現地形はＢ地区と同様で、５Ｅ54グリッドと５Ｅ68グリッドの間に自然堤防、それより東側に後背湿地、西側に一段低い段丘面が形成されている。

本調査区は弥生時代と平安時代以降の遺構と遺物を確認している。弥生時代では、土器が包含層から出土している。平安時代以降に属すると思われる遺構は、井戸、溝、焼土遺構、土坑が１基ずつ検出された。遺物は、かわらけや中国産陶磁器、須恵器が遺構や遺構外から出土している。

〔弥生時代〕

弥生土器が２点出土している。出土位置は５Ｅ77、検出面はⅥ層上面、比較的まとまりを見せた状態で出土している。遺物出土の周辺部で遺構確認を行ったが検出されなかった。177と178は、ＬＲ縄文が施文されている甕の体部で、同一個体である。

〔平安時代以降〕

ＳＥＯ１

＜出土位置＞５Ｆ81と82に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜規模＞1.74m×1.52m、深さ1.75mである。

＜平面形＞平面形は円形を呈する。

＜壁の状況＞壁は底面から真っ直ぐに立ち上がり、開口部の手前で広がりながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

＜埋土＞シルト層が主体で、９層に分けられる。埋土上部にあたる１・２・４層は人口堆積と考えられる。

＜出土遺物＞埋土の４層からかわらけと中国産陶磁器が出土している。174はてづくねかわらけで、175は白磁の四耳壺である。

＜遺構時期＞出土遺物から12世紀後半に所属するものと考えられる。

＜備考＞Ｂ地区のＳＥ01との平面形と堆積状況などが類似している

ＳＸＯ１

＜位置＞５Ｆ81に位置する。

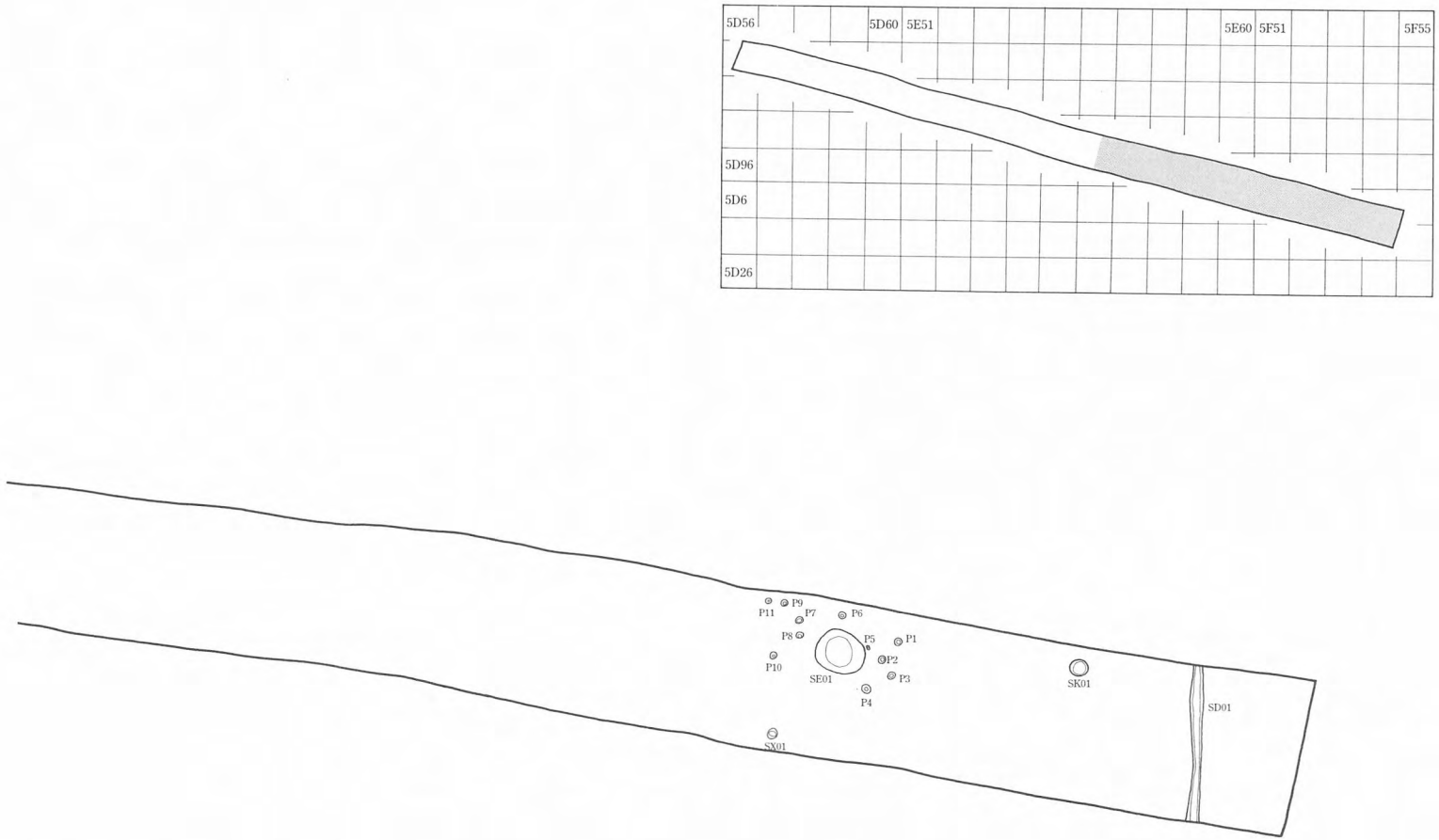
＜検出面＞Ⅲ層。

＜規模・平面形＞規模は0.35m×0.35m、深さ0.05mである。平面形は円形を呈する。

＜埋土＞焼土１層のみである。

＜出土遺物＞須恵器の甕（176）が１点出土している。

＜遺構時期＞平安時代に属すると考えられる。



第35図　C地区遺構配置図

＜備考＞性格は不明である。

ＳＫＯ１

＜位置＞５Ｆ83に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜規模＞規模は0.64m×0.57m、深さ0.2mである。

＜平面形＞平面形は円形を呈する。

＜埋土＞２層に分けられ、１層は人口堆積と思われる。

＜出土遺物＞なし。

＜遺構時期＞不明。

＜備考＞性格は不明である。

ＳＤＯ１

＜出土位置＞５Ｆ84と94に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜規模＞規模は、検出長5.45m、上端幅0.35～0.5m×下端0.15～0.25mである。

＜平面形＞上端幅、下端幅が部分によって変化するが、全体的にはほぼ真っ直ぐである。

＜埋土＞黄褐色シルト層が主体で、２層に分けられる。

＜出土遺物＞なし。

＜遺構時期＞不明。

＜備考＞Ｂ地区で検出したＳＤＯ１と規模や埋土状況などがほぼ同一であることから、同時期に所属するものと推測される。

柱穴

＜出土位置＞５Ｆ71、72、81、82に位置し、ＳＥＯ１周辺に集中している。

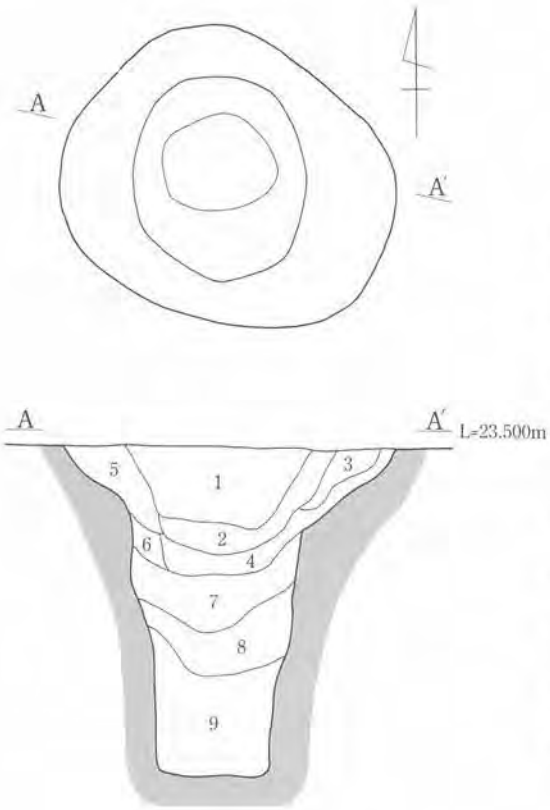
＜検出面＞Ⅵ層。

＜規模・平面形＞計測表に示した通りである。

＜埋土＞シルト層が主体である。

遺構番号	時期	長軸	短軸	深さ	標高	開口部形状	備考
Pit 1	不明	26	25	23	23	円形	
Pit 2	不明	28	24	12	23.1	楕円形	
Pit 3	不明	24	22	1	23.08	円形	
Pit 4	不明	30	30	17	23.03	不整円形	
Pit 5	不明	20	12	19	23.01	楕円形	
Pit 6	不明	28	28	13	23.1	円形	
Pit 7	不明	26	20	25	23.02	円形	
Pit 8	不明	26	20	14	22.99	楕円形	
Pit 9	不明	25	20	14	23.11	円形	
Pit 10	不明	28	23	26	23.01	楕円形	
Pit 11	不明	23	16	16	23.11	楕円形	

第11表　Ｃ地区　柱穴計測表



SE01

1　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性弱く、しまり強い。直径5㎜前後の炭化粒と5～10㎜の焼土を若干含む。

2　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性はやや弱く、しまり強い。1層に比べ粘性、しまり共に増す。混入物も1層より増す。

3　黒褐色砂質シルト層（10YR3／2）粘性弱く、しまり強い。直径1～10㎜の炭化粒を少量、5～10㎜の焼土を微量含む。

4　暗褐色砂質シルト層（10YR3／3）粘性しまり共にやや強い。直径1～10㎜の炭化粒をやや多く、1～8㎜の焼土を少量含む。遺物が出土したのは本層である。

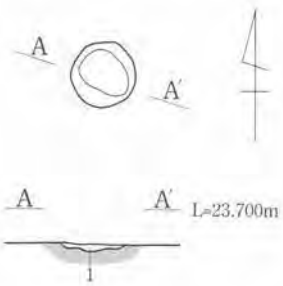
5　暗褐色砂質シルト層（10YR3／3）粘性しまり共にやや強い。4層と類似しているが、若干しまりが強くなる程度である。

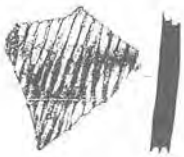
6　暗褐色砂質シルト層（10YR3／4）粘性やや強く、しまり強い。地山崩落土で、炭化粒や焼土が若干みられる。

7　にぶい黄褐色粘土質シルト層（10YR4／3）粘性は強く、しまりやや強い。直径1～10㎜の炭化粒を微量含む。上層に比べ砂質増す。

8　灰黄褐色粘土質シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまりやや強い。直径1～5㎜の炭化粒を少量含む。粘性が最も強くなる。

9　褐色粘土質シルト層（10YR4／4）粘性強く、しまりやや強い。8層と類似しているものの、砂質増す。

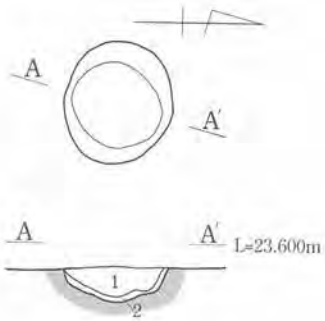




S=$\frac{1}{3}$

SX01

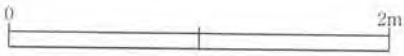
1　にぶい橙色粘土質シルト層（7.5YR7／4）粘性やや強く、しまり強い。焼土の単一層である。



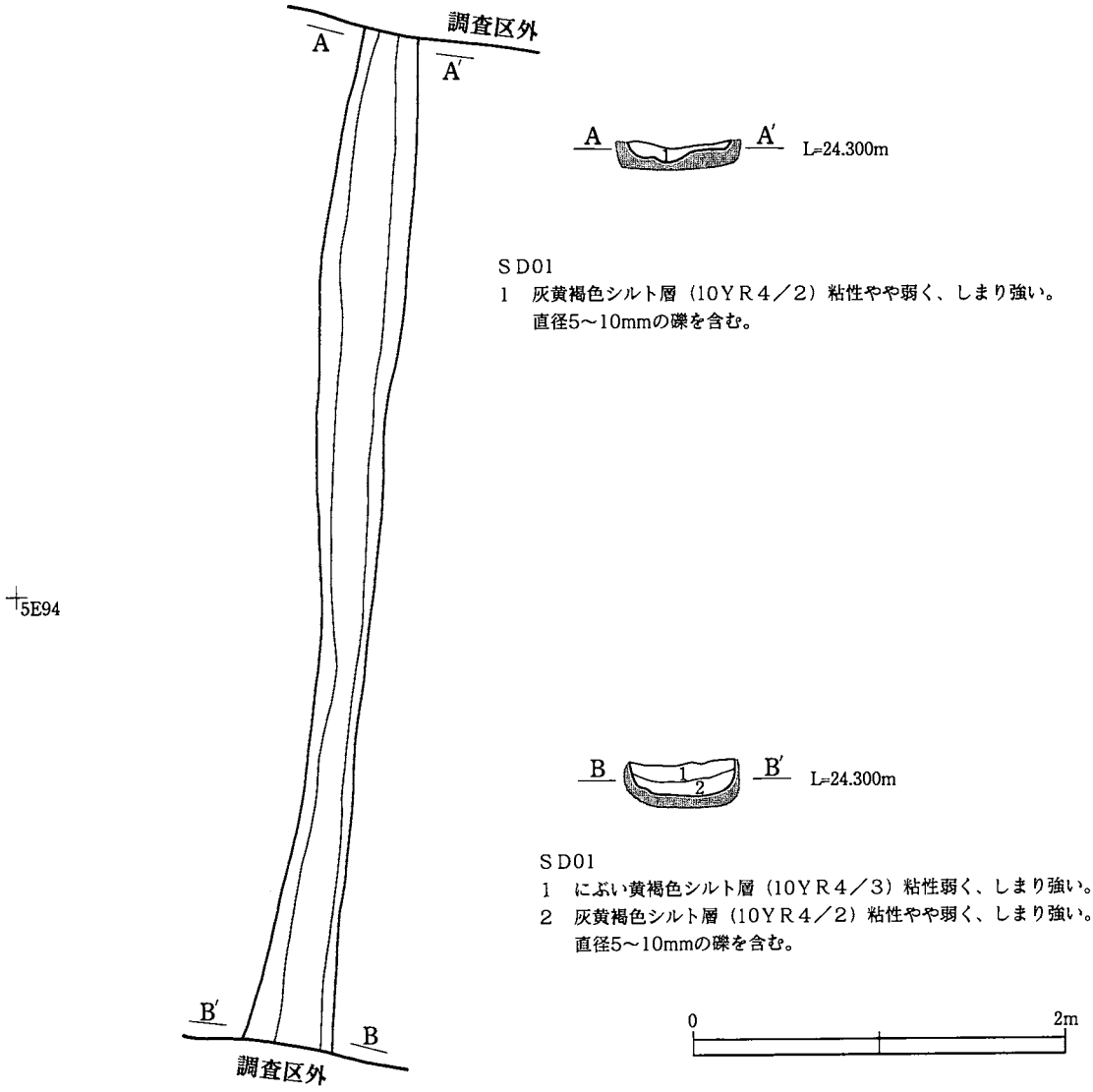
SK01

1　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性やや弱く、しまり強い。直径1～20㎜の炭化粒を含む。直径10～50㎜の焼土ブロックと直径1～5㎜の白色粒子を若干含む。

2　暗褐色砂質シルト層（10YR3／4）粘性は強く、しまりやや強い。炭化粒を若干含む。



第36図　C地区 SE01・SX01・SK01 出土遺物



第37図　C地区SD01

＜出土遺物＞なし。

＜遺構時期＞不明。

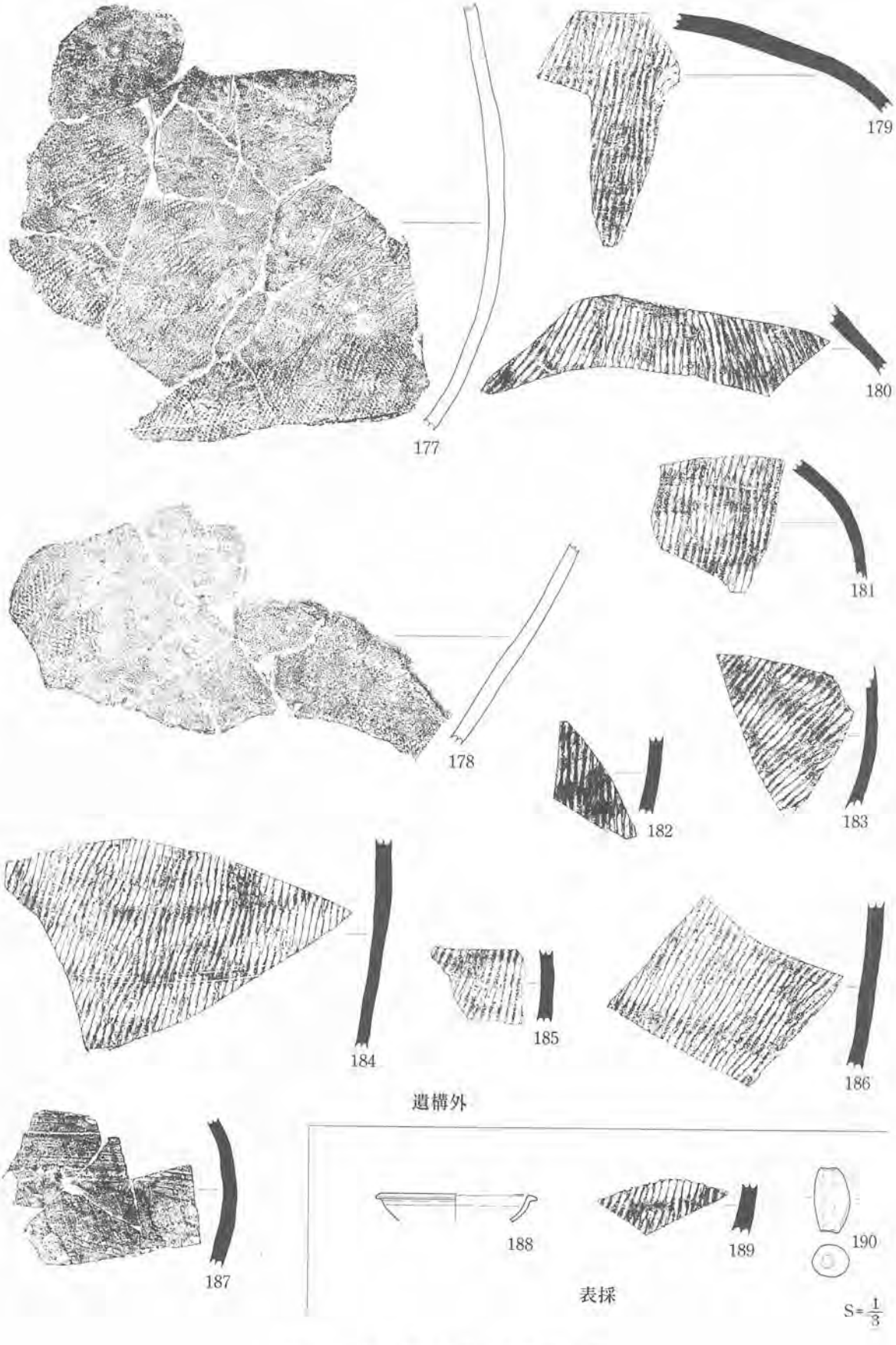
＜備考＞埋土の主体層が上層に存在しないことから、Ⅲ層形成以降に掘り込まれたものと判断しているが時期は不明とした。

＜遺構外遺物＞

遺物は主に調査区東側の５E89･90、５F81･81、５E79のⅢ層から出土している。179～187は外面にタタキ目が施されている須恵器の甕である。

＜表採遺物＞

須恵器の甕（189）、土錘（190）、肥前陶磁器（188）が調査区東側から出土している。



第38図　C地区 遺構外・表採出土遺物

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
174	1	かわらけ	ＳＥ01埋土	Ｄ3	-	-	1.8	不明			粗砂多	黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	太宰府分類	備考
175	2	白磁	四耳壺？	体部	ＳＥ01埋土	12世紀後半	Ⅲ系	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
176	1	須恵器	甕	体部	ＳＸ01埋土	-	-	5.5	タタキ目			粗砂多	灰色	良好	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	文様・縄文	備考
177	1	弥生土器	壺	体部	５Ｅ77Ⅵ層	ＬＲ縄文	
178	2	弥生土器	壺	体部	５Ｅ77Ⅵ層	ＬＲ縄文	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
179	6	須恵器	甕	体部	５Ｅ90Ⅲ層	-	-	2.4	タタキ目		粗砂少	灰色	良好	
180	8	須恵器	甕	体部	５Ｆ82Ⅲ層	-	-	3.5	タタキ目	横位のナデ	粗砂少	灰色	良好	
181	5	須恵器	甕	体部	５Ｆ82Ⅲ層	-	-	6.3	タタキ目		粗砂少	灰色	良好	
182	1	須恵器	甕	体部	５Ｅ90Ⅲ層	-	-	4.2	タタキ目		粗砂少	灰色	良好	
183	4	須恵器	甕	体部	５Ｅ89Ⅲ層	-	-	7.3	タタキ目		粗砂少	灰色	良好	
184	2	須恵器	甕	体部	５Ｅ89Ⅲ層	-	-	10.9	タタキ目		粗砂少	灰色	良好	
185	9	須恵器	甕	体部	５Ｅ89Ⅲ層	-	-	3.8	タタキ目		粗砂少	灰色	良好	
186	7	須恵器	甕	体部	５Ｆ82Ⅲ層	-	-	8.8	タタキ目		粗砂少	灰色	良好	
187	3	須恵器	甕	体部	５Ｆ81Ⅲ層	-	-	7.8	タタキ目		粗砂少	灰色	良好	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	胎土	釉薬	製作地	製作年代	備考
188	1	陶磁器	蓋	-	５Ｆ94Ⅱ層	(7.8)	-	1.4	白色	透明釉	肥前	18Ｃ前半	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
189	2	須恵器	甕	体部	表採	-	-	5.4	タタキ目			粗砂少	灰色	良好	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	胎土	色調	備考
190	3	土錘	５Ｆ95Ⅱ層	3.4	1.9	1.8		粗砂多	橙	

第12表　Ｃ地区遺物観察表

第７章　　Ｄ地区の遺構・遺物

第１節　Ｄ地区の概観

Ｄ地区はＢ～Ｆ地区の調査区がある面のほぼ中央にあたり、面積520㎡(140×３)の調査区である。現況は農道で、本調査区からは遺構、遺物等は検出されなかった。

この調査区の現況は、農道であったため、ほぼ水平な状態で埋め立てられていた。しかし、旧地形は、Ｂ・Ｃ地区と同様な形成過程を示していることが土層断面から明らかとなった。

第８章　　Ｅ地区の遺構・遺物

第１節　Ｅ地区の概説

Ｅ地区は、Ｄ地区とＦ地区の中間にあたり、遺跡の中央よりやや南に位置している面積750㎡（150×5）の調査区である。本地区の地形はＡ～Ｄ地区の地形とは異なり、東端から西側に向かって登っていく緩斜面が形成され、10Ｄ61グリッドより西で水平な地形となる。この平らな地形はＢ区で説明した自然堤防の部分に相当する。さらに、調査区の西側には南北に走る農道が存在し、標高は急激に落ちていく。

本調査区は、弥生時代と平安時代以降の遺構と遺物が確認されている。前者では弥生土器のみが確認され、遺構は検出されなかった。後者で検出された遺構は、土坑４基、柱穴31基である。遺物は遺構に伴いかわらけ、国産陶器、中国産陶磁器、須恵器などが出土している。

〔弥生時代〕

弥生土器が２点出土している。出土位置は10Ｄ87と88の間、検出面はⅥ層上面である。211と212は、２列の烈点文が施文され、同一個体である。

〔平安時代以降〕

ＳＫＯ１

＜位置＞10Ｄ73に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜規模＞規模は1.54m×0.53m、深さ0.51mである。

＜平面形＞平面形は半円形のみ確認できた。規模、平面形共に調査区外に延びていくため全容は不明である。

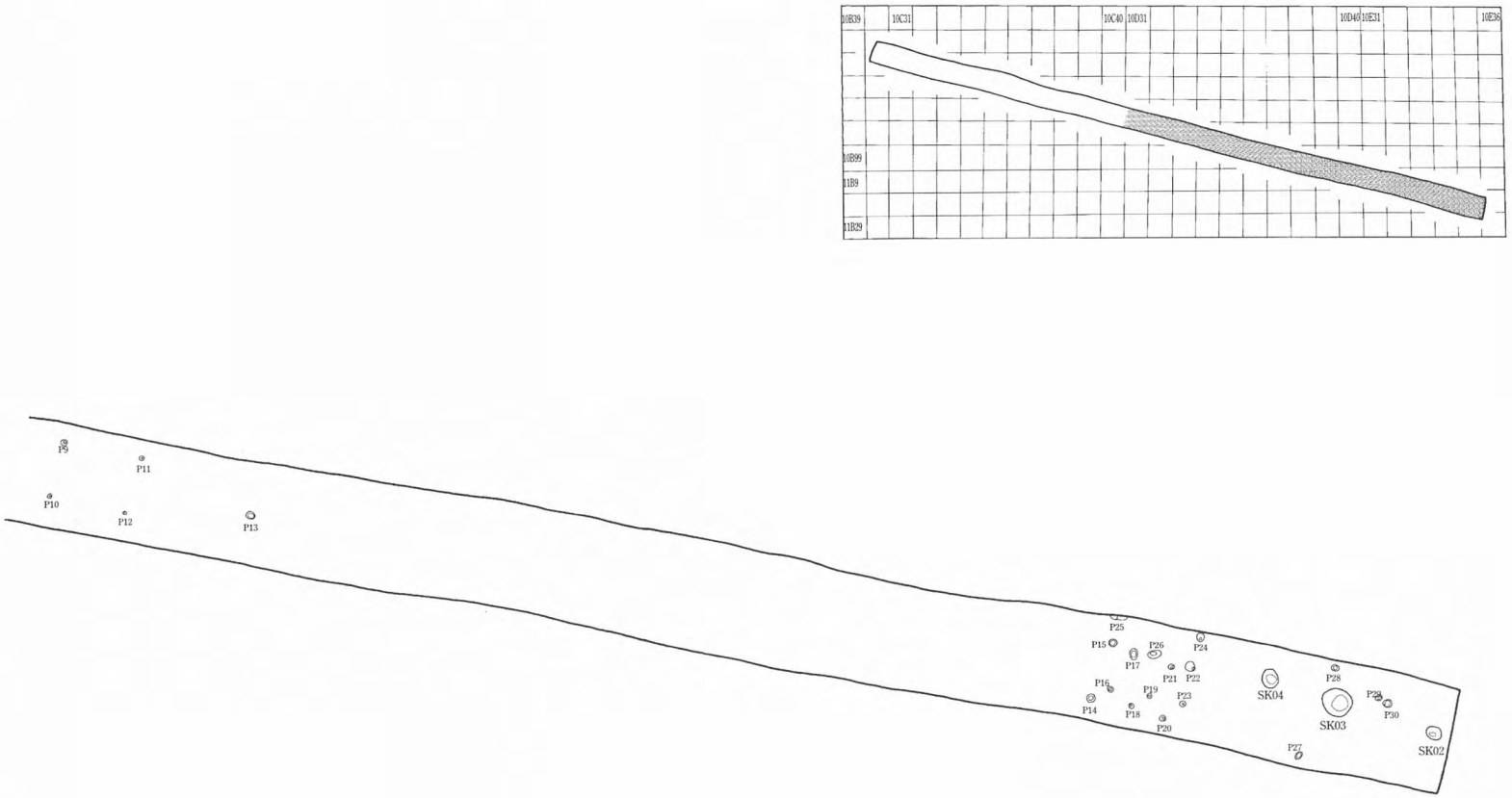
＜埋土＞暗褐色シルト層が主体で、６層に分けられる。

＜出土遺物＞なし。

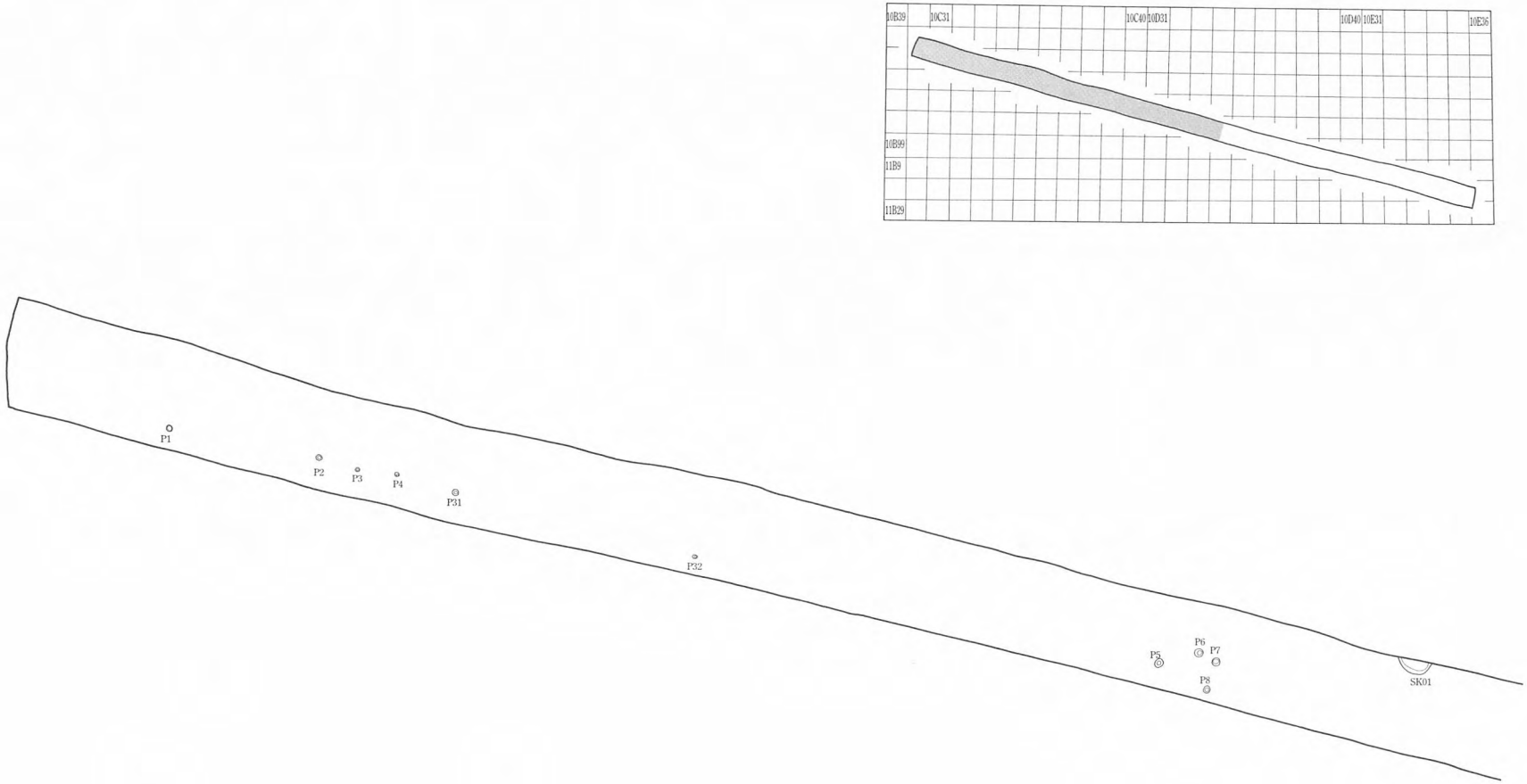
＜遺構時期＞調査区東側に存在するＳＫ02、03、04の埋土主体層とは異なるため不明である。

ＳＫＯ２

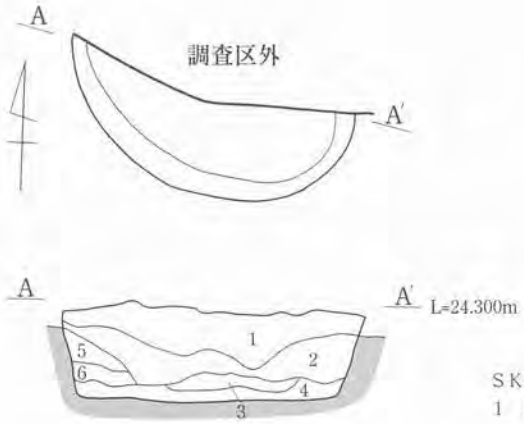
＜位置＞11Ｅ06と16の間に位置する。

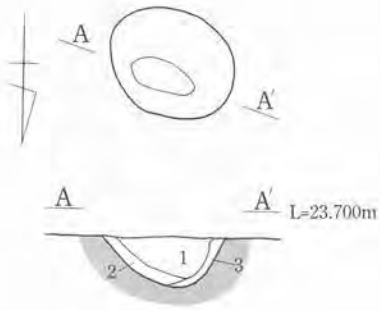


第39図　E地区遺構配置図



第40図　E地区遺構配置図



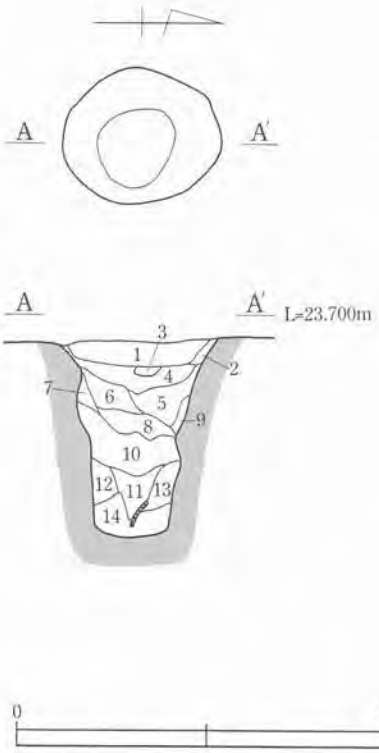


SK01

1　褐色シルト層（10YR4／4）粘性やや強く、しまり強い。
2　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性あり、しまり強い。炭化粒を含む。
3　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性あり、しまり強い。
4　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性あり、しまり強い。
5　暗褐色砂質シルト層（10YR3／4）粘性あり、しまり強い。
6　明褐色粘土質シルト層（10YR5／6）粘性やや強く、しまり強い。

SK02

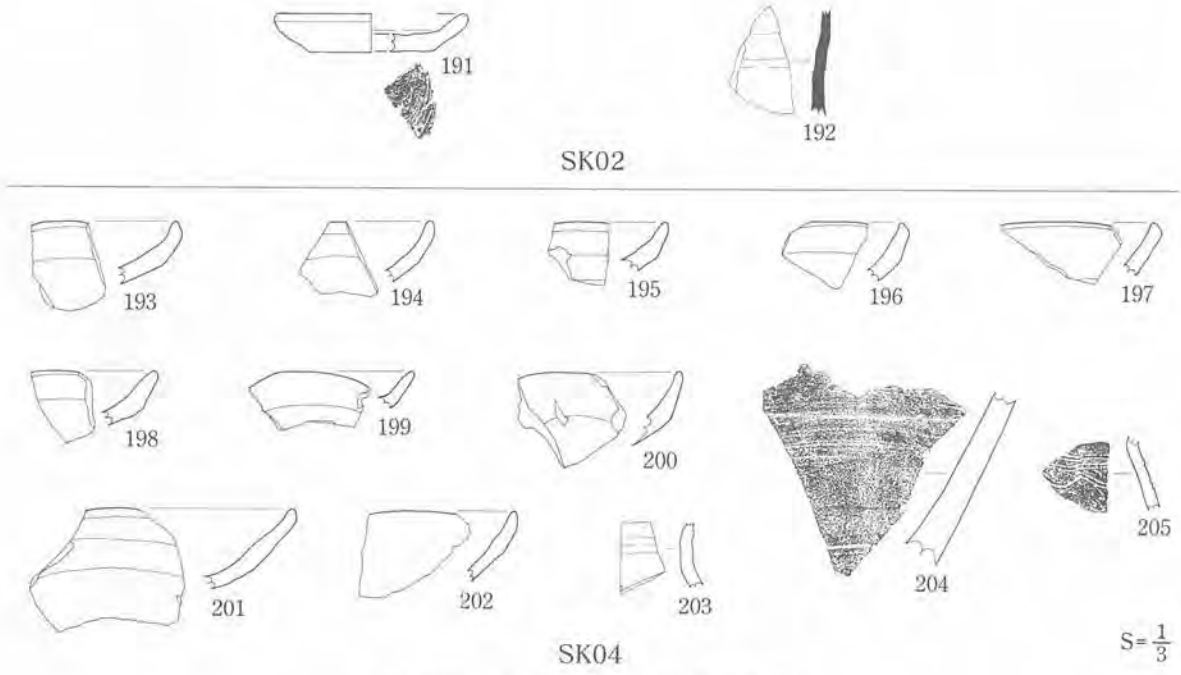
1　黒褐色シルト層（10YR3／1）粘性あり、しまり強い。直径1～10㎜の炭化粒がやや多く、直径1～5㎜の焼土と地山ブロックを少量含む。直径30㎜前後の焼けた礫も出土している。
2　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性やや強く、しまり強い。炭化粒を微量含む。水の影響を受けたと思われる白色化した部分も見られる。
3　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性、しまり共に強い。地山ブロックを含む。



SK04

1　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性あり、しまり強い。直径1～15㎜の炭化粒をやや多く、直径1～5㎜の焼土を微量、直径20㎜の白色粘土ブロックを少量含む。磨滅したかわらけが少量出土した。
2　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性あり、しまり強い。1層と類似しているが、混入物が見られなくなる。
3　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性、しまり共にやや強い。直径2～3㎜の炭化粒を微量含む。
4　黒褐色シルト層（10YR2／3）粘性、しまり共に強い。直径1～35㎜の炭化粒をやや多く含む。焼土や白色粘土を微量含む。
5　黒褐色シルト層（10YR2／3）粘性、しまり共に強い。極めて4層と類似しているものの、若干明るみが増すために4層と区分した。
6　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性強く、しまりやや強い。直径1～30㎜の炭化粒をやや多く含む。焼土や白色粘土を微量含む。
7　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性、しまり共に強い。混入物は6層と類似しているが、量は少なくなる。地山ブロックが入るため若干しまりは増す。
8　黒褐色砂質シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共に強い。6層と類似しているが砂質は増す。
9　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性、しまり共に強い。
10　灰褐色砂質シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまりやや弱い。直径1～20㎜の炭化粒を少量含む。かわらけが多く出土した層である。
11　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまりやや弱い。10層と類似しているものの、混入物の量は減る。
12　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまりやや弱い。
13　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまりやや弱い。
14　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまり弱い。

第41図　E地区 SK01・02・04



第42図　E地区 SK02・04 出土遺物

＜検出面＞Ⅲ層。

＜規模＞規模は0.69m×0.55m、深さ0.25mである。

＜平面形＞平面形は円形を呈する。

＜埋土＞３層に分けられる。

＜出土遺物＞須恵器やかわらけが埋土下層から出土している。かわらけは磨滅しており、図面掲載不可能なものであった。191はろくろかわらけ、192は須恵器の壺である。

＜遺構時期＞12世紀後半に属すると考えられる。

＜備考＞埋土の主体層や出土遺物からＳＫ03、04と同時期のものと推測される。

ＳＫＯ３

＜位置＞11Ｅ05に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜規模＞規模は1.28m×1.15mで、深さ1.11mである。

＜平面形＞平面形は円形を呈する。

＜埋土＞41層に分けられる。

＜出土遺物＞かわらけ、温石、土師器、石鏃、礫などが出土している。図面掲載できたのは僅かで、大半が磨滅したかわらけである。温石やかわらけは埋土下層から出土している。206・207はろくろねかわらけ、208はてづくねかわらけ、210は温石、209は石鏃である。

＜性格＞「トイレ状遺構」と類似している。

＜遺構時期＞12世紀後半に所属すると考えられる。

＜備考＞遺構時期と性格は、遺物の所属時期や埋土状況などから平泉遺跡群で見られる「トイレ状遺構」に類似していることから判断した。また、埋土主体層からＳＫ02、04と同時期のものと推測される。

ＳＫＯ４

＜位置＞11Ｅ05に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜規模＞規模は0.84m×0.7m、深さ1.06mである。

＜平面形＞平面形は円形を呈する。

＜埋土＞黒褐色・灰褐色シルトが主体で、14層に分けられる。

＜出土遺物＞かわらけ、中国産陶磁器、渥美産陶器、弥生土器などが埋土下層より出土している。その中でもかわらけの出土量は、磨滅しているものを含めると約100点と最も多くみられる。191～202はてづくねかわらけ、203は白磁の壺、204は渥美産の鉢、205は弥生土器である。

＜性格＞ＳＫ03と同様である。

＜遺構時期＞遺構時期は12世紀後半に属すると考えられる。

＜備考＞ＳＫ03と同じ理由で遺構時期を判断した。また、埋土主体層からＳＫ02・03は同時期のものと推測される。

柱穴

＜出土位置＞調査区の全域で検出しているが、主に11Ｅ03より東側を中心に31基検出されている。検出面はⅢ層である。

＜規模・平面形＞計測表で示した通りである。

＜埋土＞主体層からＰ１～13・31・32とＰ14～30の２種類に分けることができる。ただし、検出面より上層が削平されているため、主体層からはその新旧関係を明らかにできなかった。

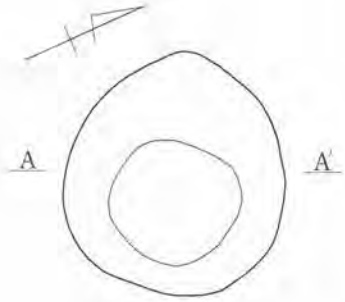
＜出土遺物＞Ｐ15よりかわらけが１点出土しているだけである。213はてづくねかわらけである。

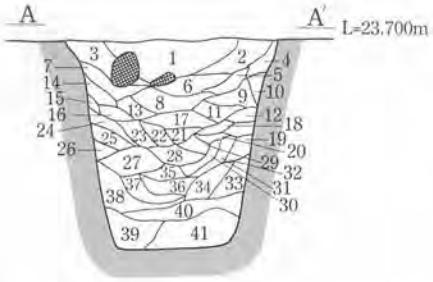
＜遺構時期＞Ｐ１～13、31、32は不明であるが、Ｐ14～30は古代から中世に属する可能性がある。

＜備考＞11Ｅ03より東側で検出された柱穴の中には柱痕をもつものが幾つか確認できたが、調査区は狭いため建物のプランを確認するまでには至らなかった。

遺構外遺物

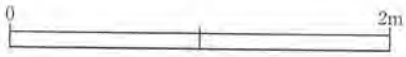
遺物はかわらけが１点、10Ｅ93のⅢ層上面より出土している。214はてづくねかわらけである。

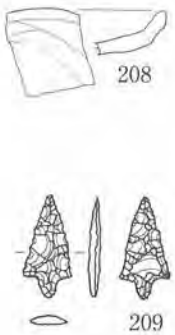




SK03

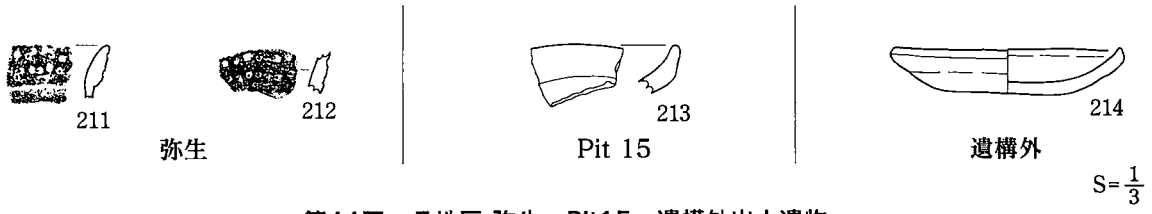
1　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性あり、しまり強い。直径1～20mmの炭化粒をやや多く、直径5～10mmの焼土を微量含む。　2　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。直径1～15mmの炭化粒をやや多く、5mm前後の焼土を微量含む。　3　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性やや強く、しまり強い。直径5～30cmの礫を含む。　4　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。2層と類似しているが、しまりは増す。　5　褐色シルト層（7.5YR4／4）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒と焼土を微量含む。　6　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。直径1～10mmの炭化粒をやや多く、直径5～10mmの焼土を微量含む。　7　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性やや強く、しまり強い。3層と類似しているが混入物はなくなる。　8　黒褐色シルト層（10YR2／2）粘性強く、しまりやや強い。直径1～15mmの炭化粒を少量含む。　9　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性あり、しまり強い。地山ブロックを多く含むため明る味を増す。　10　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性あり、しまり強い9層に類似しているが、混入物は見られない。　11　暗褐色シルト層（10YR3／2）粘性やや強く、しまり強い。直径1～5mmの炭化粒と焼土を微量含む。　12　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。直径1～10mmの炭化粒を若干含む。　13　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性やや強く、しまり強い。11層と類似している。　14　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。　15　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。14層と類似しているものの、粘性としまりが弱くなる。　16　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共に強い。　17　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性、しまり共に強い。直径5～20mmの炭化粒が少量、直径5mm前後の焼土を含む。　18　褐灰色シルト層（10YR4／1）粘性、しまり共に強い。直径20mmの炭化粒を少量含む。地山ブロックが混入している。　19　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの焼土を微量含む。　20　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共に強い。19層と類似している。　21　黒褐色シルト層（10YR3／3）粘性あり、しまり弱い。　22　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性強く、しまり弱い。直径1～7mmの炭化粒、焼土を微量含む。23　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性強く、しまり弱い。22層と類似している。　24　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性あり、しまり強い。15層と同じ。　25　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性あり、しまり強い。24層に類似しているが、しまりは増す。　26　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。地山崩落土。　27　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共にやや強い。直径1～3mmの焼土を微量含む。　28　黄褐灰色シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまり弱い。直径1～5mmの焼土を微量含む。　29　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性強く、しまり弱い。23層と類似している。　30　黄褐灰色シルト層（10YR4／2）粘性、しまり共に強い。直径1～3mmの焼土を微量含む。　31　黄褐灰色シルト層（10YR4／2）粘性、しまり共に強い。直径1～3mmの焼土を微量含む。　32　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性あり、しまり強い。地山ブロックを含む。　33　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒と焼土を若干含む。　34　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性、しまり共に強い。33層と類似している。　35　褐色シルト層（10YR4／4）粘性強く、しまりやや強い。直径1～3mmの焼土を若干含む。　36　黄褐灰色シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまりやや強い。直径1～5mmの炭化粒を少量含む。　37　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒と焼土を若干含む。　38　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性、しまり共に強い。34層と類似している。　39　褐色シルト層（10YR4／4）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒を微量含む。　40　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性強く、しまりやや強い。直径1～5mmの炭化粒と焼土を微量含む。　41　褐色シルト層（10YR4／4）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒を微量含む。





S=$\frac{1}{3}$

第43図　E地区 SK03・出土遺物



第44図　E地区 弥生・Pit15・遺構外出土遺物

遺構番号	時期	長軸	短軸	深さ	標高	開口部形状	備考
Pit 01	近世	32	29	7	24.39	円形	
Pit 02	近世	27	25	31	24.1	円形	
Pit 03	近世	21	18	5	24.37	円形	
Pit 04	近世	24	20	6	24.38	円形	
Pit 05	近世	44	38	44	23.78	円形	
Pit 06	近世	40	37	45	23.85	円形	
Pit 07	近世	38	36	42	23.81	円形	
Pit 08	近世	30	30	52	23.69	円形	
Pit 09	近世	28	23	27	23.76	円形	
Pit 10	近世	17	17	16	23.92	円形	
Pit 11	近世	22	20	13	23.91	円形	
Pit 12	近世	18	17	13	24.03	円形	
Pit 13	近世	36	33	29	23.83	円形	
Pit 14	古代～中世	37	35	35	23.3	円形	
Pit 15	古代～中世	35	32	23	23.41	円形	かわらけ（1）
Pit 16	古代～中世	26	21	38	23.24	円形	
Pit 17	古代～中世	51	35	30	23.32	円形	
Pit 18	古代～中世	23	21	17	23.44	円形	
Pit 19	古代～中世	22	18	5	23.56	不整円形	
Pit 20	古代～中世	26	25	38	23.24	不整円形	
Pit 21	古代～中世	26	25	20	23.38	不整円形	
Pit 22	古代～中世	46	41	30	23.26	円形	かわらけ（2）
Pit 23	古代～中世	27	22	20	23.38	円形	
Pit 24	古代～中世	35	12	26	23.31	円形	
Pit 25	古代～中世	75	12	20	23.5	半円形	
Pit 26	古代～中世	59	35	31	23.28	円形	
Pit 27	古代～中世	39	25	15	23.38	不整円形	
Pit 28	古代～中世	32	27	19	23.33	円形	
Pit 29	古代～中世	28	24	18	23.35	不整円形	
Pit 30	古代～中世	36	35	24	23.29	円形	
Pit 31	近世	28	29	21	24.24	円形	
Pit 32	近世	22	18	11	24.34	円形	

第13表　F地区柱穴計測表

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
191	1	かわらけ	ＳＫ02埋土	ｒｄ10	(7.4)	(5.0)	1.6	ロクロ	回転糸切	1/6	細砂多	橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	その他
192	2	須恵器	壺	頸部	ＳＫ02埋土	-	-	4.3	自然釉	自然釉		細砂粒多	灰オリーブ	良好	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
193	2	かわらけ	ＳＫ04埋土	Ｄ4	-	-	3.1	指		-	細砂多	浅黄橙	
194	5	かわらけ	ＳＫ04埋土	Ｄ4	-	-	2.5	指		-	細砂少	浅黄橙	
195	6	かわらけ	ＳＫ04埋土	Ｄ4	-	-	2.3	指		-	細砂少	浅黄橙	
196	7	かわらけ	ＳＫ04埋土	Ｄ4	-	-	2.4	不明		-	細砂多	浅黄橙	
197	8	かわらけ	ＳＫ04埋土	Ｄ4	-	-	2.1	指		-	細砂多	浅黄橙	
198	１０	かわらけ	ＳＫ04埋土	Ｄ4	-	-	2.5	不明		-	細砂少	浅黄橙	
199	9	かわらけ	ＳＫ04埋土	Ｄ3	-	-	1.5	不明		-	細砂少	にぶい黄橙	
200	3	かわらけ	ＳＫ04埋土	Ｄ3	-	-	3.1	指	すのこ痕	-	細砂多	にぶい黄橙	
201	1	かわらけ	ＳＫ04埋土	Ｃ5	-	-	3.4	指	すのこ痕	-	細砂多	浅黄橙	指凹み
202	4	かわらけ	ＳＫ04埋土	ｒｄ	-	-	2.8	指		-	細砂少	浅黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	備考
203	14	白磁	壺	頸部	ＳＫ04埋土	12世紀後半	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
204	12	渥美	片口鉢	体部	ＳＫ04埋土	12世紀後半	褐灰色	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	文様・縄文	備考
205	15	弥生土器	壺	頸部	ＳＫ04埋土	平行沈線と波状口縁	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
206	1	かわらけ	ＳＫ03埋土	Ｄ3	9.2	-	1.8	指		1/2	細砂多	浅黄橙	
207	2	かわらけ	ＳＫ03埋土	ｒｄ11	9.0	6.3	1.9	ロクロ	回転糸切	1/2	細砂多	にぶい黄橙	
208	3	かわらけ	ＳＫ03埋土	Ｃ3	-	-	1.9	指		-	細砂多	浅黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
209	5	石鏃	ＳＫ03埋土	2.7	1.3	0.3	0.7	頁岩	
210	4	温石	ＳＫ03埋土	15.1	10.5	2.5	515.8	-	被熱により白色化しているため断定はできない。

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	文様・縄文	備考
211	1	弥生土器	甕	体部	10D87Ⅵ層	刺突文	
212	2	弥生土器	甕	体部	10D87Ⅵ層	刺突文	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
213	1	かわらけ	Pit15埋土	Ｄ3	-	-	2.1	指			細砂多	褐灰色	
214	1	かわらけ	10E93Ⅲ層	Ｄ4	9.1	-	1.9			完形	細砂多	にぶい黄橙	

第14表　Ｅ地区遺物観察表

第９章　　Ｆ地区の遺構・遺物

第１節　Ｆ地区の概説

Ｆ地区はＢ～Ｆ地区の調査区がある沖積地の段丘面の最も南にあたり、遺跡範囲では南端に位置している面積2200㎡（200×11）の調査区である。本調査区は用・排水路の埋設のため他調査区より広く設定されている。本調査区の地形はＥ地区と同様、東から13Ｃ47グリッド付近まで緩やかに登り、それより西側では平らな地形が形成されている。さらに13Ｂグリッドより西側では一段低い段丘面が存在している。

本調査区では平安時代と近世に属する遺構、遺物が確認された。平安時代の遺構は、竪穴住居跡５棟、溝１条、土坑２基、柱穴１基あり、遺物は、和鏡、かわらけ、国産陶器などが出土している。近世の遺構は、掘立柱建物跡２棟、柱穴170基あり、近世陶磁器などが出土遺物として確認されている。

〔平安時代〕

ＳＩＯ１

＜位置＞13Ｂ26・27に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜検出状況＞地山より若干暗味帯びた部分が見られることから、調査区北壁にサブトレンチと攪乱部分の断面で壁の立ち上がりを確認したことから住居跡と判断した。

＜規模＞調査区外に延びていくため全容は不明である。確認された規模は、東壁2.68m×南壁4.73mである。

＜平面形＞唯一確認された南東隅は方形を呈する。

＜埋土＞褐色シルト層が主体で、３層に分けられる。

＜壁の状況＞上部が著しく削平を受けており、壁の残りは不良である。確認された壁では、ほぼ垂直に立ち上がる。

＜床面の状態＞Ⅲ層を掘り込むように平坦な床面が形成されている。地山との判別が付きづらいが、若干堅く締まっている。ただし貼り床は確認されなかった。

＜カマド＞不明。

＜出土遺物＞土師器が床面直上で24点出土している。215～218は酸化焔焼成を受けたロクロ成形による坏で、216～218は３cm未満の器高をもつ小形のものである。219は内外面にミガキが施され、内面に黒色処理が施された碗である。

＜遺構時期＞11世紀初頭に属すると考えられる。

＜備考＞ＳＩ02・03・04・05の時期より新しい時期に位置づけることが可能である。

ＳＩＯ２

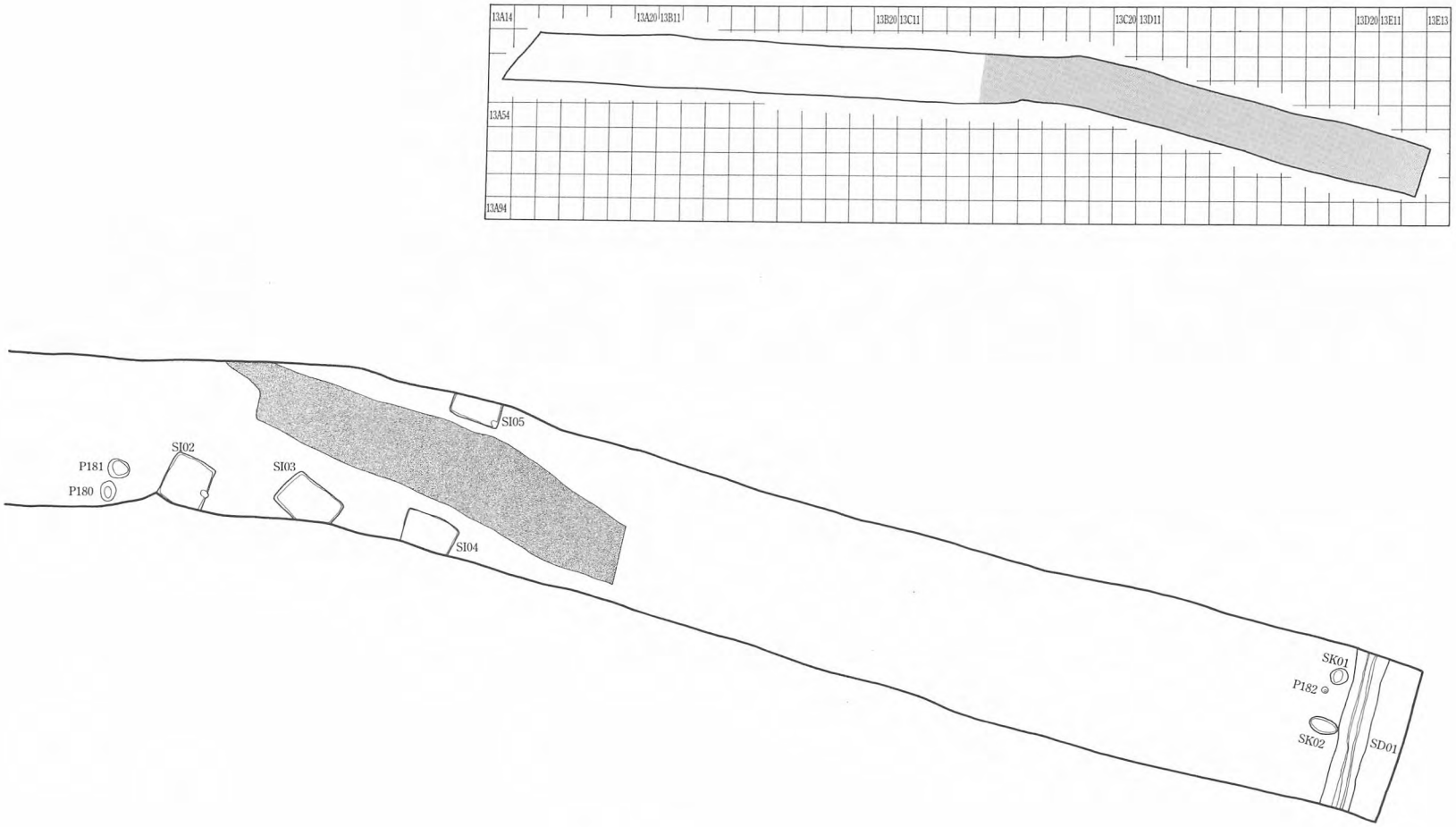
＜位置＞13Ｃ46と47に位置する。

＜検出状況＞Ⅲ層。

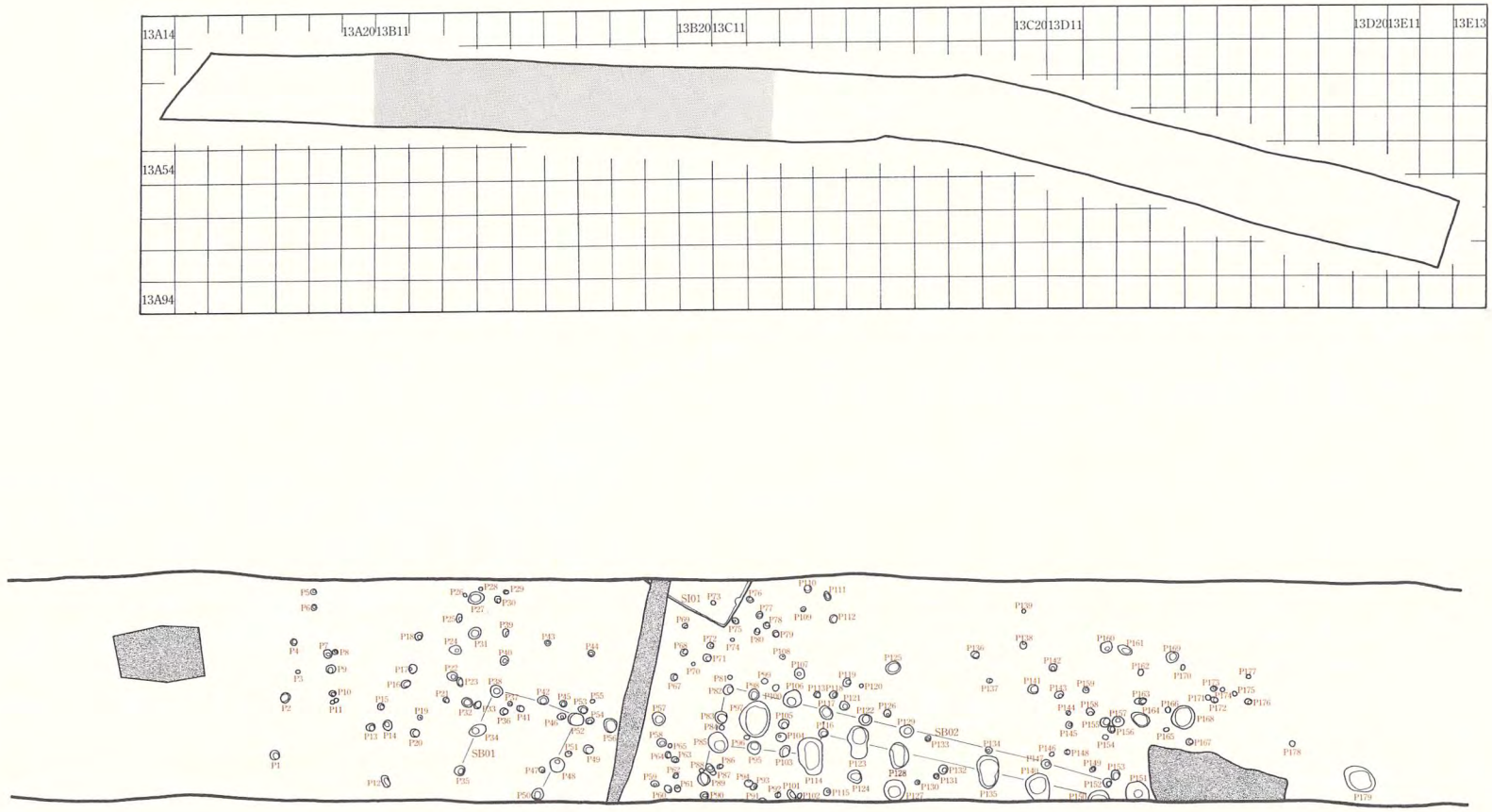
＜規模＞南東隅の一部は調査区外に延びていくが、規模は3.27m×3.33mである。

＜平面形＞確認された平面形は隅丸方形を呈する。

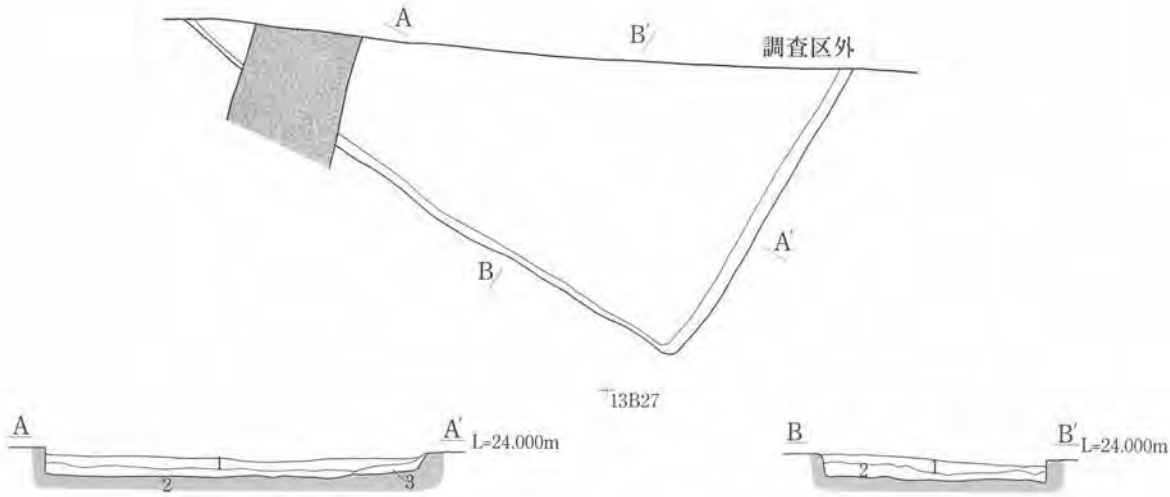
＜埋土＞褐色シルト層が主体で、６層に分けられる。



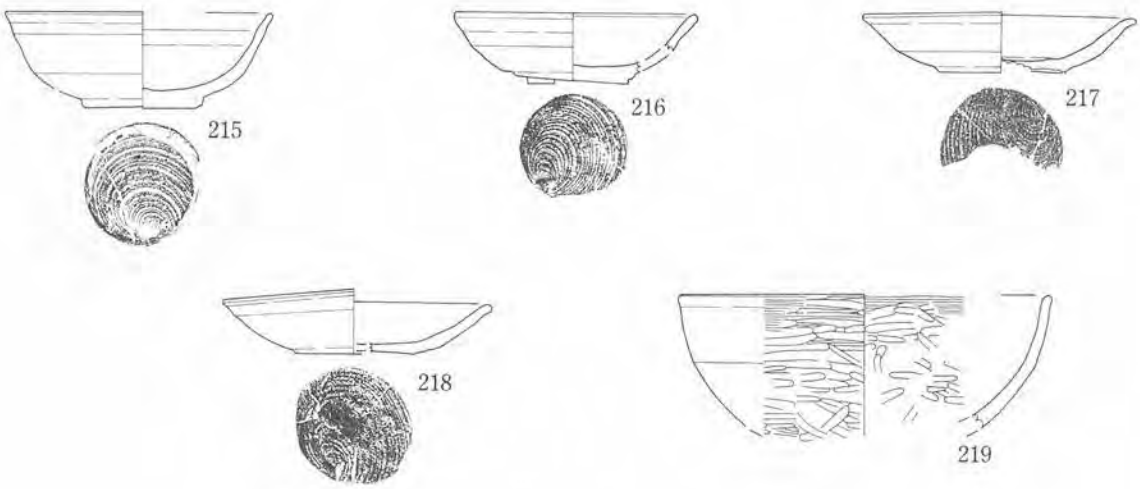
第45図　F地区遺構配置図



第46図　F地区遺構配置図

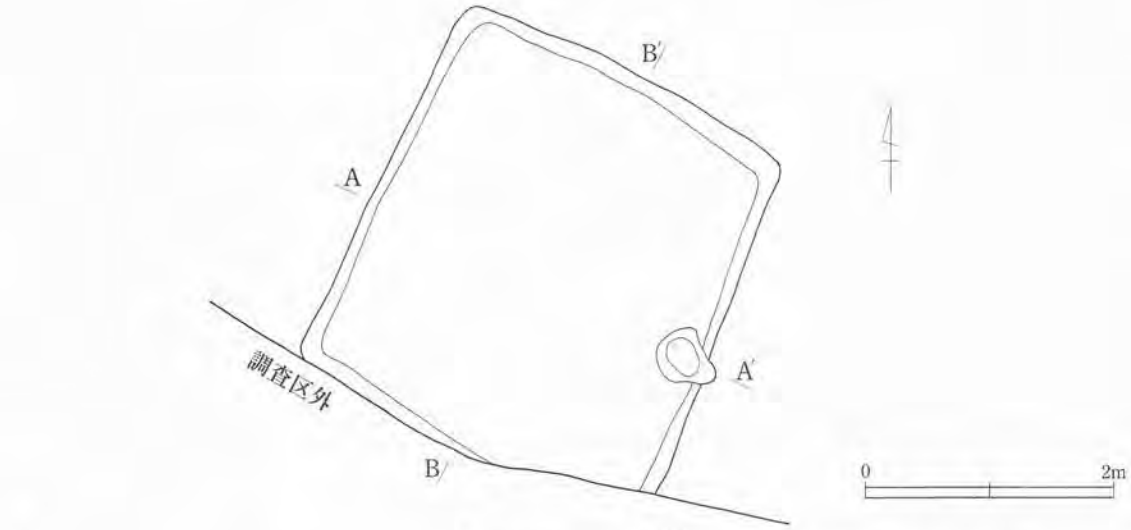


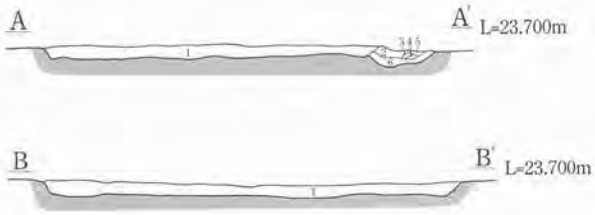
S I 01
1　黄褐色シルト層（10ＹＲ５／６）粘性弱く、しまり強い。
2　褐色砂質シルト層（10ＹＲ４／６）粘性弱く、しまり強い。
3　黄褐色シルト層（10ＹＲ５／６）粘性やや弱く、しまり強い。
地山崩落土。



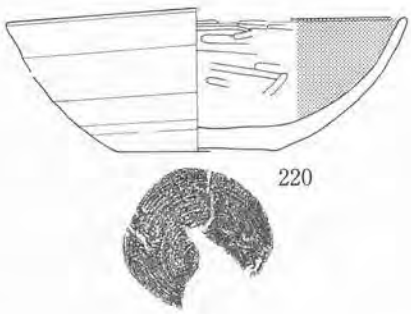
S=$\frac{1}{3}$

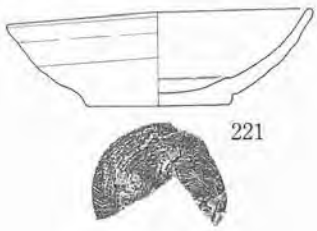
第47図　Ｆ地区SI01・出土遺物

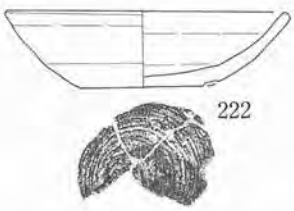


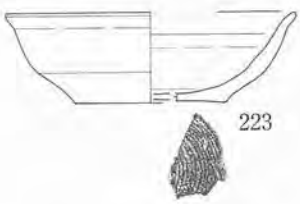


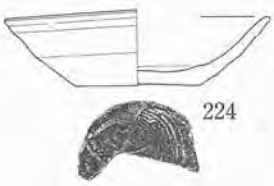
S I 02
1　にぶい黄褐色シルト層（10ＹＲ４／３）粘性あり、しまりやや強い。直径５㎜の白色粒子と青灰色粒子を微量含む。
2　暗赤褐色シルト層（５ＹＲ３／３）粘性やや強く、しまり強い。直径１～10㎜の焼土ブロックを多く、直径１～20㎜の炭化粒を少量含む。
3　褐色シルト層（7.5ＹＲ４／３）粘性あり、しまり強い。直径５㎜前後の焼土をやや多く含む。
4　褐色シルト層（7.5ＹＲ４／３）粘性あり、しまりやや強い。３層と類似しているが、混入物の量は減る。
5　褐色シルト層（7.5ＹＲ４／３）粘性あり、しまり強い。直径５㎜前後の焼土を少量含む。
6　にぶい黄褐色シルト層（10ＹＲ４／３）粘性、しまり共にやや強い。直径１～10㎜の焼土ブロックと直径１～５㎜の炭化粒を少量含む。

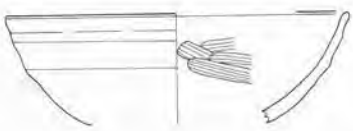


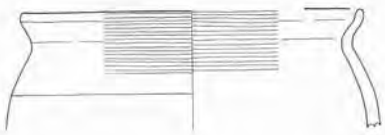












S=$\frac{1}{3}$

第48図　Ｆ地区SI02・出土遺物

S I 03
1　にぶい黄褐色シルト層（10YR４／３）粘性弱く、しまりやや強い。
2　にぶい黄褐色シルト層（10YR４／３）粘性やや強く、しまり強い。直径１～７㎜の炭化粒を微量含む。流れ込んだと思われる直径５～20㎜の白色粒子の火山灰ブロックを壁際で幾つか確認した。
3　灰褐色シルト層（10YR４／２）粘性強く、しまりやや強い。直径１～20㎜の炭化粒をやや多く含む。
4　にぶい黄褐色シルト層（10YR４／３）粘性強く、しまりやや強い。直径５～20㎜の白色粒子の火山灰ブロックをが幾つか確認された。
5　にぶい黄褐色シルト層（10YR４／３）粘性強く、しまりやや強い。直径５～20㎜の白色粒子の火山灰ブロックをが幾つか確認された。
6　灰褐色シルト層（10YR４／２）粘性やや強く、しまりやや弱い。地山崩落土。
7　灰褐色シルト層（10YR４／４）粘性やや強く、しまり強い。
P１・２　灰褐色シルト層（10YR４／２）粘性、しまり共に強い。直径１～５㎜の炭化粒を微量含む。

第49図　F地区SI03

＜壁の状況＞上部は著しく削平を受けており、壁の残りは不良である。

＜床の状態＞床面は地山を掘り込んで形成され、平坦な床面を呈している。

＜カマド＞東壁の中央部に設けられている。削平により大半が失われ、皿状にくぼんだ燃焼部底面を残す程度であった。

＜出土遺物＞土師器の坏や甕が出土している。220～225は酸化焔焼成を受けたロクロ成形による坏で、220は内面に黒色処理が施されているもの、221～224は３cm～3.7cmの間の器高をもつ比較的小形のものである。226は口縁が短く外反している甕である。

＜遺構時期＞出土遺物より10世紀後半に属すると考えられる。

＜備考＞ＳＩ01より古く、ＳＩ03～05と同時期に位置付けることが可能である。

ＳＩ03

＜位置＞13C47・48・58付近に位置する。

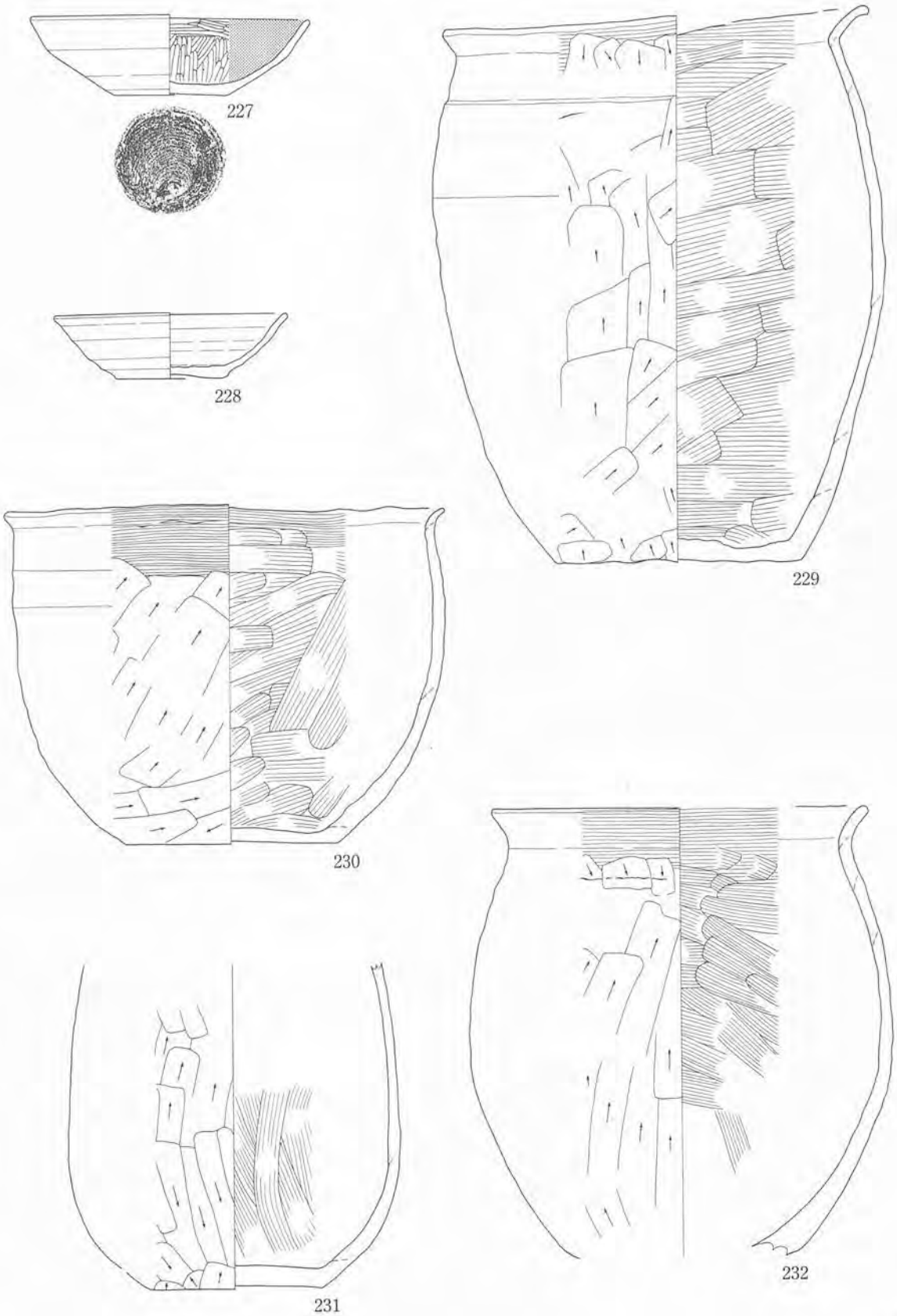
＜検出面＞Ⅲ層。

＜規模＞南東隅の一部が調査区外に延びていくが、規模は3.99m×2.89mである。

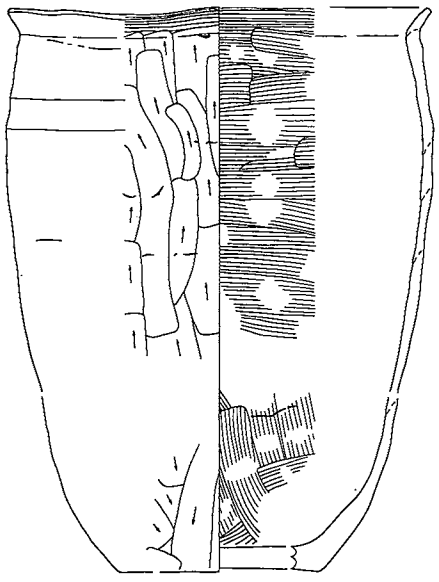
＜平面形＞確認されている平面形は長方形を呈する。

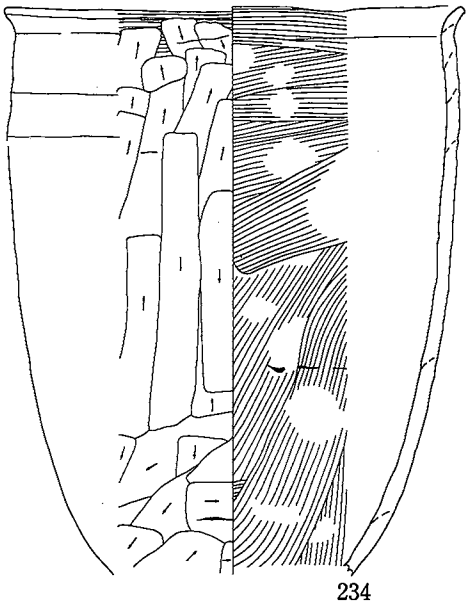
＜埋土＞黄褐色シルト層主体で、４層に分けられる。

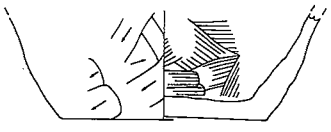
＜壁の状況＞壁はやや斜めに立ち上がる。

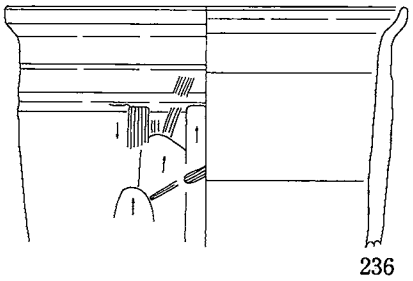


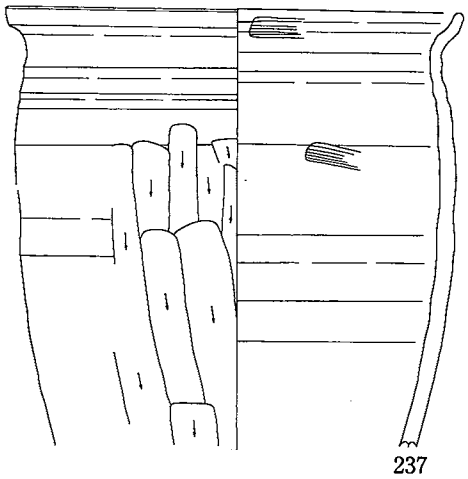
第50図　F地区SI03 出土遺物(1)

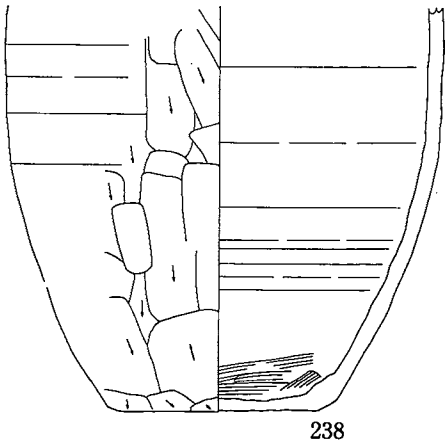






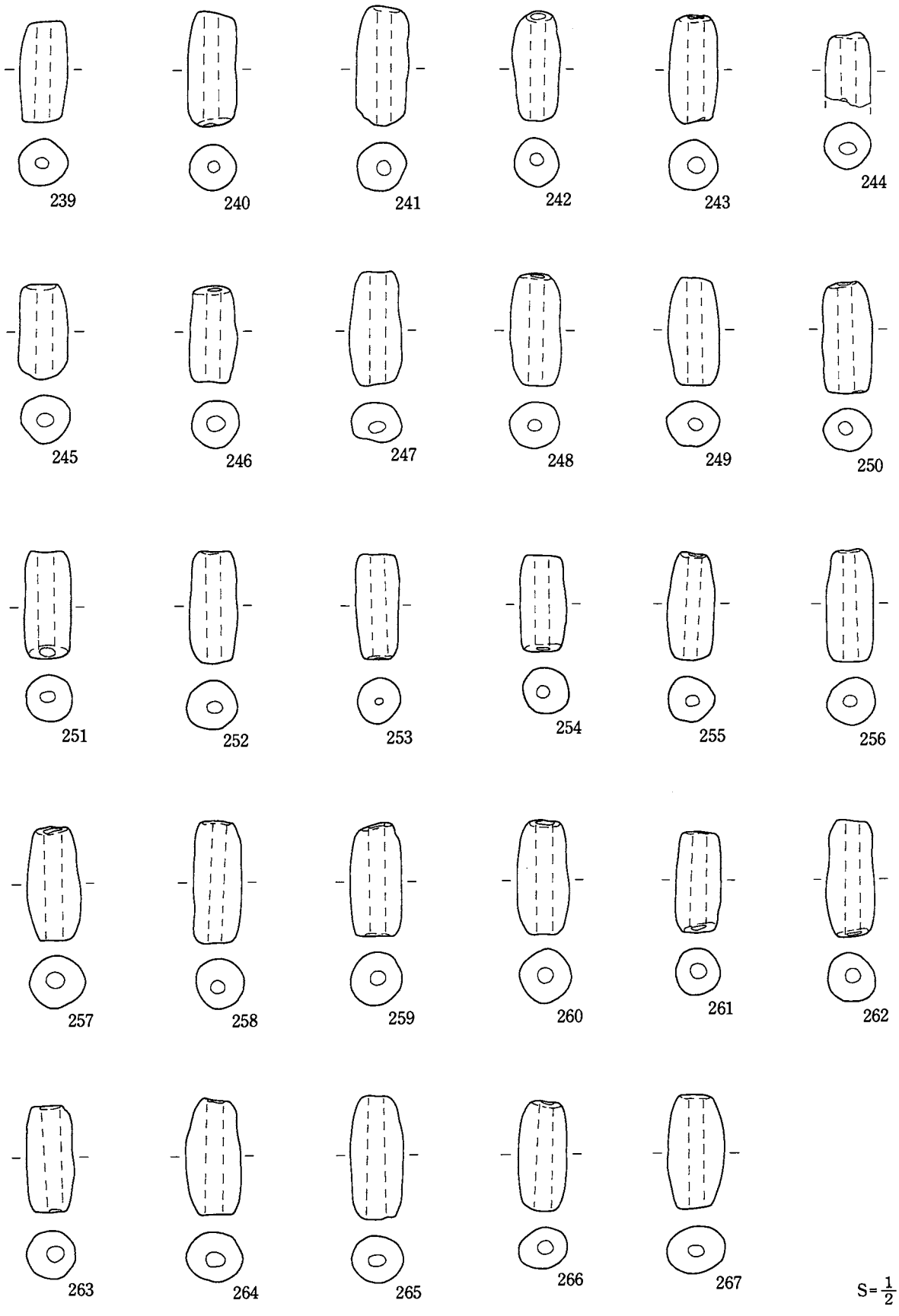






S=$\frac{1}{4}$

第51図　F地区SI03 出土遺物(2)

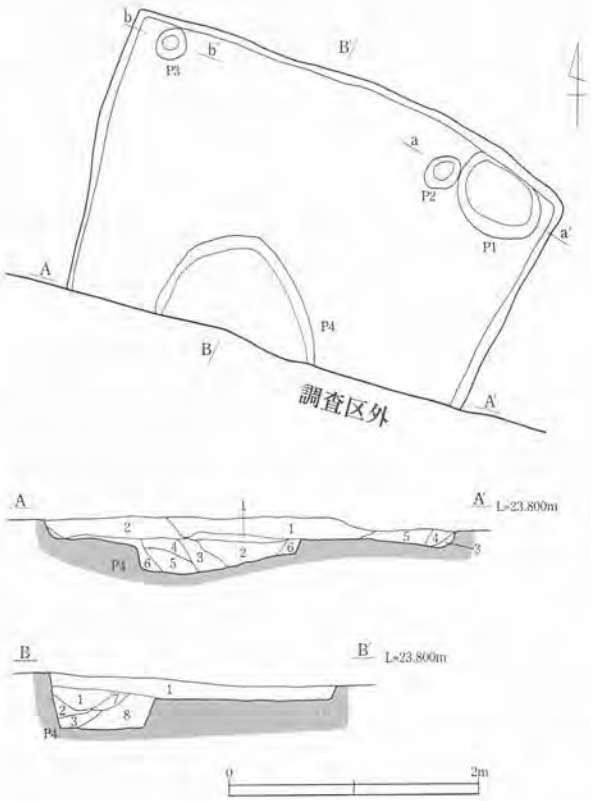


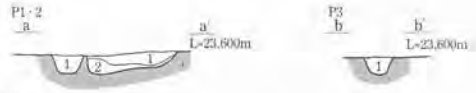
第52図　F地区SI03 出土遺物(3)

<床面の状態>床面は平坦で、Ⅲ層を掘り込んで形成されている。
<土坑・柱穴>土坑２基を床面より検出されている。
<出土遺物>土師器の坏と甕、土錘が出土している。227と228は酸化焔焼成を受けたロクロ成形による坏である。227は内面に黒色処理が施されているもので、228は3.3cmの器高を持つものである。229～238は甕である。229～235は非ロクロ成形、236～238はロクロ成形によるものである。239～267は、９割以上が完形の土錘で、両端が整形され、大きさの平均値が39mmと規格的なものである。
<遺構時期>10世紀後半に属するものと考えられる。
<備考>本遺構の中央部よりやや北壁側で地床炉が検出されており、工房跡の可能性がある。また、ＳＩ01より古く、ＳＩ02・04・05と同時期に位置付けることが可能である。

ＳＩ０４
<位置>13Ｃ49・59・60付近に位置する。
<検出面>Ⅲ層。
<規模>調査区外に延びていくため全容は不明である。確認された規模は、北壁3.73m、東壁1.87m、西壁2.31mである。
<平面形>確認されている平面形は方形を呈する。
<埋土>シルト層主体で、5層に分けられる。
<壁の状況>上半部が削平を受け、壁の残りは不良である。確認されている壁は斜めに立ち上がる。
<床面の状態>Ⅲ層を掘り込んで形成された床面はほぼ平坦である。
<土坑・柱穴>土坑が１基、柱穴が北東隅で２基、北西隅で１基を床面で検出した。
<出土遺物>土師器の坏と碗、甕が出土している。268～270は酸化焔焼成を受けたロクロ成形による坏で、268は内面に黒色処理が施されたものである。271は酸化焔焼成を受けている線刻を有する碗である。272は内面に黒色処理が施された高台坏である。276はロクロ成形による台付碗である。273～275は甕である。273と275非ロクロ成形によるもの、274はロクロ成形で口縁が短く外反するものである。
<遺構時期>出土遺物から10世紀後半に所属するものと考えられる。
<備考>ＳＩ01より古く、ＳＩ02・03・05と同時期に位置付けることが可能である。

ＳＩ０５
<位置>13Ｃ40に位置する。
<検出面>Ⅲ層。
<規模>調査区外に延びていくため全容は不明である。確認された規模は、東壁1.74m、南壁3.48m、西壁1.21mである。
<平面形>確認されている平面形は方形を呈する。
<埋土>８層に分けられる。
<壁の状況>上半部が削平を受けており、残りは不良である。確認されている壁はやや斜めに立ち上がる。
<床の状態>Ⅲ層を掘り込むように形成された床面は、ほぼ平坦である。
<カマド>調査区断面より焼土や粘土、炭化粒などが観察されることから、調査区外の東壁に残存している可能性がある。





S I04

1　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性強く、しまりやや強い。直径5㎜前後の炭化粒と黄白色粒子を微量含む。

2　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性、しまり共にやや強い。地山崩落土。

3　褐色シルト層（10YR4／4）粘性強く、しまりやや強い。

4　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性、しまり共に強い。焼土粒を若干含む。

5　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。4層と類似しているが、しまりは若干増す。

P1－1　暗赤褐色シルト層（5YR3／3）粘性強く、しまりやや強い。直径1～20㎜焼土ブロックをやや多く含む。直径1～10㎜の炭化粒を微量含む。

P1－2　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性強く、しまりやや強い。直径1～10㎜の焼土ブロックを微量含む。

P2・3　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性やや強く、しまり強い。

P4－1　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性強く、しまりやや強い。水の影響による白色粘土ブロックをやや多く含む。

P4－2　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまりやや強い。

P4－3　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまりやや強い。

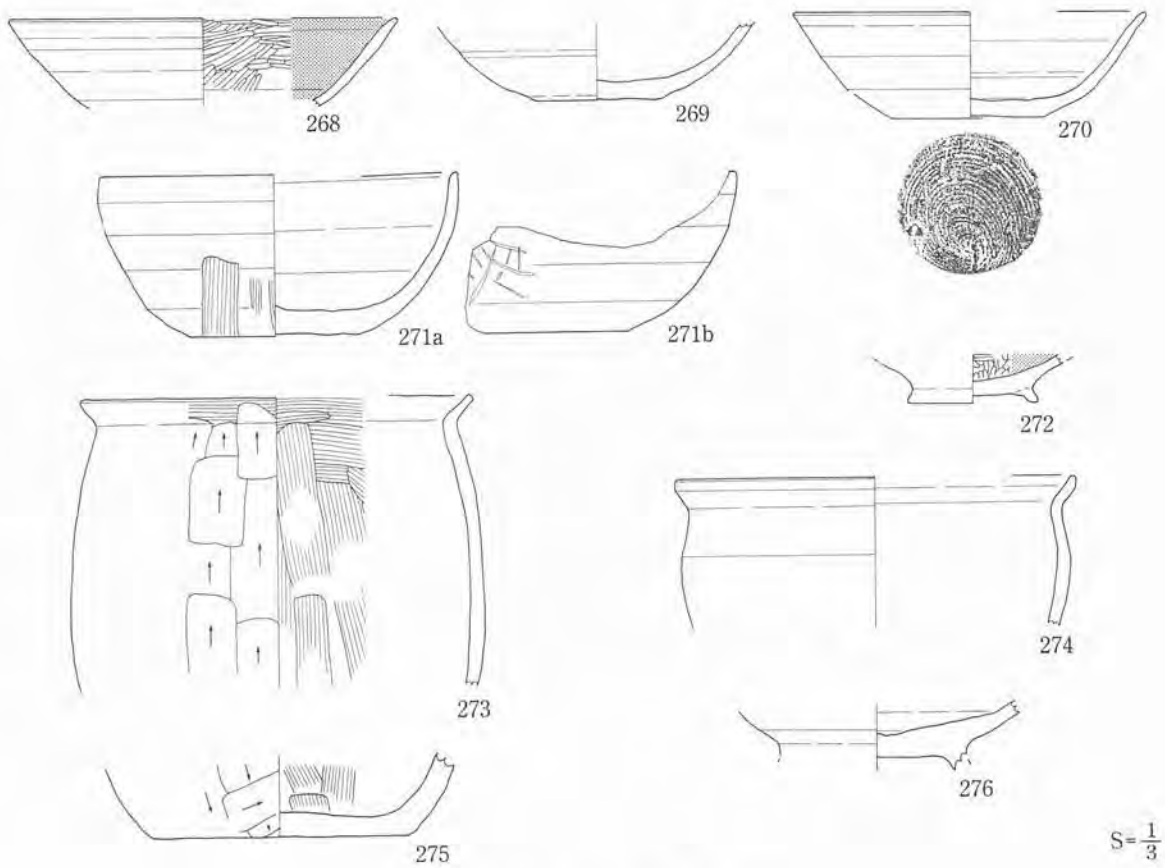
P4－4　褐色シルト層（10YR4／4）粘性、しまり共に強い。
直径5㎜前後の炭化粒を微量含む。

P4－5　褐色シルト層（10YR4／4）粘性、しまり共に強い。9層と同じであるが、しまりが増し、炭化粒は見られなくなる。

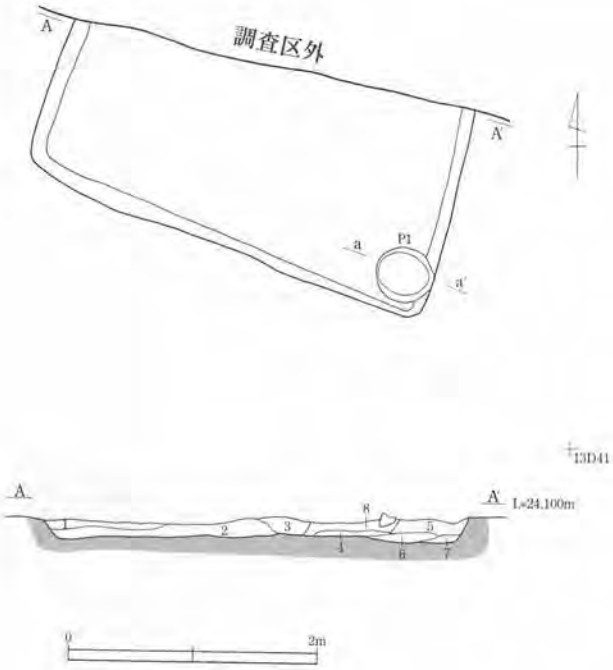
P4－6　掘りすぎ。

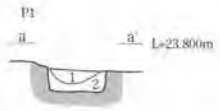
P4－7　褐色シルト層（10YR4／4）粘性強く、しまりやや強い。直径1～5㎜の炭化粒を微量含む。

P4－8　褐色砂質シルト層（10YR4／4）粘性強く、しまりやや強い。



第53図　F地区SI04・出土遺物





S I 05

1　褐色砂質シルト層（10ＹＲ４／４）粘性強く、しまりやや強い。

2　褐色シルト層（10ＹＲ４／４）粘性強く、しまりやや強い。１層に類似しているが、砂質が無くなる。

3　褐色シルト層（10ＹＲ４／４）粘性しまり共にやや強い。

4　にぶい黄褐色シルト層（10ＹＲ４／３）粘性強く、しまりやや強い。直径１～５㎜の炭化粒と焼土ブロックをやや多く含む。

5　にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４／３）粘性強く、しまりやや強い。直径５～20㎜焼土ブロックを少量含む。

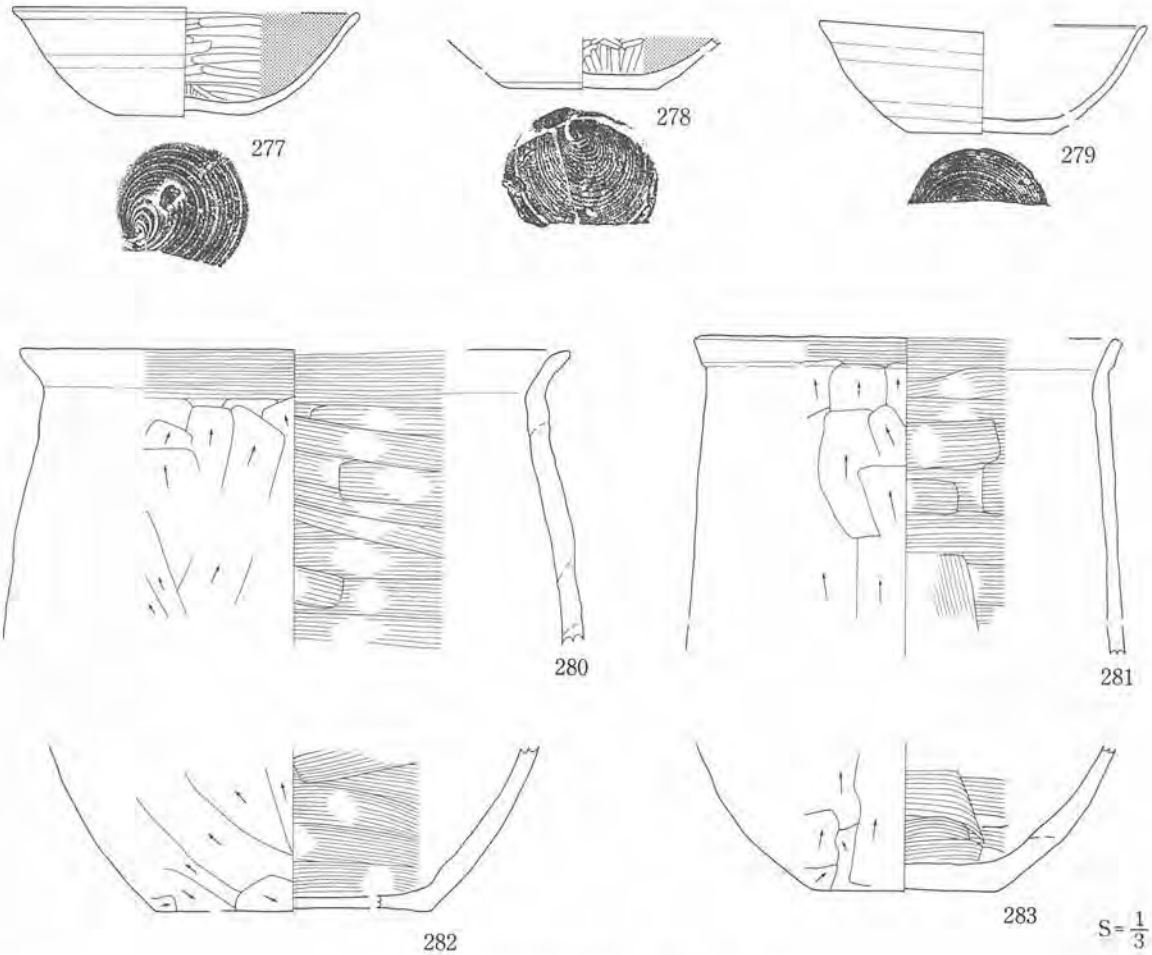
6　にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４／３）粘性やや強く、しまり強い。直径１～５㎜の炭化粒と焼土ブロックを少量含む。

7　褐色シルト層（10ＹＲ４／４）粘性強く、しまりやや強い。２層と類似している。

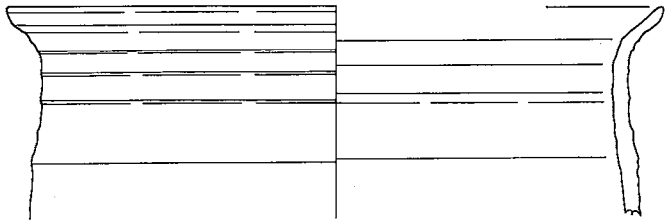
8　にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ４／３）粘性しまり共にやや強い。直径１～３㎜の焼土を微量含む。

Ｐ１－１　褐色シルト層（10ＹＲ４／４）粘性、しまり共にやや強い。直径１～15㎜の炭化粒が少量、直径１～10㎜の焼土を若干含む。

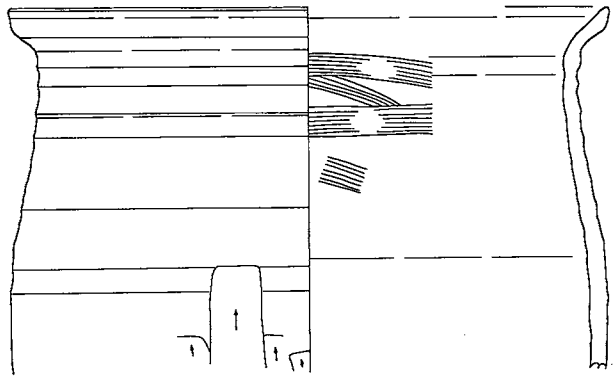
Ｐ１－２　にぶい黄褐色砂質シルト層（10ＹＲ５／４）粘性強く、しまりやや強い。直径１～５㎜の炭化粒と焼土ブロックを微量含む。



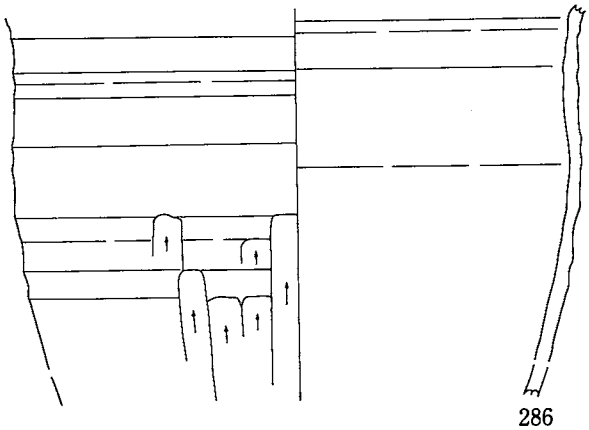
第54図　Ｆ地区SI05・出土遺物（1）



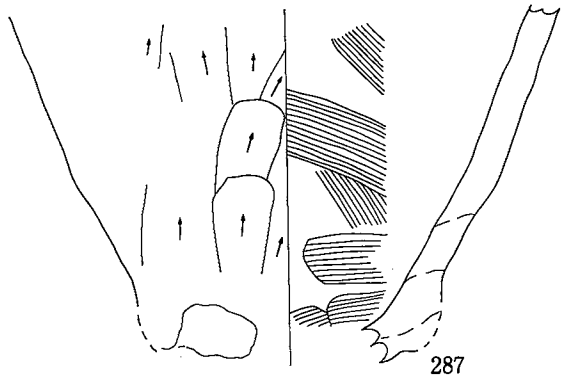
284



285



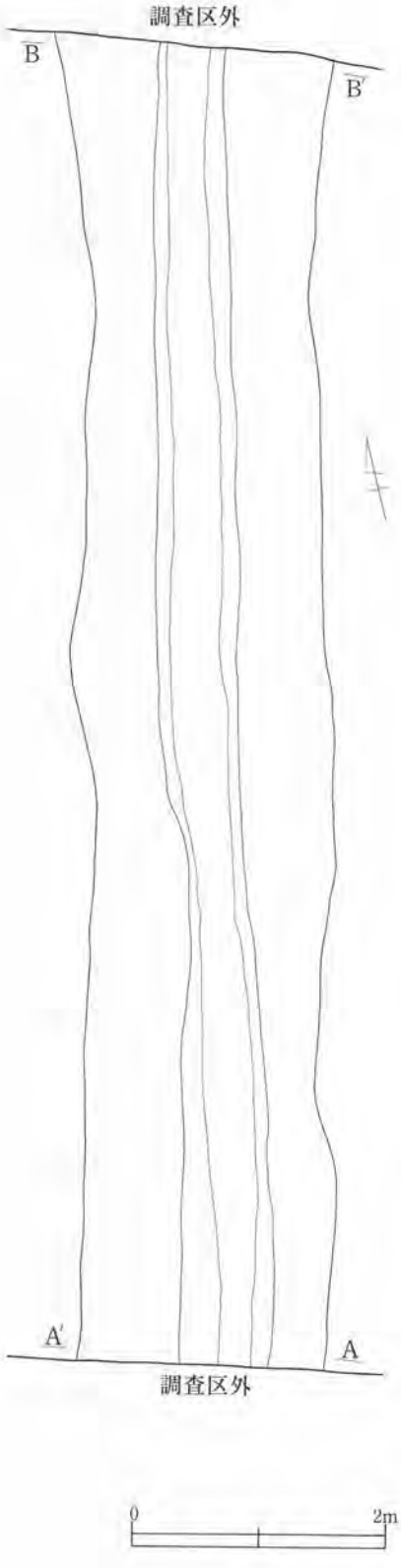
286

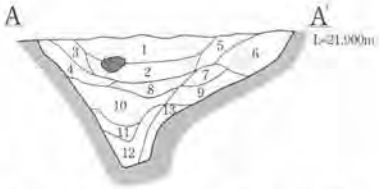


287

S=$\frac{1}{3}$

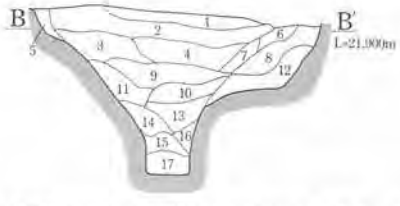
第55図　F地区SI05・出土遺物(2)





SD01

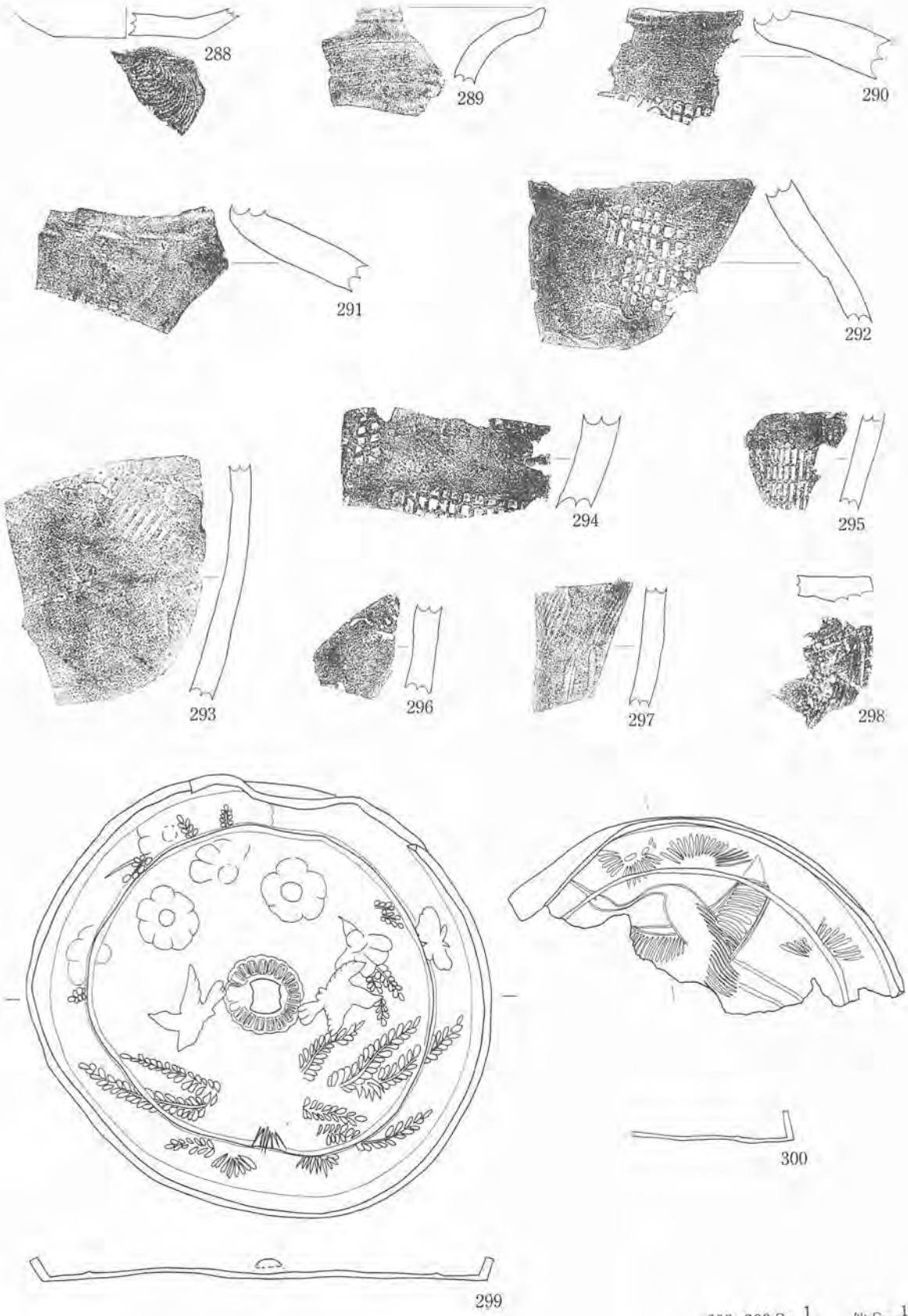
1　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性あり、しまり強い。非常にしまりがある。
2　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性やや強く、しまり強い。直径1～10mmの炭化粒を少量、直径5mm程の焼土を若干含む。
3　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性あり、しまり強い。非常にしまりがある。砂質が増す。
4　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。直径1～3mmの焼土若干含む。
5　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性あり、しまり強い。3層に類似するが混入物は見られなくなる。
6　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性、しまり共に強い。
7　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。
8　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒を微量含む。完形の鏡が出土。
9　褐色粘土質シルト層（10YR4／4）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒を微量含む。
10　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒を少量含む。
11　灰黄褐色粘土質シルト層（10YR4／2）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒を微量含む。
12　灰黄褐色粘土質シルト層（10YR4／2）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒を微量含む。
13　掘り過ぎ。



SD01

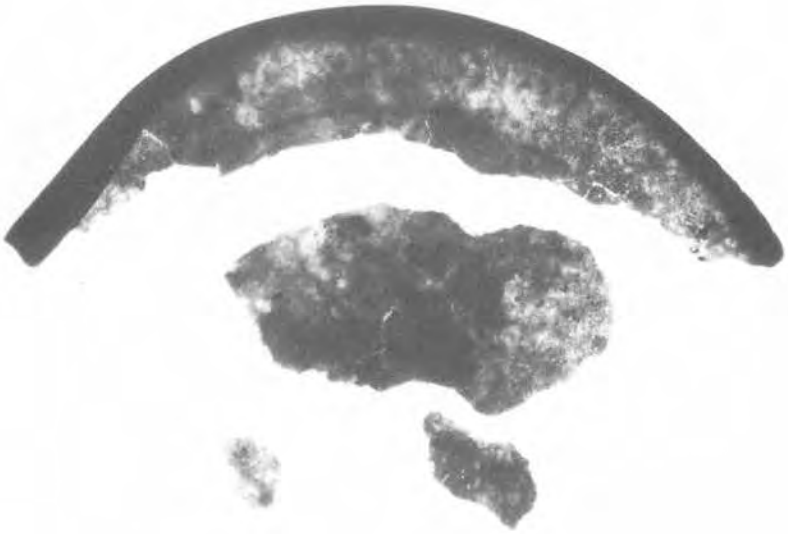
1　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性あり、しまり強い。非常にしまりがある。
2　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性あり、しまり強い。直径1～15mmの炭化粒を少量含む。
3　にぶい黄褐色砂質シルト層（10YR4／3）粘性しまり共にやや強い。直径1～30mmの炭化粒を少量含む。
4　暗褐色シルト層（10YR3／4）粘性やや強く、しまり強い。直径1～15mmの炭化粒を少量含む。
5　褐色シルト層（10YR4／4）粘性やや強く、しまり強い。
6　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。直径1～5mmの炭化粒を若干含む。
7　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性やや強く、しまり強い。直径5～15mmの炭化粒を少量含む。
8　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性やや強く、しまり強い。直径5～10mmの炭化粒を若干含む。
9　黒褐色シルト層（10YR3／2）粘性やや強く、しまり強い。直径1～15mmの炭化粒を少量含む。本層は多く水の影響を受けたと思われる褐灰色の粘土や酸化鉄の土が見られる。破片の鏡は本層から出土。
10　黒褐色砂質シルト層（10YR3／2）粘性やや強く、しまり強い。砂質が強くなる。直径1～10mmの炭化粒を少量含む。南壁の8層に対応するものと思われる。
11　暗褐色粘シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。直径1～10mmの炭化粒をやや多く含む。また、直径5mm程の焼土を若干含む。
12　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性あり、しまり強い。直径1～5mmの炭化粒を若干含む。
13　灰黄褐色シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまりやや強い。直1～40mmの炭化粒をやや多く含む。
14　暗褐色粘土質シルト層（10YR3／3）粘性、しまり共に強い。直径1～15mmの炭化粒をやや多く、直径1～3mmの焼土を若干含む。
15　にぶい黄褐色粘土質シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。直径1～10mmの炭化粒をやや多く含む。
16　暗褐色粘土質シルト層（10YR3／3）粘性、しまり共に強い。直径1～30mmの炭化粒をやや多く含む。
17　灰黄褐色粘土質シルト層（10YR4／2）粘性強く、しまりやや強い。直径1～20mmの炭化粒をやや多く含む。

第56図　F地区SD01



299・300 S=$\frac{1}{2}$　他 S=$\frac{1}{3}$

第57図　F地区SD01 出土遺物



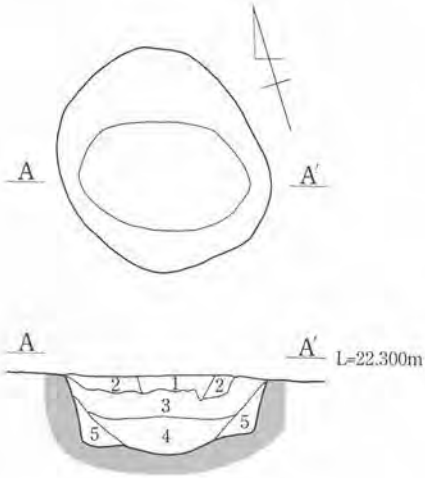
写真図版１　和鏡Ｘ線写真

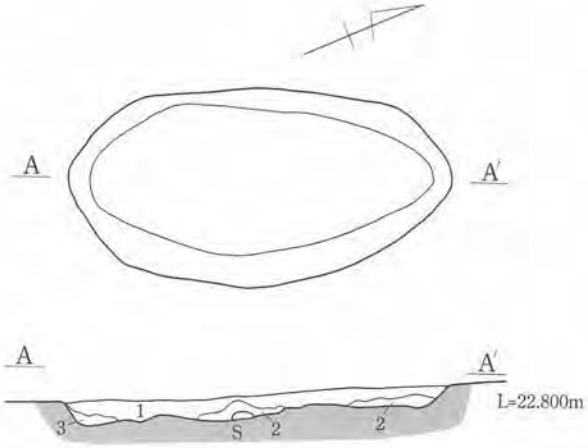
<土坑：柱穴>南東隅に１基検出した。
<出土遺物>土師器の坏と甕が出土している。277～279は酸化焔焼成を受けたロクロ成形による坏である。277と278は内面に黒色処理が施されている。280～287は甕である。281～283と287は非ロクロ成形によるもので、その中の280と281の口縁部は短く外反している。284～286はロクロ成形によるものである。
<遺構時期>出土遺物から10世紀後半に属すると考えられる。
<備考>ＳＩ01より古く、ＳＩ02～04と同時期に位置付けることが可能である。

ＳＤＯ１
<位置>13Ｂ62、72、81、82に位置する。
<検出面・検出状況>Ⅲ層。
<規模>検出長は10.46m、上端幅1.75～2.13m、中端幅0.45～0.69m、下端幅0.27～0.44mの規模である。
<平面形>軸線方向がＮ－15°－Ｅで、上端幅と中端幅、下端幅が部分によって変化するが、全体的にほぼ直線といえる。
<埋土>シルト層主体で、北壁が17層、南壁が14層に分けられる。
<出土遺物>埋土中層から下層にかけて和鏡や渥美産陶器、土師器などが出土している。288は土師器、289～298は渥美産陶器で、これらの所属時期は12世紀後半に属すると考えられる。299と300は和鏡で、299は花草双鳥鏡、300は松鶴鏡である。和鏡の時期は12世紀後半に属すると思われる。
<遺構時期>12世紀後半に属すると考えられる。
<備考>土層の堆積状況から、北壁断面では８・12層と南壁断面では６・７・９層を含む幅の広い溝の上から、それらの層を除いた深い溝へと新しく作られた可能性が考えられる。

ＳＫＯ１
<位置>13Ｂ61に位置する。
<検出面>Ⅲ層。
<規模・平面形>規模は1.21m×1.11m、深さ0.43mで、平面形は不整円形を呈する。
<埋土>黄褐色シルト層主体で、５層に分けられる。
<出土遺物>かわらけと渥美産陶器が出土している。301はてづくねかわらけ、302は渥美産の甕である。
<遺構時期>12世紀後半に属すると考えられる。
<備考>ＳＤ01の渥美産陶器と同一個体である。

ＳＫＯ２
<位置>13Ｂ71に位置する。
<検出面>Ⅲ層。
<規模・平面形>規模は2.03m×1.04m、深さ0.1～0.15mで、平面形は楕円形を呈する。
<埋土>灰褐色シルト層主体で、３層に分けられる。
<出土遺物>ろくろかわらけ（303）が１点出土している。
<遺構時期>12世紀後半に属すると考えられる。





SK01

1　暗褐色シルト層（10YR3／3）粘性やや強く、しまり強い。直径1～30mmの炭化粒をやや多く、1～3mmの焼土を若干含む。

2　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。直径1～30mmの炭化粒をやや多く、1～3mmの焼土を若干含む。

3　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。直径1～8mmの炭化粒を少量、1～5mmの焼土を微量含む。

4　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。3層と類似しているが、混入物の量は減る。

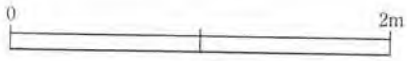
5　にぶい黄褐色シルト層（10YR4／3）粘性、しまり共に強い。地山ブロック以外の混入物は見られなくなる。

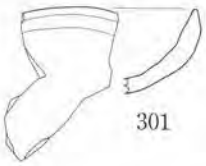
SK02

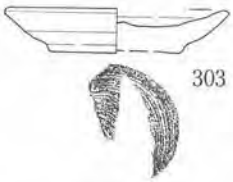
1　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性やや強く、しまり強い。直径1～5mmの炭化粒を少量含む。混入物の量は異なるが、SK01の2層類似している。

2　灰褐色シルト層（10YR4／2）粘性やや強く、しまり強い。1層と似ているが、混入物は見られなくなる。

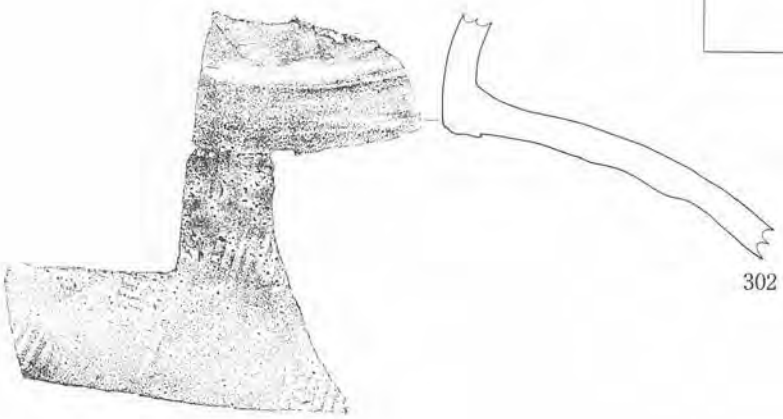
3　褐色シルト層（10YR4／4）粘性あり、しまり強い。地山崩落土。







SK02



SK01

S=$\frac{1}{3}$

第58図　F地区SK01・02・出土遺物

〔近世〕

ＳＢＯ１

＜位置＞13Ｂ34・35、13Ｂ44・45に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜平面形式＞調査区外の南東方向に延びていくため本建物の全容は不明である。

＜建物方位＞桁行の軸線方向はＷ－70°－Ｎである。

＜出土遺物＞なし。

＜遺構の性格＞不明である。

＜遺構時期＞近世に属する。

ＳＢＯ２

＜位置＞13Ｂ37・38、13Ｂ46～50に位置する。

＜検出面＞Ⅲ層。

＜平面形式＞西側が上手で座敷や納戸、東側が下手で土間といった性格の部屋を推測できる。

＜建物方位＞桁行の軸線方向はＮ－110°－Ｅである。

＜出土遺物＞P85・89・95・128・135・140などから近世陶磁器やかわらけ、土師器などが出土している。

＜遺構の性格＞母屋と考えられる。

＜遺構時期＞近世に属する。

柱穴

＜出土位置＞13Ｂ32・42～13Ｃ32・42の間、調査区中央より西側の自然堤防上に大半は位置している。

＜規模・平面形＞計測表に示した通りである。

＜埋土＞Ｐ１～181は、ＳＢ01、02を配置する柱穴と覆土の主体層が同じであるため、近世に属する可能性がある。ただし、調査区東側で検出されたＰ182は、ＳＫ01・02と主体層が同じであることから古代末から中世に属すると考えられる。

＜出土遺物＞計測表にも示したが、土師器、かわらけ、古銭、近世陶磁器などが出土している。

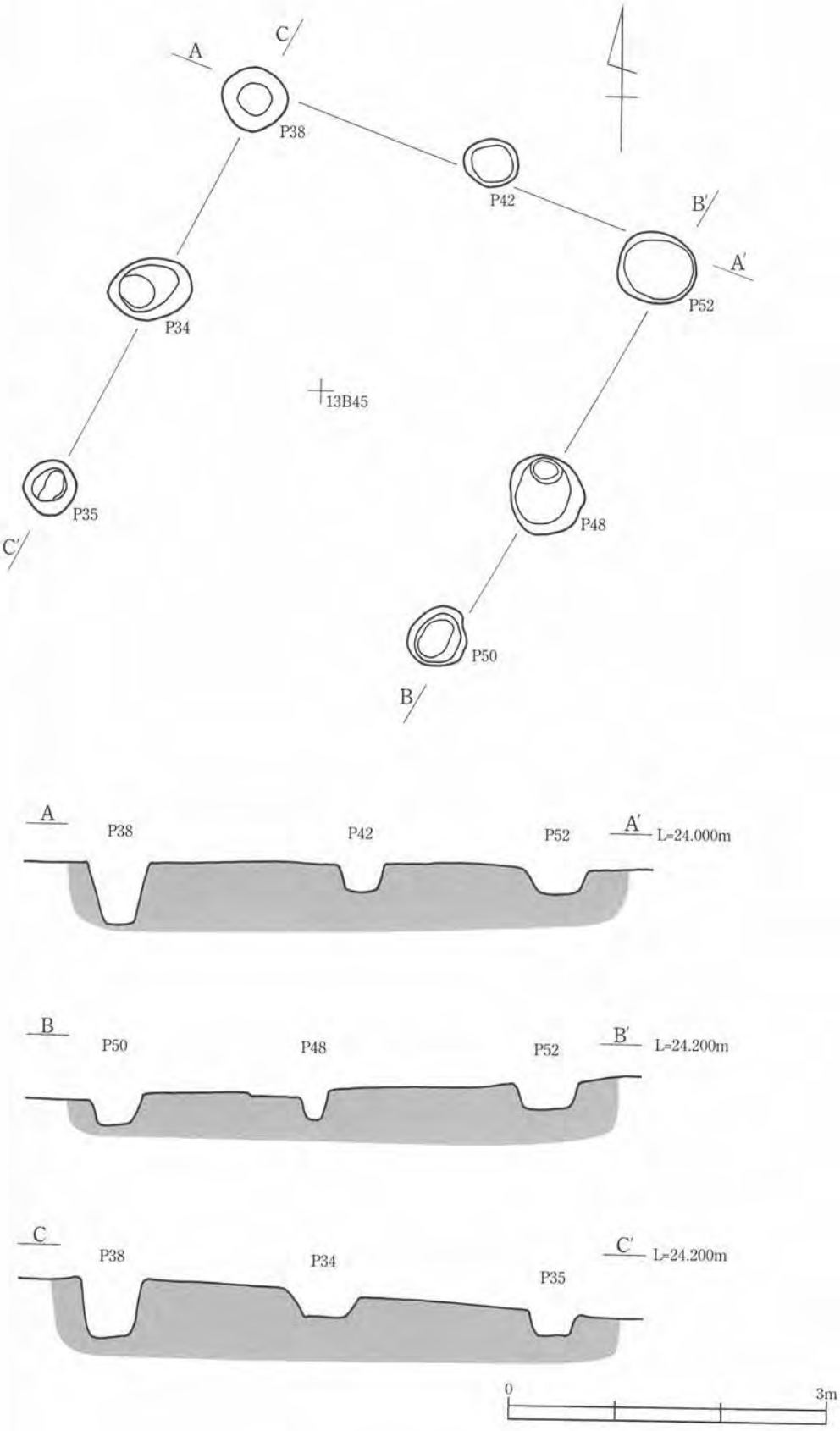
＜遺構時期＞大半は近世に属する。

遺構外遺物

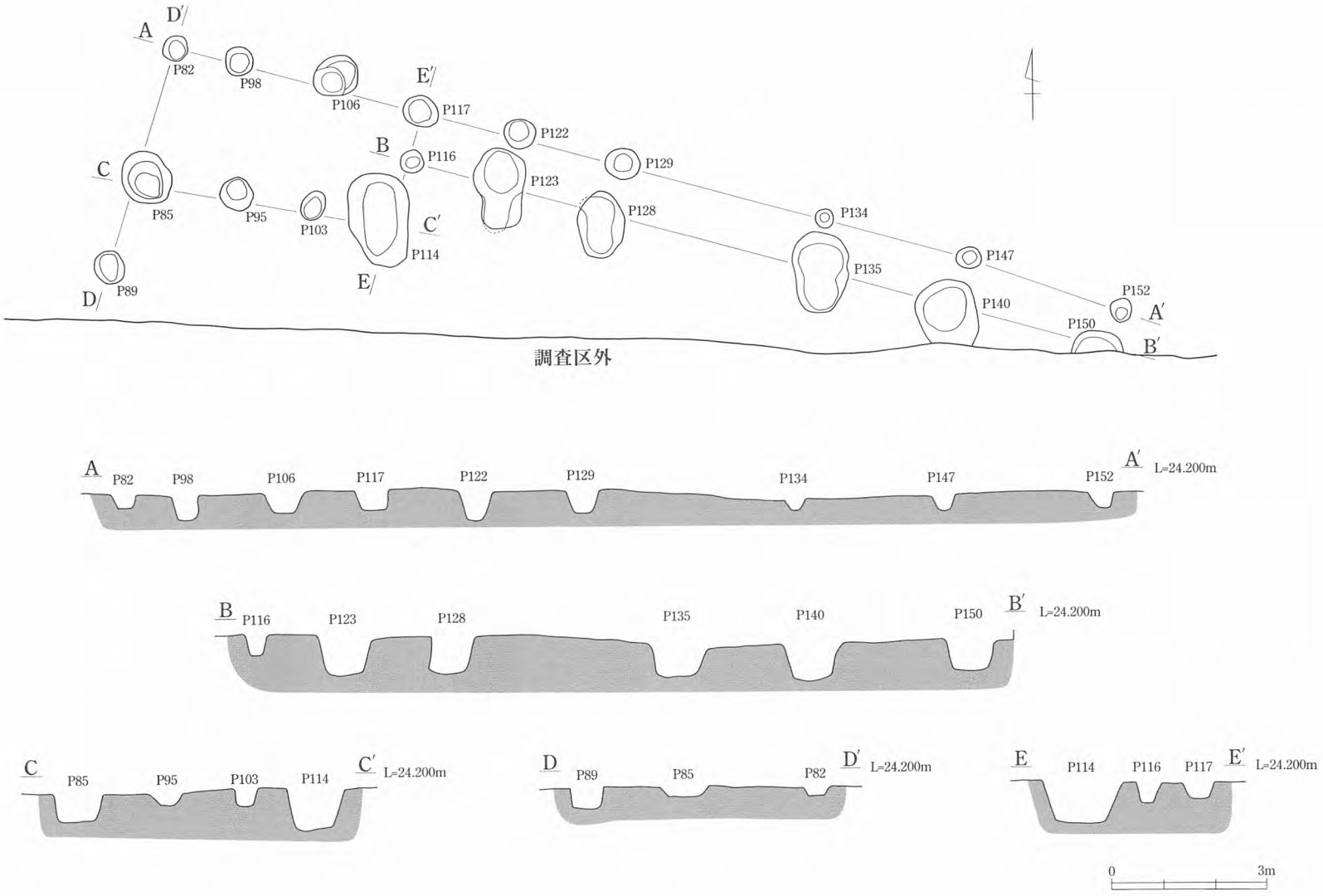
耕作時に遺物包含層の大半が削平を受けており、出土遺物は遺構検出面でのみ可能であった。出土した遺物１点はかわらけであった。304は碗型のロクロかわらけで、12世紀前半の中尊寺金剛院下層期に属すると考えられる。

表採遺物

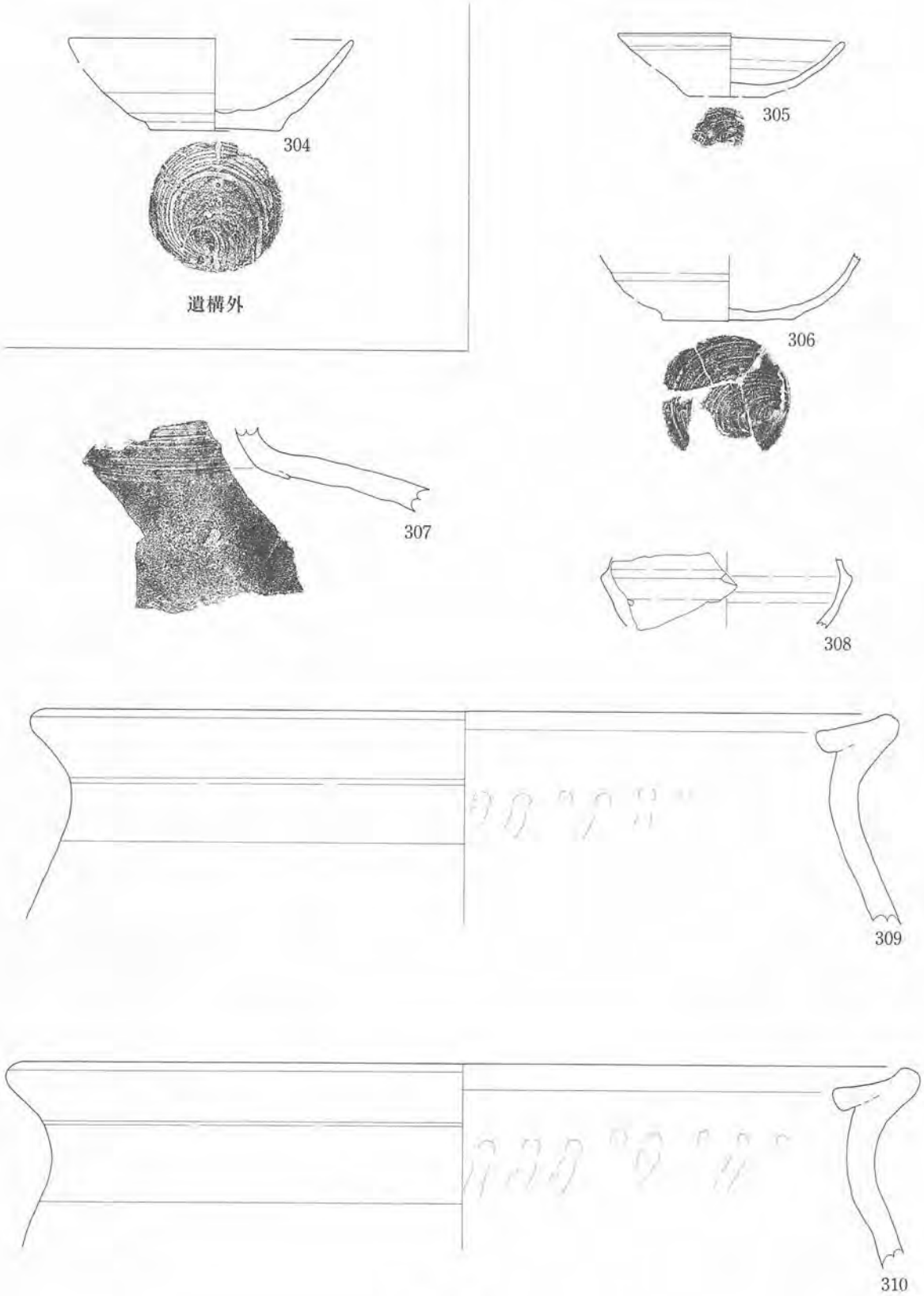
表採遺物は土師器や国産陶器、近世陶磁器などが見られる。305、306は酸化焔焼成を受けた土師器である。307は常滑産の甕で、12世紀後半に属するものである。308、311～313は18～19世紀に属する在地系の陶磁器である。309と310は18Ｃに属する常滑産の甕である。314、316～319は肥前産である。315は平清水産の碗である。



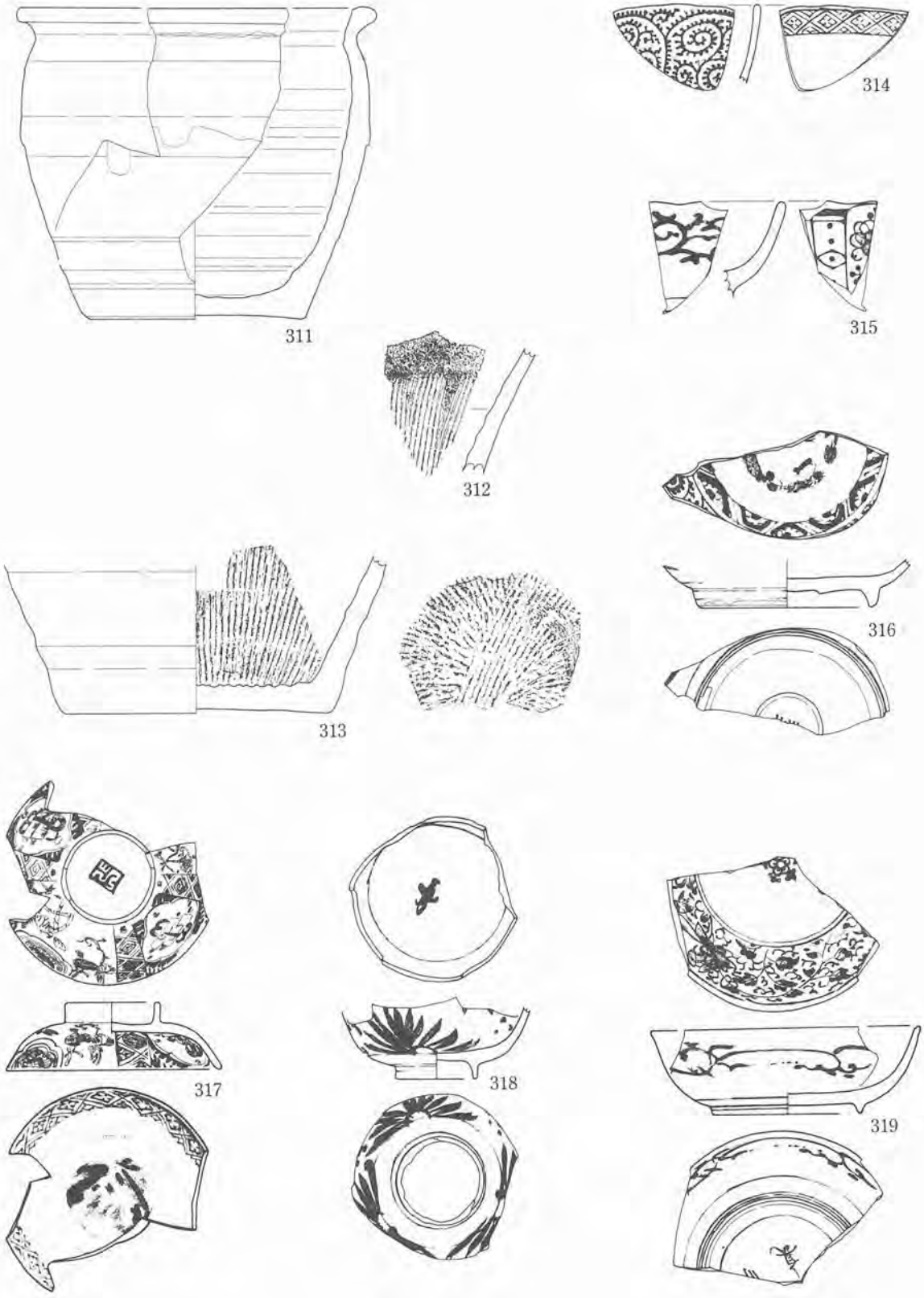
第59図　F地区SB01



第60図　F地区SB02



第61図　F地区遺構外・表採出土遺物(1)



S=$\frac{1}{3}$

第62図　F地区遺構外・表採出土遺物(2)

遺構番号	時期	長軸	短軸	深さ	標高	開口部形状	付属遺構	備　考
Pit　1	近世	43	42	33	24.39	円形		
Pit　2	近世	51	41	31	24.49	楕円形		近世陶磁器（2）、煙管、土師器
Pit　3	近世	20	20	21	24.6	円形		
Pit　4	近世	30	27	25	24.55	楕円形		
Pit　5	近世	26	21	16	24.62	楕円形		
Pit　6	近世	36	27	23	24.46	楕円形		
Pit　7	近世	45	35	18	24.58	円形		
Pit　8	近世	25	24	23	24.53	円形		
Pit　9	近世	45	40	34	24.42	円形		
Pit　10	近世	31	28	28	24.43	円形		
Pit　11	近世	45	33	27	24.47	不整円形		
Pit　12	近世	60	41	36	24.26	不整円形		
Pit　13	近世	49	40	21	24.53	楕円形		
Pit　14	近世	35	31	21	24.58	楕円形		
Pit　15	近世	44	43	26	24.53	円形		
Pit　16	近世	41	34	17	24.57	楕円形		
Pit　17	近世	45	42	57	24.19	円形		
Pit　18	近世	41	36	30	24.48	不整円形		
Pit　19	近世	41	41	21	24.52	円形		
Pit　20	近世	30	30	11	24.59	円形		
Pit　21	近世	30	28	21	24.63	円形		
Pit　22	近世	50	39	31	24.42	楕円形		
Pit　23	近世	45	33	29	24.45	楕円形		土師器（1）
Pit　24	近世	59	41	46	24.33	楕円形		土師器（2）
Pit　25	近世	44	25	14	24.64	楕円形		土師器（6）
Pit　26	近世	21	18	17	24.6	楕円形		
Pit　27	近世	72	55	30	24.48	楕円形		
Pit　28	近世	21	20	27	24.54	円形		
Pit　29	近世	25	21	9	24.67	不整円形		
Pit　30	近世	36	25	22	24.58	楕円形		
Pit　31	近世	65	51	32	24.53	楕円形		
Pit　32	近世	54	44	22	24.54	楕円形		
Pit　33	近世	39	29	35	24.43	楕円形		
Pit　34	近世	78	54	37	24.37	楕円形	ＳＢ01	
Pit　35	近世	50	48	52	24.16	円形	ＳＢ01	
Pit　36	近世	34	34	27	24.46	円形		
Pit　37	近世	34	31	25	24.47	円形		
Pit　38	近世	60	60	58	24.17	円形	ＳＢ01	
Pit　39	近世	39	30	36	23.55	不整円形		
Pit　40	近世	43	38	37	23.53	不整円形		土師器（2）
Pit　41	近世	33	30	27	23.58	円形		
Pit　42	近世	51	44	23	23.63	楕円形	ＳＢ01	
Pit　43	近世	25	23	12	23.8	円形		
Pit　44	近世	36	33	18	23.62	不整円形		
Pit　45	近世	34	32	35	23.54	不整円形		
Pit　46	近世	42	34	24	23.59	楕円形		
Pit　47	近世	32	27	41	23.27	楕円形		
Pit　48	近世	75	71	52	23.15	円形	ＳＢ01	
Pit　49	近世	47	44	27	23.44	円形		
Pit　50	近世	60	54	28	23.16	不整円形	ＳＢ01	

第15表　Ｆ地区柱穴計測表（１）

遺構番号	時期	長軸	短軸	深さ	標高	開口部形状	付属遺構	備　考
Pit　51	近世	37	29	16	23.51	楕円形		
Pit　52	近世	75	65	30	23.5	楕円形	ＳＢ01	
Pit　53	近世	45	37	26	23.72	楕円形		
Pit　54	近世	38	30	22	23.59	楕円形		
Pit　55	近世	26	20	14	23.78	楕円形		
Pit　56	近世	70	66	26	23.54	不整円形		
Pit　57	近世	57	53	25	23.65	不整円形		
Pit　58	近世	47	40	20	24	楕円形		
Pit　59	近世	44	28	24	23.57	楕円形		
Pit　60	近世	44	38	46	23.36	円形		
Pit　61	近世	30	29	14	23.7	円形		
Pit　62	近世	29	22	17	23.71	楕円形		
Pit　63	近世	36	28	30	23.7	不整円形		
Pit　64	近世	34	32	35	23.54	円形		
Pit　65	近世	23	19	40	23.5	楕円形		
Pit　67	近世	45	31	34	23.67	不整円形		
Pit　68	近世	40	40	23	23.67	円形		土師器（1）
Pit　69	近世	27	22	16	23.75	楕円形		
Pit　70	近世	25	21	19	23.71	楕円形		
Pit　71	近世	36	34	12	23.78	円形		
Pit　72	近世	34	27	19	23.7	不整円形		
Pit　73	近世	32	26	19	23.73	楕円形		
Pit　74	近世	23	21	17	23.74	円形		
Pit　75	近世	35	30	23	23.72	楕円形		
Pit　76	近世	30	24	16	23.73	楕円形		
Pit　77	近世	32	26	14	23.75	楕円形		
Pit　78	近世	35	32	15	23.8	不整円形		
Pit　79	近世	32	30	26	23.68	不整円形		
Pit　80	近世	33	27	25	23.69	楕円形		
Pit　81	近世	26	24	28	23.58	不整円形		
Pit　82	近世	49	45	23	23.61	不整円形	ＳＢ02	
Pit　83	近世	57	56	45	23.48	円形		土師器（1）
Pit　84	近世	24	22	21	23.66	円形		
Pit　85	近世	107	95	50	23.34	不整円形	ＳＢ02	近世陶磁器（1）、土師器（1）
Pit　86	近世	28	22	19	23.66	円形	ＳＢ02	
Pit　87	近世	41	36	42	23.45	不整円形		
Pit　88	近世	23	21	26	23.6	円形		
Pit　89	近世	65	58	44	23.46	楕円形	ＳＢ02	土師器（1）
Pit　90	近世	36	33	27	23.62	円形		
Pit　91	近世	32	20	17	23.66	半円形		
Pit　92	近世	31	30	24	23.7	円形		寛永通宝（3）
Pit　93	近世	45	36	26	23.58	楕円形		
Pit　94	近世	43	37	34	23.5	楕円形		
Pit　95	近世	65	60	27	23.54	円形	ＳＢ02	かわらけ（1）
Pit　96	近世	32	26	15	23.67	円形		土師器（1）
Pit　97	近世	175	149	74	23.06	不整円形		
Pit　98	近世	56	53	49	23.32	円形	ＳＢ02	
Pit　99	近世	30	26	35	23.48	楕円形		
Pit　100	近世	34	34	15	23.71	不整円形		

第16表　Ｆ地区柱穴計測表（2）

遺構番号	時期	長軸	短軸	深さ	標高	開口部形状	付属遺構	備　考
Pit 101	近世	55	36	17	23.63	楕円形		
Pit 102	近世	27	25	33	23.52	円形		
Pit 103	近世	60	45	33	23.6	楕円形	ＳＢ02	
Pit 104	近世	47	45	42	23.5	円形		
Pit 105	近世	46	43	49	23.42	円形		
Pit 106	近世	93	75	52	23.48	楕円形	ＳＢ02	
Pit 107	近世	48	46	36	23.57	円形		
Pit 108	近世	32	30	14	23.78	円形		
Pit 109	近世	24	22	9	23.77	円形		
Pit 110	近世	35	34	19	23.67	円形		
Pit 111	近世	45	29	29	23.57	不整円形		
Pit 112	近世	41	38	17	23.69	円形		
Pit 113	近世	33	32	10	23.8	円形		
Pit 114	近世	178	116	85	23.07	不整円形	ＳＢ02	
Pit 115	近世	34	30	24	23.67	楕円形		
Pit 116	近世	44	43	40	23.48	円形	ＳＢ02	
Pit 117	近世	70	50	36	23.44	楕円形	ＳＢ02	
Pit 118	近世	32	31	22	23.7	円形		
Pit 119	近世	42	36	14	23.75	円形		
Pit 120	近世	20	20	17	23.72	円形		
Pit 121	近世	48	40	54	23.35	不整円形		
Pit 122	近世	60	56	53	23.27	円形	ＳＢ02	
Pit 123	近世	155	102	71	23.08	鍵穴	ＳＢ02	
Pit 124	近世	70	62	21	23.51	不整円形		
Pit 125	近世	66	60	11	23.67	円形		
Pit 126	近世	34	32	11	23.72	楕円形		
Pit 127	近世	100	97	56	23.04	円形		
Pit 128	近世	127	86	64	23.13	楕円形	ＳＢ02	近世陶磁器（2）、土師器（6）、砥石（1）
Pit 129	近世	66	60	44	23.38	円形	ＳＢ02	
Pit 130	近世	24	22	11	23.58	円形		
Pit 131	近世	30	26	51	23.29	楕円形		
Pit 132	近世	45	42	62	23.18	円形		土師器（21）
Pit 133	近世	30	27	13	23.66	円形		
Pit 134	近世	37	32	20	23.38	不整円形	ＳＢ02	
Pit 135	近世	155	106	54	23.04	不整円形	ＳＢ02	かわらけ（2）、土師器（35）
Pit 136	近世	40	36	42	23.33	円形		
Pit 137	近世	25	21	8	23.61	円形		
Pit 138	近世	37	33	18	23.64	楕円形		
Pit 139	近世	23	20	19	23.59	円形		
Pit 140	近世	123	116	72	22.88	不整円形	ＳＢ02	近世陶磁器（1）、かわらけ（1）、土師器（9）
Pit 141	近世	47	44	34	23.39	円形		
Pit 142	近世	38	33	21	23.55	楕円形		近世陶磁器（2）
Pit 143	近世	47	35	18	23.67	楕円形		
Pit 144	近世	25	23	13	23.75	円形		
Pit 145	近世	32	29	34	23.51	楕円形		かわらけ（1）
Pit 146	近世	27	25	20	23.52	円形	ＳＢ02	
Pit 147	近世	48	41	31	23.36	楕円形	ＳＢ02	
Pit 148	近世	30	27	14	23.56	円形		
Pit 149	近世	33	25	30	23.48	楕円形		土師器（1）
Pit 150	近世	100	40	101	23.02	半円形	ＳＢ02	

第17表　Ｆ地区柱穴計測表（３）

遺構番号	時期	長軸	短軸	深さ	標高	開口部形状	付属遺構	備　考
Pit 151	近世	107	99	46	23.08	不整円形		
Pit 152	近世	46	40	33	23.38	楕円形	ＳＢ02	
Pit 153	近世	52	38	12	23.66	楕円形		土師器 (3)
Pit 154	近世	32	32	9	23.82	円形		
Pit 155	近世	51	46	23	23.68	円形		
Pit 156	近世	35	35	27	23.61	円形		
Pit 157	近世	58	49	30	23.57	楕円形		
Pit 158	近世	36	36	66	23.35	円形		
Pit 159	近世	30	25	12	23.77	楕円形		
Pit 160	近世	55	51	24	23.72	不整円形		
Pit 161	近世	71	48	21	23.66	楕円形		
Pit 162	近世	35	23	22	23.67	楕円形		
Pit 163	近世	60	36	28	23.67	楕円形		
Pit 164	近世	92	72	31	23.48	不整円形		土師器 (7)
Pit 165	近世	25	21	16	23.62	不整円形		
Pit 166	近世	27	25	16	23.62	円形		
Pit 167	近世	30	31	22	23.49	円形		
Pit 168	近世	106	106	35	23.39	円形		近世陶磁器 (4)、土師器 (5)
Pit 169	近世	62	57	32	23.45	円形		
Pit 170	近世	29	25	39	23.39	楕円形		
Pit 171	近世	28	24	11	23.68	円形		
Pit 172	近世	34	32	27	23.52	不整円形		
Pit 173	近世	36	30	36	23.44	楕円形		近世陶磁器 (1)、土師器 (6)
Pit 174	近世	25	24	19	23.53	不整円形		
Pit 175	近世	24	23	12	23.71	不整円形		
Pit 176	近世	35	33	18	23.64	円形		
Pit 178	近世	28	25	16	23.67	円形		
Pit 179	近世	163	128	25	23.39	不整円形		
Pit 180	近世	133	112	24	23.6	楕円形		
Pit 181	近世	151	129	40	23.45	楕円形		
Pit 182	近世	43	40	37	22.88	円形		

第18表　Ｆ地区柱穴計測表（4）

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
215	1	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ01・床直	(10.8)	4.7	3.8	ロクロ	ロクロ	1/2	細・粗砂多	にぶい黄橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
216	2	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ01・床直	(9.6)	(4.6)	2.8	ロクロ	ロクロ	1/2	細・粗砂多	明褐灰	良好	底部切り離しは回転糸切り
217	3	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ01・床直	(11.0)	(5.0)	2.4	ロクロ	ロクロ	1/2	細・粗砂多	にぶい黄橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
218	4	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ01・床直	(10.8)	(2.7)	2.6	ロクロ	ロクロ	1/2	細・粗砂多	にぶい黄橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
219	5	土師器	碗	口縁～体部	ＳＩ01・床直	(15.1)	-	5.6	ロクロ・ミガキ	ロクロ・ミガキ	1/9	細・粗砂多	橙	良好	底部切り離しは回転糸切り

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
220	1	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ02・床直	(15.9)	(6.2)	5.6	ロクロ	ロクロ・ミガキ	2/3	細・粗砂多	橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
221	2	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ02・床直	12.1	5.6	3.7	ロクロ	ロクロ	1/3	細砂多	浅黄橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
222	3	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ02・床直	(11.3)	(5.3)	3.2	ロクロ	ロクロ	2/3	細砂多	橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
223	4	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ02・床直	(11.6)	(6.2)	3.6	ロクロ	ロクロ	1/2	細・粗砂多	にぶい黄橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
224	5	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ02・床直	(10.6)	(3.0)	5.0	ロクロ	ロクロ	1/2	細砂多	にぶい黄橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
225	6	土師器	坏	口縁～体部	ＳＩ02・床直	(13.8)	-	4.4	ロクロ・ヘラナデ	ロクロ	1/6	細砂多	浅黄橙	良好	
226	7	土師器	甕	口縁～体部	ＳＩ02・床直	(13.6)	-	4.7	ナデ	ナデ	1/9	粗砂多	浅黄橙	良好	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
268	2	土師器	坏	口縁～体部	ＳＩ04・床直	(15.4)	-	3.5	ロクロ	ミガキ・黒色処理	1/2	細・粗砂多	にぶい黄橙	良好	
269	3	土師器	坏	体～底部	ＳＩ04・床直	-	(5.4)	3.0	ロクロ	ロクロ	1/3	細砂多	にぶい橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
270	1	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ04・床直	(14.2)	(4.2)	6.0	ロクロ	ロクロ	1/2	細・粗砂多	浅黄橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
271	10	土師器	碗	口縁～底部	ＳＩ04・床直	(14.3)	6.4	6.8	ロクロ	ロクロ	2/3	細・粗砂多	橙	良好	底部切り離しは回転糸切り。線刻有り
272	4	土師器	台付坏	体部下半～底部	ＳＩ04・床直	-	(5.2)	2.0	ロクロ	ミガキ・黒色処理	1/3	細・粗砂多	浅黄橙	良好	
273	5	土師器	甕	口縁	ＳＩ04・床直	(15.4)	-	11.6	ケズリ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	1/4	粗砂多	橙	良好	
274	6	土師器	甕	口縁～体部	ＳＩ04・床直	(15.8)	-	6.0	ロクロ	ロクロ	1/12	粗砂多	にぶい黄橙	良好	
275	9	土師器	甕	底部	ＳＩ04・床直	-	(10.2)	3.3	ケズリ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	1/3	粗砂多	にぶい黄橙	良好	
276	8	土師器	台付甕	底部	ＳＩ04・床直	-	-	2.7	ロクロ	ロクロ	3/4	細・粗砂多	浅黄橙	良好	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
277	1	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ05・床直	(13.9)	5.5	4.3	ロクロ	ミガキ・黒色処理	1/3	細・粗砂多	明黄褐	良好	底部切り離しは回転糸切り
278	3	土師器	坏	底部	ＳＩ05・床直	-	6.0	2.1	ロクロ	ミガキ・黒色処理	1/3	細・粗砂多	にぶい橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
279	2	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ05・床直	(13.2)	5.8	4.3	ロクロ	ロクロ	1/2	細・粗砂多	浅黄橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
280	5	土師器	甕	口縁～体部	ＳＩ05・床直	(20.0)	-	11.0	ロクロ	ロクロ・ナデ	1/4	粗砂多	橙	やや良	
281	6	土師器	甕	口縁～体部	ＳＩ05・床直	(17.8)	-	12.7	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	1/9	細・粗砂多	浅黄橙	良好	
282	11	土師器	甕	体部下半～底部	ＳＩ05・床直	-	(11.2)	6.7	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	1/6	粗砂多	にぶい橙	良好	
283	10	土師器	甕	体部下半～底部	ＳＩ05・床直	-	7.2	6.0	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	1/2	粗砂多	にぶい橙	やや良	
284	7	土師器	甕	口縁～体部	ＳＩ05・床直	(26.4)	-	8.4	ロクロ	ロクロ	1/6	細・粗砂多	にぶい橙	やや良	
285	4	土師器	甕	口縁～体部	ＳＩ05・床直	(24.0)	-	14.5	ロクロ・ケズリ	ロクロ	1/5	細・粗砂多	橙	良好	
286	8	土師器	甕	体部	ＳＩ05・床直	-	-	15.6	ロクロ・ケズリ	ロクロ	1/4	細・粗砂多	にぶい橙	良好	
287	9	土師器	甕	体部下半～底部	ＳＩ05・床直	-	(10.5)	14.3	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	1/5	粗砂多	橙	やや良	

第19表　Ｆ地区遺物観察表

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
227	13	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ03・地床炉	(14.2)	(5.8)	4.1	ロクロ	ミガキ・黒色処理	2/3	細・粗砂多	橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
228	12	土師器	坏	口縁～底部	ＳＩ03・地床炉	11.8	5.7	3.3	ロクロ	ロクロ	3/4	細・粗砂多	橙	良好	底部切り離しは回転糸切り
229	1	土師器	甕	口縁～底部	ＳＩ03・地床炉	21.6	28.3	12.6	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	ほぼ完形	細・粗砂多	黄橙	良好	
230	2	土師器	甕	口縁～底部	ＳＩ03・地床炉	22.7	10.9	17.2	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	ほぼ完形	細・粗砂多	にぶい黄橙	良好	底部に木葉痕あり
231	9	土師器	甕	体～底部	ＳＩ03・地床炉	-	8.8	16.4	ロクロ・ケズリ	ヘラナデ・ナデ	1/2	細砂多	にぶい黄橙	良好	
232	6	土師器	甕	口縁～体部	ＳＩ03・地床炉	(19.2)	-	22.7	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	1/2	細・粗砂多	にぶい黄橙	良好	
233	4	土師器	甕	口縁～底部	ＳＩ03・地床炉	(22.0)	(10.5)	29.4	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	1/2	細・粗砂多	橙	良好	
234	3	土師器	甕	口縁～体部	ＳＩ03・地床炉	24.2	-	29.4	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	1/2	細・粗砂多	橙	良好	
235	10	土師器	甕	体部下半～底部	ＳＩ03・地床炉	-	(5.6)	10.8	ヘラケズリ	ヘラナデ・ナデ	1/2	細・粗砂多	にぶい黄橙	良好	底部に木葉痕あり
236	7	土師器	甕	口縁～体部上半	ＳＩ03・地床炉	(21.5)	-	12.5	ロクロ・ケズリ	ロクロ	1/6	細・粗砂多	橙	良好	
237	5	土師器	甕	口縁～体部	ＳＩ03・地床炉	(23.8)	-	23.2	ロクロ・ケズリ	ロクロ・ヘラナデ	口縁3/4	細・粗砂多	橙	良好	
238	8	土師器	甕	体～底部	ＳＩ03・地床炉	-	(21.2)	11.0	ロクロ・ケズリ	ロクロ・ヘラナデ	1/4	細・粗砂多	にぶい黄褐	良好	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	胎土	色調	備考
239	1	土錘	ＳＩ03埋土	3.4	1.6	1.5	11	粗砂少	灰白	完形
240	2	土錘	ＳＩ03埋土	3.9	1.7	1.6	12.5	粗砂少	浅黄橙	完形
241	3	土錘	ＳＩ03埋土	(4.2)	1.8	1.6	9.9	粗砂多	黒褐	ほぼ完形（端部欠損）
242	4	土錘	ＳＩ03埋土	3.8	1.6	1.6	13.0	粗砂多	黒褐	ほぼ完形（端部欠損）
243	5	土錘	ＳＩ03埋土	3.7	1.6	1.6	10.7	粗砂少	にぶい黄橙	完形
244	6	土錘	ＳＩ03埋土	(2.6)	1.7	1.5	6.4	粗砂多	暗褐	1/2・半割
245	7	土錘	ＳＩ03埋土	(3.1)	1.7	1.5	8.5	粗砂多	にぶい黄橙	1/3・半割
246	8	土錘	ＳＩ03埋土	3.3	1.6	1.5	9.6	粗砂少	浅黄橙	完形
247	9	土錘	ＳＩ03埋土	3.9	1.8	1.7	10.5	粗砂多	橙	完形（剥落あり）
248	10	土錘	ＳＩ03埋土	3.9	1.7	1.6	11.7	粗砂多	黒褐	完形
249	11	土錘	ＳＩ04埋土	3.7	1.7	1.5	10.6	粗砂多	にぶい黄橙	完形
250	12	土錘	ＳＩ03埋土	3.8	1.7	1.5	10.9	粗砂少	にぶい黄橙	完形
251	13	土錘	ＳＩ03埋土	3.6	1.6	1.5	10.8	粗砂少	浅黄橙	完形
252	14	土錘	ＳＩ03埋土	3.7	1.6	1.5	11.4	粗砂少	浅黄橙	完形
253	15	土錘	ＳＩ03埋土	3.6	1.5	1.4	9.8	粗砂少	にぶい黄橙	完形
254	16	土錘	ＳＩ03埋土	3.2	1.6	1.6	10.1	粗砂少	灰白	完形
255	17	土錘	ＳＩ03埋土	3.6	1.5	1.5	9.6	粗砂多	灰黄褐	完形
256	18	土錘	ＳＩ03埋土	3.8	1.6	1.5	11.5	粗砂少	灰黄褐	完形
257	19	土錘	ＳＩ03埋土	3.8	1.8	1.6	13.1	粗砂少	にぶい黄橙	完形
258	20	土錘	ＳＩ03埋土	4.1	1.7	1.7	14.6	粗砂少	にぶい黄橙	完形
259	21	土錘	ＳＩ03埋土	3.8	1.8	1.7	13.9	粗砂少	灰白	完形
260	22	土錘	ＳＩ03埋土	3.8	1.7	1.7	12.8	粗砂多	浅黄橙	完形
261	23	土錘	ＳＩ03埋土	3.4	1.7	1.5	9.9	粗砂少	にぶい黄橙	完形
262	24	土錘	ＳＩ03埋土	4.0	1.7	1.5	12.0	粗砂少	灰白	完形
263	25	土錘	ＳＩ03埋土	3.7	1.7	1.6	11.5	粗砂少	にぶい黄橙	完形
264	26	土錘	ＳＩ03埋土	3.9	1.9	1.7	13.0	粗砂少	にぶい黄橙	完形
265	27	土錘	ＳＩ03埋土	4.1	1.8	1.6	13.3	粗砂多	黒褐	完形
266	28	土錘	ＳＩ03埋土	3.7	1.6	1.4	9.3	粗砂多	黒褐	完形
267	29	土錘	ＳＩ03埋土	3.6	1.9	1.7	14.6	粗砂少	にぶい黄橙	完形

第20表　Ｆ地区遺物観察表

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
288	11	土師器	坏	底部	ＳＤ01埋土	-	(8.0)	1.6	ロクロ	回転糸切	1/3	粗砂多	橙	良好	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
289	3	渥美	甕	口縁	ＳＤ01埋土	12世紀後半	灰	内面に自然釉
290	6	渥美	甕	肩部	ＳＤ01埋土	12世紀後半	灰	
291	4	渥美	甕	肩部	ＳＤ01埋土	12世紀後半	暗灰	
292	2	渥美	甕	体部	ＳＤ01埋土	12世紀後半	灰	
293	1	渥美	甕	体部	ＳＤ01埋土	12世紀後半	灰	
294	8	渥美	甕	体部	ＳＤ01埋土	12世紀後半	灰	
295	9	渥美	甕	体部	ＳＤ01埋土	12世紀後半	褐	
296	7	渥美	甕	体部	ＳＤ01埋土	12世紀後半	灰	
297	5	渥美	甕	体部	ＳＤ01埋土	12世紀後半	灰	
298	10	渥美	甕	蓋？	ＳＤ01埋土	12世紀後半	灰	

遺物番号	登録番号	種類	径	縁高	縁幅	重さ	備考
299	1	和鏡	11.8	0.7	0.3	126.5	草花双鳥鏡
300	2	和鏡	―	0.7	0.15~0.2	22.5	松鶴鏡

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
301	2	かわらけ	ＳＫ01埋土	D_4	-	-	3.4	指	すのこ痕	-	細砂多	黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
302	1	渥美	甕	頸部～体部上半	ＳＫ01埋土	12世紀後半	灰色の自然釉	ＳＤ01と接合

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
303	1	かわらけ	ＳＫ02埋土	ｒｄ11	(8.8)	(5.2)	1.8	ロクロ	回転糸切	1/4	細砂少	褐	

遺物番号	登録番号	種類	出土位置	分類	口径	底径	器高	内面ナデ	外底（すのこ痕）	残存度	胎土	色調	備考
304	1	かわらけ	13C32層	Ｒｄ10	14.3	6.7	4.3	ロクロ	回転糸切	1/4	細砂多	にぶい黄橙	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	残存度	胎土	色調	焼成	備考
305	1	土師器	坏	口縁～底部	表採	(11.5)	(3.2)	4.0	ロクロ	回転糸切	2/3	粗砂多	橙	良好	
306	2	土師器	坏	体～底部	表採	-	6.7	3.3	ロクロ	回転糸切	1/4	細砂少	黄橙	良好	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	年代	色調	備考
307	3	常滑	甕	肩部	表採	12世紀後半	灰	

遺物番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	胎土	釉薬	製作地	製作年代	備考
308	16	陶磁器	碗	体部	表採	-	-	3.6	暗灰色	鉄釉、白色の釉	在地	19C	
309	10	陶磁器	甕	口縁	表採	(42.5)	-	10.6	赤褐色	鉄釉	常滑	18C	
310	17	陶磁器	甕	口縁	表採	(44.5)	-	9.4	赤褐色	鉄釉	常滑	18C	
311	11	陶磁器	甕	口縁～底部	表採	(18.1)	5.6	15.4	黒褐色	鉄釉、白色の釉	在地	19C	長島焼き1850～1870
312	14	陶磁器	擂鉢	体部	表採	-	-	6.1	黒褐色	鉄釉	在地	18C	
313	12	陶磁器	擂鉢	体～底部	表採	-	13.2	7.3	赤褐色	鉄釉	在地	19C	
314	5	陶磁器	蓋		表採	10.6	4.5	3.3	灰白色	染付	肥前	19C	
315	18	陶磁器	碗	体～底部	表採	-	3.8	3.3	灰白色	染付	平清水	19C	
316	4	陶磁器	碗	口縁～底部	表採	(13.0)	(7.0)	4.2	白色	染付	肥前	18C	
317	8	陶磁器	碗	口縁～体部	表採	-	-	4.6	白色	染付	肥前	19C	
318	7	陶磁器	鉢	口縁～体部	表採	(9.0)	-	3.8	灰白色	染付	肥前	18C～19C	
319	6	陶磁器	皿	体～底部	表採	-	8.8	2.3	灰白色	染付	肥前	19C	

第21表　Ｆ地区遺物観察表

第10章　まとめ

今回の調査では、弥生時代、10～11世紀の平安時代、12世紀の各時期の遺構や遺物などが得られた。これらの資料が平泉町内でも北上川東岸地域で出土した意義は大きい。

しかし、調査成果をまとめていく時点で、水田耕作により基本層序や遺構上半部が削平をされていることから、遺構埋土と遺物の両方からの年代観の把握ができず、主に遺物の所属時期を中心として遺構年代を確定せざるを得なかったのは極めて残念なことである。

以下に本遺跡より出土した遺構と遺物をまとめていく。

第１節　遺構

＜竪穴住居跡＞

今回、Ｂ地区で４棟とＦ地区で５棟の計９棟が検出され、それらは自然堤防上やそれより東側の後背湿地において確認されている。

Ｂ地区より検出した住居跡は、３～５ｍの規模を持つものである。いずれの住居跡も調査区外に延び、水田耕作時の削平を受けているため全容は不明な点が多い。また、所属時期はＳＩ01の９～10世紀に属する出土遺物が見られる以外は、出土遺物もなく明らかでない。ただし、12世紀後半に属すると考えられる井戸跡に、ＳＩ02が切られていることからそれ以前のものと考えられる。

Ｆ地区より検出したＳＩ01～05は、水田耕作時に大半が削平を受けているため、ほぼ床面のみが確認された状況であった。すべての住居跡が調査区外に延びているため規模・平面形状等の全容は不明であるが、一辺は２～４ｍの規模を持つものである。これらの中でカマドが付属する住居は、ＳＩ02の１棟だけである。

それらの所属時期は、土師器の所属年代からＳＩ01のみ11世紀初頭に属するものとし、それ以外は10世紀後半に属するものとしたが、時期によって住居に明確な差は見られない。また、５棟の住居跡の中のＳＩ03からは、床面中央から北東よりに礫と土師器で囲まれた地床炉が設置され、他とは異なる様相が確認された。出土遺物は土師器と土錘のみの確認であったが、何らかの工房跡の可能性が示唆される。

以上のように若干の時間幅を捉えられるものの、継続的に小規模な集落が存在していたことを窺わせる例は、平泉町内においては稀な存在と言えよう。

＜井戸＞

Ｂ・Ｃ地区で、規模や平面・断面形状・堆積状況等など共通しているものが１基ずつ検出された。また、埋土上層でかわらけ、常滑産陶器、中国産磁器などの12世紀後半に属する遺物が出土していること、廃棄され自然堆積した後の人工堆積と思われる埋土上層から遺物が出土していることなどが確認されていることも共通している。

＜溝＞

Ｂ・Ｃ・Ｆ地区で１条ずつ検出された。Ｂ地区とＣ地区で検出された溝は、検出位置、形状、規模、埋土状況、軸線方向などが類似していることから、この２条の溝は同時期の可能性も考えられる。ただし前者の所属時期は古代末から中世、後者は出土遺物が見られないため所属時期は不明である。

Ｆ地区で検出した溝は、12世紀後半に属する和鏡と渥美産陶器などが埋土中層より出土していることから、

12世紀後半に属するものと思われる。また、断面観察から広い溝から若干幅の狭く深い溝へと変化しているとも捉えられ、複数回に及び利用されていた可能性がある。本遺構の性格としては、堀的な役割を担っていたと推測される。

＜その他の遺構＞

その他に各地区でカマド状遺構・掘立柱建物跡・陥し穴・土坑・柱穴などが検出された。特に時期を特定できたものだけ述べておく。

カマド状遺構はＢ地区で検出され、燃焼部より12世紀後半に属する常滑産陶器が出土しており、遺構時期は遺物の所属時期と同時期と考えられる。遺構の軸線形状や方向などは平泉町内の高玉遺跡で確認されているものと一致している。

掘立柱建物跡はＦ地区の自然堤防上において、近世に属するものが２棟検出された。この２棟は南側の調査区外に延びていくため不明な点が多い。その中でもＳＢ01は建物の配置等は不明、ＳＢ02は母屋の可能性がある。

陥し穴はＡ地区の段丘面の縁で検出されたもので、埋土から縄文が施文されたものが出土しており、縄文ないし弥生時代に属すると思われる。

土坑の中のＢ地区のＳＫ01とＥ地区のＳＫ03・04は、平泉遺跡群で検出されている「トイレ状遺構」に類似しているものである。これらの遺構から種子や花粉などは検出されなかったが、埋土や平・断面形状から「トイレ状遺構」と考えられる。

柱穴のＢ・Ｅ地区で検出された中には、12世紀後半に属する掘立柱建物跡を構成すると考えられる柱穴がある。しかし、両調査区共幅が狭いため把握するまでには至らなかった。

第２節　遺物

＜弥生土器＞

本遺跡では、出土点数に偏りが見られるもののＡ・Ｂ・Ｃ・Ｅ地区で出土し、各地区の出土点数は以下の通りである。Ａ地区では表面採集で数点確認されている。Ｂ地区から出土した土器は374点で、そのほとんどが磨滅したものである。Ｃ地区とＥ地区では２点ずつ出土している。ここでは各地区ごとの文様構成をまとめていきたい。

まず最初に、各地区で出土した土器の大半は、磨滅した体部であるためその器種を推定しにくいが、その構成を述べておく。各地区ごとで確認できた器種は甕と壺からなり、それらの内の僅かに小形のものも確認された。

次に文様構成を出土点数が少ない地区から述べていく。Ａ地区で出土したものは刺突文が施されている口縁、縄文が施文された体部、Ｃ地区で出土したものは縄文が施文された壺の体部、Ｅ地区では口縁部直下に列点文が施されたものが出土している。これらの所属時期は、Ａ・Ｅ地区が後期に属すると思われ、Ｃ地区は不明である。

さらに、最も多く出土したＢ地区では、本来出土ブロックごとに記載していくことが望ましいが、今回は出土地区全体の特徴を把握することでまとめとしたい。大半の土器は、体部にＬＲ縄文が施文されているものと無文のものに分けられ、僅かに指頭圧痕や沈線文等で構成されているものが確認されている。以下にそれらの文様の特徴を抽出する。

・口唇部が指頭圧痕により、波状を呈するもの。体部に縄文が施文されているものと無文のものがある。(13・15・16・44・74・90)

・口唇部と口縁部が指頭圧痕により波状を呈するもの。(91)

・指頭圧痕により口唇部直下が摘みだされ、折り返し口縁が形成されているもの。(89)

・口唇部は波状を呈し、さらに刻みが施されているもの。(18)

・口縁部に刺突文や木目烈点文が施されているもの。(24・88)

・工字文に充填縄文が施されているもの。(87)

・山形沈線文、連弧沈線文、平行沈線文の組み合わせて施されているもの。(17・86・92・96)

・平行沈線文のみ施されているもの。(25)

以上の特徴は、主に弥生中期後半から後期、常盤式や天王山式の範疇で捉えられる。この時期のものは平泉町内では瀬原Ⅰ遺跡において確認されている。

また、現在弥生編年研究は小田野氏や須藤氏等に業績があり、これらを参考とする。該期の土器の特徴は小田野哲憲氏のⅢ期（1982）・Ⅳ期（1987)、須藤隆氏のⅤ期～Ⅵ期に比定され、時期としては前述した時期が相定される。

＜弥生石器＞

ここではB地区のⅦ層中より出土した石器のみを扱い、器種組成や石材組成、製作技術などをまとめていく。本来は各出土ブロックで記載していくことが妥当と思われるものの、得られる情報が少ないことから、全体をまとめることで特徴を抽出したい。

器種組成は、石鏃や石匙、それらの未製品、石錘、二次加工を有する剥片、剥片、チップである。今回は二次加工を有する石器は、未製品の可能性もあるが、無理に器種決定をせずに扱うこととし、器種分類した各石器ごとにまとめておく。

・石鏃は、長さが1.5～5cmの範囲内にあり、有茎と無茎に分類される。無茎のものは、尖端縁とその周を中心に加工するものが多い。素材には主に横長剥片が用いられている。

・石匙は、長さが1.4～3cmの範囲内にあり、未製品の長さは4cmである。石器そのものは比較的小形の形状を呈し、背面ないし末端部に自然面を有するものが多い。

・石錐は、長さが2.5～5cmの範囲内にあり、錐部のみ加工を施しているものである。

・二次加工を有する剥片は、不定形の形状が多く、素材の縁辺に二次加工を施しているだけである。

石材組成は頁岩が主体で9割強を占めており、少量の瑪瑙が含まれるている。それらの石材産地は、頁岩が北上山系、瑪瑙が奥羽山脈とされ、いわゆる在地系石材を中心に利用してたと考えられる。

石器製作技術は、接合資料が少なく、石核が出土していないため剥片の背面構成から検討する。計測表で用いている背面構成は、以下のような基準としている。

Ⅰ類は腹面の剥離方向と背面の剥離方向が同一方向のもの。

Ⅱ類は腹面の剥離方向に対して背面の剥離方向が反対方向のもの。

Ⅲ類は腹面の剥離方向と背面の剥離方向が直交するもの。

本遺跡の剥片生産技術は、Ⅱ類もしくはⅢ類に含まれるものが多いことから、打面を上下左右に設定して目的剥片を剥離していたと考えられる。その目的剥片は、無茎石鏃やその未製品、二次加工を有する剥片などに用いられている素材剥片から横長剥片と考えられる。

現在、弥生時代の石器研究を集成した資料は少ないが、相原氏や禰冝田氏が業績を挙げているため、それらと比較していきたい（相原1989・1990、禰冝田1993）。本遺跡の土器の様相から、相原氏の弥生時代Ⅲ期（相原1989・1990）、禰冝田氏の弥生時代後期（禰冝田1993）に相当している。その時期の器種組成は、比較的大陸系磨製石器などが観察されているものの、本遺跡はそれらが含まれていないことなどが差として挙げられる。少なからず存在しているこの時期の打製石器のみで構成されている遺跡の存在は、現段階では不明な点が多いことから、弥生石器の出土例を待ち今後の課題としたい。

＜土師器＞

竪穴住居跡から出土した土師器のみまとめていく。本遺跡において竪穴住居跡はＢ・Ｆ地区で確認されていることは先述したが、Ｂ地区で検出したものは所属時期が不明確で、点数も少ないことからここでは扱わない。今回はＦ地区で検出したＳＩ01～05の床面直上から出土している土師器のみを扱い分類することと、各住居跡の分類した土師器のセット関係を対比していくことで特徴を抽出したい

まず始めに、出土した土師器の特徴を以下に示しておく。坏と碗はすべて酸化焔焼成によるもので、その中で細分を行う。

坏Ａ１　高さ3.5cm以上５cm未満で、口縁が直線的に立ち上がる。ロクロ成形のもの。（215・221～225・228・268・270～279）

坏Ａ２　Ａ１類の内面に内黒処理とミガキが施されているもの。（220・227・277・278）

坏Ｂ　高さ3.5cm以下で、口縁が直線的に立ち上がる。ロクロ成形のもの。（216～218）

坏Ｃ　高台をもつもので、ロクロ成形のもの。（272）

碗Ａ１　高さ５cm以上で、内外面にミガキが施されているもの。ロクロ成形のもの。（219）

碗Ａ２　高さ５cm以上で、ロクロ成形のもの。（271）

甕Ａ　ロクロ成形で、口縁が短く外反し、口唇部が垂直につまみ上げられたもの。（236～238・274・284～286）

甕Ｂ　非ロクロ成形で、口縁が短く外反するもの。（226・229～235・273・275・280～283・287）

上記に挙げた坏のＡ１類や碗のＡ類などは10世紀前後に見られるものである。また、坏と甕の中に所属時期を10世紀後半から11世紀初頭の終末期に位置づけられる特徴を有するものが存在している。それは甕のＡ・Ｂ類共に10世紀後半、坏のＢ１類や碗Ａ２類としたものが、11世紀初頭に位置付けることが可能と思われる（井上1995、八木1995）。

次に前述したの分類をＦ地区で検出された各住居跡に当てはめ、以下の表から特徴を抽出していく。

	坏				碗		甕	
	Ａ１	Ａ２	Ｂ	Ｃ	Ａ１	Ａ２	Ａ	Ｂ
ＳＩ01	1		3		1			
ＳＩ02	5	1						1
ＳＩ03	1	1					3	7
ＳＩ04	3			1		1	1	2
ＳＩ05	1	2					3	5

まず、ＳＩ02から05までの所属年代は、器高の低い坏と口縁が短く外反している甕などの存在することから10世紀後半とした。その中で、この時期まで黒色処理が施された坏や小形の坏が同時期にが存在していること、碗などが共伴関係にあること、ロクロと非ロクロ成形の口縁が短く外反する甕が存在していることなどは、この時期の特徴と捉えてられる。ＳＩ01は小形の坏と碗が共伴関係、11世紀初頭のバリエーションの一つと捉えられる

これらの10世紀後半から11世紀初頭にかけての資料を有する本遺跡の存在は、奥州藤原時代へと繋ぐ貴重な存在と考えられる。

＜土錘＞

Ｆ地区のＳＩ03の埋土から29点出土し、９割以上が完形品である。それらの法量の平均は長さ39cm、幅と厚さ16cm、重さ13gで、全体的には近似した数値を示している。両端が整形され、形状は正面がほぼ長方形をし、規格的な形態を呈している。土錘はすべて、ＳＩ03の埋土中層から下層にかけて出土していることから、埋没過程にある本遺構に一括廃棄されたと考えられる。このことから所属時期は、ＳＩ03の床面直上より出土した10世紀後半に属する土師器と同時期か若干新しいものと思われる。

＜かわらけ＞

まずはじめに本報告でかわらけをまとめるにあたって、分類基準は柳之御所遺跡報告書内で松本建速氏が示した分類基準を使用していることを述べておく（松本1993)。

出土したかわらけには、てづくねとロクロのものが確認れているが、大半は磨滅した破片で分類が不可能であった。確認できたものにはＣ３（二段撫面取りなし)、Ｃ５（二段撫面取りあり)、Ｄ３（一段撫面取りなし)、Ｄ４（一段撫面取りあり）がある。その４種類とロクロのかわらけはＢ・Ｃ・Ｅ・Ｆ地区の井戸、土坑、溝等から出土し、調査区や遺構からの出土傾向に偏りは見られない。

特筆すべきは、Ｆ地区の遺構外から出土したろくろかわらけ（304）で、上述したかわらけと形態が異なり大碗のロクロかわらけである。その所属時期は12世紀前半に属し、中尊寺金剛院下層期に相当するものと考えられる。12世紀後半の資料が大半の中このような古い段階のかわらけが、北上川東岸地域で１点だけではあるが、出土した意義は大きい。このことがどのような意味を持つことなのかは検討課題としたい。

＜国産陶器＞

常滑産の甕や片口鉢、渥美産の甕、広口壺などがＢ・Ｅ・Ｆ地区の井戸や溝、土坑などから出土している。常滑産の甕はII～III型式に属するものが多く、III型式に属するものは１点のみであった。広い範囲で常滑産や渥美産の国産陶器が確認され、Ｂ地区では常滑産、Ｆ地区では渥美産のものが多く出土している傾向がある。ただしこの傾向が、何らかの意図をもつものなのか現段階では不明であるが、どのような意味をもつものなのか今後の検討課題としたい。

＜中国産陶磁器＞

Ｃ地区ＳＥ01から白磁の壺１点とＥ地区ＳＫ03から白磁の碗１点の計２点出土している。また、Ｂ地区で表採ではあるが青磁と白磁が１点ずつ確認されている。これらの中国産陶磁器はすべて12世紀後半に属するものである。

点数は少ないものの広範囲で検出されている。

＜和鏡＞

Ｆ地区ＳＫ01の埋土中層から和鏡２面の出土状況は、鏡面が下に向けられている状態で確認された。それらの所属時期は共伴した渥美産陶器や和鏡の鏡背文様から12世紀後半に相当すると考えられる。ここでは、和鏡の文様などから、平泉町内で出土した当該期の和鏡と対比してみる。平泉町内においては９例確認され、すべて北上川西岸地域の平泉遺跡群で出土している。今回のような溝からの出土例や１遺構から２面が確認された例、北上川東岸地域での出土例など平泉町で初めて確認されたことが多く、極めて稀な例といえる。以下に鏡背形式や文様の特徴や溝から出土したことにより得られた若干の考察を述べていきたい。

まず、鏡背形式と文様の特徴をまとめる。

和鏡１（329）の名称は花草双鳥鏡で、径11.8cm・縁高0.7cm・縁幅0.3cm・重126.5gである。形状は直角式中縁、花蕊座鈕、界圏は中線である。鏡背文様は秋草が下段から中央にかけて内外区にあしらわれ、それ以外の内区には鈕を対象に２羽の鳥や菊、外区には蝶や花などが描かれている。

和鏡２（330）の名称は松鶴鏡で、縁高0.7cm・縁幅0.15～0.2cm・重22.5gである。形状は直角式細縁、界圏は細線である。鏡背文様は外区を中心に内区にかけて松があしらわれ、内区から外区に向けて鶴が描かれている。

これらの抽出した特徴を平泉遺跡群出土和鏡と比較し、本遺跡出土鏡との共通性を抽出したい（平泉町教育委員会1997）。

花草双鳥鏡は、外区に蝶と内区に鳥や花が配されている構図と蝶や花の個々の描写などの鏡背文様は白山社遺跡第３次調査区出土の花枝双雀鏡と類似している。また、直角式中縁であるこの鏡の鏡背形式も同様である。

松鶴鏡は、柳之御所遺跡31ＳＥ２より出土の松鶴鏡と同じ構図をし、外区に見られる松の描写が類似しているが、本遺跡の鶴の描写はやや肉厚的に描かれている。鏡背形式は平泉遺跡群には存在しない。

次に溝より出土した和鏡の性格を考えていきたい。この出土和鏡の性格については、前田氏や菊池氏らに業績があり、それらを参考にしたい。溝の埋土から検出された和鏡は、鏡面が下に向けられた状態で２面共出土している。現在まで、平泉遺跡群においても今回のような出土事例が無いことは先述したが、全国的に見ても多くはない（前田1986・1987・菊池1987）。両氏共に本遺跡のような出土状況は、基本的に水に纏わる祭祀的な要素が大きいものと考えられる。

また、平泉遺跡群出土の和鏡の性格も水の祭祀的なものと捉えることが可能であることから、本遺跡も同一性格と思われ、平泉町内での和鏡の用いられ方は、共通していたと考えられる。

本遺跡の出土和鏡と平泉遺跡群出土和鏡を比較した結果、文様の構図及び特徴などでの一致が見られた。これらの一致がどのような意味を持つものなのか、出土例を待ち今後の課題としたい。

＜温石＞

Ｅ地区のＳＫ03より本遺物が１点出土し、北上川東岸地域で初めての出土例である。所属年代はかわらけが共伴することから12世紀後半に属するものと考えられる。また、本遺物の石材は、被熱のため剥落していることから特定するのは困難であるが、平泉町遺跡群で見られる滑石製の温石とは異なる。この北上川西岸地域と東岸地域の石材相違が何を意味していくのか町内での同様な出土例を待ち今後の検討課題として挙げ

ておきたい。

以上、里遺跡の遺構や遺物のまとめてきたが、遺跡範囲内の部分的な調査であることや担当者の能力不足から十分な成果が得られず資料提示にとどまった。しかしながら、北上川東岸地域において弥生時代から近世にかけて各時期の資料を提示できた意義は大きいと思われる。最後に各時代ごとに若干まとめておきたい。

〔弥生時代〕

広範囲で中期後半から後期に属する土器や石器を確認できたが、頻繁に水が付いていると思われ遺構を捉えるまでには至らなかった。しかし、遺跡の立地状況や遺物の出土量、炭化物範囲などから判断して、この時期に集落が営まれていたと推測することができる。

〔平安時代〕

今回出土した10世紀後半から11世紀初頭にかけての資料は、町内において稀有な存在であり、10世紀後半から奥州藤原時代の間を埋める貴重な存在と考えることができる。

〔奥州藤原時代〕

12世紀前半に属するかわらけが出土したことや12世紀後半に属する和鏡や陶磁器が溝や井戸などの遺構に伴って出土したことは、奥州藤原氏の時代の北上川東岸地域にも同氏の関連相当施設などがあったことを推測させ、その域を超えるものではないと思われる。また、本遺跡と同様な沖積地上に立地する周辺の遺跡を調査することで、北上川西岸域の中心である柳之御所から見渡せる北上川東岸地域との関係が明らかになると思われる。

引用参考文献

相原　康二　1997「岩手県における弥生時代の石器器種組成」　『考古学古代史論攷』　伊藤信雄先生追悼論文刊行会

井上　雅孝　1996　「岩手県における古代末期から中世前期の土器様相（素描）」　中近世土器の基礎研究Ｘ１

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1985　『高玉遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財調査報告書第93集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1997　『瀬原Ｉ遺跡第２次・第３次発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財調査報告書第257集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995　『柳之御所跡発掘調査報告書』　岩手県埋蔵文化財調査報告書第228集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1979　『泉屋遺跡発掘調査報告書』　岩手県埋蔵文化財調査報告書第184集

岩手県教育委員会　1980　「鳥海Ａ遺跡」　『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ｘ』

小田野　哲憲　1982　「弥生時代」　『岩手の土器』　岩手県立博物館

菊池　誠一　1987　「平安時代の集落遺跡出土鏡の性格」　『物質文化』

久保　智康　1999　『中世・近世の鏡』　日本の美術３　至宝堂

須藤　隆　1990　「東北地方における弥生文化」　『考古学古代史論攷』　伊藤信雄先生追悼論文刊行会

天王山式シンポジウム　1990　『「天王山式期をめぐって」の検討会』

中野　政樹 1969　『和鏡』　日本の美術10・11　至宝堂

中村　五郎 1976　「東北地方南部の弥生式土器編年」　『東北考古学の諸問題』　東北考古学会

禰宜田　佳男　1993　「東北の弥生石器」　『弥生文化博物館研究報告』　第２集

平泉町教育委員会　1992　『平泉遺跡群発掘調査報告書』　岩手県平泉町文化財調査報告書第29集

平泉町教育委員会　1993『白山社第２次発掘調査報告書』　岩手県平泉町文化財調査報告書第30集

平泉町教育委員会　1997　岩手県平泉町内出土の古代～中世の鏡（資料）

平泉町教育委員会　1996『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書』　岩手県平泉町文化財調査報告書第51集

前田　洋子　1986　「和鏡の用途について」　『歴史における政治と民衆』　日本史論叢会

前田　洋子　1987　「平安後期出土鏡の研究序説」　『東アジアの考古と歴史　下』

松本　建速　1995　「かわらけの形態分類と編年」　『柳之御所跡』　岩手県埋蔵文化財調査報告書第228集

水沢市教育委員会　1974　『水沢市史』

八木　光則　1993　「陸奥中部における古代末期の土器群」　『歴史時代土器研究』　第８号

第11章　各種鑑定と自然科学分析

1．　平泉周辺出土の和鏡ついて

杉山　洋（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館）

はじめに

柳之御所をはじめとする最近の発掘調査によって、平泉周辺から多くの和鏡が発見されるようになった。加えて、平泉町教育委員会の調査によって、鏡と考えられる鋳型の発見も報じられており、当該地域における和鏡をまとめて論じる必要性が生じてきている。

本稿は直接的には岩手県埋蔵文化財センターが行った里遺跡の調査で出土した２面の和鏡の位置付けに端を発しているが、考察の多くを1997年９月に行った調査結果に依っている。本調査は関西在住の鏡研究者を中心に、不定期で行っている研究会が実施したものである。岩手県埋蔵文化財センターの村木敬氏、菅原靖男氏、平泉町教育委員会菅原幹成氏、及川司氏、八重樫忠郎氏、鏡研究会の久保智康氏、前田洋子氏に感謝の意を表したい。

１．平泉町での和鏡の出土例

これまで平泉町内で出土した和鏡は下記11面に達する。

	遺跡名	鏡式	面径(cm)	出土遺構	年代	文献
1	柳之御所24次	秋草双鳥鏡	10.9	窪み	12世紀後半	平泉町19集・38集
2	柳之御所31次	松双鶴鏡	11.5	ＳＥ２の底部	12世紀後半	岩手県228集
3	柳之御所20次	鏡片		黒褐色土層	平泉町15集	
4	柳之御所28次	八稜鏡破片		28ＳＥ９の下層	12世紀後半	岩手県228集
5	柳之御所	鏡片				
6	伽羅之御所５次	山水飛雁鏡	10.2	井戸底	12世紀中頃	
7	白山社遺跡	花枝双雀鏡	11.8	白山社前提苑地跡	12世紀中頃	
8	中尊寺40次	唐草双鳥五花鏡		下層整地層	11世紀末～12世紀前葉	平泉町53集
9	泉屋遺跡	瑞花双鳥鏡	7.7	表土直下	岩手県247集	
10	里遺跡	草花双鳥鏡	11.6	ＳＤ01中層	12世紀後半	
11	里遺跡	松鶴鏡		ＳＤ01中層	12世紀後半	

これらの中で、破片で鏡式の詳細でない３、５と11を除くと、鏡式で大きく１、２、６、７、10の円形和鏡と、４の瑞花双鳥八稜鏡、８の唐草双鳥五花鏡、９の多度式鏡に大きく分けることができよう。

この中で、鏡の年代から考えると８と９をいずれも12世紀後半の範囲で考えることができる。８が伴出土器から11世紀末から12世紀前葉の年代が与えられており、藤原清衡の長治２年（1105）中尊寺の建立にほぼ相当する時期に当たる。平泉地方への和鏡の搬入は中尊寺の建立を契機とした12世紀前葉と考えることができる。

その後12世紀中頃に伽羅之御所の山水飛雁鏡が、梅樹文金蒔絵鏡箱を伴って出現する。同時に白山社遺跡でも苑地への鏡の奉納が始まっている。この時期から12世紀後半までの半世紀間が平泉への本格的な和鏡導入期である。その時期である６と７の２例において既に平泉での和鏡受容の特徴が顕在化している。６の伽羅之御所出土の山水飛雁鏡は、梅樹文金銀蒔絵鏡箱を伴っており、京都から鏡箱を伴って平泉へ搬入された和鏡と推定される(1)。対して７の花枝双雀鏡は文様構成などに京都産和鏡との違いが見られる。詳細は後述するがこの時期から平泉における和鏡の生産が始まったものと考えられる。12世紀中頃に京都からの和鏡の搬入と平泉における和鏡生産という、対象的な特徴が現出している点に注目しておきたい。

12世紀後半には柳之御所での和鏡の出土が増え、平泉での和鏡が使用本格化する。鏡式の違いでは円形和鏡が主体を占める中、４の柳之御所出土の八稜鏡は唯一の平泉出土の八稜鏡で、ＶＩ類八稜鏡に分類することができる(2)。現状ではＶＩ類以前の八稜鏡は出土を見ない。また同じ時期の羽黒山鏡群にも八稜鏡は非常に少ない(3)。対して栃木県男体山山頂遺跡からはＶ類を中心とする大量の八稜鏡が出土している(4)。12世紀前半から中頃に平泉出土鏡の中に八稜鏡がない点は羽黒山と同様に、八稜鏡と和鏡の流通に地域的な違いがあったことを物語っている。

主体となる円形和鏡では柳之御所と里遺跡からの出土品が当該期に属する。この時期にも12世紀中頃に始まる京都からの搬入品と平泉での生産品との２様のあり方が継続し、柳之御所出土の１・４が京都からの搬入和鏡、柳之御所の２と里遺跡の２面が平泉の製品と推定される。

２．平泉での生産和鏡

先に指摘したように平泉出土和鏡には、京都からもたらされた和鏡と、平泉で生産和鏡との２様相が見られる。ここでその違いを論じておきたい。

京都産和鏡と推定されるのは、１秋草双鳥鏡と６の梅樹文金銀蒔絵鏡箱を伴った山水飛雁鏡である。この２鏡はいずれも羽黒鏡群中に類似した文様構成の鏡を見いだすことができる。羽黒鏡群はその文様構成など鏡自体の特徴から京都からもたらされた鏡群と考えられており(3)、類似する平泉出土鏡も京都からの搬入品と考えることができる。

平泉産和鏡と推定されるのは２松双鶴鏡、７花枝双雀鏡、10花草双鳥鏡の３面である。２松双鶴鏡は主文を双鶴としたが、一般的な松喰鶴文の鶴とは表現が異なる。周囲の樹枝文が松枝と見えることから松鶴鏡と考えたが、主文の特異性は注目できる。さらに本鏡は一般的な和鏡と比べて鏡胎が厚い。

７花枝双雀鏡（以後：白山社鏡）、10花草双鳥鏡（以後：里遺跡鏡）の２面は単位文様に類似が見られるとともに、京都産和鏡に見られない特徴を示す。まず両鏡とも主文は鈕の周りを旋回する２羽の鳥文である。両者飛行の方向が反対であるが、鳥文の大きさや羽の広げ方が類似している。里遺跡鏡では破損と腐食のため文様がはっきりしないが、Ｘ線写真では比較的はっきりと認めることができる。里遺跡鏡で２単位求められらる花文は、白山社鏡で内区全体に６単位配置されている花文と類似している。また白山社鏡では外区の文様が蝶文を主体とする３単位の花文で構成される。里遺跡鏡でも同様の構成がわずかに見て取れる。以上

記した文様の諸特徴はいずれも京都産和鏡には見られない特徴であり、以上３鏡を平泉産とする根拠である。平泉での和鏡生産を肯定する遺物として、志羅山遺跡第37次調査で出土した鋳型がある。1997年の研究会による調査のおりに拝見することができ、諸子一致して円形和鏡の粗型と考えられた。この他に椀型・華瓶の肩部などと思われる鋳型を伴っている。伴出土器から12世紀後半の年代が推定され、先に出土鏡から推定した平泉における和鏡生産の様相と一致する。７の白山社遺跡からは12世紀第３四半期の梵鐘鋳造遺構も発見されており、当該期に和鏡や梵鐘をはじめとする多種の青銅製品の生産が平泉で勃興した様子が知られる。

注

(1)以後の京都産和鏡と平泉産和鏡の違いは、冒頭に述べたように、1997年９月に行った鏡研究会の現地見学の折りに、研究会会員諸子の見解をまとめたものである。

(2)杉山洋「出土八稜鏡の研究」『ＭＵＳＥＵＭ』第481号　1991

(3)前田洋子「羽黒鏡と羽黒山頂遺跡」　『考古学雑誌』第70巻第１号　1984によれば、平安時代の鏡の内、円形和鏡319面に対し、八稜鏡は４面にすぎない。

(4)日光二荒山神社　『日光男体山』　1963

２．平泉町里遺跡出土和鏡の分析について

元興寺文化財研究所

１．調査対象

No.１　　和鏡

No.２　　和鏡

２．内容

表面から非破壊で、ケイ光Ｘ線分析（以下ＸＲＦ）による元素分析を行った。各遺物数カ所ずつ分析を行い、そのうち代表的なポイントを写真１、２に示した。

３．使用機器及び測定条件

●エネルギー分散型ケイ光Ｘ線分析装置（セイコーインスツルメンツ(株)ＳＥＡ５２３０）

試料の微小領域にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光Ｘ線を検出するとにより元素同定する。

モリブデン管球使用、大気条件下、コリメータ1.8mm、管電圧45kV

４．結果

ＸＲＦスペクトルは図１～４に示した。

No.１の①の赤色部分とその周辺部分とを比較すると赤色部分は鉄（Fe）を多く含んでいた（図１）。

赤　色顔料が付着していたとすれば、ベンガラ（酸化第二鉄（Fe_2O_3））

No.１、２共に、ＸＲＦで検出されたのは主に（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）であり、、鉛を含む青銅鏡である。他に鉄（Fe）、銀（Ag）、ヒ素（As）、アンチモン（Sb）を検出した（図１下、図２～４）。

各遺物表面は製作時の状態から大きく変化しているので、元の組成は不明である。鉄は土壌の由来ものが主であるとみられる。銀、ヒ素及びアンチモンは、素材に含まれていたものと考えられる。

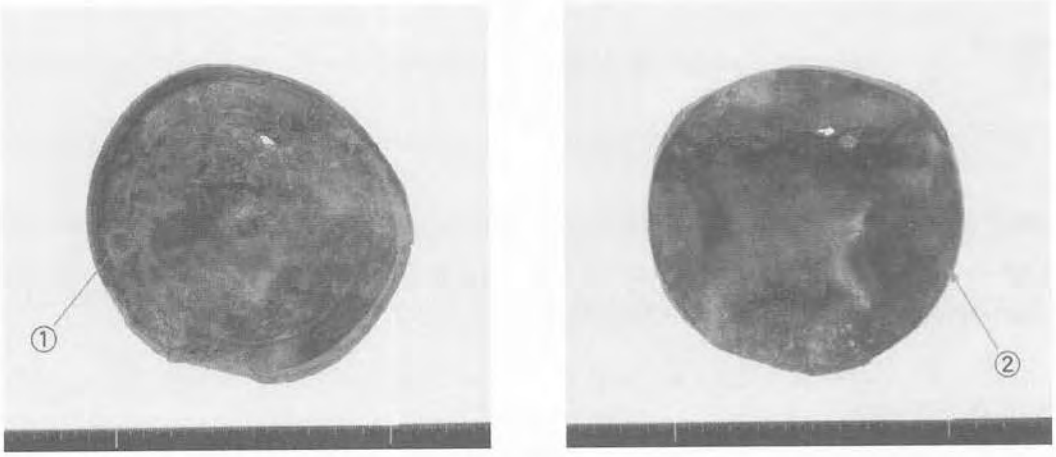


写真１　No.1 和鏡の分析箇所

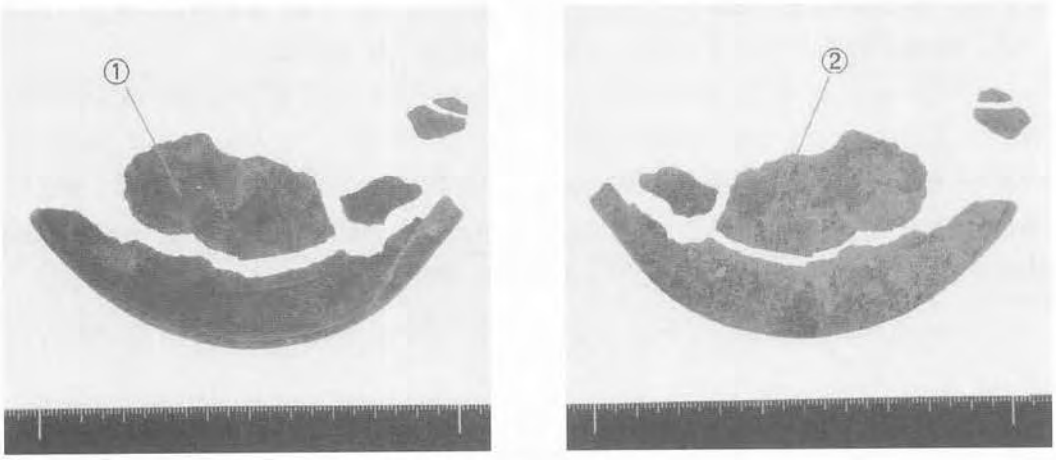
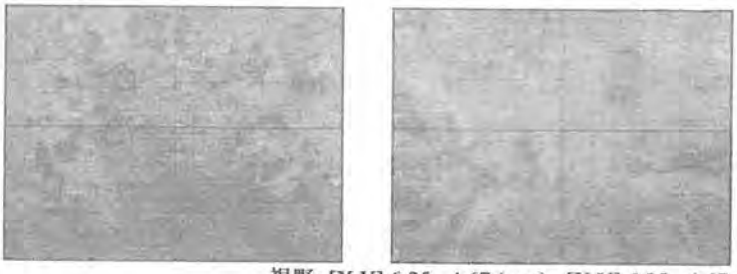


写真２　No.2 和鏡の分析箇所

［測定条件］

	A	B
測定装置	SEA5230	SEA5230
測定時間（秒）	300	300
有効時間（秒）	210	209
試料室雰囲気	大気	大気
コリメータ	φ1.8 mm	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45	45
管電流（μA）	24	24
コメント	2000-1490（財）岩手県 No.1 和鏡 鏡背・赤色部	2000-1490（財）岩手県 No.1 和鏡 鏡背・赤くないところ

［試料像］



視野: [X,Y] 6.25, 4.67 (mm), [X,Y] 6.25, 4.67 (mm)

［スペクトル］

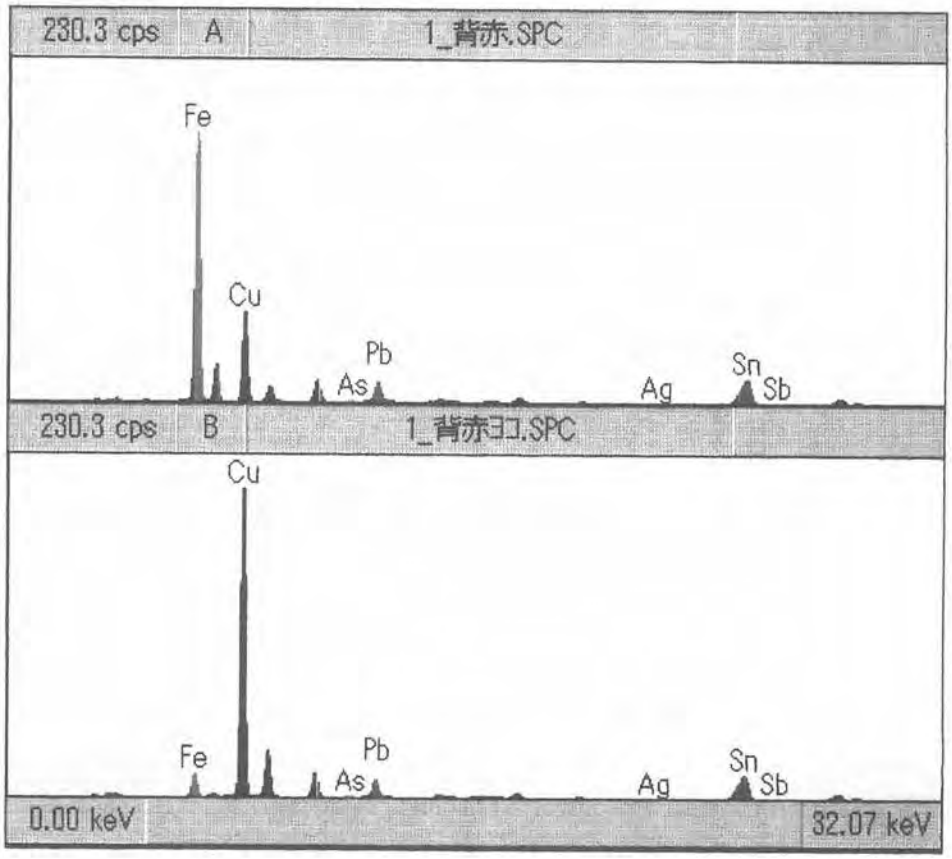
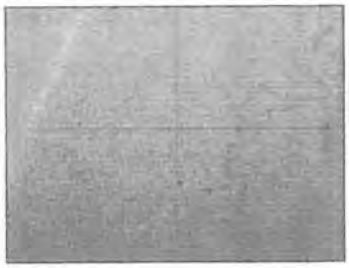


図1　No.1 和鏡 ①のXRFスペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	215
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	28
コメント	2000-1490（財）岩手県 No.1 和鏡 鏡面・灰色光沢

［試料像］



視野: [X,Y] 6.25, 4.67 (mm)

［スペクトル］

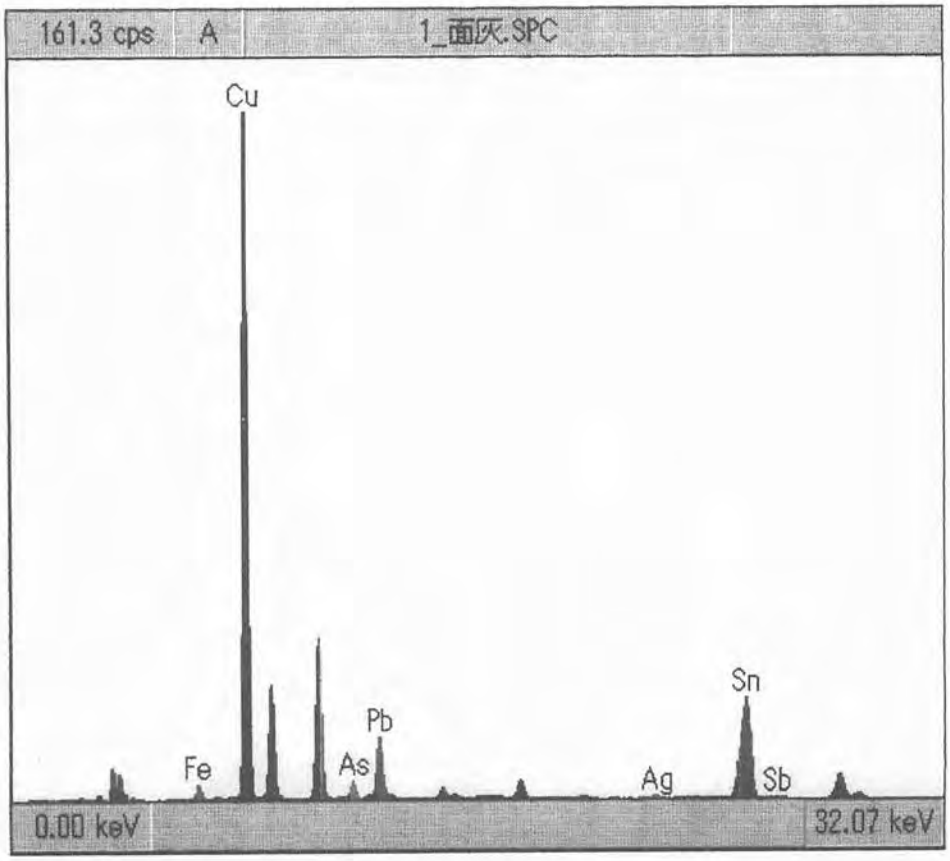
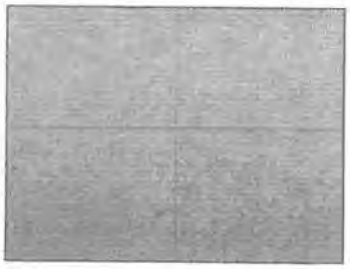


図２　No.1 和鏡 ②のXRFスペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	208
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	24
コメント	2000-1490（財）岩手県 No.2 和鏡 鏡背･灰色部1

［試料像］



視野: [X,Y] 6.25, 4.67 (mm)

［スペクトル］

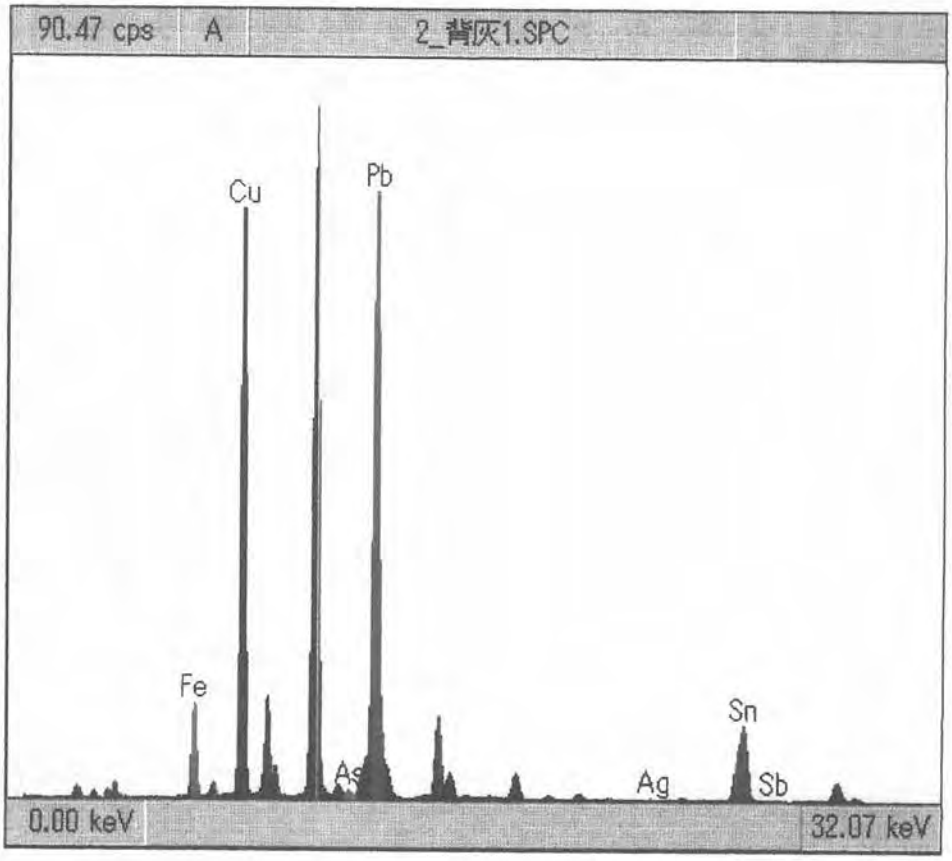


図３　No.2 和鏡 ①のXRFスペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	214
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	16
コメント	2000-1490（財）岩手県 No.2 和鏡 鏡面・黒色部

［試料像］

視野: [X,Y] 6.25、4.67 (mm)

［スペクトル］

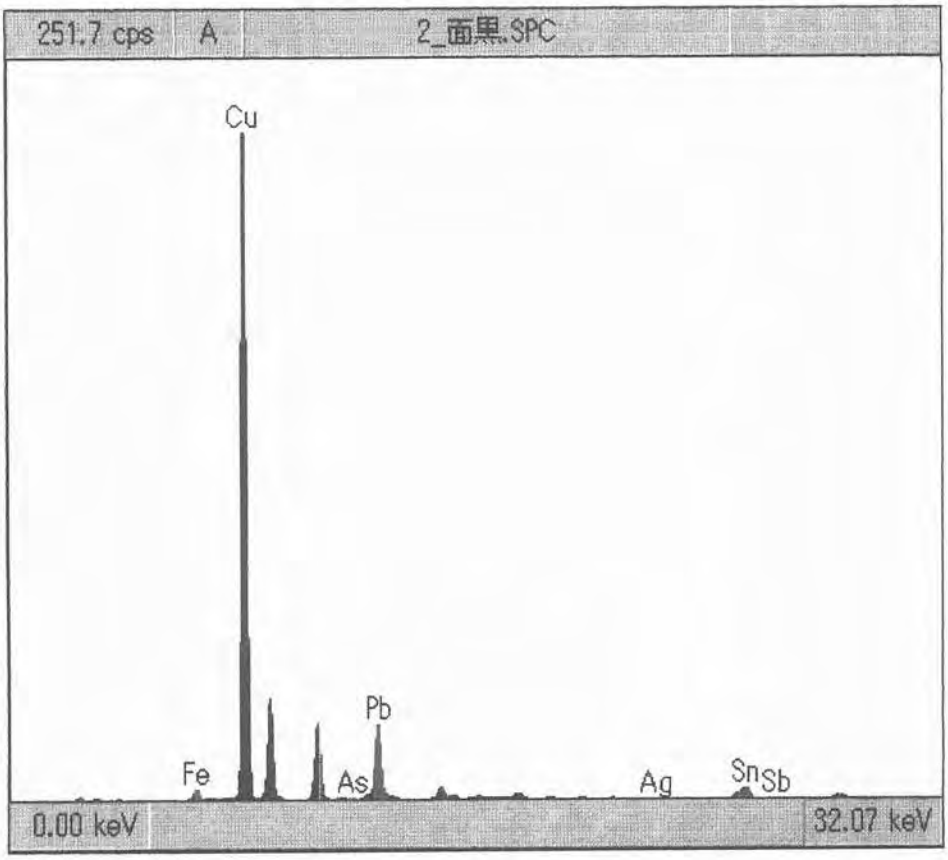


図4　No.2 和鏡 ②のXRFスペクトル

３．平泉町里遺跡トイレ状遺構の内容物について

パリノ・サーベェイ株式会社

はじめに

本遺跡は、岩手県平泉町に所在し、北上川東岸の沖積地の微高地上に立地している。今回の発掘調査は、ほ場整備事業に伴う用・排水路の埋設部分を対象にしており、東西に細長い調査区より縄文時代～弥生時代の陥し穴や近世の建物跡など、多くの遺構・遺物が検出されている。今回の分析調査では、検出された３遺構（SK01、SK03、SK04）についてトイレ状遺構かどうかを検証するため、花粉分析・寄生虫卵分析・種実同定を行う。

１．試料

分析対象とした地点はＢ地区SK01・Ｅ地区SK03・Ｅ地区SK04の３地点で、それぞれの遺構断面を図１に示す。分析試料は、Ｂ地区SK01の３層・６層、Ｅ地区SK03の８層・21層・28層・36層、同じくSK04の６層・10層・14層より採取された土壌試料、９点である。

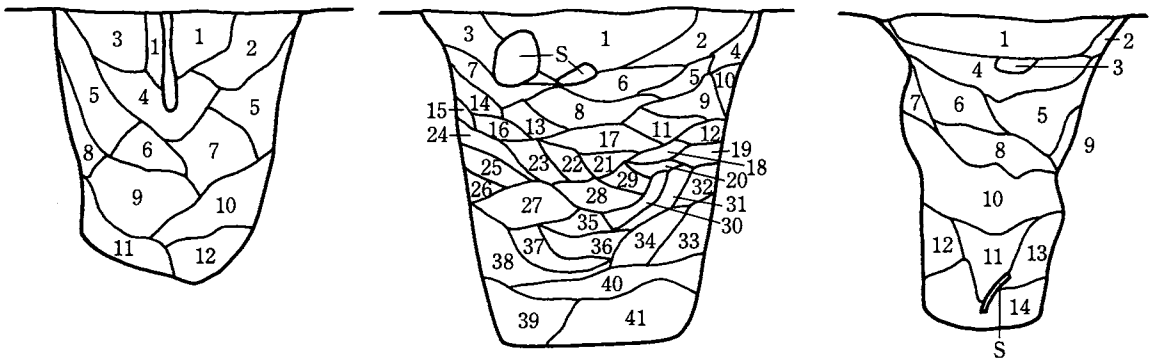


図１　遺構断面図

２．分析方法

（１）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥下、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理の順に、物理・科学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。表中で複数の種類をハイ

フォンで結んだのは、種類管の区別が困難なものである。

（2）寄生虫卵分析

試料15ccを量りとり、重さを測定して分析試料とする。これについて、水酸化カリウムによる泥下、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理の順に、物理・科学的処理を施して花粉を濃集する。残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。なお、分析過程の各所で重量や容積の測定を行い、堆積物1ccあたりの検出個数を求められるようにする。

（3）種実同定

種実同定には、今回送付された土壌は多いもので300g程度と比較的少量であったが、種実同定は多量の試料を必要うとする。このため、花粉分析・寄生虫分析が終了した残試料のほとんど全てを分析に用いた。秤量後、数%の水酸化ナトリウム水溶液を入れて放置し、試料を泥化させる。1.5mmの篩を通して水洗し、残渣を集める。残渣を双眼実体顕微鏡で観察し、種実遺体抽出・同定する。

3．結果

（1）花粉分析

結果を表1に示す。花粉・胞子はほとんど産出せず、産出した化石の保存状態も良くなかった。プレパラート内の状況写真を図版に示す。

（2）寄生虫卵分析

全試料を通じて、1個体も認められなかった。

（3）種実同定

結果を表2に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

・イネ（Oryza sativa L.）　イネ科イネ属

炭化した胚乳が検出された。大きさ4mm程度。楕円であるが、胚の痕跡部分が欠けたように見える。表面には数本の筋がみられる。

・アワーヒエ（Setaria itarica Beave. -Echinochloa crus-galli Beauve）　イネ科

炭化した胚乳が検出された。円盤形で大きさは1mm程度。一端にへそがあるので、欠けたように見える。

表1　花粉分析結果

種類	B区 SK01		E区 SK03				E区 SK04		
試料番号	4	7	8	21	28	36	6	10	14
木本花粉									
マツ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
スギ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ブナ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ニレ属ーケヤキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉									
イネ科	1	3	1	1	-	4	2	1	1
クワ科	-	-	-	1	-	-	-	-	1
アブラナ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-
フウロソウ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-
不明花粉	-	1	-	-	-	-	1	2	-
シダ類胞子									
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-
他のシダ類胞子	1	6	8	4	5	-	6	6	1
合計									
木本花粉	1	0	0	0	1	2	0	0	1
草本花粉	2	3	1	2	0	5	2	2	2
不明花粉	0	1	0	0	0	0	1	2	0
シダ類胞子	1	6	8	4	6	0	6	6	1
総計（不明を除く）	4	9	9	6	7	7	8	8	4

表2　種実同定結果

試料名			重量(g)	種類名（個数）
B区	SK01	4	30.2	未検出
		7	48.4	未検出
E区	SK03	8	150.9	不明（破片）
		21	102.6	アワーヒエ（1）
		28	248.2	不明（破片）
		36	146.0	イネ（1），アワーヒエ（8）
	SK04	6	116.4	アワーヒエ（2）
		10	142.9	アカザ科（1）
		14	107.1	未検出

・アカザ科（Chenopodiaceae）

種子が検出された。黒色。測面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは1mm程度。側面「へそ」がある。表面は細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

4．考察

今回の分析試料からは、遺構の内容物などを検証するに充分な数の花粉化石は検出されなかった。おそらく各土層堆積時に取り込まれた花粉が、その後の年数変化により分解・消失したと思われる。また、これらの遺構がトイレであったかどうか明らかにするために寄生虫卵分析を行ったが、寄生虫卵は1個体も確認されなかった。トイレ遺構の検証例については、静岡県の河合遺跡や石川県の大宮坊跡などがあり、1㎤あたり1万～数万個の寄生虫卵が検出されている（金原ほか，1995a，b）。また、1㎤3あたり100未満については、ある程度の人口密度を持つ集落による汚染の範囲内とみなされている（金原ほか，1995a，b）。

一方、トイレ遺構内から検出される種実の組成の特徴は、種実ごとに果肉を食する種類（メロン類、ブドウ属、キイチゴ属など）の種実が糞便とともに排泄されるため、これらの密度が非常に高くなると言われている（金原・金原，1992）。今回の分析結果で検出された有用植物はイネとアワーヒエであるが、炭化していることなどから、糞便中の食物残渣の一部とは考えられない。おそらく、今回検出された種実は、遺構廃絶後の埋積過程で混入したものである可能性がある。遺構覆土の埋積が、遺構が機能していた時期と大きな時間的隔たりがないと過程すれば、アカザ科は当時生育していた周辺植生に、イネやアワーヒエは当時利用されていた植物質食料にそれぞれ由来すると思われる。

以上より、今回の花粉分析・寄生虫卵分析・種実同定の結果のみから、各遺稿の内容物に関する検証することは難しく、トイレ遺構を含め、遺構の性格や機能について情報をえることができなかった。

なお、本遺跡は微高地上に位置するため、酸化的状況下にある。このような場合、仮に遺構覆土中に糞便の一部が含まれていたとしても、寄生虫卵や花粉化石・種実遺体などが酸化分解や土壌微生物によって分解・消失する可能性があり、遺構の用途に関する情報を得られにくい場合が多い。このような土壌の場合、土壌中での移動が少ないリン酸や、土壌中での分解に強い脂質やステロール組成を把握するとよい結果が得られることがある。ともに屎尿には多量に含まれる成分であることから、その含量や組成を調べ、地山などと比べることによって屎尿の存在について検証できる可能性もある。なお、このような分析調査によって遺構の性格を明らかにするためには、さらに遺構覆土の詳細な埋積過程を復元することが望まれる。

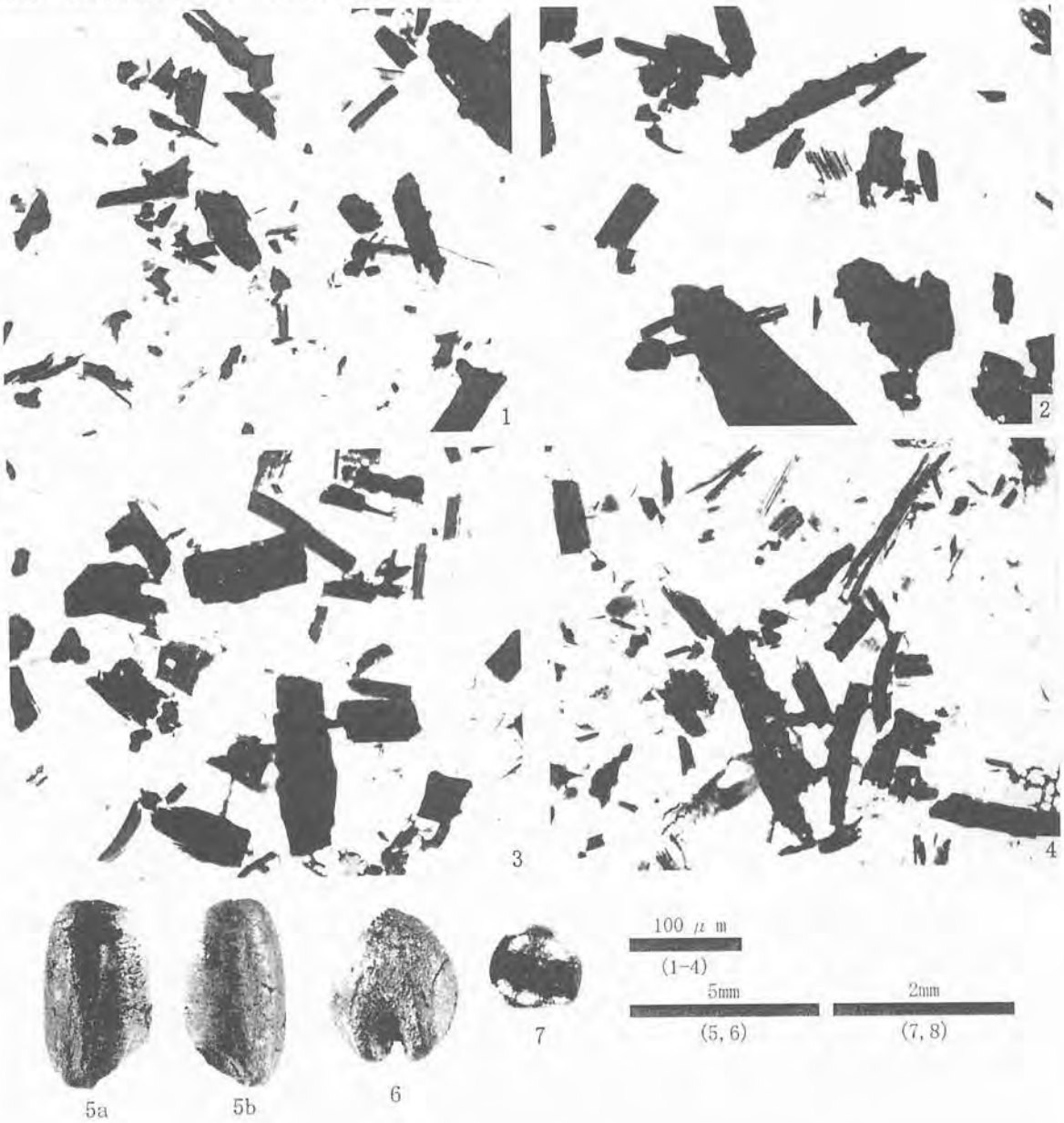
引用文献

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫.「藤原京跡の便所遺構　－右京七条－坊西北坪－」，p12-14，奈良国立文化財研究所.

金原正明・金原正子・中村亮仁（1995a）大宮坊（厠跡）における自然科学的分析.「史跡石動山環境整備事　業報告II」，p51-70，石川県鹿島町教育委員会.

金原正明・金原正子・中村亮仁（1995b）河合遺跡八反田地区SE402・SE405における寄生虫卵・植物遺体分析. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第63集「河合遺跡八反田地区II」本文編，p341-354，静岡県埋蔵文化財調査研究所.

図版　花粉分析プレパラート内の状況・種実遺体



1.状況写真（E区SK04;6層）
2.状況写真（E区SK03;21層）
3.状況写真（B区SK01;8層）
4.状況写真（B区SK01;3層）
5.イネ（E区SK03;36層）
6.アワーヒエ（E区SK03;36層）
7.アカザ科（E区SK04;10層）

4．平泉町　里遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1．試料と方法

試料名	遺構・地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	ＳＫＯ３	炭化材	酸-アルカリ-洗浄, ベンゼン合成	β線計数法 (液体シンチレーション法)
No.2	ＳＫＯ４	炭化材	酸-アルカリ-洗浄, ベンゼン合成	β線計数法 (液体シンチレーション法)

2．測定結果

試料名	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦）	測定No. (Beta-)
No.1	1210±80	-26.0	1200±80	交点：Cal AD 810,Cal AD 840, Cal AD 860 2σ：Cal AD 660 ～ 1000 1σ：Cal AD 710 ～ 910, Cal AD 920 ～ 960	150846
No.2	1290±80	-26.5	1270±80	交点：Cal AD 720,Cal AD 740, Cal AD 760 2σ：Cal AD 640 ～ 960 1σ：Cal AD 670 ～ 870	150847

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（１３C/１２C）。この値は、標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正１４C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動に対する補正により、暦年代（西暦）を算出した。具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定、サンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により補正曲線を作成して暦年代を算出する。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）・2σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

5）測定No.

測定は、Beta Analytic Inc.(Florida, U.S.A)において行われた。Beta-は同社の測定No.を意味する。

５．里遺跡出土炭化材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

１．試料

試料は２点で、Ｂ地区ＳＫ03，04の２基の土坑から検出されたもの各１点である。検出遺構は住居跡の可能性もあるとされるが確定していない。また、試料の性格は不明で、所属年代は現在測定中である。

遺跡は北上川左岸の河岸段丘上（標高約24m）に立地している。

２．方法

試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）３断面を作製し、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（ＳＥＭ，加速電圧10kV）で観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版を作成した。（図版１）。ＳＥＭ観察にあったては（株）ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝いたします。なお、ネガ・フィルムと残った炭化材は木工舎「ゆい」に保管されている。

３．結果

Ｂ地区ＳＫ03試料は、広葉樹（環孔材？）であったが、試料の状態が悪く断面が作成できなかったため、樹種は不明である。Ｂ地区ＳＫ04試料はケヤキに同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名・和名は「日本の野生植物大本Ｉ」（佐竹ほか 1989）にしたがい、一般的な性質につては「木の事典　第４巻」（平井 1980）も参考にした。

・ケヤキ（Zelkova serrata）ニレ科　Ｂ地区ＳＫ04試料

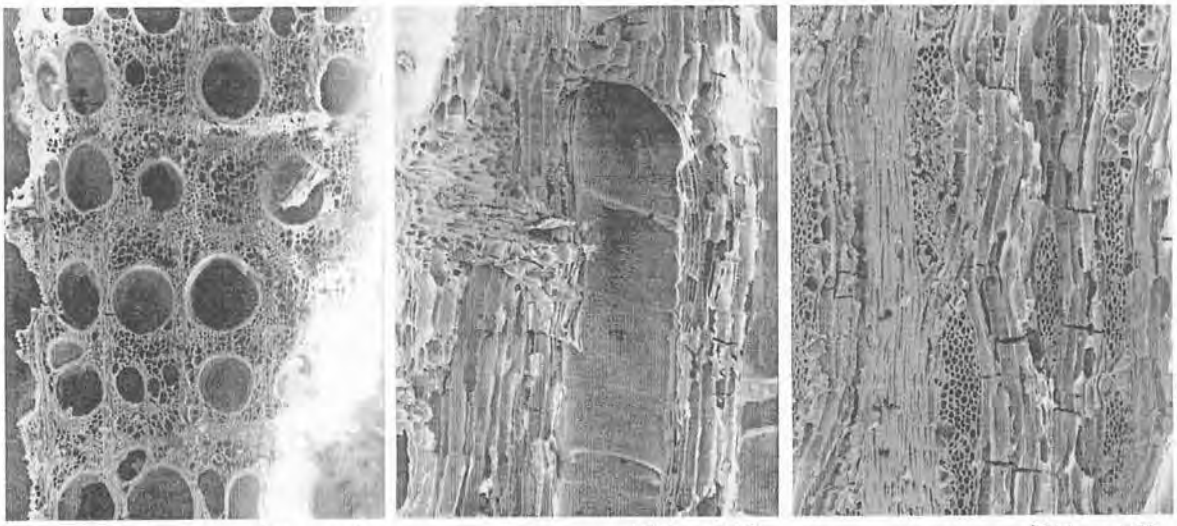
環孔材で孔圏部は１－２列、孔圏外で急激に管径を減じ、塊状に複合し接線・斜方向の文様をなす。大道管は横断面では楕円形、単独。小道管は横断面では多角形で複合環孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１－１０細胞幅、１－６０細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高５０mにもなる。材はやや重硬で、強度は大きいが加工は困難ではなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪材など各種の用途に用いられ国産広葉樹の中の最良のものの一つにあげられる。

引用文献

平井信二 1980　「木の事典　第４巻」，かなえ書房.

佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・富成忠夫（編）1989　「日本の野生植物　大木Ｉ」，平凡社，321pp.



木口　x40　　柾目　x100　　板目　x100

ケヤキ　B区SK04

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右。

写真図版

写真図版2　和鏡

写真図版3　和鏡

現在の調査区周辺

現在の調査区周辺

写真図版4　航空写真（1）

昭和43年頃の調査区周辺

戦後の調査区周辺

写真図版5　航空写真（2）

調査前風景（A地区付近、北から）

調査前風景（B・C地区付近、東から）

A地区完掘（南から）

STP01完掘（東から）

STP01断面（東から）

SK01完掘（東から）

SK01断面（東から）

配石遺構検出状況（南西から）

写真図版6　A地区遺構

配石遺構・土坑完掘（南西から）

配石遺構・土坑断面（南西から）

B地区調査前風景（南から）

B地区調査前風景（西から）

炭化粒集中1検出状況（北西から）

炭化粒集中1断面（南から）

炭化粒集中2検出状況（南から）

SK01完掘（南から）

写真図版7　A・B地区遺構

B地区完掘（西から）

B地区完掘（東から）

SI04周辺完掘（西から）

SD01周辺完掘（西から）

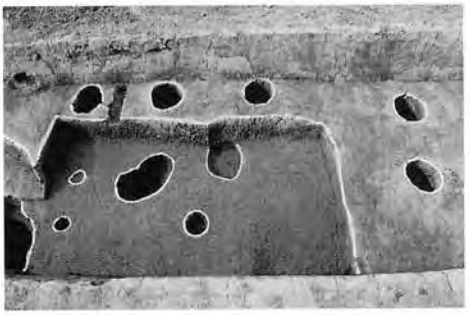
SI01東壁断面（北から）

SI01西壁断面（北から）

SI02完掘（北西から）

SI03断面（北から）

写真図版8　B地区遺構（1）



SI04完掘（南から）

SI04断面（北から）

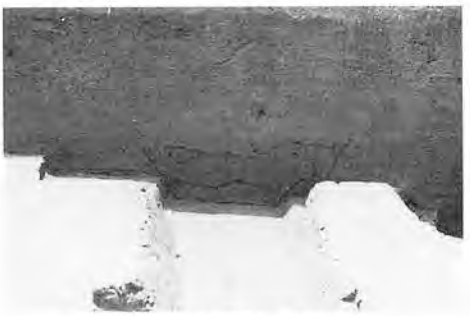
SE01検出状況（南から）

SE01断面（北から）

SX01完掘（南から）

SX01断面（西から）

SD01完掘（南から）



SD01断面（北から）

写真図版9　B地区遺構(2)

SK01完掘（東から）

SK01断面（東から）

SK03炭化材検出状況（西から）

SK03完掘（西から）

SK03断面（東から）

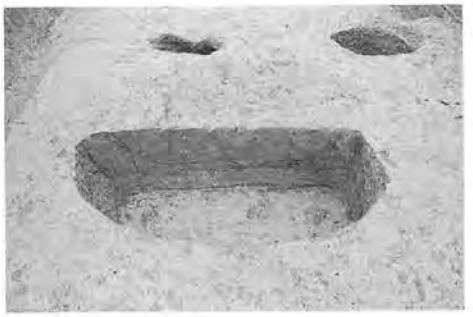
SK04完掘（北から）

SK04断面（南から）

SK04炭化材検出状況（南から）

写真図版10　B地区遺構(3)

SK06完掘（西から）



SK06断面（西から）

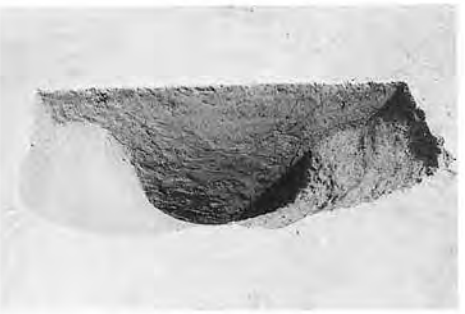
3F12グリッド遺物出土状況（西から）

3F14グリッド遺物出土状況（東から）

C地区完掘（南東から）

C地区完掘（東から）

SE01完掘（南から）

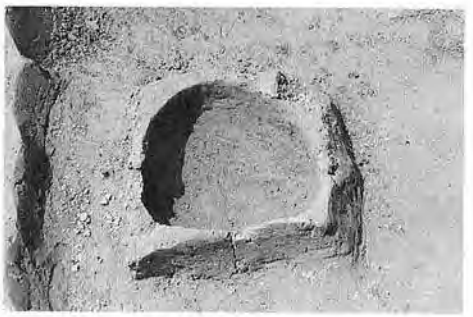


SE01断面（南から）

写真図版11　B・C地区遺構

SD01完掘（東から）

SD01断面（北から）



SX01完掘（北から）

SX01断面（北から）

SK01完掘（東から）

SK01断面（東から）

E地区完掘状況（西から）

E地区完掘状況（西から）

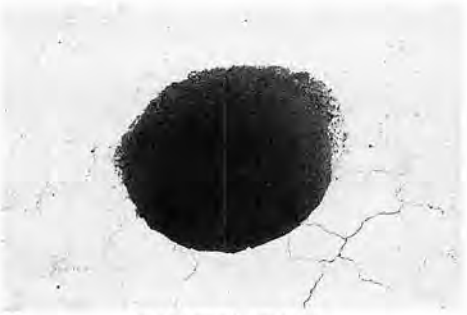
写真図版12　C・E地区遺構

SK02完掘（北から）

SK02断面（北から）

SK03完掘（東から）

SK03断面（東から）



SK04完掘（東から）

かわらけ出土状況（北から）

F地区完掘状況（東から）

F地区完掘状況（西から）

写真図版13　E・F地区遺構

SI01完掘（南東から）

SI01断面（南西から）

SI02完掘（西から）

SI02断面（西から）

SI03完掘（北西から）

SI03断面（北東から）

SI03遺物出土状況（北西から）

SI03遺物出土状況（北西から）

写真図版14　F地区遺構(1)

SI03遺物出土状況（北から）

SI03内ピット遺物出土状況（東から）

SI04完掘（西から）

SI04断面（北から）

SI05完掘（北から）

SI05断面（南から）

SD01完掘（北から）

SD01断面（北から）

写真図版15　F地区遺構(2)

SI01完掘（南東から）

SI01断面（南西から）

SI02完掘（西から）

SI02断面（西から）

SI03完掘（北西から）

SI03断面（北東から）

SI03遺物出土状況（北西から）

SI03遺物出土状況（北西から）

写真図版14　F地区遺構（1）

SI03遺物出土状況（北から）

SI03内ピット遺物出土状況（東から）

SI04完掘（西から）

SI04断面（北から）

SI05完掘（北から）

SI05断面（南から）

SD01完掘（北から）

SD01断面（北から）

写真図版15　F地区遺構(2)

SD01完掘（北から）

和鏡出土状況（SD01、北から）

和鏡出土状況（SD01、北から）

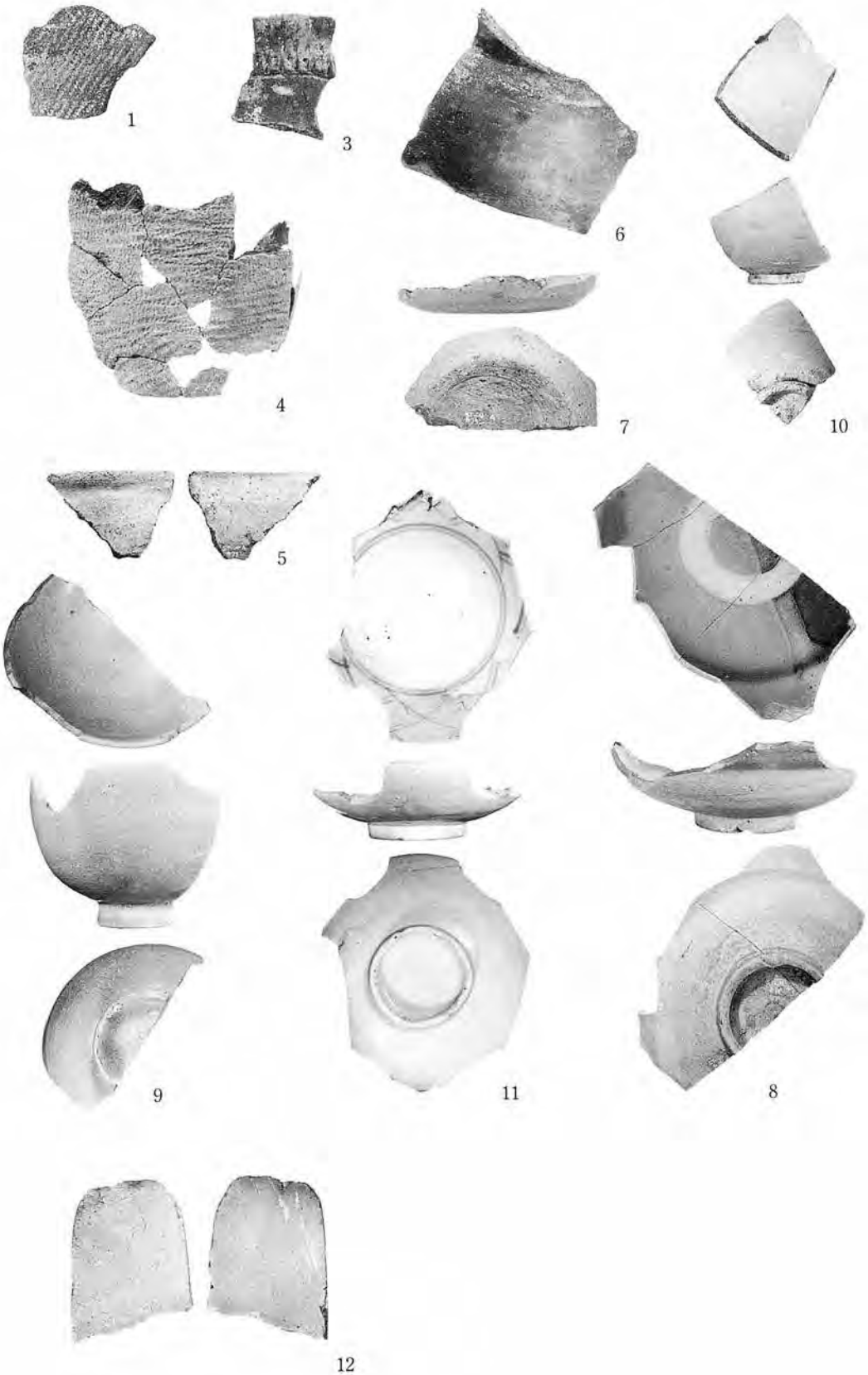
SK01完掘（東から）

SK01断面（東から）

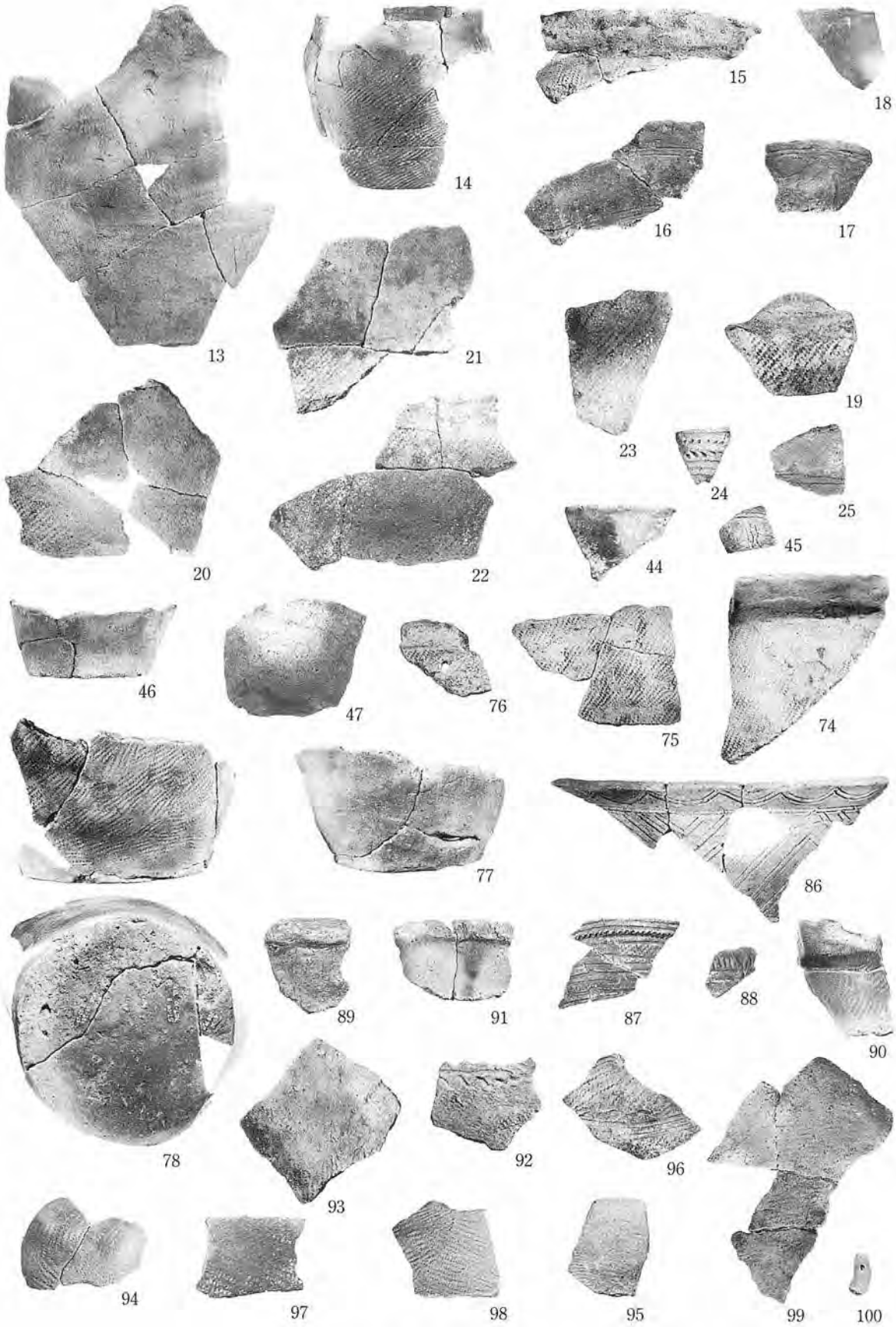
SK02完掘（北から）

SK02断面（北から）

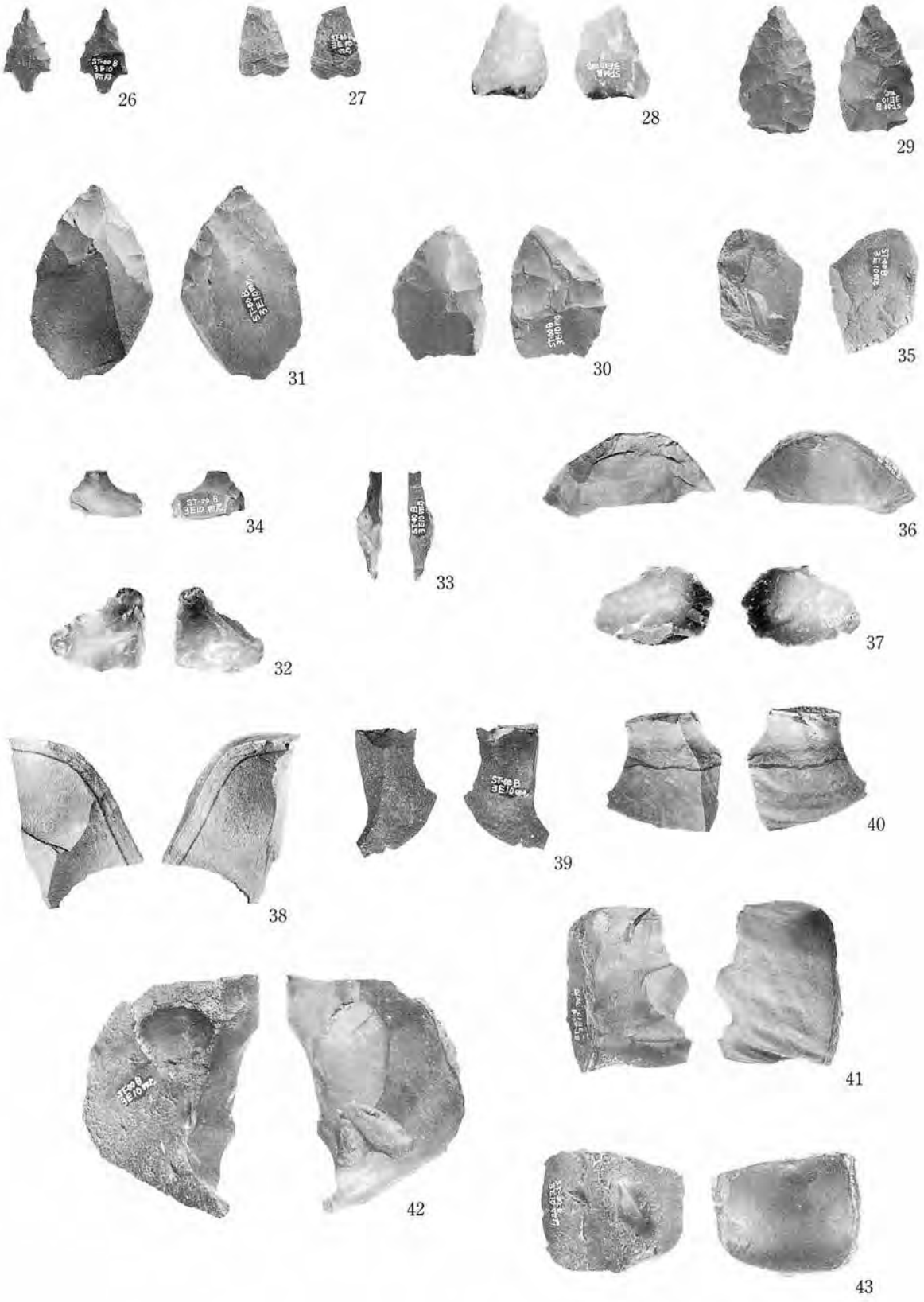
写真図版16　F地区遺構(3)



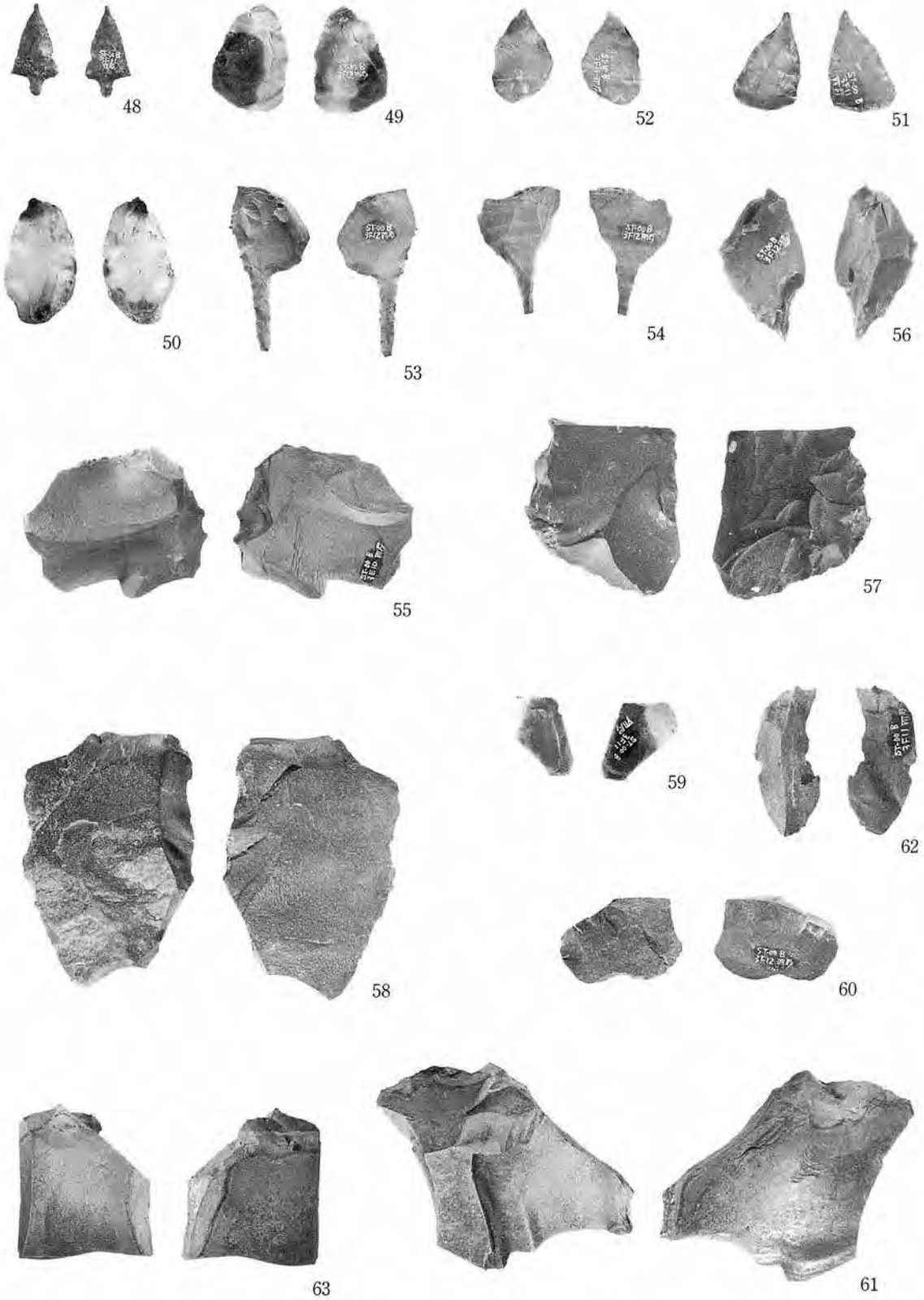
写真図版17　A地区遺物



写真図版18　B地区遺物(1)



写真図版19　B地区遺物(2)



写真図版20　B地区遺物(3)

64

66

65

67

68

69

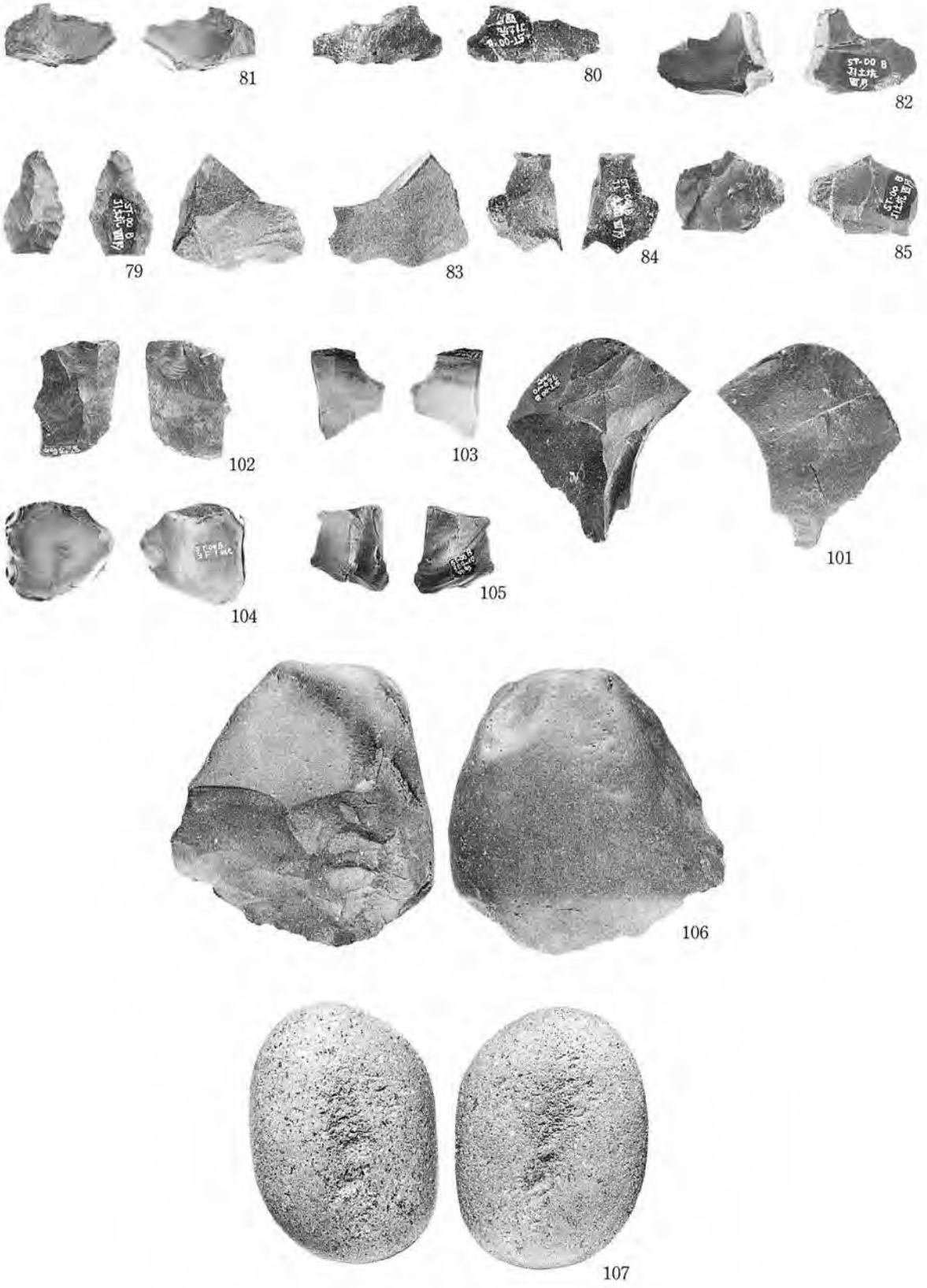
70

71

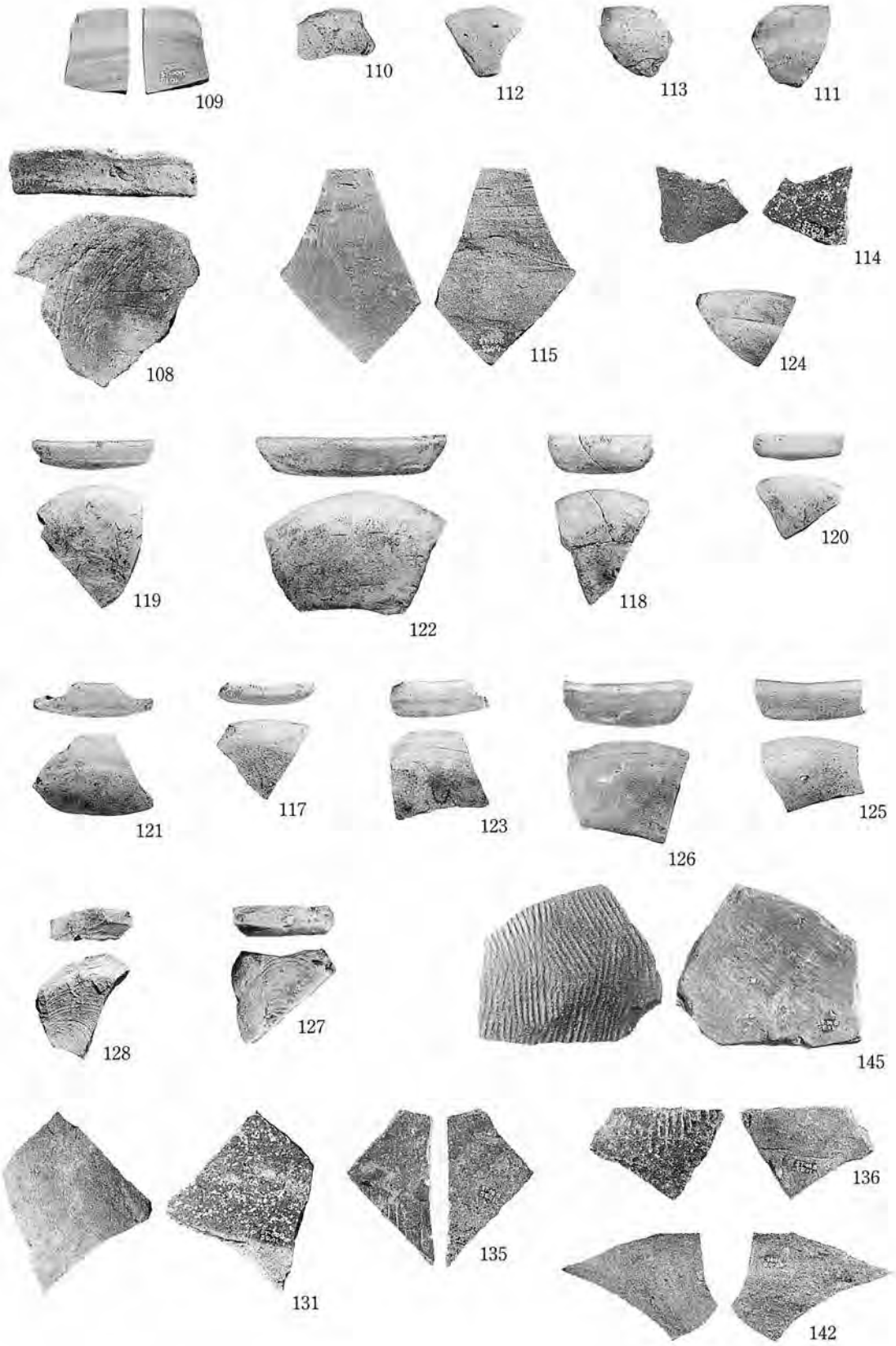
72

73

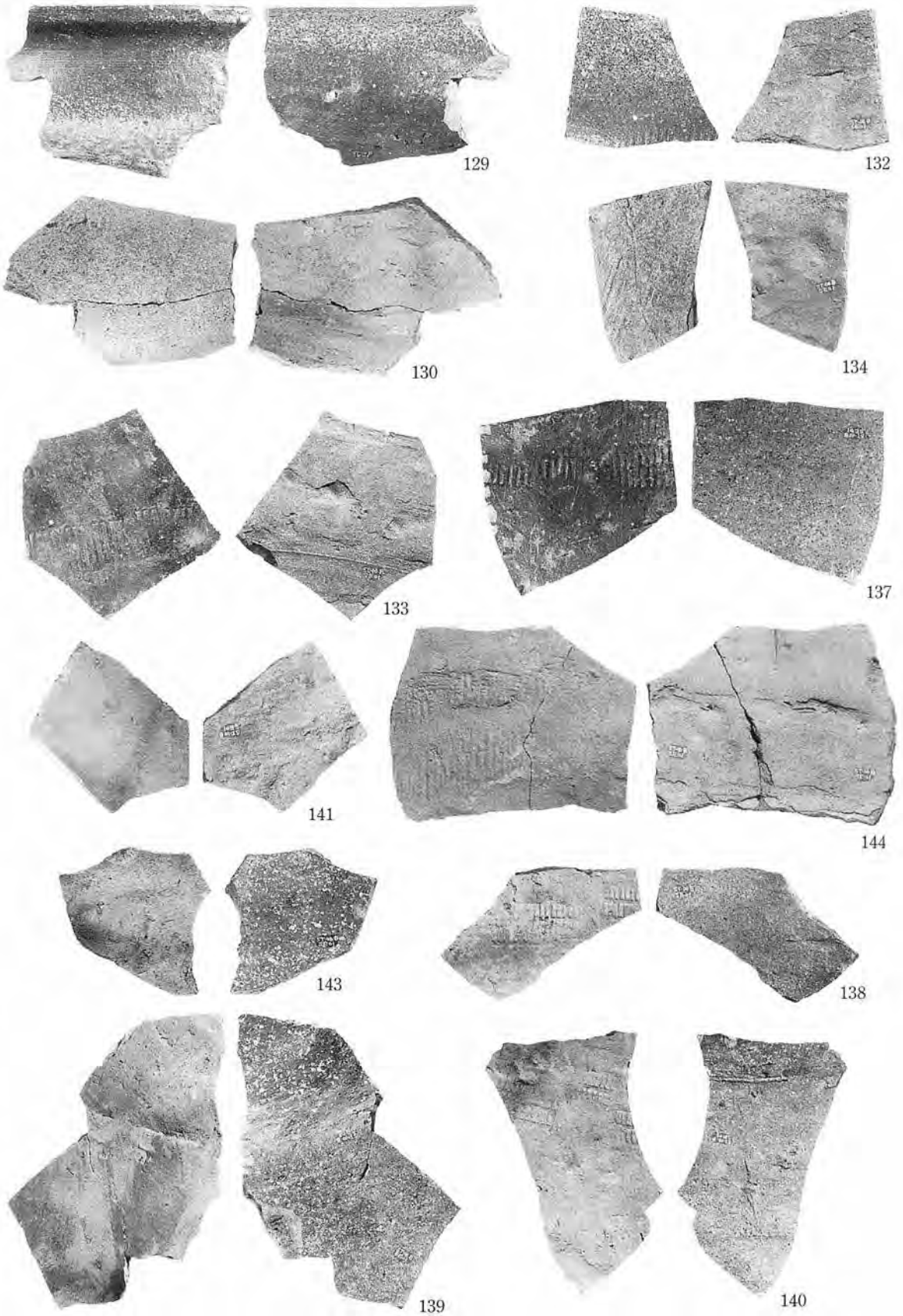
写真図版21　B地区遺物(4)



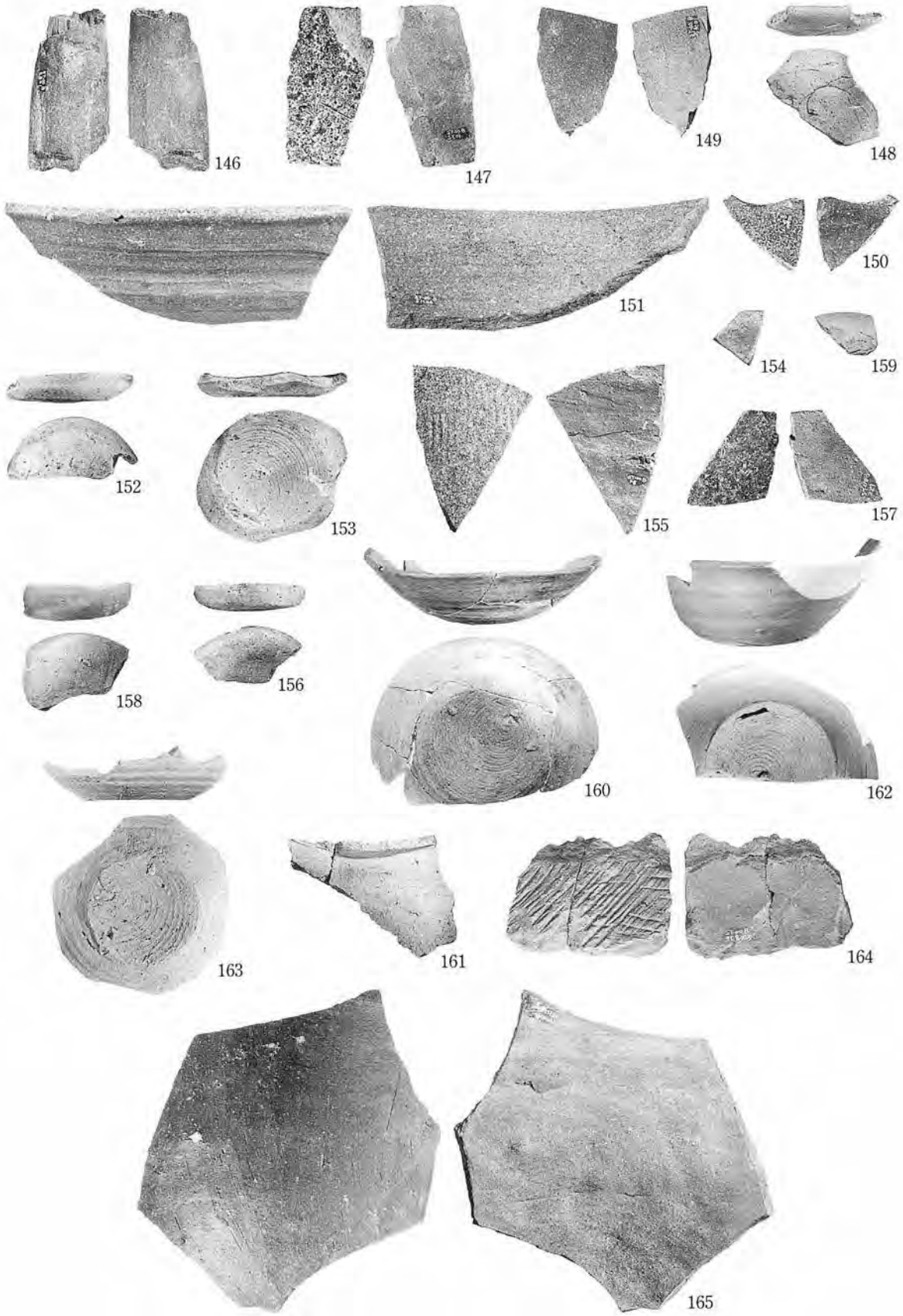
写真図版22　B地区遺物(5)



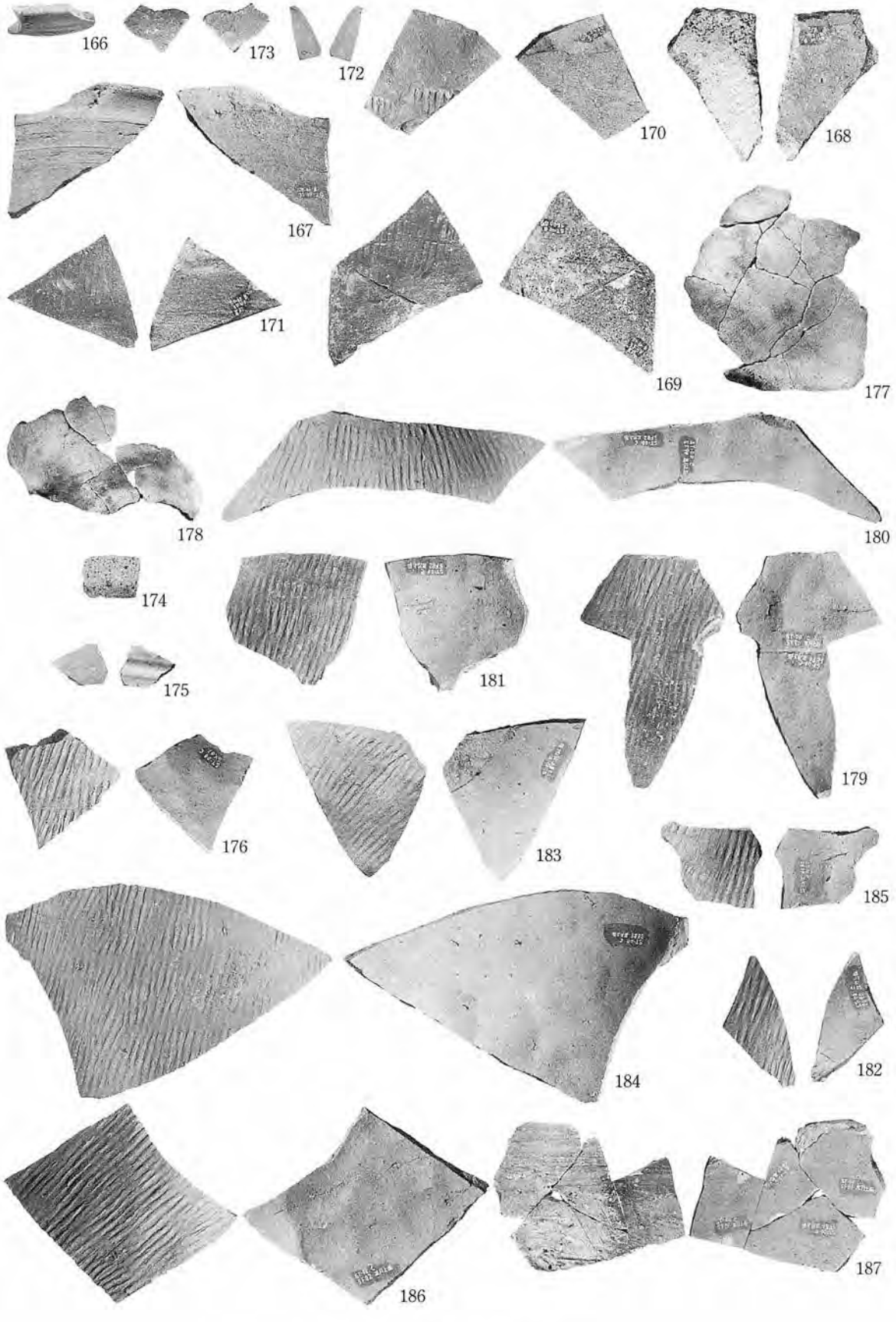
写真図版23　B地区遺物(6)



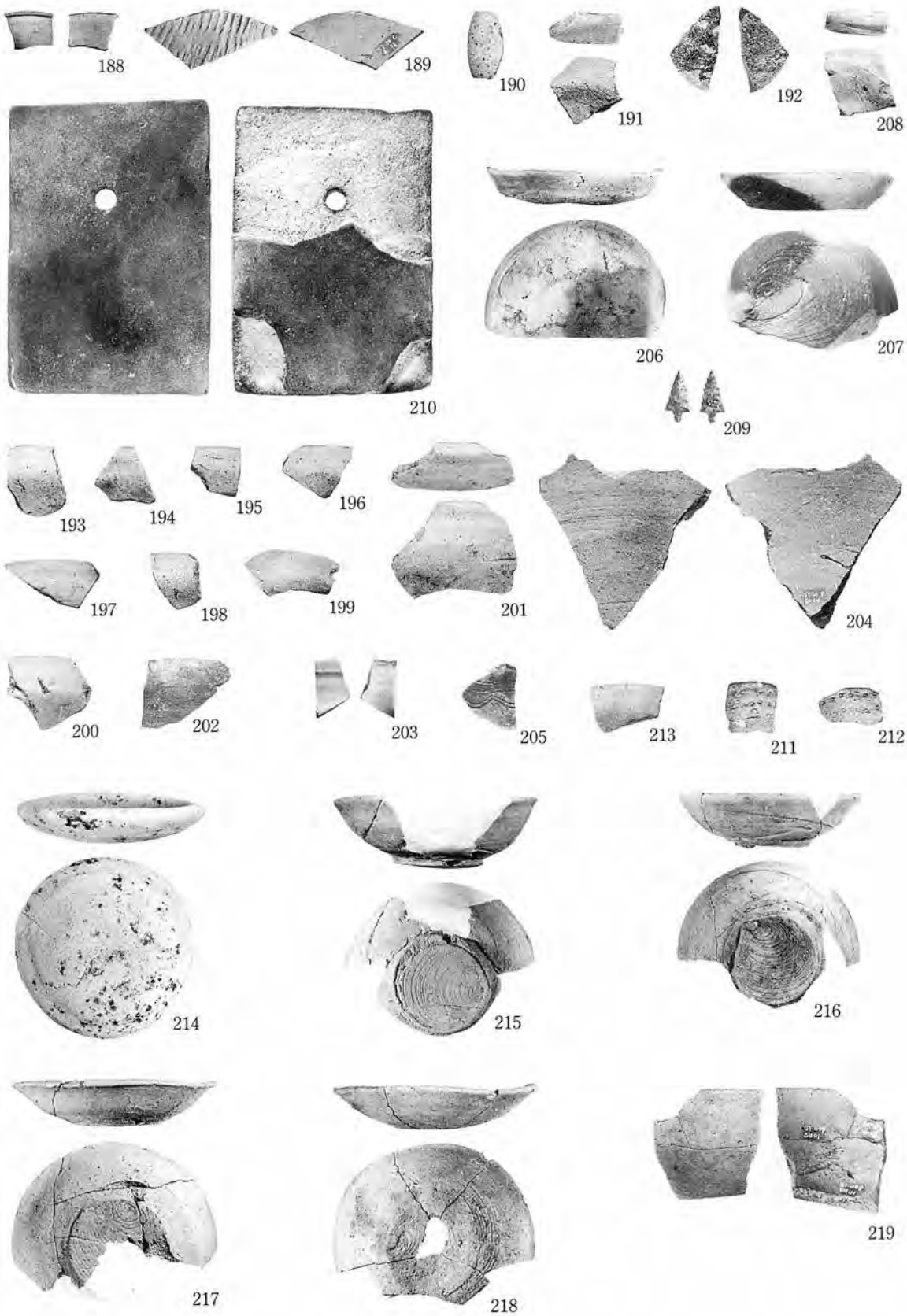
写真図版24　B地区遺物(7)



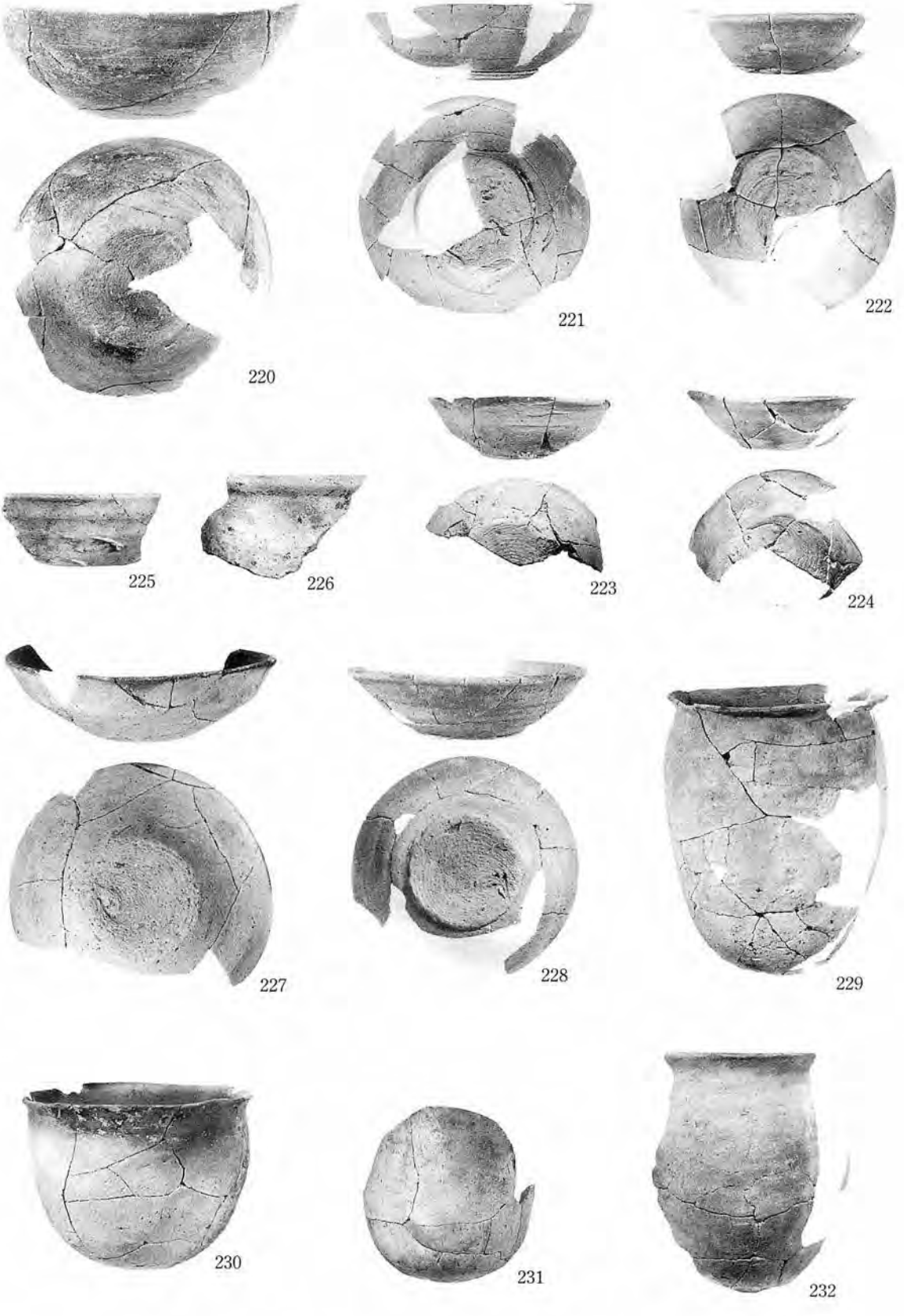
写真図版25　B地区遺物(8)



写真図版26　B・C地区遺物



写真図版27　C・E・F地区遺物



写真図版28　F地区遺物(1)

233

234

237

238

235

236

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

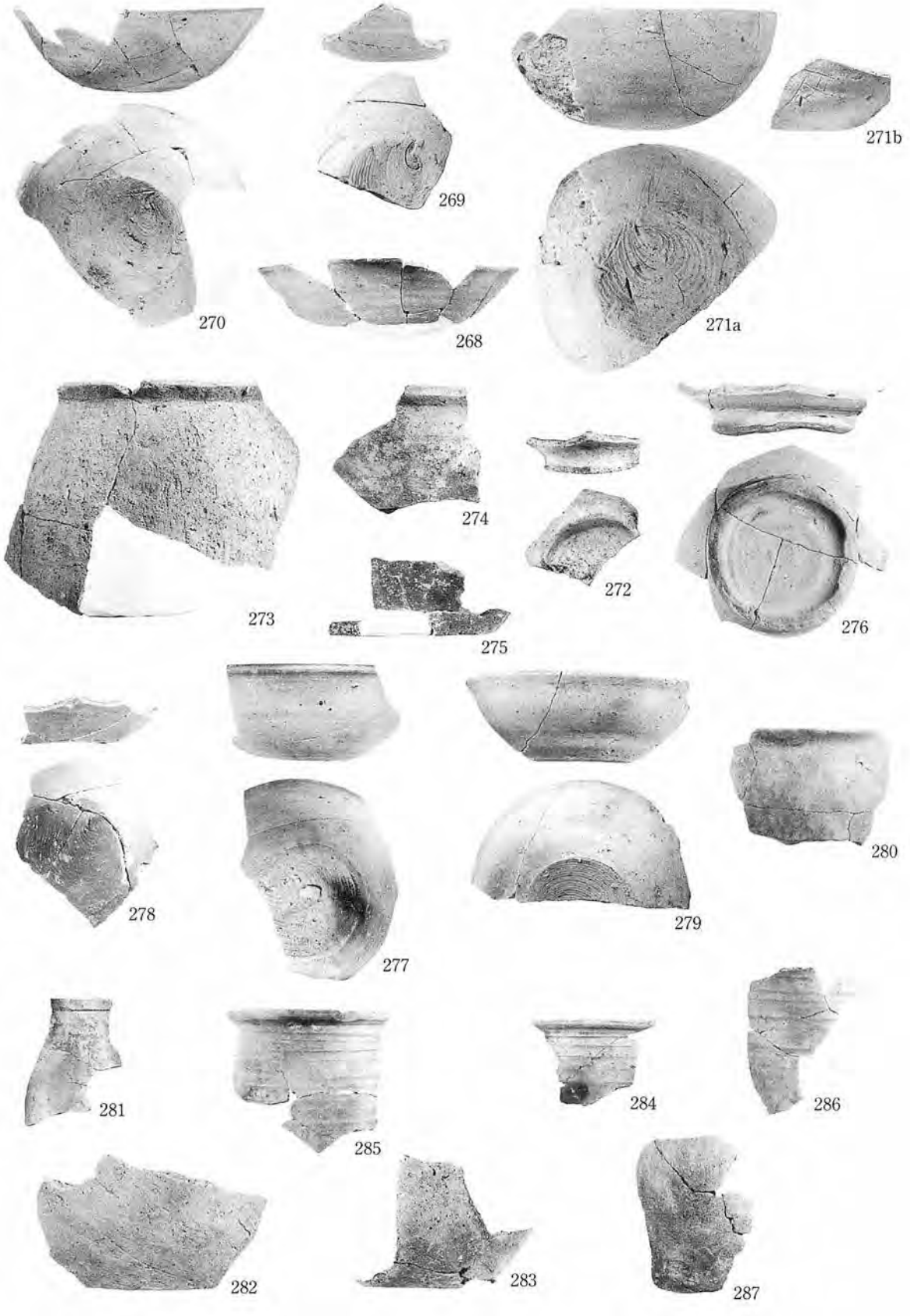
264

265

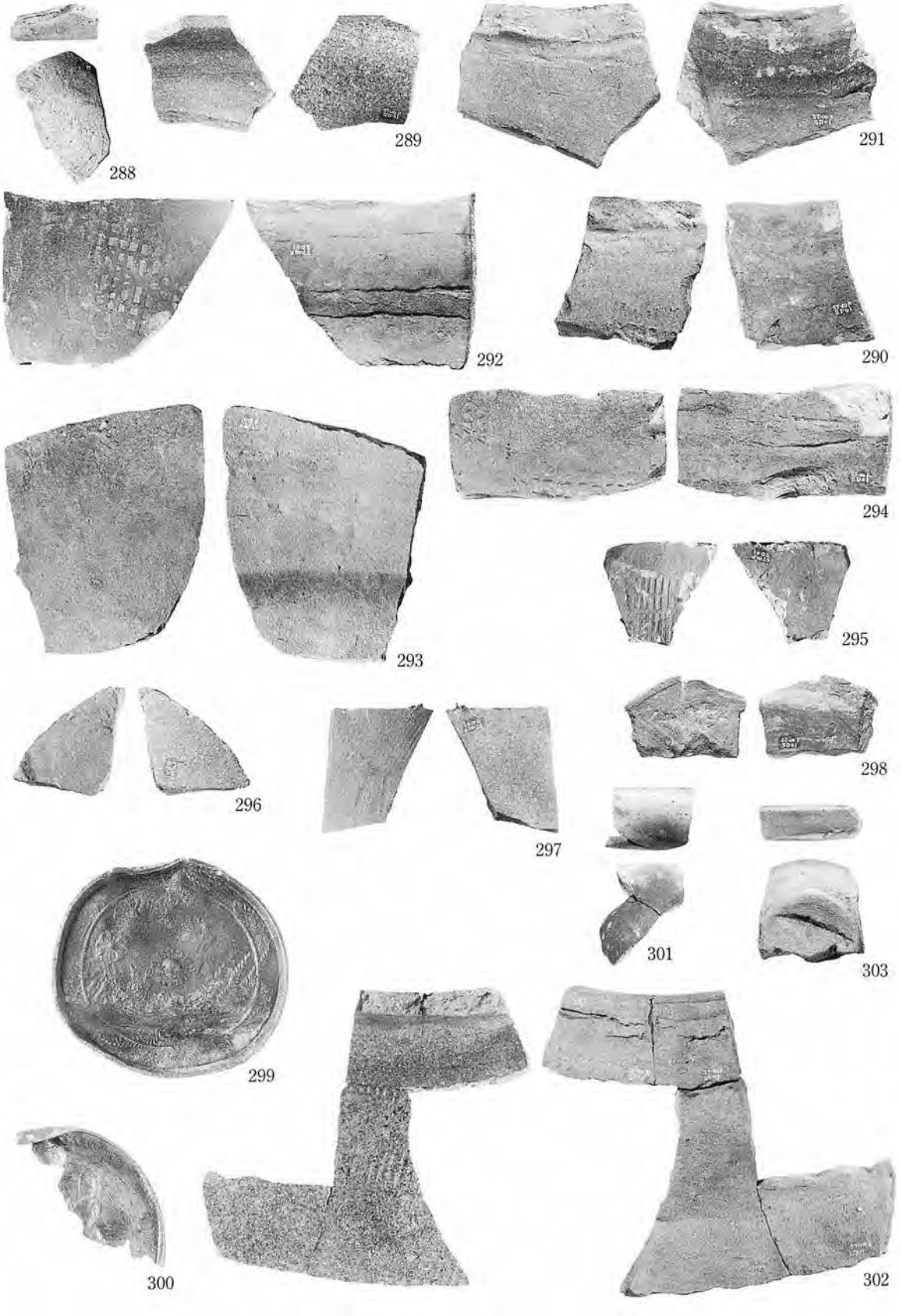
266

267

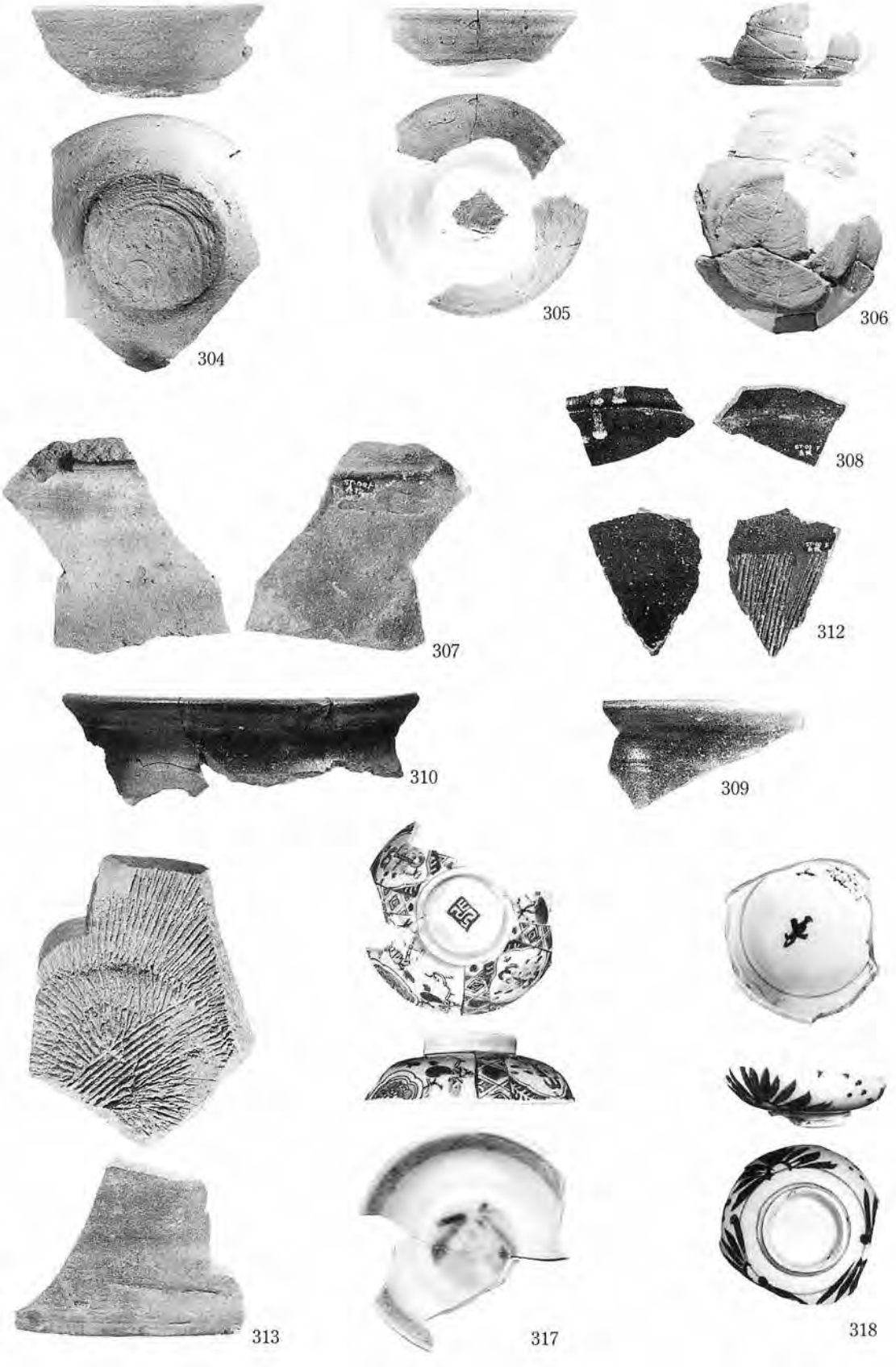
写真図版29　F地区遺物(2)



写真図版30　F地区遺物(3)



写真図版31　F地区遺物(4)



写真図版32　F地区遺物(5)

写真図版33　F地区遺物(6)

報告書抄録

ふりがな	さといせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	里遺跡発掘調査報告書
副 書 名	ほ場整備（一関第２地区）関連発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第383集
編著者名	村木　敬・菅原靖男
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所 在 地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　ＴＥＬ019－638－9001
発行年月日	西暦2002年1月30月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
里遺跡（さといせき）	岩手県西磐井郡平泉町長島字若宮10ほか（いわてけんにしいわいぐんひらいずみちょうながしまあざわかみや）	03402	NE66—2119	39°00′32″	141°08′05″	2000.4.11～8.4	4,160m²	ほ場整備（一関第２地区）に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種　別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
里遺跡	集落跡	平安時代・近世	竪穴住居跡　９棟 掘立柱建物跡２棟 溝　３条 土穴　14基 柱穴　256基	土師器・須恵器 かわらけ・国産陶器・中国産陶磁器・和鏡	

平成13年度　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター職員名簿

【職　員】

所　長	伊　藤　民　也	副所長	高　橋　正　儀

［管理課］

管理課長	韮　沢　正　吾	嘱　　託	高　橋　照　雄
管理課長補佐	山　崎　善　光	〃	佐々木　光　重
管理課長補佐	山　岸　直　美	〃	加　藤　美代子
主　　査	立　花　多加志	〃	湯　沢　邦　子

［調査第一課］

調査第一課長	佐々木　　勝
調査第一課長補佐	佐々木　清　文
調査第一課長補佐	高　橋　義　介
文化財専門員	小山内　　透
文化財調査員	中　田　　迪
〃	飯　森　秀　文
〃	赤　石　　登
〃	吉　田　　充
〃	亀　　大二郎
〃	小　原　眞　一
〃	佐々木　信　一
〃	小笠原　健一郎
〃	金　野　　進
〃	小　松　則　也
〃	岩　渕　　計
〃	鳥　居　達　人
〃	金　子　昭　彦
〃	羽　柴　直　人
〃	千　葉　正　彦
〃	長　村　克　稔
〃	星　　幸　文
〃	佐　藤　あき子
〃	菊　池　貴　広
〃	村　上　　拓
〃	本　多　準一郎
〃	村　木　　敬
〃	北　村　忠　昭
〃	高　瀬　克　範
〃	丸　山　浩　治
〃	島　原　弘　征
〃	中　村　絵　美
期限付調査員	小　林　弘　卓
〃	江　藤　　敦
〃	菊　池　　賢
〃	井　上　信　介
〃	川　又　　晋
〃	吉　田　真由美
〃	坂　部　恵　造
〃	木　村　ひかり

［調査第二課］

調査第二課長	高橋　與右衛門
調査第二課長補佐	中　川　重　紀
文化財専門員	金　子　佐知子
文化財調査員	阿　部　眞　澄
〃	飯　坂　一　重
〃	阿　部　　徹
〃	濱　田　　宏
〃	安　藤　由紀夫
〃	高　木　　晃
〃	佐　藤　淳　一
〃	星　　雅　之
〃	菅　原　靖　男
〃	半　澤　武　彦
〃	杉　沢　昭太郎
〃	溜　　浩二郎
〃	中　村　直　美
〃	西　澤　正　晴
〃	八　木　勝　枝
〃	(阿　部　勝　則)
期限付調査員	吉　川　　徹
〃	北　田　　勲
〃	吉　田　里　和
〃	原　　美津子
〃	齋　藤　麻紀子
〃	駒木野　智　寛

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第383集

里遺跡発掘調査報告書

ほ場整備事業（一関第2地区）関連遺跡発掘調査

印刷　平成14年1月24日
発行　平成14年1月31日

発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11地割185
TEL(019)638－9001
FAX(019)638－8563

印刷　有限会社光文社印刷
〒020-0106　盛岡市東松園3丁目12-1
TEL(019)661－3441

©岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター　2002